
黄昏の日々

平沢貴文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の日々

【Nコード】

N4037Z

【作者名】

平沢貴文

【あらすじ】

『火魅子伝』シリーズの二次創作。某投稿掲示板に別名義で投稿していた作品です。

九州の完全開放から4年、耶麻台共和国では戦争の傷跡が少しずつ癒され、国力は大きく回復していた。

九峪とかつての將軍幹部たちは国の重職を担い、ようやく訪れた平和を謳歌していた。しかしつかの間の安らぎは内部の権力抗争によ

つて崩れ、九州は激動の内乱へと落ち込んでいく……。

第1回 「不穩」(前書き)

・二次創作なので、史実とは関係がありません。
・オリキャラが多数登場します。
これらをご了承していただいた上で、どうぞお楽しみください。

第1回 「不穩」

木々が和らげてくれる太陽の日差しを浴びる。今年の夏はすこぶる暑い。

今はまだいいが、いずれ酷暑と言っていいほど、気温が上がるだろう。出来る限りの薄着をして、それでも肌にはしっとりと汗がにじんでいる。風はない。鬱葱と茂る木々や藪が、涼風を遮ってしまうからだ。

それでも、心なしか涼しく感じるのは、ここが森の中だからかもしれない。

今は、それが何よりもありがたかった。きっと今の自分では、あの燦々と照りつける日の暖かさに耐え切れる気がしない。

「・・・・・・・・お姉様」

隣から声をかけられる。亜衣は頷いた。衣緒の手には盆があり、やはり、酒瓶と杯が載っている。

この杯が決別の証となることを再認識する。眼前に突きつけられた現実の重みが、いま、両の手にかかるのだ。

そっと胸元を押さえると、指先に感じる硬い感触。とても小さいそれは、彼女にとって、やはり大きな意味を持つものだ。

まだ文武騒乱が起こる前に 九峪と共に視察した先の市場で、買い贈ってくれた赤い首飾りを、九峪に返さなくてはならない。

衣緒から盆を受け取り、無言で歩み始める。目指すは目の前の簡素な屋敷。

五歩。十歩。二十歩。それぐらいの歩みで、もう小屋の戸は目の前にまで迫ってくる。自分から歩み寄りながら 恐ろしいまでの圧迫をともなうて近づいてくるようだ。

これを開ければ、私の全てが終わる。終わらせられる。

ふと、心の中に、そんな考えが過ぎった。ただし、それでいいと思った。そうだ、私は、自らの意思で終わりを、幕引かねばならないのだから。

片手を盆から離して戸にかける。

「失礼いたします」

私は、終焉の戸を、開けた。

元星三年五月。耶麻台共和国と狗根国との大戦が終結し、国家としての体裁が整えられてから、三度目の春が訪れていた。

緩やかな冬季を過ぎ、今では気温が急激に上昇しつつある。田畑にとってはあるがたいことだ。国土の大半が山野という九洲にとって、

石高が増えるのは願ったり叶ったりなのだ。

涼やかな風が流れていく。鼻腔をくすぐるのは、新しく芽吹いた若々しい萌芽の匂い。

まるで、未だ新しい時代を祝福しているようだ。

女王・火魅子の朝は早い。祈祷によって国家の趨勢を導くことを司る国家の元首だが、ただ無法に過ごして良い資格はない。とはいえ、特別の内規があるわけでもないが。

身支度を整え、朝餉を取り、本日始めの祈祷を行う。祈祷は朝と夜にそれぞれ二回ずつ行うことが、女王の仕事である。

祈祷は専用の祈祷場で執り行われる。宮殿の最奥、もっとも天高く構えられた壮大な祈祷場には、女王・火魅子以外の者が立ち入ることは許されない。何人も、神の遣いであっても。

その日、一日の執務を終えた火魅子に残った最後の仕事 『宵の星詠み』。

満点の星空を見つめる火魅子の表情は、輝く空とは対照的だった。

「嫌な星ね。何かしら……ざわざわする」

呟きをもらして、それでも意を決して、両腕を天高く仰いだ。

途端、星々が、まるで螺旋を描くように回転しだした。いや、回転しているように火魅子には見えた。軌跡を描いて、空は不思議な模様に描かれていく。

星は全てを教えてくれる。良いこと、悪しきこと、嬉しいことも悲しいことも　そして、望まぬことさえも。

「　　っえ？」

見えた。星の瞬き、軌跡、その羅列の果てに。

女王は膝から崩れ落ちた。

これが、最初の『兆し』だった。

街道や港の整備、都市の開発、田畑の開墾。商業の奨励、貿易の推進、学問の一般化。

耶麻台共和国が抱える問題は多い。建国から六年が経った今でも、処理すべき問題は列挙に暇がない。

これらの問題を解決していくには、いわゆる民主的な方法では何かと遅い。議題が上がってから話し合わなければならぬが、その論議に費やす時間が余りにも長すぎるからだ。

こういうとき、事態を迅速に收拾させる存在が稀に出現する。いわゆる『ワンマン』と呼ばれる飛びぬけた手腕を発揮する者たちであり、時として『独裁者』とも呼ばれる、一世の英傑である。

九峪という男もその一人だった。彼は暴政を嫌い、話し合いによる合議を尊ぶが、彼の真の力はその突出した手腕にある。強いカリス

マを持つ者が国の重鎮を成すとき、人々の期待は、えてしてその者に集中してしまう。

ただ、このような人種が組織の中にいると、そこから起こる問題もまた少なくない。特に民主的な組織の中では、それは顕著なものとなる。

街の視察は九峪が積極的に行うことの一つである。宮殿からは見えないことも、街に出て、自分自身の足で練り歩けば自然と見えてくる。

民を持って国と成す。民の声なくして、九峪の政治はありえなかった。

いつものブレザーではなく、簡単な作りの衣服をまとうて、九峪は川辺城の視察に訪れていた。川辺城は火向灘に面した場所にあり、海産物などの流通が盛んな大都市である。

九州の都市の中でも大きな方だろう。人も物も良く集まる。見れば鯨の行商の姿も見受けられた。

「やっぱり、川辺城ともなると賑やかだな」

「そうですね。ここは戦時中の都でしたから、その名残もあるのでしょう」

同じように隣を歩くのは亜衣。こちらもしっかり簡単な衣服に身を包んでいる。

九峪たちが今居る場所は、宮殿に続く中央の大通り。店が立ち並び、行きかう人々もどこか華やかな姿をしている。花の都とは言わないが、芳しい匂いがしてきそうだ。

目を左右にめぐらせば、見えてくるのは人々の笑顔。飛び交うのは商人の売り文句。荷車が走り、その後ろを子供が駆けて行く。

自然と頬が緩むのを九峪は押さえ切れなかった。

「戦った甲斐があつたつてもんだな」

九峪の脳裏にそれまでの戦史が蘇る。東火向の廃砦で立ち上がってから、本当にいろいろなことがあつた。

今の九峪にすれば過去のことだが、当時とはにかく怖いという思いが強かった。深川と戦ったときも、伊尾木ヶ原の死体の野を歩いたときも、魔人に襲われたときも、人の焼ける臭いを嗅いだときも。

しかしそれらを乗り越えた先がこの笑顔の溢れた世界だったのならば、あの時の恐怖すら、九峪には誇りのように感じられた。

昔の自分が見たら、どう思うだろう。そんなことを考えて、笑いがこみ上げてきた。

急に笑い出した九峪を、亜衣は不思議そうに見つめた。いったい隣を歩くこの青年は、何を考えているのだろうか。

でも、それはきっと、楽しいことに違いない。九峪様が笑うときは、いつも私たちも楽しくしてくれるのだから。

もはや亜衣にとって、九峪の笑顔とは平和そのものだった。九峪の笑顔がなければ、亜衣の平和もないのだ。

「あー、人間、変われば変わるもんだよなあ」

「ふふ、たしかに、九峪様は変わりましたね。……………いつのまにか、遅しくなりました」

「そ、そうか？」

亜衣に褒められて、九峪はわずかに頬を赤くした。照れ隠しに視線をさまよわせるその仕草だけが、まるで昔そのまま、亜衣はそれがおかしかった。

そう、確かに九峪は変わった。いや、強くなった。それは腕っ節の問題ではなく、心が強くなったということ。

昔の九峪に足りなかったのは、覚悟とそれを支える強かさだった。それを身に着ける最大の切欠は、枇杷島が襲来したときだろうか。あの頃の九峪はある事件で塞ぎこんでいたが、見事に立ち直ることが出来た。

強さを得た証拠だと亜衣は思っている。そのときから、九峪は持ち前の明るさだけでなく、強さを得たのだ。

「か、変わったって言えばさ、亜衣も変わっただろ」

九峪は咄嗟に反撃に転じた。不意をついた一言に、亜衣は一瞬だけ目を丸くした。

変わった？ 私が？

亜衣は無意識に歩みを止めた。ただ呆然としたように九峪を見つめる。瞳はまだ丸かった。

「あ、亜衣？ どうした？」

亜衣の様子が突然変わって、九峪も面食らったように立ち止まる。まさかここまでの反応……と言っていいのかは分からないが、何やら亜衣には効果がありすぎたようだ。

『何を言っているんです？』みたいな返事を期待していた九峪だったが。

こういう表情の亜衣も珍しいな。素直にそう思った。いつものキリッとした表情ではなく、あらゆる壁を取り除いた。素の亜衣が見れた気がした。

とは言え、こうも驚くことかなあ。さっき亜衣の褒められた時、九峪は照れはしたがそう大きな衝撃はなかった。

マズイこといったかな？ ふいに、そんな考えが浮かんだ。

「……わたし、変わりましたか？」

まだ衝撃から立ち直れないのか、亜衣はどこか戸惑うような声音で九峪に尋ねた。

「か、変わったと思うけど。何ていうか……そうだな、性

格が丸くなった」

「性格が丸く、ですか」

亜衣は問い返す。そうは言われても、実際のところそんな自覚はなかった。

常日頃から冷静であることを己としてきた亜衣は、誰に対しても冷たい印象を与える女性だった。姉妹と下らないことで口論することはあったが、それでも亜衣は自他共に認める『冷酷な女』だった。

「……自分ではよく分かりません。九峪様から見れば、その、丸くなったんですか？」

「そう思うぞ。昔の亜衣って周りをすごい警戒してたけど、今は結構、やさしい目をするようになったんじゃないかな」

「や、やさしい……!？」

ぼんつと亜衣の顔が真っ赤になった。いつも『怖い』と言われ続けた亜衣は、やさしいなどの言葉に対して、壊滅的なまでに耐性がなかった。

頬を両手で押さえて、ここ最近の自分を思い返してみろ。しかし記憶の中の自分は、やはりいつも通りの冷静で冷徹な自分だった。

いけない。そう思った。亜衣の最大の武器はその知能であり、それを最大限に生かす環境こそが、冷静な自分だった。

それが壊れようとしてる。

自分を律しなければ。ここで気づけたことは天の助けだったのかも
しれない。

「でも、本当にさ。亜衣はいい感じに変わったと思う」

律すると固めた決意を、直後に崩してくれるのが九峪という男
だ。

「昔の亜衣は、なんだか一人に見えてさ。衣緒とか星華は別として
も、けっこう壁を作ってた感じがするんだよな」

「・・・・・・・・」

何も言い返せない。九峪の言葉は、亜衣にとって真実以外の何もの
でもなかった。

亜衣は人との境界に壁を設けていた。その壁は意図的なものだった。
他人を他人以上の存在にしないことで、亜衣は『冷静な自分』を守
っていたのだ。

初めてその壁を解いたのは 伊万里が最初だっただろうか。初め
ての合戦のとき、伊万里の純真な決意が亜衣の中の何かを変えた。

亜衣の変化はその頃から始まった。しかしその変化は緩やかで、亜
衣に自覚させることはなかった。

それでも第三者から見れば大きな変化だった。九峪の亜衣に抱く第
一印象が『怖いお姉さん』から始まったから、尚更のことだった。

「俺たちは一人で何かをすることは出来ない。だから『共和国』なんだ」

共に和を成して国を創る。いつか、阿蘇の嶺に立った九峪の抱負。

その意味を亜衣は取り違えていた。勘違いしていたのだと、この時ようやく気づいた。はっと、亜衣は目を大きく見開いた。

ただ単に、衆議によって物事を決めるだけだと思っていた。でもそこに九峪の真意はなかった。

「見ろよ、この街を」

誘われて視線を向ければ、眼前に広がる川辺の大通り。

そこを通るは、人であり、物であり、言葉であり、笑いであった。喧嘩も起きる。しかしそれすらも

「これが『和』なのですね」

「ああ。そこに仲間外れはいないぜ？」

そう言った九峪は満面の笑顔だった。まるで太陽のような笑顔だった。

九峪の笑顔を見ているうちに、亜衣も知らず微笑んでいた。

仲間外れ。なんとも九峪らしい物言いだ。こういう細かなところで、九峪という青年は暖かいのだと思い知らされる。

私はまだ、和に入っていなかったのだな。

そう思うと、何故か、先ほどの自分自身の決意が馬鹿らしく思えてきた。たしかに冷静であることは武器だろう。しかし和を成さない自分は、その和を崩す要因にも成りかねなかったのだ。

冷静であることと冷徹であることの違い。亜衣はそれを知った。

「く、九峪様ツ!？」

ふいに、そんな声が上がった。聞いたことのない声だった。

九峪と亜衣は驚いて振り返ると、そこには桶を背負った中年の男が居た。やはり知らない男だった。

男は驚愕に目を見開いていた。と、九峪はそこではっと気づいた。

周りの皆も、九峪を見ていることに。一人残らず、である。

「く、九峪様だつて？」

「本当だか？」

「ま、間違いない。おれ見たことある！」

そんな声が上がった直後、九峪と亜衣は大勢の中に、あつという間に埋もれた。

これが和に入るといことなのですか!？

もみくちやにされながら、亜衣は叫んだ。声にならない叫びだった。

それが、一月前の出来事だった。

六月。この頃から、国内に不穏な空気が流れ始めていた。

切欠が何だったのか、それを気にする者は多くない。ただ目を逸らすことの出来ない現実だけに囚われ、始まりが有耶無耶になってしまった。

それでも振り返るのならば、事の起こりは五月の晩期。耶牟原城の役人と武人がその発端だろうか。

国家にも人間同様、運命さだめというものがある。それは国家を国家足らしめる要因の中で、何時の世も、何処の文明でも起こりうる、呪われた因果なのかもしれない。

『二君不仰是』という言葉がある。『二君これを仰がず』と読み、早い話が、一つの国に指導者が二人も居てはいけない、という意味である。

権力闘争を起こすには、耶麻台共和国はまだ若すぎる。誰も彼もが未来明るい世界を思い描いている。しかし二人の指導者を前に、誰についていくべきなのか。

太平を迎えた今、政治に力を入れる役人たちは火魅子を。

神の遣いの奇跡を目の当たりにしてきた武人たちは、今でも威光が輝く九峪を。

決して互いを蔑ろにするわけではないが、それでもこの大きすぎる輝きに、人々は目を眩ませてしまっていた。

耶牟原城内の廊下を、数人の巫女を引き連れた火魅子が、威厳高らかに歩んでいく。二重三重の着物に身を包み、煌びやかな金細工を施された髪飾りが、見事な高貴を演出していた。

長い栗色の髪がなびく。細い白眉の美しい女王は、歩きながら外の景色に視線を向けた。

見えるのは晴れ渡る晴天、流れる砂のように忙しく動く人の姿。

明るい。そう思いながら、しかし女王の目には、何か灰色の世界が広がって見えた気がした。

星読みを行ってからだ。あれから、私は安息を忘れてしまった。

「火魅子様。お疲れならば、今日はもうお休みになられては」

巫女の一人が心配そうに言った。知らぬうちにため息でもついていたのかと思い、女王は己の迂闊を内心で罵った。

「心配いりません」

「左様ですか」

巫女は直ぐに引き下がった。しつこく食い下がる必要もない場面で、女王の不評を買いたくはなかった。

それが今はありがたい。人の上に立つ者、迂闊に本音を見せるわけには行かない。内心の不安も悟られたくはなかった。

とはいえ、いつまでもこのままではいられない。

一度、信頼の置ける者に相談しなければならぬ。的確な助言を与えてくれるであろう者に。

考え事をしながら歩くと、目的地にはあつという間に着くものである。いや、そう思うのは、考えが煮詰まっているからかもしれない。部屋に入る。ここは火魅子の執政の場である。火魅子は祭事だけの象徴ではなく、こうして筆仕事もこなさなくてはならない。

これが一番大変だと思う。それでもその仕事量は、宰相である亜衣や九峪らとは、比べるほどの量ではない。

腰を下ろして竹簡を手取る。内容を読みながらも、火魅子の脳裏には悩み事でいっぱいだった。

だめ。これでは仕事にならない。

文字の一つさえ頭に入らない。火魅子は竹簡を文机に置くと、巫女を一人呼びつけた。

「政務を終えてからで構いません。……………日没に、亜衣に参るよう伝えなさい」

一日を過ごす中で、湯浴みのときほど安心するときはない。とくに最近では蒸し暑くなり、汗を流せるのならば、多少熱い風呂でも気持ちが良い。

耶牟原城には浴場が複数存在する。

火魅子や神の遣いが使う一等級の風呂。

伊雅や亜衣など、上級幹部の使う風呂。

一般の武将、役人が使う風呂。

給仕などの下働きが使う風呂。

どれも大きい風呂で、この時ばかりは、一日の垢を落として誰もが笑顔で談笑に興じている。何時でも何処でも、例え現代だろうと口――マだろうと、それは変わらない人の営み。

湯船いっぱいには張られた湯から肩をわずかに晒し、亜衣はこみ上げる開放感にほっと息を吐いていた。

「一人風呂というのも久しぶりだな」

閑散とした周りを見回す。湯気が視界を遮っているが、その向こう

に人の気配はなにもない。まさに亜衣一人の楽園だった。

人の目を気にしないで良いため、ぐーっと身体を伸ばす。全裸でいる時、人は本能に近くなるという。亜衣も普段の凜然さを脱ぎ捨て、すこしだけ自由となっていた。

しかしそんな一時でさえ、亜衣の脳は休むことなく働き続けている。

思い出すのは、執務中に訪れた女官の一言。

「火魅子様がお呼びとは……………」

その真意は分からない。それが亜衣は厭だった。何か気持ちの悪い、まるで蝮か蛇が蠢いているような、そんな厭な気がするのだ。

背中がぞわぞわして腸が寒い。

「そういえば、ここ最近、お元気がないご様子だった……………
深刻な悩み事でも在るのだろうか」

揺れる水面を見つめながら、ここ最近の女王の様子を思い浮かべる。

亜衣から見た女王は、心此処に在らず、といった様子だった。仕事も思わしくなく、亜衣としても心配事の一つだった。

ただ、亜衣も巫女の端くれである。鋭い直観力をもっている。その直感、女王の悩み事に、九峪が絡んでいると読んでいた。

それならば、ある意味ではいつも通りのこと。しかし亜衣は違うと理由のない確信を抱いていた。

いつもと違うことが、妙な不安を生み出していた。

「最近是国内も不安定になってきている。何かを予知したのか？」

もしそうだとするのならば。九峪の関わることで、女王の心を煩わせる要因が『生まれようとしている』のならば。

気合を入れて望まねばなるまい。

九峪と火魅子の関係が変わりつつあることは亜衣も知っている。それは双方がそう望んだのではなく、いうなれば時勢の流れが選択の余地をなくしていった結果だった。

二人は今でも良好な関係を続けているし、それを崩したくないと思っている。

では何故こうなった。何がいけなかった。

人の心に形はない。それが今はもどかしかった。

いけない。亜衣は頭を振った。このままでは思考の埒埒だ。

のぼせる前に風呂を上がると、亜衣は手早く着替えて、火魅子の元へと向かった。

亜衣が通されたのは執務室ではなく、火魅子の寝殿だった。戸を開けると、一つだけの燭台が部屋を薄暗く照らしていた。

莫座を出されてその上に腰を下ろす。

火魅子は瞳を伏せて無言、亜衣も無言だった。

しばらく静寂の時間が過ぎた。亜衣は火魅子が話すのをじっと待った。そうでなければいけないと思っていたからだ。

「…………厭な星を見たのよ」

小さく、まるで蚊の鳴くような小ささで、苦しそうに火魅子は言葉を漏らした。

やはり、そうか。亜衣は確信したと同時に、心の中に思い何かが落ちてくる気分だった。

火魅子の占星術は未来予知の域に達している。その精度はあまりに高く、言葉一つが国家の命運を左右するといっても良い。

もちろんそれ相応の責任もあり、決して軽々しく言葉にしない。

それが、今はどうだ。亜衣も不安になってくる。

「…………どのような星を、ご覧になりました」

亜衣がそう尋ねると、火魅子は瞳をぎゅっと閉じた。

「『二君を仰がずば、これを治められん』…………この

意味、貴女ならばわかるでしょう」

「はい……………」

応える亜衣の声はとても落ち着いていた。薄々だがその可能性も、亜衣の中にはあったのだから。

最近の国内に広がる民衆の声は、亜衣も聞き及んでいるところだ。その中には、現在の火魅子に疑問を抱くものも少なくない。

火魅子が駄目だと言うのではない。ただ神の遣いに全てを任せたほうが安心なのではないかと、そういう意見があるのだ。

特にその声は、兵役の経験がある者たちの間で根強く上がっている。現在、これらの問題が共和国の上層部を悩ませていた。

一線を越えてしまえば暴動の火種にさえなるかもしれない。今はまだまだ下火だが、近い将来、その可能性もあるのだ。ましてそれは、役人と武人の対立となり、民心を裂く要因ともなる。

それは民衆の勝手な言葉。火魅子も神の遣いも変わらぬ関係を維持しているのに、その思いを尽く壊してくれる。

それでも、だれも民を悪しように言うことはないし、裁く権利もない。彼らは自分自身のより良い未来のために思っているだけなのだから。

幸せになることは、万人に与えられた冒し難い権利なのだから。

だがそれとは別としても、この状況はやはり思わしくない。

「私には、どうしたらいいか、わからないの……」

火魅子は瞳を上げないまま、悔しそうに呟くことしかできなかった。祈禱場で崩れ落ちてからのここ数日、思い悩む夜に苦しみながらも、結局は打開策を見出すことが出来なかった。

いまや火魅子にとって、この問題を解決するには亜衣の力が必要なのだ。

「亜衣。……お願い、力を貸して」

なんと弱弱しい声音か。力の籠らない、縋り付く子供のような言葉が、亜衣にはあまりにも不憫だった。

「ご期待に応えられるよう、尽力致します」

亜衣は平伏して応えた。主君を愛しむ心の片隅で、脳裏を乱舞するのはこれからのことだった。

火魅子様はここまで苦しまれた。何としても、亜衣はこの女王を救いたかった。そのために出来ることは何でもするつもりだった。

だが、その裏にあるのは一つの懸念。

火魅子を救い、神の遣いを救い、民心を落ち着かせ、国内を平らに治める。そんな方法が本当にあるのだろうか。

こういうとき、九峪様はどうしていただろう。亜衣は思った。

民心を掌握することにかけて、九峪はまさに天才的だった。彼の一挙手一投足が民の心を掴んだのだから。

それが私に出来るのだろうか。亜衣には自信がなかった。

元星四年、夏。

本人たちの望まぬ対立が表面化するのに、二年とかかることはなかった。

亜衣の尽力虚しく、役人と武人の対立は少しずつ大きくなり、双方の溝は深くなるばかりであった。

権力志向の育ちつつある官人層は、軍事に長けた九峪をもはや無用と考える者たちが現れ始め、いまだ戦国の世にあることをよく知る軍部の人間は、有事の際に起こりうる滅亡の危機を避けるために、九峪の力を必要としていた。

武人たちがなぜここまで戦を警戒するのか。その理由は九州より南方にある島国にあった。

南方では南山・中山・北山と呼ばれる三勢力が鎬を削っている。この内、北山の勢力を耶麻台共和国の武将たちは気にかけていた。

しかし内政だけを気にかける役人たちにとって、そんなことはどうでもよかった。まずは自国の安定と富国こそが急務だったからだ。また彼らは戦を知らないため、狗根国への勝利によって驕ってもいた。

その波はいつしか民衆にも広がっていく。民はどちらこそが君臨するに相応しいか、わからなくなっていた。

国内を落ち着かせるどころか、波紋は九州を揺るがした。

亜衣にはもう誰もを救う術を見出すことが出来ず。

悲痛のうちに、苦渋の選択を選ばざるを得なくなっていた。実に一年に及ぶ苦悩だった。

第2回 「亜衣の想い」

元星四年、晩秋。

この年の稲作は盛夏の猛暑の助けもあって、例年にないほどの豊作ぶりを誇っていた。

各地の城郭には連日、麻袋いっぱい詰め込まれた米や麦が城の貯蔵庫へと運び込まれていく。

「ありやあ……米倉が足りなくなるなあ」

穀税の搬入を視察していた九峪は、今にも溢れ返りそうなほど送られてくる米や麦を見て、驚嘆とも呆気ともとれる一言を漏らす。

今年は富に豊作だと聞いてはいたが、朝も早くから夕暮れまで、ひっきりなしに運び込まれる麻袋がここまでの量になるとは思いもよらなかった。

すでに耶牟原城の抱える米倉は飽和状態に陥いつている。各都市でも貯蔵場所の確保に頭を痛めている。

一部では米倉の増築も検討されており、かく言う耶牟原城もその一つだ。

「でも、来年も豊作とは限らないし。あんまり無駄に造りたくはな

いんだよなあ」

などと一人ごちながら、右往左往と忙しく働く人夫を眺める。

歩を進めても行く先々には人が溢れている。怒号のような掛け声が飛び交い、ガラガラとけたたましい音と共に荷車が横をすり抜けていく。

こういう空気が九峪は嫌いではなかった。何よりも祭りなどのバカ騒ぎが好きだった。明るく皆が騒げるのはいいことだと思えるのだ。現代に居た頃は、よく日魅子や友人たちとバカをしたものである。

「九峪様、ここにおられましたか」

声をかけられて、九峪は進めていた足を止めた。

何だろうと辺りを見回すと、場違いな巫女が一人、九峪の下へと駆け寄ってくるのが見えた。

はて、何事だろう。

九峪は首を傾げながら、向かってくる巫女に近づいていく。

「亜衣様が、お話があるとのことで、捜しておられました」

「亜衣が？」

「はい。今は執務の間にてお待ちしておられます」

どうしたことだろう。ここでも九峪は首を傾げた。

亜衣は生真面目な性格だから、自らが赴くことはあっても、目上の九峪を呼びつけることなどまずしない。

時間すら惜しい、ということなのか。それにしては珍しい。

「わかった、直ぐに行くよ」

巫女が一礼して去っていく。

すぐに人ごみに消えた巫女を見送ると、働く人夫を眺め回し、ほとんどその場を後にする。

なんだろう。九峪の心を占めるのは、亜衣に呼び出される理由。

火急の件という様子ではなかった。だから今すぐどうこうなるという問題ではないのだろう。

耶麻台共和国の抱える問題は多く、亜衣も相当な苦勞をしている。

何か煮詰まっているのかもしれないな。ならば力になりたいと九峪は思う。

亜衣には何度も助けられている。だから亜衣の助けになってやりたい。

九峪にとって亜衣は、ある意味で自らの半身と同じだった。それを助けたいと思うのもまた当然の思いだった。

筆先が墨汁の黒に染まってい。硯から離し竹簡の上を文字が走る。亜衣は険しい表情で書簡を見つめては、べつの書簡に筆を走らせるのを幾度も繰り返す。

今はそれほど忙しく無い。

しかし亜衣の表情には、たしかな疲れの色が浮かんでいた。

ふう。亜衣が息を吐いた。筆をおいて虚空を見上げる。思い起こされるのはここ最近のことばかり。

上手くいかないものだな。自嘲気味に呟く。

「亜衣様。九峪様がお見えになりました」

部下の声が聞こえてきた。その直後、戸がすつと開く。そこには光を背負う九峪がいた。

部下のものが莫塵を出し、九峪はそこに腰を下ろす。

亜衣は床机から立ち上がると、自ら莫塵を持って九峪の御前に敷き同じように腰を下ろす。

「茶を」

「はっ」

部下が部屋を出て行く。執務の間には基本的に亜衣一人しかいない。部屋は実務的な造りで、装飾の類は何一つ無い。寂しい、というよりも寒い感じのする部屋だった。

九峪は無言。呼び出したのが亜衣である以上、話を切り出すのも亜衣の役目である。

「まずは、九峪様をお呼び立てしたこと、お詫び申し上げます」

わずかに身を引いて平伏する亜衣に、九峪は笑いながら手を振る。

「いいって、気にすんなよ。それより、いったいどうしたんだ」

九峪の気軽い一言。だがその一言に、亜衣の肩は小さく、本当に小さく揺れた。

頭を上げることが出来ない。それは僅かな迷いの間だった。

それでも、亜衣は決心したかのように、ぱっと面を上げた。

やや疲れた瞳で九峪を見つめる。うつすらと見える目元の隈に、九峪は亜衣の置かれた状況が思わしくないことをこの時悟った。

思い沈黙の中、亜衣は言葉を選ぶように口を開く。

「九峪様……………。昨今の国内における情勢不安、ご存知かと思えます」

九峪は頷く。国内が俄かにざわついていることは九峪も知っていた。

その原因となるところも、九峪にはわかっていた。

文官と武官の意見の食い違いから端を発した女王と神の遣いの対立。民衆も巻き込んで、それは大きな社会問題へと発展していた。

「民心の乱れ著しく、このままでは耶麻台共和国は、分裂の憂き目に会うことも考えられます」

「ああ……そうだな」

「私は、出来る限りの事をしてきたつもりです。民が一丸となる方法を模索してきました。されど……」

僅かに、目を伏せる。その瞳の奥に、悔しい思いが泥のように沈んでいるように、九峪には思えた。

「されど、私には民心を掴むことが出来ませんでした。九峪様のご意思を汲みきること適いませんでした」

次第に声が震えてくる。それは悔しさゆえか、情けなさゆえか。

九峪にはわからなかった。ただ、亜衣が酷く小さく見えて仕方がなかった。

常に自信に満ちていたわけではない。だがここまで弱気な亜衣を九峪は知らない。目を伏せ、唇を噛み、肩を震わせている。

まるで子供のような。

おそらく亜衣の苦しみ、その全てを理解することは出来ないかもし

れない。亜衣でなければとうの昔に折れていたかもしれない。

だが、亜衣をここまで追い詰めた原因は

「私は、私では．．．．．お救いすることができません」

救う

それは何を救うということなのか。国か、民か、火魅子が、はたまた神の遣いである九峪か。

あるいは、その全てを、か。

亜衣は莫座から身を退けると、手を付いて、深く頭を下げる。額が床に付きそうなほど、深々と。

「女王様より任せられたお役目、全うさせることも叶わず。そして今また、九峪様のお知恵をお借りしようとする私を、どうか御赦してください」

平に伏する亜衣に、九峪はかける言葉を失ってしまった。

でも、それでも、亜衣は苦しんでいる。亜衣の力になりたいという思いに偽りは無い。

「亜衣．．．．．頭を、上げてくれよ」

「．．．．．」

九峪の言葉にも、亜衣は答えず、ただ平伏したまま。顔を上げず、

ずっと地に顔を向けていた。

それは亜衣の呵責の表れだった。力及ばぬことへの、憤りを隠すために。

ふつと顔を上げる。亜衣の苦しみが伝わってくるようだった。九峪もまた苦しくなってきた。

「・・・・・・・・すまない」

呟かれた一言に、亜衣は顔を上げた。目の前の男性は宙を見つめていた。

「お前を苦しめる元凶は、きっと俺にある」

「それは・・・・・・・・」

違う、と言えなかった。少なくとも問題の根底に、九峪という男の存在があることは確かだったからだ。

だが亜衣は知っている。それは九峪の望んだことではないし、すべての責任が九峪にあるわけでもないことを。

悪いといえば、確かに九峪に原因はある。しかし悪くないといえば、九峪は何一つ関与していない。

罪の所在を突き詰めることなど、出来はしなかった。

「いろんなものが原因なんだろうな。その中でも、俺が、一番の原因だ」

「九峪様は！ 九峪様は、そんな」

亜衣の弁護も、次第に言葉尻が小さくなっていく。心のどこかで、亜衣もそう思っていたからだった。

原因の一つが九峪である。わかってはいても認めたくは無い。

それは、九峪を裏切る行為に思えた。

でも九峪はそんな亜衣に、薄く微笑んだ。

庇ってくれたことが嬉しくて、信じてくれたことが嬉しくて。

自分が許せなくなっていく。

亜衣は苦しむべきではなかった。撒いた種を刈り取るのは、誰でもない、俺の役目のはずなのに。

その責任を亜衣に押し付けていた。自分が許せない。

「亜衣は俺に期待してくれた。でも、俺にも、どうするべきなのかはわからない」

嘘だ、本当は分かっている。あるべき道に戻す方法を、九峪は知っている。

そして、きっと、亜衣も。

ただそれを選択するには、九峪も亜衣も、悲しくなるほど弱い。

だから、それ以外の方法で、やっていくしかない。

「俺じゃあ力になれないかもしれない。けど、やれるだけのことはやるよ」

そう言った九峪の横顔は、とても辛そうだった。

虫の鳴き声が響く夜になってきた。

蒸した夜も訪れるようになり、涼風吹けば爽やかであった。

その日の夜は寝心地の良い夜だった。蒸し暑くなく、風も適度に吹いている。虫の鳴き声ですら、眠りに誘う鐘の音のようだった。

しかし亜衣はいまいち寝付くことが出来なかった。寝返りを何度もうっている間に、衣服は乱れに乱れていた。

それを直す気にもなれない。ずっと、亜衣の心は複雑なままだった。

私は、情けない女だな。

女王の期待に応えられず、九峪の機知に頼ろうとする。

引き受けた責任を投げ出している。期待を裏切り、投げ出している。そう思えて仕方が無い。

何度もため息が口をついて出てくる。いったい今日だけでどれほど

のため息を漏らしたことだろう。

陰鬱、という言葉すら生温い。心を締め付ける自責と自己嫌悪が、亜衣を尽く苦しめていた。

「私は……何をしているのだろう」

ぼつりと呟く。

これが、私なのだろうか。

これが、こんな惨めな自分が、今まで九峪の右腕と自負してきた自分なのだろうか。

役立たずじゃないか。

どこまでも無様じゃないか。

振り返れば振り返るほど、かつての自分の姿が霞んでいく。それまでの自分がまやかしのようにさえ思えてくる。

考えてみれば、亜衣は人を使うことは出来ても、操ることはしてこなかった。心のどこかでそれは、自分には出来ないことだと理解していたからだ。

人の心を掴む術。亜衣はそれを持つてはいなかった。人が真に欲する心模様を理解するには、亜衣はあまりにも客観的すぎたのだ。

人の行動原理や物事の結末、目に見えるものしか理解できない。形無いものを理解する九峪ほどの柔軟性が亜衣には無い。

それがこうも口惜しい。

亜衣は気だるそうに身体を起こす。布団を退けて緩慢な動作で立ち上がると、唯一の出入り口の戸を開けた。

ふわっと澄んだ緑の香りが鼻腔をくすぐる。冷やされた外気がわずかに汗ばんだ肌に心地よい。

空に星はまばらにしか見えず、雲が月明かりに浮かんで見える。風は無く、雲はいつまでもそこにあり続けた。

何も考えず、自然と足が動き出す。向かう先が何処なのか、亜衣自身にすら分からない。

何処に行くのだ。

まるで他人事のように、無関心に思う。

……いや、これはただの逃避なのかもしれない。情けない自分から逃げ出そうとしているのかもしれない。

逃げた先に、何があるかも分からないくせに。

なんと浅はかなことだろう。ここまで無様を晒すと、いつそおかしくすらある。

夢遊病者のように、耶牟原城の中を徘徊する。見回りの兵士が見れば何事かと不振に思うかもしれないが、幸い、人には会っていない。

別に隠れているわけではないのに。

何か得体の知れないものが亜衣をどこかへ連れて行こうとしているかのように、亜衣の歩みを阻むものは何も無かった。

庭に出た。後世の和風庭園とは趣の違う、それでも美しい庭園である。

雅な流線型のなだらかな丘。様々な華が彩り、池の上には橋がかけられている。大陸の帝宮の庭園を再現したものだった。

星明りも月明かりも少ない庭園は、昼のそれとはまた違った顔を見せる。なまじ美しいだけに、闇に染まった小さな世界は、亜衣にある種の威圧感を与えていた。

その中を、亜衣はゆっくりと進んでいく。闇に身を沈めるように、ゆっくりと。

ふと、足を止める。橋の上に人が立っているのが見えた。

賊ッ！？

ぼやけていた頭が一瞬で覚醒する。

向こうはまだこちらに気づいていないようだ。どうするべきか、亜衣の中にいくつもの選択肢が浮かんでくる。

宮殿の人間ならばよいが、もしもどこぞの侵入者であるとしたら。

亜衣は息を潜めて、木々の間を隠れるようにして人陰に近づいてゆ

く。鼓動が強くなっていく。

橋のかかり口に辿り着いても、人影はまだ亜衣に気づかない。何をしているのか、橋の欄干に手を付いて、空を眺めているように見える。

あまりに暗く、横顔が判別できない。知っている者かもしれないし、侵入者かもしれない。

橋に足をかけた。コツツと乾いた音が、小さく闇に溶けていく。

人影がこちらを振り向いた。警戒する様子は無く、襲ってくる気配も無い。

「何者か」

亜衣は尋ねた。人影は無言だったが、しばらくして、

「……その声、亜衣か」

と返してきた。

その一言に、亜衣もはっとする。聞き覚えのある声だったからだ。

「九峪様……」

雲に隠れていた月が顔を出す。薄明かりに照らされて、人影と亜衣の姿が闇にぼんやりと浮かんできた。人影は九峪だった。

微風が吹いてきた。雲が少しずつ動き出し、合間から星がちらりちらりと覗いている。

橋の欄干を前に、九峪と亜衣は並び立っていた。何を話すでもなく、二人して、ただそこに立っていた。

重苦しい沈黙だった。九峪との付き合いももう長くなるが、こんな重苦しい沈黙は初めてだった。

二人一緒にいて、楽しいことはあっても、苦しいとか、気まずいとか、そういうことは殆ど無かった。

今日だけだ。いや、今日からだ。亜衣は九峪との間に、目に見えない隔たりを感じ始めていた。

違う、私が一方的に避けているのかもしれない。隔たりではなく、これは引け目なのかもしれない。

横目で九峪の顔を盗み見る。気負った様子は無いが、影が射しているように見えた。

「亜衣は……ここで、何をしていたんだ」

沈黙を破る静かな問いに、亜衣は言葉を選んで、

「……散歩です」

無難に応える。別にそれが目的ではないが、間違いでもない、自

分に言い聞かせる。

亜衣の応えに納得したのか、九峪はそれ以上の言及はしてこなかった。移り動く闇雲をただ目を逸らさず眺めている。

破られた沈黙も、会話が続かなければ直ぐ重い空気に戻る。

嫌な沈黙だが、会話の糸口が中々見つからない。

見つける必要があるのか？

心の奥底、亜衣のとても冷たい部分が、そんなことを問いかけてきた。

いまさら、私から九峪様に、何を言葉かけるといふのだ？

こんな私が、何を図々しく。

心の声は冷たい。亜衣の不甲斐なさを容赦なく糾弾する。抗うことも出来ないまま、亜衣は心を閉ざしていく。

隣に九峪がいるのに、独りを感じてしまう。

沈黙に耐え切れなくなって、亜衣は九峪に一礼してその場を去ろうと

「なあ、亜衣」

するよりも前に、九峪が亜衣に声をかけてきた。

先んじられて、亜衣は開きかけた口から言葉を吐き出すことが出来なかった。

固まって動かない亜衣が見えていないのか、構わず九峪は言葉を続ける。

「前にさ、川辺城の視察に行ったよな。覚えてるか」

「あ……はい。もちろん」

「あの時、川辺城の住民にもみくちにされて、大変だったよな」

「はあ……」

何が言いたいのかわからず、そんな返事しか出てこなかった。

なぜ今、そんな話をするのだろうか。

九峪の考えが何も分からない。こういうところでも、亜衣は九峪との間に壁を感じてしまう。

九峪の表情からは何も読めない。瞳も、いやに澄んで見えた。

近くにいるのに、遠く感じる。

一歩よれば触れ合える距離なのに、見えない力がそれを阻む。

「あの頃は、不安なんか何もなかった。順調で、平穏で、皆が笑っていて……亜衣も笑っていた」

九峪は懐かしむように微笑を浮かべている。

まだ人々が平和の喜びにひたっていたあの頃、九峪も亜衣も互いに穏やかだった。

それがどうだろう。民は互いに論争を呼び、ギスギスした雰囲気、九洲全土を覆いつくそうとしている。暗雲立ち込め、日の光が届かなくなろうとしている。

なぜ、そうなった。どうしてこうなった。

決まっているじゃないか、そんなこと。

「考えれば考えるほど、俺は、俺がわからなくなる。この国の未来を見届けたい、この国の発展の力になりたい。そう思って、俺はここに残る決意をした」

五年前、九洲の元号が元星になる二月前。

九洲の完全開放、国家建設、国土防衛、王室復古。

耶麻台共和国が名実共に九洲の覇者へと返り咲いた 否、新しく芽吹いた瞬間、九峪の神の遣いとしての役目は終わった。

開放された耶牟原城は急速に復元され、九洲の各地も疲弊した国力を急速に取り戻していく。

そんな日々の中、九峪はやり遂げた達成感と、一抹の寂しさを感じていた。

これで、終わるんだな。それは、元の世界に戻れるということであり。

ともに戦ってきた『みんな』との、永遠の別れを意味していた。

戻るか、残るか。選ぶには、九峪はこの世界に長く居過ぎた。

幾多もの戦いを繰り返し、心を支えあい、掛け替えのないものを手にしてきた。

愛着がある、という問題ではない。そういうことではない。もっと尊いものを、九峪はこの世界に見出していた。

夜毎に日魅子が夢の中に出るようになった。夢の中の日魅子は泣いていて、それが九峪を苦しめた。

それでも九峪はこの世界に残った。生死をかけた絆が、九峪をこの世界の住人に昇華していたから。

だけど

「それが、間違いだった………のかもしれないって、今は思うんだ」

対立の要因は複数存在する。役人と武人の対立、民衆の意識、強すぎる二人の指導者。

その根底にあるものは火魅子と神の遣い。語弊のある言い方だが、元凶はこの二人にある。

現在の耶麻台国の最高指導者は火魅子とされている。神の遣いはその本質的な役目を終え、現在は国政を司る要職に就いている。

だから、九峪はすでに、耶麻台国の指導者でないのだ。耶麻台国で火魅子に継ぐ権力層にいる人物は、

各県の知事

大將軍である伊雅

宰相の亜衣と天目

そして顧問的な立場の九峪

と、これらの面々が耶麻台共和国の最重鎮とされている。

この中で抜きん出た発言力を持つのはもちろん九峪だが、広義で考えれば、九峪は県知事と同じ階級層となる。

これが問題といえれば問題であり、この地位に納まるには、九峪はいささか人々の心に残りすぎた。

「耶麻台共和国は合議の国だけど、火魅子をいただくことで成り立つ君主国でもある。そこに、女王を蔑ろにするやつが出れば、そりゃあ反発も起きるよ」

「九峪様は、女王を蔑ろになどは」

「そんな気はないさ。けど、人から見たらどうだろうな。いつまでも権力にしがみついている、古狸ってさ」

「それは・・・・・・・・」

亜衣は言葉を失う。九峪のいうことも判る気がしたからだ。

九峪は地位や権力に興味を示さない。この時代の人間としては限りなく稀な人種といえる。

だから、九峪は最高の座をあつさり火魅子に返した。本当に九峪が汚い人間ならば、火魅子を蹴落として九洲を支配しているはずだ。

判る。けど、それは人々の勝手な言い草だ。

違う、九峪様はそんなお人ではない。常に九峪と共にあり、九峪を見て、九峪の目指す世界を模索してきた亜衣だから。

かあつと頭に血が上る。顔が熱くなるのを感じながら、亜衣は、胸の奥底から何かが湧き上がってくるのを抑えられなかった。

私の知っている九峪様は、そんな醜たらしい人ではない！！

ずいっと、九峪に詰め寄った。距離が一気に縮まる。

「九峪様は何もしていません不是吗？ 火魅子様に楯突いたわけでもない、国益を貪ったわけでもない。ただ国と民のことを考えて、この場にとどまったのではないですかッ」

亜衣の知る九峪は、決して綺麗なだけの男ではないが、誰にもない独特の清廉さをもってことにあたっていた。

卑怯なところがなかったのだ。卑屈なことをしなかったのだ。いつもどこか清々しかった。

座を退いた後も、国政に力を注ぎ、民の声を聞き、火魅子の側に立つて是をよく補佐した。

その九峪様の、どこを見て『権力にしがみつく古狸』と呼ぶというのだ。

「耶麻台共和国の意味を、誰も理解していないだけです。権力とか地位とか、そんなことは関係ないのだと、誰も気づいていないだけでッ！」

だから、九峪様が己を卑下にすることはッ！！

そう、亜衣は叫びたかった。信じて付いていった青年を貶める言葉がどうしても許せなかった。

九峪の苦勞を亜衣は知っている。どれだけ傷ついたかも知っている。敵兵の死にすら心を痛めた異界の青年の優しさや弱さ、それを克服したときの逞しさを知っている。

私に和を教えてくれたこの方が、どうしてかように謂われねばならない。

貶められるべきは、期待に応えられない私の方なのに。

「九峪様は、この国に住む人々全てを仲間と。そのために尽力してきたではないですか」

「それがいけなかったんだ。俺は神の遣いだったから、なおさらいけなかったんだ」

九峪の民衆に与える影響力は天変の如く、凄まじいものがある。

限りなく結果を出し続け、雷鳴も鳴り止まぬ速さで次々と勝利を手にし続けてきた。

英雄、と惜しめない賞賛をもって讃えられる存在。救世主。

その影に火魅子は、いまいち埋もれがちなのだった。簡単に言えばインパクトがあまりに弱すぎた。

「俺が何をしたかじゃない。そうじゃないんだ。『ここに神の遣いが居続けている』……それが原因なんだ」

その一言は、神の遣いの 九峪の存在意義を否定する言葉。

ほかでもない、九峪の口からその言葉は紡がれた。

亜衣の聞きたくない言葉だった。

言い返したくても、もう、亜衣は何も言えなくなっていた。九峪の言う言葉、それは誤り一つないことだから。

気づいていた、亜衣も。それが根底に掬う『うねり』なのだと。

でもそれを認めてしまうと、それは『九峪を否定する』ということ
で。

そのジレンマが亜衣を苦しめ続けてきた。

「俺は………還るべきだったのかな」

わからない、と九峪は言っていた。あの言葉通り、九峪の一言は、まだ迷いがあるようだった。

僅かにでも望郷の念はあったはずだ。それを押し切ってもこの世界に、仲間の下に残り、そして今は後悔している。

複雑だった。本当に自分が何なのかわからなくなるほどの複雑。

でも

「皆を過去にすることなんて、出来ないよ」

呟かれた一言に、亜衣の身体が大きく震えた。揺れる瞳で九峪を見つめる。

過去になんて出来ない。

それは、九峪はみんなと共に歩みたいと思う、よどみない本当の思い。

九峪の瞳は悲しそうで、亜衣もなぜだか、とても悲しくなっていく。涙が溢れそうなほど、九峪が薄くぼんやりとしていた。

今にも消えてしまいそう。亜衣は咄嗟に九峪の裾を、指で弱弱しく

摘んだ。そうしないと、九峪が一瞬で霞になってしまいそうだったから。

小さな力に、九峪は瞳を亜衣に向けた。

「私はっ……九峪様と出会えた事を、天に感謝しています。九峪様とともに歩めたこと、誇りに思っ生きてまいりました」

何を言っているんだ、私は？

頭がぼんやりとしている。まるで熱病に浮かされたような、霧のよ
うに濃いもやが思考を鈍らせていく。
考える力が衰え、心の奥から沸き起こる何かが、止め処なく溢れ出
して行く。

堰を切ったように、もう止められない。激情は一瞬で亜衣の中を駆
け巡る。

「九峪様がいたから、私はここまで来れました。九峪様がいなければ、私はここにいませんでした」

全ては九峪から始まった。廃神社での出会いから、亜衣の運命は加
速度的に回り始めた。

亜衣にとって九峪は道具でしかなかった。故国を取り戻し、星華を
火魅子に祭り上げるための、便利で最強の道具。

それがいつしか、亜衣にとってなくてはならない存在へとなってい
った。道具としてではない。人として、なくてはならない存在へと。

それも九峪の力なのだろうか。亜衣には判らない。

苦難に直面しても、九峪の笑顔が亜衣を幾度も救った。九峪がいたから、亜衣はここまで戦い抜いてこられたのだ。

否定できるはずがない、私が、九峪様を。

「九峪様が共和国に残ると仰ってくれた時は……私は、嬉しく思いました」

歓喜した。冷静を装いながら、心は天を貫いていた。

まだいられる。まだいてくれる。それだけで亜衣は満たされた。

耶麻台共和国はまだ幼い。火魅子は即位してまだ日が浅い。

不安を多く抱えたまま、九峪がいなくなる、それは亜衣とってかつてない恐怖となって押し掛かった。

これからは、共に平和な世に、太平の国を創っていこう。そう宣言されたとき、亜衣はやさしく微笑んだ。

九峪がこの世界を選んだ。それがなぜだが、自分が選ばれたようにさえ思えた。

それは、私が

「九峪様がいなければ、私は　ッ!」

私が、九峪様をお慕いしていたから。

愛していたから。

いなくなるということは、永久に会えないということとは。

残される者にとって、それは死なれることと同義。

愛する者の死を許容するには、亜衣はあまりにも優しくなりすぎた。冷徹だった女は、愛を知り慈しむことを知った瞬間。

どうしようもなく弱くなった。一人で立つ力強さを失ってしまった。

寄りかかる心地よさを知ってしまったから。

共に歩む幸福感を知ってしまったから。

でも。

「私は・・・・・・・・」

ずっと一緒にいたい。

そう思うことも自然なこと。誰にも咎められない、誰もが持ちえる、それは掛け替のない、愛らしい欲望。いられないのなら

「ここにいて、意味などッ」

「亜衣」

いつしか、亜衣は九峪の胸に縋り付いていた。自制心を失った体が、無意識の中で九峪を求めていた。

九峪に呼びかけられて、亜衣の心は少しだけ落ち着いていく。九峪の声は時に心をかき乱し、ときに優しく撫でてくれる。

いま、自分が何をしているのか。揺れる頭でそれを理解すると、亜衣は急激に情けなくなっていた。

何をしているんだ、私は。こんなみつともない姿を九峪様に晒して。

情けなさ過ぎて涙が出てくる。それを見られなくて、亜衣は頭を九峪の胸にうずめた。その行為がまた恥ずかしくて情けなくて。

どんどん泥沼に落ちていく。出来るものなら、今すぐ消え去ってしまいたい。

「亜衣・・・・・・・・その、さ」

胸の中で小さくなく亜衣に、九峪はどうすればいいのか分からず困り果てていた。

わずかに伝わる温もりと女性の香り、そして振るえ。

小さいな。そう思った。自分よりも年上の女性は、まるで年下の少女のように小さかった。

小さく思えた。

どうしようかと思っていたが、その小さく泣いている亜衣を見ているうちに、自然と腕が動いていた。

なんでこんなことをするのか、九峪自信がわからない。腕はそつと、亜衣の背中に回される。

きゅつと、赤子を抱き上げるように優しく。

柔らかい。亜衣はよく自分の起伏に乏しい身体を揶揄するが、それでも、この柔らかさは、九峪に亜衣の女性を強く意識させるのに十分だった。

亜衣の身体が、大きく跳ねた。

「なんつーか……俺も、亜衣がいてくれたから、ここまでこれた。俺って一人じゃ何にも出来ないやつだから、亜衣が側にいてくれて、本当に良かったって思ってる。感謝してる」

「九峪様……」

亜衣が上目遣いに九峪を見上げる。潤んだ瞳が、わずかに差し込む月明かりに照らされて、とても神秘的に輝いていた。

「亜衣が苦しんでるのに、俺は何も出来なくて。それどころか、亜衣を苦しめる原因は俺にある始末だ」

昼に見た、亜衣の憔悴しきつた顔。隈のできた目元。

建国からこちら忙しい日々が続いたが、そこに疲れはあっても焦りや苦痛などは一つもなかった。

希望に溢れていたから。

だから、亜衣の疲れきったあの姿を見たとき、九峪は心のそこから心配したし、助けになりたいとも思った。

その俺が亜衣を苦しめている。

笑い話にもならない。つまらなさ過ぎる。

「けどその俺を亜衣は信じてくれてる。俺のせいじゃないって言うてくれた。それが……すっげえ嬉しくてさ」

まだ、見捨てられていない。まだ、信じてくれている。

九峪もまた翻弄されて疲れていた。自らの存在そのものが罪だとばかりに、世は騒ぎに騒いでいて。

これで、亜衣たち古くからの仲間にも亀裂を生み出すようだったら。

九峪はとても耐えられないだろう。

皆のために戦った。それは自分のために始めた戦いだった。けどいつしか、皆に認められて、皆を認めて、戦う意味は変わっていった。

九峪は、いつのまにか、誰かのために戦うようになっていた。仲間の願いのために戦うようになっていた。それすらも、自分の願いとして。

忘れるところだった。

「俺を、まだ必要としてくれる人たちがいる」

戦う意味を。

「 亜衣がいる」

必要だといってくれる。

「還るなんて、それこそ馬鹿だ」

「九峪様・・・・・・・・」

亜衣が九峪の名を呼ぶ。それだけで、九峪の心は温くなる。

還ってどうする気だ。沢山の人間を殺して、やりたい放題やって、さよならなんて、都合が良すぎるだろう。

そうだ、俺は背負うと決めたはずだ。背負って生きるために、この世界に残って、皆の行く末を、ともに歩もうとしたんじゃないのか。

亜衣ばかりが苦しむなんて、そんなのは駄目だ。苦しむなら、一緒に苦しむべきだった。

「ありがとう、亜衣。・・・・・・・・諦めるなんて、俺らしくないよな」

「・・・・・・・・はい。らしくありません。九峪様は、いつも、笑っていなければ」

前を向いて歩まねば。心の中で、囁きかける。

願わくば、その道に、自分もいることを願って。

涙に濡れた瞳で、亜衣は微笑んでいた。

第3回 「九峪追放」

元星四年。紅葉深まる秋。

事件がおきた。

豊後の県都で、城下民同士の大規模な殺傷暴動がおきたのだ。女王と神の遣いの論争をめぐって、民衆間で起こった、初めての暴動である。

参加者二百人超。死者三十人余り。重軽傷者多数。破壊及び放火で倒壊した民家、およそ六百棟を越える。

冬の到来を前にした事件だった。

暴動事件が切欠となったのか、このときから、全国的な対立が表面化してくることとなった。

暴動が暴動を呼び、新たな論争を呼ぶ。波は一気に押し寄せ、堤防を今にも越えてしまいそうなほど高くなりつつある。

津波の訪れは、そう遠いことではない。

筑前・筑後などの比較的離れた県はまだいいが、豊後を含めた周辺の地域は酷いものだ。

シンドローム。一帯的に感染する症候群。ウイルスによるものあれば、精神的なものまで、その広義に果てはない。

まだまだ下火だったはずの対立意識は、一年の間に徐々に燃え広がろうとしていた。

切欠はなんでも良かったのかもしれない。それがシンドロームの一番怖いところだ。ほんの小さな波紋一つが、巨大な波を作る。

人の意思など物ともせず。それは狂氣的で、悪魔に憑かれたように破滅的で。

日々激化する意識分裂の中、各地の知事たちが耶牟原城にこぞって上都してきた。

夜中、まるで隠れるように。

「伊万里殿」

耶牟原城の廊下。たった今到着したばかりの伊万里は、仁清をつれて大会議室へと向かう途中だった。豊後の仕事は上乃に任せている。その伊万里に、背後からかける声があった。丁度曲がり角から出てきたところなのだろう、藤那が傍らに閑谷をつれて立っていた。

「藤那樣。藤那樣もですか」

伊万里の問いに藤那は頷くと、

「そういう伊万里殿も、ということか」

「はい」

と、二言三言会話を交わして、揃って歩みを再開する。

夜の帳の下、虫と犬の鳴き声が聞こえてくる。あとは四つの足音か。

「大会議ということだが」

藤那が呟く。

「やはり、アレらのことだろうな」

藤那の言わんとしているところを察して、伊万里は深刻に頷いた。

件の暴動事件。

「どこも深刻だと聞くが」

「では、火後も」

「死人が出ては、どうにも、な……」

藤那の瞳に暗いものが差す。

伊万里も藤那も、抱える悩みは同じ。民衆の暴動を鎮圧するにも、出来る限り暴力には訴えたくはなかった。

しかも、暴動の発端は、他でもない伊万里領の県都で起こったものだ。

伊万里にとっては、自分自身の無能を見せ付けられた、そんな思いが強い。

責められている気さえしてくる。

「そう気を落としても、どうにもなるまい。起きたものは仕方がない」

「はい。……ですが、やはり口惜しいです」

「伊万里殿一人の責任でもない。すぐに自分を責めるのは、伊万里殿の悪い癖だな」

苦笑して、しかし藤那の表情は硬いまま。

伊万里を責める気はない。民衆の暴動はもはや、何処で起きてもおかしくはないほどだった。ただそれが、張り詰めた糸が切れたのが、たまたま豊後が早かったというだけのことだ。

藤那だつて抑え切れていたかといえば、自信を持って応えることは出来ない。聞こえてくる声は日に日に大きさを増し、藤那も誰も、目を回しかけていたところなのだ。

その渦中にあつて豊後の事件だ。責めるどころか、むしろ伊万里を同情すらしていた。

それでも、思ってしまうのは、藤那が人間だから。

豊後の事件さえなければ、と。

そんな負の思いを片隅に追いやり、藤那は今回の召集のことを考える。

「しかし、解せんな。わざわざ夜間に上れとは」

「火魅子様や九峪様への挨拶もするなどの達し。おかしくはありませんか」

伊万里や藤那にかぎらず、各知事に送られた密書には、幾つかの不可解な条件が書き添えられていた。

その最たるものが、九峪と火魅子に会うなというもの。

おかしな文面だと思う。主君たる者たちに挨拶の一つも許さないなど、普通は考えられない。

「亜衣のやつ・・・・・・・・なんだ？」

藤那の言葉は、困惑に染まっていた。

藤那と伊万里が大会議室に辿り着くと、そこにはすでに主だった面々が勢ぞろいしていた。

知事も全て揃い、それどころか、伊雅やキョウまでがいた。

藤那と伊万里が席に着く。蜀の灯火だけで照らされた大広間に、緊張の面持ちが浮かび上がる。

ひそやかに静まる部屋の中、能面のような亜衣が、場を見回した。

「まずは、この場に集まった方々に、無理をおしてお集まりいただいたことへの謝罪と感謝を」

「挨拶はいい、亜衣」

藤那が一刀の元に切り捨てる。

藤那だけではなく、全員が先を促せと目で訴えかけてくる。議題に上るであろう事を予想しているだけあって、それどころではないのだ。

気分を害した様子もなく、亜衣は一つ頷く。

「今回お集まりいただいたこと、すでに察している方がほとんど」

「では、やはり」

志野が小声で呟いた。小さい声なのに、静かな部屋には十分に響き渡っていった。

「事態が動き出した今、もはや猶予はなくなりました。これ以上の暴動は九州全土の騒乱 いえ、共和国を揺るがす『争乱』へと発展してしまうことは、誰の目にも明らか」

いずれは、そうなる。

火魅子と神の遣い。二つの指導者を頂くことが出来ないのであれば、どちらか一つを選ばなくてはならない。

暴動の起こった今、それを対話で持つて解決することはきわめて困難なこと。

そうなったとき、運命は争いで持つて解決へと突き進む。それは『女王』と『神の遣い』の戦争を意味する。

九州を二分する戦争。幕末、明治初期に勃発した『西南戦争』のよ
うに。

国家が分裂する前に。

「武力衝突は、絶対に避けねばなりません。そのためには、この騒
乱の源を取り除く以外にありません」

「それは……女王か神の遣い、そのどちらかを政から排除
するということか？」

藤那の一言に、場の視線が亜衣に一気に集中した。

何対もの視線を迎えうち、亜衣は瞳をそっと閉じると、

「……その通りです」

と、短く応えた。それは肯定の一言だった。

「排除……本気なのか、亜衣さん？」

伊万里が困惑と驚愕の表情でガタツと立ち上がった。伊万里に限らず、その場の殆どのものが、伊万里と同じ表情をしていた。

九峪と火魅子が原因であることは、もう疑いようのない事実である。

しかし、どちらも共に戦ってきた同胞であるし、厳密に言えば彼らは首謀者でもなんでもない。

ただ争う『理由』なだけで。

だが、それを排除するなど、誰の考えにもなかった。

「民衆が騒ぎ出してもう一年が過ぎました。人々の心は、このままでは引き裂かれ、元に戻ることは在り得なくなるでしょう」

「でも、だからって……他に方法は」

食い下がる伊万里。

亜衣の瞳が、わずかに、わずかに強みを増した。

「その方法があれば、とうの昔にやっております」

語気緩やかな言葉。だがその言葉に込められた思いは如何ほどのものか。

「術が他にあるならば、ぜひ、聞きたいものです」

などと言われては、もう、伊万里に言葉はない。力なく椅子に腰を

下ろす。

うつむく伊万里に、仁清以外、声をかける者はいなかった。

「皆様は各地の政を司る方々ばかり。なればこそ、火魅子様と九峪様、そのご進退を話し合っていただきたく思いました」

「だから……二人には内密、ということなのです」

手紙の不可解さは皆が胸に思っていた。

偉大なる二人へ上都の挨拶に赴くことは公然の了解だった。知事は都に上ったとき、まずは火魅子に目通り、ついで九峪に目通ることを常の慣習としていた。

身分をあらわすには当然の義務。本人たちは深く気にしていないが、周りへの示しもある。

だが、それを敢えて禁ずるとするのは、火魅子と九峪を蔑ろにする行為そのものである。

それに内密というのもおかしいことだ。

たしかに、当人たちの前で話し合える内容ではない。ともすれば、これはある種の『反逆』でもあるのだから。

ただ、志野は一人だけ、その反逆を許しがたい人物を知っている。

「伊雅様は……ご承知、なのです」

部屋の片隅。椅子ではなく床に胡坐をかいて座り込む伊雅は、腕を組んで、事の成り行きを見守っていた。

この場にいるもので、誰よりも火魅子と九峪に忠誠を誓った者を挙げるならば、誰もが伊雅を推すだろう。

亜衣の考えを、真っ先に否定して然るべき人物のはずなのに。

亜衣たちのやり取りの間も、伊雅は動揺ひとつ見せず、ずっと見つめ続けていた。

「……わしは先祖の守ってきた民と、この新しい国を守らねばならない。死して逝った輩への、それは弔いであり、礼儀であり……九峪様と火魅子様の願いでもある。そのためには、わしは、鬼の業も背負うつもりだ。だが、わしにもよき考えはないならばせめて、わしは、すべてを見届けたい。そのためにここにいるのだ」

「そう、ですか」

伊雅の苦難が、言葉の端に滲み出っていて、志野はそれ以上の事は言わずにおいた。

伊雅がそれでいいのならば、もう志野に言えることはない。

キヨウを見れば、こちらも伊雅と同様なのだろう。ただこちらは伊雅ほどの深刻さは感じられなかった。

「火魅子様を廃して、九峪様に再び政を担っていただくか。さもなければ……九峪様に、消えていただくか」

「消えて・・・・・・・・」

伊万里が絶句した。

「それは『害し奉る』ということか？」

藤那の問いに、亜衣は顔を伏せて、

「できるならば、そのようなことはしたくありません。しかし止むおえないのであれば」

「そんな！」

「伊万里殿、落ち着け。まだそうすると決まったわけではない」

床机を叩き付けんばかりの勢いで立ち上がった伊万里の腕を、藤那はやや強引に押さえつけた。

伊万里がバツと藤那を見た。わずかに怒りを帯びた瞳が、『なぜ冷静でいられる！』と、そう語りかけていた。

しばらく、そうして見詰め合う。いや、他者には睨みあっているように見えた。

ほどなくして、伊万里が大人しく席に着く。

「すみません・・・・・・・・」

蚊の泣くような声で、そう呟く。

「いえ、伊万里様のお怒り、当然のものです。……ここに
いるもので、火魅子様と九峪様、そのどちらも不要と断じる方は、
いませんから」

そう言つて、亜衣はそつと顔を伏せた。能面のようだと誰もが思っ
ていたその表情は、伊万里たち同様、悲しみにくれているように見
えた。

それを見ただけで、伊万里の中に沸きあがった怒りが、台風に消さ
れるようになっていった。

亜衣さんも、苦しんでいるんだ

亜衣にとつても、この決断は苦渋だった。救いたいと願いながら、
亜衣は、どちらか一つを否定しなければならぬのだから。

悠長に考える時間はすでになく。

直ぐに問題を解決するには、元凶となるどちらかを取り除かなけれ
ばならない。

「事態は優しくありません。今宵のうちに決断しなければ」

「そつだな……。しかし」

「共和国の統治者は火魅子様です。正統を説くならば、いただくは
火魅子様なのでしょうか」

「そうなれば、九峪様は……。…」

火魅子を仰ぐならば、九峪は害し奉らねばなくなる。

どちらも生きているだけで騒乱の種となる。けっして頂けない様にしなければならなくなる。

どちらを選ぼうとも、迎える結末は最悪のもの。

火魅子の死か、九峪の死か。

「母上。九峪様、死ぬのか？」

重苦しい空気を察したのか、香蘭は隣に腰掛けている紅玉の耳元で囁き尋ねた。

沈痛な面持ちの周囲に比べて、香蘭の表情はまだ多少の穏やかさを残している。

だが眉は下がり、不安そうな瞳はわずかに揺れている。

香蘭も今年で二十歳になる。倭国語にもなれ、母・紅玉に県政の全てを任せることもなくなった。

その香蘭は、いまだ幼さの残る感性の中で、九峪と火魅子に迫る悲劇を感じているのだ。

「わたし、九峪様に死んでほしくないよ」

「それは皆も同じです。香蘭、誰も九峪様の死を望んでないかもしれません」

「でも、九峪様、もうここにいられない」

「ええ・・・」

いずれ、九峪はこの耶牟原城から姿を消さねばなくなる。

九峪と火魅子、どちらを残すかと言えば、火魅子を残したほうが共和国のためではある。

火魅子は耶麻台国の正当な統治者であり、共和国にしても、火魅子を御旗に掲げることで成り立つ王朝である。

ゆえに排除するは九峪、ということになるのだが。

紅玉が亜衣を見やる。亜衣の真意が、なんとなく判った気がした。

「・・・この集会。もとよりそのためのものだった、ということですね」

紅玉の呟きに、亜衣は初めて笑みを浮かべた。疲れた苦いものだが、それでも初めて見せる笑みだった。

「さすが紅玉様。お察し、ありがたく思います」

「火魅子様を推し、九峪様を廃することはすでに胎の内に決まっていたこと。亜衣殿が我らに尋ねたかったのは・・・いえ、それすらも亜衣さん、貴女はわかっているのではないですか」

ざわつとどよめきが起こった。

「九峪様のお姿を世上から消すのであれば、何も殺す必要はありません。人知れず姿を隠させればよろしい。『神の遣いは元の世界に還られた』といえば、それで民衆は納得するはず。違いますかしら」

紅玉の推理に、全員が衝撃を受けたような表情で聞き入っていた。

たしかに、何も九峪を殺す必要などどこにもない。九峪がいることが問題とするのなら、人々の目に触れないようにすればいいだけのこと。

その上で今後の関わりを絶つ噂を流せば、民衆は九峪を持ち上げることができなくなる。

真実はともかく、民衆の間では、神の遣いはもう存在しなくなるのだから。

あまりにも九峪を殺すという強迫観念が強くなりすぎていた。だから誰も気づけなかった。

紅玉の推理を静かに聴いていた亜衣は　ほっとしたような、そんな安堵の微笑を浮かべた。

まるで、何かから開放されたかのように。

「だが、それでもまだ分かん。亜衣、やりようがわかっているのであれば、なぜ早々に実行に移さんのだ」

藤那が納得いかないと、やや不機嫌そうに亜衣を問い詰めた。その言葉に、何人かの者が同意するように頷いた。

解決策が分かっているながら、藤那には、亜衣がこうまであぐねる理由が分からなかった。

藤那の知る限り、亜衣はそんな愚かな女ではない。

しかしその応えは、亜衣からではなく、亜衣の背後にいるキョウから語られることとなった。

「事は女王と神の遣いの進退問題だよ。亜衣や伊雅の独断で進めるには、少し大きすぎるよ。それに今後九峪を人の目に触れさせないとなると」

「各県の協力が必要不可欠、ということですね」

紅玉の相槌に、キョウは嬉しそうに手を叩いた。

「そう！ そうなんだ！ オイラたちはこれから、九洲に住む何万という人々の誰一人にも、九峪の存在を知られるわけにはいかなくなる。だから各県を治める皆には、この話をしておかないといけなかったんだ」

「つまり、これで我々は『共謀者』になった、というわけか」

ふんつと藤那が腕を組む。

うまく亜衣に操られているような、そんな気がして、それが気に入らなかった。

回りくどい。そういうことならば素直に言えばいいものを。

「だが、これで我らがここに集った意味は分かった」

「九峪様のご退陣、か。仕方がないとは言え、気が重いな」

伊万里の一言は皆の共感する言葉だった。

これが現在打てる最良の策だろうが、伊万里にしても誰にしても、九峪の立場を奪うことに変わりはない。

古きは過ぎ去り、新しきを迎えうる。

しかしそれも、一步間違えれば、九峪への反逆にさえなってしまうかねない。

そうでなくとも、伊万里は、九峪に申し訳なくて仕方がなかった。九峪を裏切る行為に思えて仕方がなかった。

鬼の業。伊雅の言葉が蘇る。この後ろめたさを、伊雅は背負うというのだろうか。

「時が過ぎれば、九峪様への償いも、如何様に出来ます」

「そうだな・・・これが最後の別れになるわけだなし。上手くいくのであれば、これ以上の方法はないのかも知れんな」

「九峪様は、納得するでしょうか」

権力や地位に執着する九峪ではないとわかってはいるが、それでも気になる。

自分の知らないところで処遇を決められ、追い出される。それも制約のある生活を余儀なくされる。

九峪は変なところで我侂だから、聞き入れないかもしれない。

「九峪様への説得は私がやります」

亜衣が進み出る。実際、こういう仕事などは亜衣の得意とするところ。

亜衣には提案者としての責任がある。最後の締めは自らで行わなければならぬと思っている。

それに　けじめをつける意味でも、亜衣はこの役目を最初から、自分自身のものと考えていた。

九峪様を裏切る行為。たしかにそうだ。これは九峪様を裏切ることには他ならない。

その責、罪、一心に背負うつもりだ。

背負って、その贖罪として、国と民をより良く導く火魅子をよく支える。

この役目だけは、誰にも譲らない。譲れない。譲りたくない。

「近く、九峪様のご出城を決行に移します。知事の方々には、細心の注意をよろしくお願いいたします」

深々と一礼する。覚悟の籠った、見えない力強さを秘めた礼。

亜衣の決意が、その一動作に込められていた。

夜の密会から翌三日。

この日は昼間から肌寒さを感じる程度の冷え込みだった。庭師も厚着で草木の手入れをしている。

いつか、亜衣と九峪が一夜の抱擁を交わした小さな橋の上。

同じく二人はそこにいた。しかしその距離は、互いに一步引いた場所になっている。

「ここからの景色も、直に見納めになるのか」

ぽつりと、九峪は呟いた。

短く切り揃えられた草に咲く花も、見事な枝振りの木々も、もうすぐ見れなくなる。

美に対する意識も感覚もない九峪だが、耶牟原城の誇るこの庭園の涼やかな静けさが、大人になった九峪に不思議な穏やかさを与えていた。

いつから始まった騒々しい世の中であって、この庭園だけは全てから九峪を遠ざけてくれた。

聞こえてくる声は届かず。そしてこの庭園にあつて、九峪は神の遣いである必要はなかった。庭園も、神の遣いを必要とはしなかった。庭園は、神の遣いにとって、唯一の箱庭だった。

眺める景色は季節とともに移り変わってゆく。同じ時はなかった。

それは、この箱庭に守られてきた九峪もまた同じこと。

変わらぬことなど何もない。何もかもが変わってゆく。

「亜衣。時代と時代を隔てる区切りは、何処にあると思う」

不意に問われ、亜衣は俯いていた顔を上げた。

時代の区切りと言われても、亜衣は、それが何を意味する言葉なのかわからなかった。

だが直ぐに、それが、現状に重ねた九峪の心の現われの一端だと気づく。九峪は今こそ、時代の節目だと思っているのだ。

しかし、九峪の心の一部に気づいたとて、それが問いの答えになるわけではない。

「私には、判りかねます」

結局のところ、亜衣にはこんな答えしか返せないのだ。

そうだろうと、九峪は密かに笑んだ。亜衣に問いかけた九峪自信、己の問いに対する明確な答えなど持つてはいなかった。

だいたい、そんなものだ。過去を振り返ることが出来れば、その時の節目もわかる。

だが今を生きる以上、まさに今こそが節目なのだと、気づける者はどれだけいるだろうか。

「……もっと早く、気づくべきだったんだよな」

今こそが、時代の変革期だったのだ。

しかし九峪がそれに気づいたとき、世界は、すでにある形へと向かって歩みだしていた。

亜衣の決断がその道を示してしまったのだ。

「俺はいろんな時代を知っている。いろんな出来事を知っている。だから、多くの時代を隔てた区切りも、その末に迎えた結末も知っている」

「今が、そうだと？」

「……… たった五年でも、古くなるには十分だったんだ。そうして没落していった一族も、俺の世界には沢山あった」

憧れた古き時代は、まさに栄枯盛衰が如実に現れた時代でもあった。落ちることは即ち死を意味していた時代だった。

未だ少年だった頃。思い起こせば、この頃の九峪は、本当に子供だった。穢れを知らぬと言えただろう。

落ちるということがどういうことなのか、あの時はまだ知らなかった。

落ちた今、初めて気づいた。

時代と共に進み続けるには、強制的に訪れる区切りの刃を防ぎきらねばならない。それが出来なければ、時代に取り残され、新たな時代を迎えられなくなる。

柴田、武田、北条、上杉、京極、足利、斉藤、長宗我部 . . .
. . . 九峪が最も心を奔らせた戦国の名家武家も、時代の波に乗り切れなかった。

時代と世界は違えど、九峪もまたその一つとして名を連ねようとしている。

「引き際を誤った結果がこれだ」

苦しそうに、その言葉は苦渋に満ちた一言だった。

亜衣と同じように、九峪もまた出来る限りの事はしてきた。当事者である九峪は、とにかく自身が火魅子の障害と成りえない事を、ひたすらに示し続けてきた。

だが何かを言えば言うほど、自らを押し上げ奉る者どもは、さらに火魅子への懐疑心を募らせるばかり。

不幸だったのは、共和国がまだ若いことだった。そして九峪の知識が豊富なことだった。九峪が自重を決め込んでも、国政を司る物た

ちは九峪を必要としてきたのだ。

結局として、九峪は活躍せざるを得ないのだ。九峪が活躍すれば活躍するほど、火魅子を純正とする者たちは、より火魅子に傾倒するようになっていった。

何をしてても悪循環なのだ。

だから、その連鎖を断ち切るには。

「これが最後のチャンスだ。 亜衣は、それに気づいたんだ。ここを逃せば……………亜衣、お前は、俺を殺すつもりだった」

「ッ……………はい」

一瞬、亜衣は息を詰まらせた。

亜衣は己の考えを九峪に打ち明けた。すなわち現在の政治の基盤とも呼べる、

九峪政権

の崩壊と、神の遣いの廃止である。亜衣は九峪に政治からの完全退陣を強制したのだ。

それが受け入れられない場合は……………その先は、言うことは出来なかった。

九峪様ならば、受け入れて下される。そう言い聞かせていた。それは、自身の中にある九峪殺害の思いを、たとえ一片でも知られたく

はなかった。

だが、なんと言ったのか。いや、流石はと言ったべきか。

九峪は全てを承知していたのだ。

おそらく、ずっと前から考えていたのだろう。亜衣と同じ事を。政権からの退陣を。

そして、最悪の場合も。だから亜衣の要求にも、九峪は逆らうこともなく、取り乱すこともなかった。

亜衣は取り繕うことはしなかった。そうすることは、全てを承知した九峪に対する、最大の侮辱だと思ったからだ。

せめて、これ以上、何も隠したくはなかった。

「………私を、お恨みになりますか」

九峪の方は見ずに、じっと池の水面のたゆたう波を見つめながら、亜衣は雪のように冷たい声で九峪に問いかけた。

私は、九峪様を亡き者にしようとしていた。

それを知られた今、亜衣は強烈なまでの悔恨と、同時に途方もない開放を感じていた。

心の苦しみが、隠し続けてきた後ろめたさが、全てを知られていたと分かった途端、朝露に消えるように霧散してしまった。

後に気になるのは唯一つ。恨まれて当然だと、亜衣の中に諦めにも似た感情が渦巻いている。ここで怨嗟の言葉をぶつけられようと、亜衣は、全てを受け止めるつもりだった。

だが九峪は、困ったように笑う。

笑ったのだ。

「そりゃ楽だ。恨むんなら、それ以上に楽なことはないさ。・・・
・・恨めるんならな」

そう言っただけ九峪は亜衣のほうを振り向いた。

その表情には、怒りも、憎しみも感じられない。ただいつも通りの九峪の表情だった。

胸の奥がズキリと痛む。

「俺が亜衣を恨んでいいのなら、亜衣は、俺を恨んでいい。俺に亜衣を憎む資格があるのなら、亜衣は、俺を憎む理由に事欠かない」

「私は憎んでなごッ！」

「わかってるよ。わかってるから・・・・・・恨むことも、憎むことも出来ないんじゃないか」

「しかし、私は」

九峪様を、殺すつもりでいたのですよ。

言いかけて、咄嗟に言葉を喉の奥に押し返す。

この期に及んで、何を恐れている。今更、もう全てを知られているというのに。

言葉にするのが怖いのか。言葉は消せない。聞かれれば、それで終わりだ。

何が終わる。もう終わっているではないか。

終局の道に、亜衣も九峪も、外れることなどできないのだ。

ならば、せめて。

「逆に聞かせてくれ。亜衣は、俺を恨んでいるか。恨んでいるから、今回のことを考えたのか」

「ッ違います！」

サッと、亜衣の心臓が凍りつきそうなほど冷たくなった。

そんなことない。恨んでもいないし、憎んでもいない。それは確かに言っただけだ。

だというのに、九峪は二度にわたって、同じ問いを亜衣に投げかけた。恨んでいるのかと、二度も問われたのだ。

信じてもらえなかった。私の心が疑われている。そう思えるほど、九峪の問いは絶望的なものだった。

恨んでいると思われたくない。憎んでいるなどと思われたくない。絶対に、そんなことなどない！

「私は、九峪様を殺したくないから、死なせたくないから！ だから九峪様の御身を隠そうと」

ははっ。そんな笑い声が聞こえてきた。

亜衣はいつしかこぶしを握り締めていた。体中が強張って、まるで鋼を全身に流されたようだった。

耳に届く、九峪の聞きなれた声でさえ、亜衣は聞くのが怖くなっていた。九峪の言葉の一つ一つが、自分の思いを否定する言葉にさえ聞こえてきそうだった。

どうすれば。どうすれば信じてもらえる。頭の中を駆け巡るのは、そればかりで。

それでも、九峪の声は、やはりいつも通りだった。

「だったら尚更、恨むことなんか出来ないな」

俯く亜衣に投げかける言葉は優しくかった。ただ、九峪はたまらなく嬉しくて、やはり悔しかった。

九峪にしてみれば、亜衣の決断のおかげで命が助かるのだ。

たしかに九峪は実権を失うだろう。今までと違って、ただ生活するだけでも、多くの制限を強いられるだろう。これから先の人生は、まさしく軟禁状態に置かれるのだから。

だが命は助かる。それは、亜衣の手を汚させないことでもある。

もともと、これは九峪たち当事者が解決すべき問題だったのだ。だが九峪も火魅子も、それを解決することが出来ず、各知事や亜衣などに面倒を押し詰める形になってしまった。

不甲斐ない身なりのくせに、どうして偉そうに出来る。

いま九峪に出来ることは、こうまで追い詰めさせた亜衣を、ただ労働ことしかなかった。

「俺は亜衣に助けられた身だ。恩人を恨むほど、高慢なつもりはない」

「……これが、助けたと言えますか」

「助けたさ。お前の決断が、国と民を救った。俺も助けられた。なら十分じゃないか。これ以上、何を望む」

そう、だろうか。

最初、亜衣の思い描いた結末とはかけ離れてしまった。全てが万事解決し、全てが元通りになったはずの未来こそが、亜衣の望んだものだった。

そこには、いつもの如く、亜衣と九峪の姿もあったのだ。

あるはずだったのだ。

なんだ、そういうことか。

不意に亜衣は気づいた。気づいた気がした。私は、ただ今が気に入らないだけなんだ。

だから満足できないんだ。

九峪様と、一緒にいられないから。

だからすつきり出来ないんだ。

九峪様はいいかもしれないけど……私はよくないんだ。

私が救われないんだ。

だと言うのに、なぜ。

「これからどうなるかはわからないけど……国を頼む、亜衣」

なぜ、そんなことを言うのですか。

自分勝手だとわかりながら、亜衣はそう、心の中で呟くしかなかった。

悔しくて、寂しくて、切なくて。

顔を上げることが、出来なかった。

十一月に入って二十三日が過ぎた頃。

この日を境に、九峪の姿が見られることはなくなった。そして翌五日が過ぎて、お宮から九洲全土に、一つの御触れが行き届いた。

曰く、神の遣いは元の世界に戻られた。

合わせて、火魅子を頂点とする体制を築くことも、より強い語調で語られることが多くなった。これは、論争を鎮圧するに当たり、火魅子の発言力、存在感をより高めることを目的としたものだった。

この時より、神の遣いを推し奉る武官筋の者たちは、目に見えて大人しくなっていた。対して、火魅子を押し上げる文官筋の人間が増徴しだした。

両者の溝はまだまだ深いが、それもいずれは時の流れが解決してくれるだろう。

最悪の事態は、避けられたのだ。

元星四年十一月。

耶麻台共和国は、もう一つの過去との、決別のときを迎えようとしていた。

第4回 「平和の意味」

元星四年、十二月。混乱の秋を越え、九洲は冬の季節を迎えていた。阿蘇や祖母など九洲山地の高地はすっかり雪化粧を施され、麓の村々にも、粒のような雪がちらちらと舞い落ちている。

どこの村も越冬の準備は済んでいる。越後などの豪雪地帯と違って九洲の冬は厳しくないが、それでも準備することはいくらでもある。特に野菜の保存には毎年、細心の注意を払っている。天敵は鼠である。

阿蘇の中腹。比較的平坦な場所に、一軒の家屋があった。それほど大きくもなく、一見すれば質素な造り。

だが山人や狩人など下々の人間が住まうには、十分すぎるほど立派な家であった。

晩の内に積もったのか、屋根は白くなり、周囲も白くなっていた。

今朝の冷え込みはひとしおだ。戸を開けた瞬間、寒気が男の身体を容赦なく振るわせる。

ぶるると一気に熱が抜けていき、思わず両腕で身体を抱きしめた。吐く息の白さが余計に身を振るわせた。

「・・・・・・・・」

眠気も一気に吹き飛んでしまった。見上げると突き抜けるばかりの晴天があつた。雲ひとつない天空は蒼穹だった。

しばらく蒼い空を見上げていると、遠くからパシャパシャと、水の跳ねる小さな音が聞こえてきた。

音は徐々に近づいてきて、家の角から一人の女性が姿を現した。両手で水桶を持って、危なげな足取りだった。

「あ……お、おはようございます」

こちらに気づいた女性が、慌てたように朝の挨拶をしてきた。

「おう、おはようさん」

しばらくぞんざいに挨拶を返す。別に面倒だとか、そういうことではなく、これがいつもの挨拶だった。

変に畏まったのは好きじゃない。身分だとかなんだとか、そんなことを気にするほうが面倒だ。

ただでさえ目の前の女性は、いまだ身分と言うものに拘りを持っているのか、自分との接し方もどこか硬さが残っている。

だからせめて、挨拶だけは簡単に軽いものにしたかった。でなければ、自分が持たない。

重そうな水桶を持って、女性がヨロヨロと歩みを開始した。女性の身体は小さく、背も、腕や足の細さも、まるで歳相応ではない。女

性の年齢は二十代後半だが、見た目は十代で通りそうなほどだ。

「手伝おうか？」

さすがに可哀相に見えて、背後から声をかけた。すると女性は驚いたように振り向いて、

「め、滅相もございませんッ!!」

と、悲鳴のような声を上げて、そそくさとその場を去ってしまった。

こんな寒い中、大変だなあ　　。雪の絨毯に点々と残された足跡を見ながら、他人事のようにそんなことを思った。

凍りつきそうなほど冷たい冷水に手を浸す。その冷たさに耐える小さな手は、正直にすごいと感嘆する。

自分は、身を竦ましていると言うのに。何とも情けない絵図だ。

「・・・・・・今日は、何をするかな」

白い吐息が呟いた。

時間はいくらでもある。やれることも少なく、どこかへ行くことも出来ないが、虚しいことに時間だけはあるのだ。

日の出から日没まで、ただ吸気と排気を繰り返すだけと言っても過言ではないかもしれない。

そんな時間だけが今日もある。

トッ

小さな音がした。足元を見ると、そこには一匹の老いた猫がいた。

猫は寒さに毛を震わせて、男の足に擦り寄ってきた。身体を擦り付けながら、少しでも温かみを感じようとしているようだ。

うろつろ、うろつろと。男の周りを何週も回り、時には逆方向に回り、顔を男の足に擦り付けて、傍を離れようとしない。

ふつと、男は軽く微笑んだ。

「今日も来たのか？　・・・・・・・・山猫なのに人懐っこいな、お前は」

そつと抱き上げてやる。猫は男に懐いているのか、抵抗一つしなかった。

「腹でも減ったのか？　ん？　悪いけど、ここにはミルクも何もないぜ。・・・・・・・・山女の開き干でよかったらあるけどな」

にゃー

猫が鳴いた。その短い鳴き声が男には、

それでいい

と、言っているように聞こえた。

やれやれ。男は嘆息して　でも嬉しそうに　肩を竦めた。

「じゃ、朝飯にするか」

猫を抱き上げたまま、男は家の中に戻っていった。

今日も、こいつと過ごすか。

いつからか、この老いた猫は男の下を訪れるようになっていた。寒い冬を過ごすのに、囲炉裏のある家は快適だったのだろう。おまけに男はお人よしで、食事も与えてくれる。

暖かい部屋で、猫はいつも寝てばかりだ。天寿も後半、老いた身体は動かすのも一苦労と見える。

だが、男には唯一この猫だけが、隔たりなく過ごせる無二の友となっていた。

無為の時を楽しむ友人。男にとって、山猫はそんな存在だった。そこにいてくれるだけでよかった。

パタン。戸が音を立てて閉じられた。

九峪が帰還　　真実は異なるが　　したことで起こった二頭政治の崩壊。耶麻台共和国は火魅子の名の下に、ようやく一つとなった。諸々の混乱はあったものの、世上は次第に平穏を取り戻しつつあった。

武官は次第に発言力を失い、変わって文官は権力を強めていった。戦争がなければ、武官に出番はなかった。

政策は九峪の推し進めていたものをそのまま続行する形で進められた。当時としては斬新すぎる発想ばかりだが、それを亜衣は必死に租借し理解し、現状で実現可能な政策へと転化する作業に追われていた。

その過程で、文官は一つの政策を実行に移した。

兵役緩和

である。

兵役に動員する人間や、軍備に割く予算の削除、つまりは軍備縮小である。

戦争は終わったのだから、もう兵士は要らない。それよりも国力の増大が急務であると、文官はそう考えていたのだ。

これに反発したのが、琉球島を気にかける武官たちだった。狗根国も滅んだわけではなく、泗国も警戒する脅威である。

裸で虎の前に躍り出るようなものだ。しかし武官の言葉は届かなか

った。それどころか、ここぞとばかりに、口うるさい武官（特にかつての九峪派）はその半数以上が軍を追放されてしまったのだ。

この事件は、文官の増徴を物語っていた。

九洲は繁栄の途にあった。軍備は縮小されたものの、そのおかげで産業や工業に回す人材が増え、物が溢れかえるようになっていた。

田畑はもちろん、製造、貿易まで盛んに行われるようになった。富が商人や地主を豪族にまで押し上げた。

中でも一番の隆盛を誇ったのが、亜衣の管理する『茶葉畑』であった。大陸でしか生産されていない茶葉を、亜衣は九洲での栽培に成功させていたのだ。

九州北部は茶葉の栽培に適した土地だと九峪から教えられたことがあった。

以前、未だ耶牟原城に居を構えていた頃から九峪は、九洲で茶葉を栽培したいと亜衣に語っていた。

嗜好品の乏しい倭国にあって、茶葉を入手するには、大陸まで出向かなければならない。しかし現在の大陸は、呉と晋が戦争を繰り広げている状態。つまり三国時代の終盤に差し掛かっている時期でもある。

入手は極めて困難。晋が呉を滅ぼすのは、まだ数十年先の話であり、

そのことも、倭国の諸王たちはうすうす感じ取っていた。

だが、もしもこの貴重な珍品を、他ならぬ倭国内で手に入れることが出来れば。

こぞって買い手がつくのは明白、巨万の富が飛び込んでくる。

事実、亜衣の懐は大いに潤った。利益の幾つかは国庫に納められ、残りは農地の管理などにまわされた。

十二月、冬の関門海峡。倭国本土へと渡る貿易船に、この年に収穫・加工された茶葉が積み込まれていく。

茶葉は湿気ることのないように、粗めの麻袋に詰められる。船にはそんな麻袋が入った木箱しか載せられていない。

港には水夫たちの荒々しい掛け声が響いていた。九州と本洲を繋ぐ彼らは、亜衣御用達の海人集で、『関門衆』と呼ばれた。

初めて他国に対して茶葉を輸出したのが、丁度去年の十二月であった。荷を船に積み込むとき、亜衣は必ず、自分の目でその作業現場を視察することになっていた。

自分が始めたことなら、それを自分の目で確かめ、見届ける。

当事者の言葉を聴かないと、社会は不自由になる。

九峪はそう言って、よく視察に赴いていた。耶牟原城はもちろん、それぞれの県都、はては地方の村々に足を運んだこともある。

その度に亜衣は九峪の後ろをついていった。一人で行かせるのは不

安だ、というのも理由だが、それ以上に、九峪の考えが知りたかったからだ。

どうすれば九峪のような考え方が出来るのか。あまりに独創的な思考理論は、どのような過程で生まれ出るものなのか。

それをつぶさに観察し続けてきた。

国内が騒がしくなってから、その機会もめっきりと減ってしまったのだが。それでも、亜衣は多くのことを学んできた。

自分の目で見なければわからないことは、余りにも多くありすぎる。机上の考えと現実の有様との相違はとても大きなものだ。

そのことを知ったからこそ、亜衣は、自らが手がける輸出業を自らの目で視察するように心がけている。そしてそのことが、類まれなる成功をもたらしてくれた。

亜衣の視線は、ずっと、出向のときを今か今かと待ち続けている商船に注がれている。

冬の港には、潮の匂いは余りしない。それでも、海に吹く風と言うのは、陸のものとはどこか違って匂えた。

視線を船から外し、広大な関門海峡へと向ける。浜辺独特の匂いと凍えた潮風、それらが吹いてくる遙か向こうには、天目の治める出面国がある。

共和国が九州を平定することが出来たのは、天目が出面国の奪還に乗り出したためでもあった。

耶麻台共和国の建国と、天目の離反。

帖佐が天目と通じたがために起こった泗国攻略の頓挫。

そして彩花紫による王位篡奪。

狗根国はその国力を著しく損ない、その隙を突いて、天目は天晴れ祖国を取り戻すことに成功していたのだ。

天空界へと旅立った天目は、それまで以上の存在感を持って生還してきた。そして耶麻臺 国を任せていた虎桃や案埜津など、親衛隊と兵士たちをつれて、出面へと軍を進めた。

戦いを終えて帰還してきた九峪たちは驚いた顔をしていた。何せ帰ってきたら耶麻臺 国との戦争が終わっていたのだ。皆の驚いた顔を、亜衣は一生かけても忘れることはないだろう。

これが耶麻台共和国の九州平定、その全容である。

つまり、この関門海峡を越えた先には、天目を王とする新生出面国がある。そしてその出面国こそが、亜衣の取引先だった。

「亜衣様」

過去を振り返っていた亜衣は、自分と呼ぶ声で我に返った。

商船の船長が、出港の挨拶に来たのだ。船長は只深の部下であった。茶葉の貿易は亜衣による独占ではなく、商売のノウハウを持つ只深の協力あって実現した事業でもあった。

「荷積みが終わりました。昼までには出向したく思います」

「許可する。無事、荷を届けてくれ」

「かしこまりました」

深々と一礼して、船長はさつさと部下の元へと向かっていった。海の男の性格は荒く、またこざっぱりとしている者が多い。

船長も亜衣への挨拶をそこそこに済ますのがいつもの事だった。

水夫たちがぞろぞろと船に乗り込んでいくのを見届けて、亜衣も港里へと向かった。波は穏やかで、あの船長ならば、昼と言わず直ぐにでも出向するだろう。

これ以上、ここにいる必要はなかった。

砂浜が途切れると、そこから先は草木の世界となる。その更に向こう側は集落となっている。

集落には亜衣の部下が数名ほど待機していた。名目は道中の護衛である。その中には衣緒の姿もあった。

「お姉様」

「衣緒、帰るぞ」

そういつて、亜衣は馬の背に跨った。一段落ついたからといって、茶の一杯も飲む気はなかった。

衣緒や部下たちも慌てて馬に跨ると、すぐに亜衣の後を追いかける。

「何もそんなに急がなくてもいいではないですか」

馬を寄せて、衣緒は少しだけ口を尖らせた。亜衣のために茶を一杯点てようと思つて準備していたのに、それが台無しになったのだ。

茶葉の栽培に成功してからと言うもの、お茶はそれまで以上に幹部の間に浸透していった。茶葉は輸出するだけでなく、国内の財政を循環させるために、豪族の間にも手広く回されていた。

衣緒は仕事の傍らで、茶の点て方を研究していた。只深から大陸式の茶を教わり、九峪もテレビなどで見た茶道の所作を、衣緒に吹き込んでいた。

そのため、衣緒の茶の点て方は非常にちぐはぐなものとなったが、それでも飲んで美味いものだから、何とも不思議なことである。

「帰つたらいくらでも飲んでやる」

「………それではまるで私が、無理やり飲ませているようではありませんか」

「頼んでもいないのに淹れてくれるからな。まったく………ああも用を足しに行つていては、仕事どころではないぞ」

「そんなに淹れているかしら」

小首をかしげる衣緒を、亜衣は恨めしそうにねめつけた。

仕事の合間に入れられるお茶はたしかに美味い。疲れた脳も、固まった筋肉も、張り詰めた精神も、全てを癒しほぐしてくれる。それも妹が手ずから淹れた茶だとすれば、また別格である。

しかし、一度でも『美味い』と言ったのが、亜衣の最大の失敗だったのだろう。

酷いときには、四半時ごとに茶を持ってこられたこともあった。亜衣に褒められたことがよほど嬉しかったのだ。

「お前の茶は美味いさ。ああ、美味いともさ。だがな、私にも仕事はある。お前の仕事は茶入れか？」

「平和な世になりましたから、それも良いかもしれませんね」

口に手を当てて、衣緒はくすくすと小さく笑った。まったく堪えた様子のない笑みに、亜衣はため息をついた。

随分と口達者になって……。交渉の際に、衣緒をよく護衛として伴ってきたせいかな、口芸も多少は覚えてきたようだ。

最近では、亜衣の口撃にも、やんわりと返すようになってきた。

頼もしくはなったが、何故だろう、亜衣は寂しさも感じるようになっていた。時世の移り変わりを、衣緒は亜衣に見せ付けていた。

平和になった……。その言葉も、また、亜衣の心をぎゅっと締め付けた。

亜衣は、つい昔のことを、思い浮かべた。

「衣緒・・・・・・・・戦がなければ、それは平和なのか」

しん、とした言葉だった。どんな思いが込められたのか、低く呟かれた言葉だ。

尋ねられた方の衣緒は、一瞬、瞳をきょとんと丸めていたが、さもおかしそうに笑むと、

「何を言っているのです、お姉様。戦があれば戦乱、終われば太平。すなわち平和ではありませんか」

ふと、視線を周囲に向けた。畦道の脇には、どこまでも広がる田と畑が見えた。

「百姓が持つのは、剣ではなく鍬となり、矢が射るのは人ではなく野の獣。戦が終わり、人と人が争わなくなりました。それが平和です」

「そう、戦は終わった。だが、人は剣を、弓を、言葉に変えて・・・・・・・・争っていた。つい最近までな。それは平和か」

「それもまた、終わったことです。・・・・・・・・九峪様が、還られたから、人々に笑顔が戻りました」

ついつと、衣緒は声の調子を下げて、空を仰ぎ見た。

九峪はどこにいるのか。もうこの空の下にいないことだけはたしかだ。

衣緒が九峪の帰還を知らされたのは、お触れが下ったときだった。最初は冗談かと思った。

あの九峪が、別れの挨拶もなしにいつてしまったのだ。三日三晩、頭を駆け巡るのは九峪のことばかりだった。

ただ、九峪がいなくなって、民衆が落ち着いて　そうして平和になつて、衣緒は思った。

九峪様は、最後のお役目を全うされたのだ、と。

九洲太平は、九峪の帰還によつて完了された。神の遣いは、この瞬間、ある者にとっては神そのものとなった。

その平和が、平和でないはずがない。

「人が笑めば、平和か」

「左様でしょう。九峪様の残された平和です」

「ならば・・・・・・・・」

亜衣はうつむいた。握る手綱が、手のひらの中でぎゅっと締められた。

「私の平和は、いずこに・・・・・・・・」

「え？」

「・・・・・・・・なんでもない！」

切り捨てるようにいつて、鎧にかけた足で馬の腹を蹴った。

ヒインツと馬が嘶いて、鎧を跳ね上げ駆け出した。腰を僅かに上げ、前傾に身体を傾けると、風が耳を掠めていった。

「お姉様！？」

「あ、亜衣様！？」

衣緒や部下たちが驚いて声を上げた。

「お前たちは先に帰れ！」

「どこへ行かれるのです！？」

「所要だ、ついて来るな！」

その言葉を残して、亜衣の姿は藪道のなかに颯爽と消えていつてしまった。

いきなりのことに、衣緒はおろか、誰もが後を追うことが出来なかった。しかし気づいた時には、もう亜衣の姿は林の向こうに消えていた。

ダダッ

ダダッ

蹄音を響かせて、亜衣の駆る馬が道という道を駆け抜けていく。街道、畦道、小道、獣道。

ただただ、最短の道だけを選んで、そこだけを通って豊前を抜け、日がもつとも高いところに来る頃には豊後を越え、沈み始めた頃になって、ようやく火後にたどり着いた。

途中の集落で松明を貰うと、亜衣はそのまま阿蘇の山に入っていた。途中までは人の通る道にそって馬を進めていたが、辺りが真っ暗になると、馬から下りて、明かりを頼りに進んでいった。

「・・・・・・・・さすがに、寒い」

かじかむ身体を温めるのは、一本の松明の温もりだけ。

季節は十二月。雪が彩る阿蘇ともなれば、亜衣の格好は軽装以外の何物でもない。

もう少し厚着すればよかったと思いは始めるが、亜衣自身、ここには半ば衝動的に足を運んだのだ。

もともと、来るつもりなどなかった。なのに寒い思いをしてまで、こんな軽率な行動に出たのは、衣緒との会話が原因だった。

寒い。それは、身体もそうだし、心もそうだった。身体は今寒い、心はずっと前から寒かった。

「平和は・・・・・・・・私の平和は」

サクツと雪を踏みしめる音。松明の明かりに照らされ浮かび上がる

木々の列。

迷って当たり前な道を、亜衣は淀みなく進んでいく。いつしか、馬の手綱を放していた。走り去る音すら気づかなかった。

ただ一心に歩み続ける。

「あつ……」

不意に呟いた。闇の向こうに、明かりが灯っているのが見えた。

見えた。見えた。見えた！

そう思った瞬間、亜衣は知らず駆け出していた。凍えて震える足は、今にも纏れてしまいそうだ。呼吸は乱れ、炎は不規則にゆれている。

気持ちはただ明かりにしか向いていない。足元の木の根に躓いて、前倒れに転んでも、亜衣の瞳は変わらず明かりに向けられていた。

立ち上がり、雪もほろうこともなく、また駆け出す。ずれた遠眼鏡もそのままに。

広い空間に出た。家があつて、小屋がある。

亜衣は家の戸の前までくると、戸に手をかけようとして　　ようやく、自分の格好に思い至った。

雪と泥で汚れた服と顔。

しまった　　何という格好！

衝動的とは言え、まさかここまで我を忘れるとは。

どうしよう。亜衣は戸を前にして逡巡した。このいつそはしたない格好を晒すべきだろうか。

しかし変えの服はないし、湯につかるうにも、それもまた戸の向こう。引き戻す気にもなれなかった。

ひゅうつと、寒風が亜衣を震え上がらせた。

この寒さが、全て悪いんだ！

自分でもよくわからない言い訳をして、亜衣は息を呑んで戸を軽く叩いた。

ガタッ

内部から音がした。しかし返事は返ってこない。明かりもあり、人がいることはたしかだが。

亜衣はしばし返答を待ったが、まだ声はかからない。しかたなく、もう一度、亜衣は戸を叩いた。

早く出てきてくれ。凍え死んでしまう。

震えながら寒風に耐えていると、ふと、戸を隔てて人の気配が感じられた。息を潜めて警戒しているのが、亜衣にも感じられた。

「……………何者か」

女性の声である。

「王都宰相執権、宗像の亜衣である」

「ッ！！ あ、亜衣様で」

慌てたような声が聞こえてきたかと思うと、戸が思い切りよく開かれた。ぱっと目の前が明るくなり、そこには、剣を持った女性が立っていた。

「亜衣様。このような夜分遅く、如何なされました」

「それは後で話すから、まずは中に入れてくれ。外は寒すぎる」

「し、失礼いたしました！ どうぞ、お入りくださいませし」

女性が亜衣を家の中に招きいれ、戸を閉めた。

家の中はよく暖められており、まるで鳥の羽に埋もれたように、優しい温もりが亜衣の冷え切った身体を包み込んだ。

ほっと、息をはいた。今にも体から力が抜けて、腰砕けのようにへたり込みそうになるが、それを意地でもって押さえつけた。

「まあまあ、何と言うお姿を。山賊にでも襲われましたか」

泥に汚れた亜衣の姿を見た女性が目を丸くした。良く見ると、服装

も違和感があった。あまりにも薄着に過ぎるのだ。

宰相とあろう者が、供もつけず、雪の積もりし夜の阿蘇を、この様な姿で登るものだろうか。

しかしそうは思っても、亜衣をこのままの姿で置くわけにはいかない。ここにはあの方もいるのだから。

「お寒うございましょう。丁度、湯を張っております。いささか手狭ですが、お入りください」

「ああ……そう、させてもらう」

「さあさ、こちらにございます」

女性の導きに、亜衣は素直に従うのであった。

浴室は白亜の世界だった。戸を開けた瞬間、逃げ場を知らなかった湯気たちが、一気に外へと飛び出した。

生まれたままの姿となった亜衣の身体を覆いつくし、すり抜け、目の前に湯船が現れた。

服を脱いだことで、肌に直接寒気が刺してくる。急くように湯船に足を入れると、今度は別の痛みが亜衣の身を振るわせた。

「ツ~~~~はあ」

ゆつくりと湯の中に身を沈め、安堵の吐息を漏らす。じんわりとした慈しみが、体の芯にまで広がるようだった。

ほぐされていく。身も、心も。そうしてたゆたう湯に浸かっているうちに、なぜ自分はここにいるのかと、ふと思った。

「……何をやっているんだ、私は」

本当に、何をやっているのだろう。ただ商船の荷積みを観察しにきただけなのに、一人おわれるように馬を走らせ、何の準備もなしに、雪の阿蘇に登るなど。

いまごろ、耶牟原城の者たちは心配しているだろうか。茶器を前に寂しく佇んでいる衣緒の姿が、瞼の裏に浮かんでは消えた。

仕事もまだ残っているはずなのに。なぜ自分はこんなことをしてしまったのだろう。

どんな顔をして会えばよい。

「亜衣様。湯加減は、如何ございましたようや」

女性に声をかけられ、亜衣は我に帰った。

「あ、ああ、悪くない」

「それはようございました。ただいま夕餉の支度をしておりますゆえ、お着替えは手伝えませぬ。申し訳ありませんが」

「よい。それくらい自分で出来る。それよりも、もう戻っていいぞ」

「はい。では」

壁を隔てて、女性が頭を下げたのが、なんとなくわかった。気配が消えると、亜衣はもう一度ため息をもらした。

湯から上がり衣服を纏い、居間に顔を出すと、良い匂いが鼻腔をくすぐった。これは 魚の塩焼きか。

火桶の前に、お膳が二つ並べられていた。米に、塩漬けの野菜、そして干し魚の塩炙り。

宮殿に並ぶ料理にはひどく劣るが、どれも美味そうだ。

家の主はいまだ姿を見せていない。かつてに腰を下ろしてもよいものだろうか。

しばらく、そうして迷っていると、土間から女性が徳利と猪口を持つて姿を現した。

「ああ、亜衣様。どうぞ、お座りください、どうぞ」

勧められて腰を下ろすと、女性はまたすぐに別の部屋へと向かっていった。

ひとり残されて、亜衣は黙って佇むしかなかった。ここには過去、なんとか足を運んだが、食事を振舞われるのはこれが初めてだった。

なんとなく、辺りを見回してみる。相変わらず質素なつくり、質素な風景だ。調度品の類はなく、しいて言えば、銅鏡があるくらいか。

この家の主のことを考えると、もっと豪勢をしてもいいはず。それでも、ここまで質素な生活をおくるのは、それが限界だったからだ。

亜衣にはこれが限界だった。

「これで恨まないと言っただから、ほんとうに、お人よしで……」

ふっと、自嘲気味に呟く。地位も暮らしも貶められ、それで怨まぬこの家の主。

まるで、その人の良さにつけこんでいるような、そんな自責の念すら湧いてくるようだ。

にゃー

「ん？」

突然、猫が亜衣の隣を通り過ぎた。

「猫？　なぜ、猫がこんなところに」

首を傾げるが、それに答える猫ではない。悠々と家の中を歩く猫だったが、亜衣の対面にあるお膳の奥座の上で丸まった。

亜衣の目がわずかに細められる。

「・・・・・・・・そこに落ち着くか。山猫風情が、良い度胸だ」

つまみ出してやる！ 亜衣は立ち上がろうとして その時、戸が開いた。

咄嗟に顔を向けて、亜衣は慌てて姿勢を正した。

そこには男が立っていた。

「悪い悪い、なかなか切りの良いところで終わんなくてさ」

気さくに、男はそういった。亜衣は顔を上げず、ただ、もう一度、深々と頭を下げた。

畏まる亜衣に男 九峪は、肩を竦めるしかなかった。

九峪をこの阿蘇山に渡してから、亜衣はいつも一步引いた接し方をしてきた。それが後ろめたさから来るものなのか、九峪にはよくわからなかった。

猫をどけて、莫座の上に腰を下ろす。猫は不満そうに鳴いたが、すぐに、九峪の隣に座り込んだ。

「お前はほんつとくに図々しいやつだな」

なー

猫は鳴いただけだった。それが九峪には、

うるさい

と言っている様に聞こえた。

「あの・・・・・・・・九峪様。その猫は」

顔を上げた亜衣が、困惑気味に尋ねてきた。

「ああ、こいつか。さあなあ・・・・・・・・俺にも良くわからん。気がついたら、居座っていた」

「以前おもむいた折、見かけませんでした」

「たまたまいなかったんだろ。猫だからさ、気ままなんだよ」

しょうがないヤツだと、九峪は苦笑しながら猫の顎を撫でてやった。ゴロゴロと喉を鳴らしながら、猫は目を細めていた。

随分と人間に馴れているな・・・・・・・・見たところ、この猫は山猫。街にいる猫とは違う。

街の猫は中々人に懐かない。山の猫は、それ以上に懐かない。

それをこうまで飼い馴らすとは、さすがは九峪様・・・・・・・・と、思えば良いのだろうか。

昔から不思議な力をもった人だったが、いまだ健在ということかもしれない。腐ろうとも落ちぶれようとも、神の遣いは神の遣いだっ
た。

「ま、こいつのことは気にしないで、飯にしようか」

笑顔で言われて、亜衣はもう、この山猫のことを気にしないことにした。考えても所詮は山猫のこと、詮無いことだ。それに 見て
いると、なぜか腹が立ってくる。

猫はずっと九峪の隣で毛繕いをしている。まるでそこにいることこそが当たり前だと言わんばかりに、自然な在り方だった。

それが気に入らなかった。

そんな亜衣の気持ちを知ってか知らずか、猫はのん気に欠伸などをしている。その隣で、九峪は猪口を亜衣に差し出していた。

「さ、まずは一献」

「・・・・・・・・・・はっ」

受け取った亜衣は、猫のことを頭の片隅に追いやり、熱い一献を喉に流し込んだ。

口から杯を離し、ふうっと吐息を漏らす。思いのほか身体は疲れていたのだろ。湯に入って表面に現れた疲労に、酒の味は心地よかった。

「はは、さあもう一献」

「いえ、そんな・・・・・・・・私ばかり」

「気にすんなって」

浮かれたように笑みを浮かべて、九峪は亜衣の杯に、酒を並々と注いだ。

強く断ることも出来ず、再び酒を喉に通す。やはり心地よき喉越しが身体を温める。

二、三年ほど前からのことだった。誰かと酒を飲むとき、九峪は酌を『受ける』側から『する』側に回るようになっていた。

最初は場の雰囲気を考えて、神の遣いらしく酌を仰いでいるが、宴も中ごろになると、席を立て酒を振舞う姿が見られた。

亜衣も何度か、九峪より酒を拝したことがあった。亜衣だけではない、伊雅や、知事たちも。例外は羽江などの年少組や、あとは志野くらいの者だ。

さりとて、亜衣はいまだ、この九峪の酌に慣れないでいた。それをお構いなく注いでくるのが九峪と言う男でもあった。

「まあ一杯」

「それもう一献」

と、まるで酔わせることが目的かと勘繰りたくなるほど、自ら飲むよりも勧めることが多い。

自然、亜衣も、

「ヒック」

すっかりいい塩梅に出来上がっていると云うわけである。

飯も平らげ、食器は当の昔に下げられている。

火桶を前にした亜衣は、その炭の明かりに負けぬほど赤々と頬を染め、九峪も、ほろ酔い程度に酒が回っていた。

自分で自分の杯に酌をして、それを喉に流しとおす。

さしたる会話はなかった。九峪は一献、二献と酒を仰ぎ飲み、時々、亜衣に酌をしてやった。

トクトクと注がれる酒を、亜衣は黙って見つめていた。

「……………何も、お聞きにならないのですか」

「ん？」

「突然の訪問……………さぞ、驚かれたことだと思います」

「ああ、そうだな。冬で夜の阿蘇を、火も持たず、たった一人で来たんだってな。しかも薄着で……………正気の沙汰とは思えないよな」

「お恥ずかしい限りです」

「よほど亜衣らしくない。俺はてつきり、狗根か琉球が襲ってきたのかと思っただぞ」

「・・・・・・・・」

亜衣はもう、何も応えることが出来なかった。まさか冗談だとは思うが、九峪の口からこれほど物騒な言葉が飛び出てくるほど、亜衣の来訪は以外に過ぎるものだった。

どう九峪に顔向けすれば良いのか、酒で緩くなった頭は教えてくれなかった。ただ杯の水面に揺れる自分の顔を見つめるほかなかった。

呆れられてしまった。そんな思いが湧き上がって来た。かつての右腕が、なんという醜態を晒したことが。

情けなくて涙が出てきそうだ。

俯いて黙り込んだ亜衣を、九峪は優しげな瞳で見つめている。

酒に浮かぶ自分の顔に、いったい何を見ているのか・・・・・・・・酒に浮かぶ顔を見て、九峪は心の中で呟いた。

「・・・・・・・・そういえば、亜衣と酒を交わすのも、久しぶりだな」

ふと呟かれた言葉に、亜衣は顔を上げた。

「俺がここ（阿蘇山）に来てからも、亜衣とは何度か会っているの

に、いつも事務的な感じだったからなあ」

「はっ・・・・・・・・」

「政治や皆の様子を教えてくれる。ここだとしても世情に疎くなりがちだから、それはすごく有難いけど・・・・・・・・すこし、寂しい」

寂しい。その一言に、亜衣は思わず九峪の顔を見つめた。

霞んで見えた。笑顔の似合う男だったのに、どうしても、その笑みには翳りが見て取れた。

目を逸らしたかった。九峪のこんな笑みは見たくなかった。九峪は何時だって、笑顔でいなければならない男なのだ。

それは、あの　この阿蘇山とともに過ごした日々の中に、嫌と言うほど思い知ったはずだ。

なのに、目を逸らせない。逸らしてはいけないと、亜衣の中の奥深くにある後悔が、それを許さないでいた。

この苦しみを背負って生きる。それが決意だったから。

「・・・・・・・・私を、お恨みでございますか」

自然とこぼれた言葉だった。言ってしまった瞬間、しまったと、咄嗟に口元を手で覆った。

何と言っことをッ！

あまりに迂闊な自分を呪った。しかし放たれた言葉は、決してもみ消すことなど出来ない。

だが、九峪はおかしそうに笑った。

「ははっ。…………その質問は二度目だな、亜衣」

ふうつと息をついて、九峪は天井を見上げた。

「…………恨むんなら、それ以上に楽なことはない。恨めるんなら、それ以上に楽なことはない。でも俺に恨む資格があるのなら俺には、同時に恨まれる理由がある。…………この答えも、二度目だ」

言って、酒を仰ぐ。

数ヶ月前の問答を、そのままそっくり繰り返している。不思議だと、九峪は飲みながら思った。

亜衣が何かに追い詰められている。それはわかっていた。その何か、亜衣をここに連れてきたのだろう事も。

しかしそれが何なのか、九峪にはいまいちわからなかった。論争が収束していき、諍いの種もいまや山の木の一本となっている。

亜衣を悩ませ煩わせるものは無くなった筈だ。　　亜衣は何に脅えている。

それが知りたかった。しかし聞けなかった。無理に問いただしても、

逆に亜衣を苦しめるだけだと思ったからだった。

だが、何もわからない九峪だが、全てがわからないわけではない。亜衣の中にある後ろめたさ……それだけは、いくら九峪でも察しがついている。

自分を許せない亜衣。それもまた、亜衣を脅えさせる原因の一つかもしれない。それは、九峪がどうこうという問題ではないのだ。それは、九峪にしても同じことであった。

「悪循環だな、俺たちは。堂々巡りだ。恨まれないと恨めない。恨むと相手に恨まれる。自分が許せないと……相手も、自分を許せなくなる」

「……………」

「鶏が先か、卵が先か……。俺が自分を許せないから、亜衣も自分を許せないのか。それとも、亜衣が自分を許せないから、俺も自分を許せないのか」

「九峪様は、なにも悪くありません」

「なら、亜衣も何も悪くない」

まっすぐに見つめ返されて、亜衣は息を呑んだ。

いつのまにか、九峪の表情からは、翳りのある笑顔すら消え去っていた。どこまでも真摯な瞳で、まっすぐに亜衣の瞳と繋がっていた。

二十歳を越えてから、九峪は時々、こんな瞳をするようになった。

不思議な力の宿った瞳をするようになったのだ。

見つめられると、体が石のように固まってしまふ。亜衣は九峪に吞まれていた。それなのに、そのことに恐怖を感じなかった。

「全ては終わったことなんだ。亜衣が思い悩むことは何もない。やるべき事を成した、それでいいじゃないか」

「私は九峪様に、このような侘しい暮らしをさせたかったわけではありません。こんな……」

真っ赤な顔で部屋中を見回すと、

「こんな、何もない、不自由な暮らしなどッ」

まるで吐き出すように、亜衣は激情を吐露した。持っている杯が碎けそうなほど、小さな手は行き場のない力に震えていた。

亜衣から見ても、ここの暮らしはさぞ不自由なものだった。九峪の行動圏は家の中がほとんど。

仮に外に出たとしても、周囲の開けた範囲のみに留められている。それ以上そこに出ると、人の目に触れる危険性があつたからだ。

幽閉ともいえそうな軟禁生活。普段九峪が何をしているのか、亜衣はこの家で働く女中から一応は聞かされていた。

日がな一日、本を読み、同時に何かを認めているらしい。手紙ではなく、どうも書物の類のようだ。日記かもしれないが、九峪には、それくらいしかやれることがないのだ。

自由のない暮らしだ。かつて隆盛の頂点にいた男の、これが今の現実なのだ。おおよそ、九峪には似合わない生活だ。

「私は九峪様が、耶牟原城に居られるように……したかった」

「それが、亜衣の望んだ結末なのか」

ふうつと、九峪は息をはいた。

亜衣を苦しめる理由は、前から、何も変わってはいない。素直にそう思った。

火魅子を救い、神の遣いをも救う。その結末こそが己の望む結末だと、そう語ったのは他ならぬ亜衣だった。

九峪は救われたと思っていた。たしかに自由のない暮らしだが、心は解放されたのだ。

だが亜衣は 亜衣にとっては違った。重要なのは、九峪が『神の遣い』でいられない事にあったのだ。

それが亜衣にとってどういう意味を持つのか。現状の何が亜衣の不満になっているのか。

ようやく ……うすうす、わかりかけてきた。都の庭園で抱き合ったあのときから、今の亜衣の言葉まで。

自惚れでなければ、繋がる。亜衣の気持ち。自分の気持ち。

だから亜衣には……救われてほしかった。

「諦めなかったから、今がある。今があるから、こうして会える」
空になって久しく感じる杯に、酒を注ぐ。

波揺れる杯を、亜衣に掲げてみせる。

「この酒と同じさ。酒があるから呑む、呑むから酒を注ぐ。この循環と同じで、今があるから会える、会えるから今を紡げる」

「循環……」

亜衣の呟きに、九峪はにやりと笑って酒を飲む。そしてもう一度注ぎとしたとき、酒は杯の半分を満たさずに枯れ果てた。

「……酒がなくなったな。これじゃあ注げない。循環の終わりだ」

「この酒は、もう、呑まれることはない」

「そう、呑んで注ぐ循環は終わった。だったらさ、亜衣。俺たちの循環の終わりは何なんだろうな」

「それは……」

尋ねられても、亜衣にはすぐには思い浮かばなかった。

酒は枯れた。故に注げず、故に呑めぬ。

人の循環はどうだろう。どうすれば会えなくなる。どうすれば今を紡げなくなる。

何が尽きれば、そのようになってしまふのだろうか。

そんなもの、一つしかない。

「・・・・・・・・命、尽き果てたとき」

亜衣の一言に、九峪はふっと微笑を浮かべた。

「俺もそう思う。死んだら元も子もないからな。でも、その逆もまた然り、だろ？ 生きているのなら、生きている間、いくらでも会える。会えるんだ」

「九峪様・・・・・・・・」

「生きて会える。それ以上は望まない。俺は・・・・・・・・亜衣が来てくれるのを、いつも楽しみにしている」

はっと、亜衣の心に響く何かがあった。

いつか、亜衣は、九峪の言葉を思い出していた。庭園で抱きしめられたときの、九峪の言葉を。

俺を、まだ必要としてくれる人たちがいる。

亜衣がいる。

九峪様に必要とされている。恨まれて当然だと思っていた自分を、まだ必要だといってくれた。

亜衣がここに足を運んできたのは、いつも実務的なことばかりだった。それ以上のことも、想いも、全てを切り捨ててきた。

そんな資格はないと思っていたから。

でも、九峪様は

「今日はもう遅い。外も真っ暗だ。泊まっていけよ」

「あ、は……はい」

たしかに、もう夜中も夜中。これからは肉食の獣が動き回る時間だ。そうでなくても、夜の山は危険に過ぎる。

馬もとうの昔に失っている。足なくして、もはや阿蘇を下ることなど出来はしない。

結局のところ、亜衣にはここで、夜を越す以外には出来ようもないのだ。

以前ならば、何としても辞していたことだろう。一晚といえども、一つ屋根の下に九峪がいるとすれば、夜明けまで己への責苦に苛んでいたかもしれない。

だが何故だろう。今夜、亜衣の心は軽かった。全てを許したわけではなくとも、この夜に亜衣は、ようやく一つを許すことが出来た気がした。

「さてと、それじゃあ、寝具の仕度をさせないとな」

話も終わりと見るや、九峪は侍女に布団を出すように言いつけた。ちようど、代えの布団が一組だけある。亜衣にはそれを使わせるつもりだった。

九峪は自ら立ち上がると、身体を伸ばして、腰を左右に捻った。酔いのせいか、一瞬だけ体が傾いた。

「ゆっくりしていけ」

そうだけ言い残して、自室に引いていく。残された亜衣は、九峪の消えた戸の向こうに、一礼した。

その様を、猫は、欠伸をしながら見つめていた。

第5回 「薩摩動転」

「右舷から寄せろ、左へ追い込め！」

「接舷だ接舷！ 橋掛け用意ッ！」

薩摩県沿岸。

岸より六里ほど離れた海域で、六隻の船が右へ左へと円を描くように追いかけていた。

二隻は耶麻台共和国の国旗、『日輪巴』と、県知事である香蘭の紋章が描かれた紋旗が翻っている。残りの四隻には、二つの山頂の上に輝く三日月の紋章が描かれた旗がいくつも風に揺れている。

『二山月牙』。琉球島の三大勢力が一つ、北山の紋章である。

共和国の軍船が北山の船に船体を寄せている。矢が飛び交う中、船首を相手の船首と平行にあわせ、鎖鎌で互いを密着し固定させる。

接舷が完了すると、つり橋を相手の船に掛ける。三十人ばかりの共和国軍兵士たちが、弩等のように北山の軍船に乗り込んでいった。

悲鳴が上がり、剣と剣がぶつかり合う音が響いてきた。広くない甲板の上で、何十人も人間が押し合い圧し合い争っている。

「ッ！ 船頭、一隻だけこっちに向かってくる！」

共和国の軍船に残っている見張りが叫んだ。右舷から、北山の軍船が近づいていた。

「やっぱり、二隻だけじゃあ……」

「泣き言いつてんな！ 弓矢で寄せ付けるなッ！」

「ゆ、弓を引けーい……放てエ！」

十数の矢が敵船めがけて降り注ぐ。しかしその倍以上の矢が、敵方から放たれてくる。

接近を防ぐどころか、またたくまに弓兵たちは矢の餌食とされていた。

逃げようにも、こちらは別の船と接舷している。ましてや味方はいまだ敵船の上で戦っているのだ。

「く、くそお……ッ」

船に鎖鎌を掛けられ、船頭は悔しさも露に唇をかみ締めた。橋を掛けられるのも時間の問題であった。

「官人どもが、余計なことをしてくれたッ！」

橋が掛けられ、敵の兵士たちがこちらに向かって攻め入ってきた。

船頭は剣を構えると、「これまでか」と一言呟き、敵兵の中へと踊

りこんだ。

命を絶たれるのに、そう長い時間は掛からなかった。船は占領され、戦っていた兵士たちも、動揺のうちに尽くが殺された。

共和国の軍船は、わずか一刻ほどで、完全に沈黙してしまうのであった。

薩摩県、鹿児島城。旧国都である国分城に代わって、薩摩政庁の要となつた主要都市である。

一般の城郭都市とは異なり、鹿児島城は『複数の村落の集合』から成り立っている。

薩摩県 旧南火向国は、いわゆる『シラス』と呼ばれる地質の土壌が、領土の大半を占めている。

遙か昔、錦江湾の始良カルデラの噴火による火砕流が、南火向をシラス台地に形作つたためである。

シラス土壌は石灰性 つまり水分を吸収せず、すべて地下深くの地層や海に逃がしてしまう。稲作には向かないのだ。

そのため、昔から南火向では、税として治める米や麦の代わりに、豆を国庫に納めてきた。薩摩県での主な生産品は、豆、粟、稗などの水分を多く必要としない穀物、甘いも（薩摩芋）や大根などの根

野菜であつた。

財政はふるわず、新城建設といえども、そんな金は捻出できない。そこで紅玉が考えたのが、故郷である大陸で作りに出された世界最大の建造物、

万里の長城

の建設経緯を模倣するというものだった。すなわち、村落同士を城壁でつなぎ、一つの集落を皆とみなした巨大な『集合都市』にすることであつた。

こうして生まれた鹿児島城は、同時に兵士たちの一大鍛錬場でもあつた。

農耕の振るわない薩摩県は、以前から漁業が盛んであつた。海の男は性格が荒い者が多く、作物の凶作地帯で生まれたことの不満も手伝い、薩摩県の間人は性格的に乱暴な者が多かつた。

それらを束ねるのが、共和国きつての最強武将、

香蘭・紅玉

親子である。

鹿児島城でこの二人に、心身ともに鍛えられた荒くれ者の薩摩兵士たちは、数は少ないものの、今や九州一の精強さを誇る精鋭となつていた。

その精強な薩摩兵士に守られる薩摩県沿岸で、いつそ気味の悪い異

変が起きたのは、元星五年一月のことであつた。

元星五年に入ってから、紅玉と香蘭は、ある一つの問題に頭を悩ませていた。

文官と武官の対立に端を発した論争や暴動が明けて、ようやく順調に廻り始めた矢先の出来事。

こともあろうに、薩摩県は、外敵の脅威に晒されていたのだ。

舞台は海域。薩摩県の有する警備艇が、たびたび襲撃を受けるといふものだった。

紅玉たちは最初、これを海賊の蛮行だと思っていた。しかし精強が売りの薩摩兵士が、尽く全滅の憂き目にあっているのだ。

おかしい、と思うのに、そう時間は掛からなかった。そしてまさか、と思うのにも、やはり時間はかからなかった。

『二山月牙』 北山。矛先を九州に向けてきたのだ。琉球島の民は海の民。中には、生涯の四分の三を船の上で過ごす民までいるという。

母の腹の中で海の民の声を聞き、船の上で産湯につかり、大海に抱かれながら生れ落ち、波の音を子守唄に聞きながら育った。九州の『海人』よりも、海との繋がりが深い民である。

そんな連中を相手に、海戦で勝てるわけがない。薩摩は早急に、この問題に対処しなければならなかった。

鹿児島城の中樞、薩摩^{さつまのしょう}莊。田畑の類は一切なく、役人や兵士のための宿舎がおよそ二百棟、木造の質素な宮殿、そして兵士の鍛錬城があるだけの、まさに政庁機能重視の里である。

その薩摩莊に重然が呼び出されたのは、元星五年三月。まさに北山の警備艇襲撃が問題となつてるときだった。

「香蘭様、紅玉様。石川島の重然、まかりこしました」

『知事の間』で、上座に佇む香蘭と、その斜め向かいに、同じように佇む紅玉。そして二人の役人、三人の武人。それらを前に、重然は畏まり平伏していた。

九州解放戦争からの付き合いだが、形式的な挨拶には、紅玉も重然もうるさかった。これが、紅玉親子だけが相手であればまた違うのだが、ここには役人も武人もいる。示しがあつた。

だがそれをまだ気につけないのが、香蘭である。

「顔を上げるよ、重然」

「へい」

顔を上げると、そこには、昔より少しだけ大人びた表情の香蘭がいた。香蘭も今年で二十三歳。倭国語になれた香蘭は、信じられないほど知的な女性になっていた。昔に比べて、という前置きは必要だが。

もともと、幹部の皆が思うほどの馬鹿娘ではないのだ。

ただ倭国語の拙さが災いして、身体言語で意思を表現するしかなく、その結果として他者から『内面は幼い』という印象を持たれてしまっただけなのだ。

とはいえ、「では元から知的なのか」と言われれば、紅玉は香蘭の頭を、それこそ頭髮が全て抜け落ちるほど叩いて否定することだろう。

他の者に比べて、香蘭の『おつむ』は間違いなく足りていなかった。そして今も、まだ足りていないと、紅玉は思っていた。

それでも、こういう場で会談する程度には、なにも問題はない。足りない部分は、他でもない紅玉たちが補えば良いだけ。香蘭にはそれだけの能力は備わっていた。

重然も、そのことは遠く前からわかっていた。驚くことはなかった。

「久しぶりね、重然。元気にしてたか？」

「へい。今は穏やかなもんですが……。陸が豊作なのに比べて、海はいまいちでさ」

「不漁か？」

「いやいや、そんなことはありません。ただ、去年は暖かかったから、魚がさつさと北に逃げちまったんでさ。今年ももう暖かい。情けねえ話ですが、今年は見事に、鯛や鰯の捕らえ時を逃しちまいやした」

頭を掻きながらそう言った重然は、まいったとばかりの苦笑いだつた。

「そか・・・・・・・・それじゃ、今年は鯛、食べれないな」

「面目次第もありやせん」

残念そうな香蘭を見ていて、重然も本当に申し訳ない気持ちになった。香蘭は、食べるときはとにかく美味しそうに、呑むときも美味しそうに呑む女性である。

鯛や鰯の塩焼きを、あんなに美味しそうに頬張ってくれるのならば、海人冥利に尽きるというものだ。

「・・・・・・・・おほん。お二方、挨拶はそれほどで」

ずっと静観していた紅玉が、話の区切りについて相槌を打った。これ以上しゃべらせていては、話が進まないと思った。

「おお、そだった。重然、実は頼みがあるんだけど」

「・・・・・・・・へい。何で、御座いましょうや」

香蘭は紅玉に目配せをした。紅玉は静かに頷いた。

「重然。ここ最近、我が薩摩の沿岸で起こっている異変、聞き及んでいますね」

「もちろんでさ、紅玉様。海賊が暴れているとか」

「海賊ではありません。いえ、私たちも、最初はそう思っていたのですが」

「……………海賊でなけりゃあ、何ですかい」

「重然、しらないのか？」

香蘭が驚いたように目を大きくした。石川島海人衆の頭領である重然のことだから、てっきり知っているものとばかり思っていたのだが。

当の重然も、怪訝そうに眉間に皺を寄せていた。

薩摩県で、ここ最近、海賊が横行しているというのは聞いていた。商船や薩摩の軍船が襲われているらしい、と。

だが、どうということだろう。紅玉の様子からすると、海賊ではないようだ。

ではいったい、何が商船や軍船を襲っているのだ？

「どうやら、知らないようですわね」

「……………薩摩で、何が起きているんです」

重然の表情が、にわかに険しくなった。薩摩以南の海域で、海賊以外の武力といえば、思いつくのは、二つ。

一つはとてつもない脅威、一つは劣るもやはり脅威。

大陸か、琉球島か。

「北山の旗を掲げた船舶が、我が薩摩の警備艇、果ては商船を襲撃しているのです」

「北山……琉球島の、北山で」

「二月ほど前からでしょうか。対処しているのですが、向こうは海の民。船の上のこと、我々は常に遅れを取る始末」

「なぜ、北山が薩摩を？」

紅玉が目を細めた。

「『九洲を』というのが、正しいかもしれませんね。仔細は知らねども……さて、九洲を奪いに来たか」

「ですが、琉球はいま、戦争の真っ最中のはず。九洲に手を出す余裕があるとは思えやせん」

むうっと重然は唸った。どうにもきな臭い臭いがして仕方がなかった。

北山　琉球の北を納める王族国家。

たびたび九洲の領海に進出することはあったが、そのほとんどは戦うことなく引き上げていった。中山と争っている中、九洲と争う意思は欠片も見せなかった。

それが、ここにきて、一体どうしたことだろう。まさか北山が琉球

島を統一したのだろうか。

あれこれと考えるが、重然の臉の裏には、真相は見えてこなかった。だが、なぜ、自分がここ薩摩に呼ばれたのか。それだけは見えてきた。

「……あつしらに、薩摩の警備につけ、ということですかい？」

重然の言葉に、香蘭と紅玉は頷いた。

「相手は根っからの海の民。ただの海人では相手にもなれません。しかし重然殿ならば、見事に渡り歩けることでしょう」

「あつしの手勢は、せいぜい六百。北山の勢力がわからん以上、心許ないですが」

「おお、それなら心配要らないよ」

「へ？」

重然は間の抜けた声を上げて、香蘭を見つめた。

「あれを重然殿に」

紅玉が役人の一人に声をかけた。役人は紅玉と香蘭に一礼すると、小さな箱を、重然の前にそっと置いた。

この時代には見慣れない漆塗りの朱箱。漆の技術は大陸で芽生え始

めていたが、その採取と扱いの用意ならざることから、多く広まることはなかった。

この朱箱にしても、只深が取り仕切る大陸との交易の折に、たまたま入手した物でしかなかった。

重然は一礼して、濡れたような朱の明かりをのせた箱を外した。小さな箱の中には、掌ほどの大きさの木札が収められていた。

円形の札に、鳳凰のあしらい、そしてその中央に、

『香』

の一字が、金箔に塗られて輝いていた。

「これは……………」

「『鳳凰符』言つよ」

「鳳凰符？」

聞きなれない言葉だった。少なくとも、それが何であり、何を意味する物なのか、重然にはまったくわからなかった。

それを察してか、紅玉が香蘭に代わって口を開いた。

「鳳凰符…………大陸では古くは『虎符』と呼ばれた証紋ですわ。虎符とは本来、皇帝ないし王、または軍事面での最高責任者である『大將軍』…………時として実力ある『軍師』に与えられし物です」

「軍事面の、最高責任者…….?」

「左様。『歩軍』『騎軍』『海軍』……これら三軍を率いる最高司令官たる証、それが『虎符』その『鳳凰符』です」

「ち、ちよつと待つてくだせえッ」

一瞬で顔色を変えて、重然は慌てたように叫んだ。やや青ざめたような顔で、心なしか、体が震えている。

「つてえことは、何ですか。あつしに、薩摩の全兵力を率いる指揮官になれつて……そういふことですかい？」

「そうよ」

「そうです」

「……」

あまりにあつさりと返答されて、重然は口を開けたまま固まった。

三軍の最高司令官。この耶麻台共和国では、各県知事がこの鳳凰符を所持している。それは、各県の兵力は独立していることを表しており、それら全てを統括する、

『火魅子の鳳凰符』

というのも存在していた。この『火魅子の鳳凰符』は知事の持つ鳳凰符とは別次元の代物で、火魅子の代行として現在は大將軍の位に

ある伊雅が所持している。

この鳳凰符を持つということは、軍事面において、知事と同じ位に立つと言うことでもあった。

この場合は、香蘭の持つ軍事的権利を、重然が丸ごと肩代わりするということ。

それゆえ重然は、「まさかな……」という思いとともに、石のように固まる羽目になったのだ。

「うふふっ……『開いた口が塞がらない』とは、よく言っただものですわね」

扇子で口元を隠して、紅玉は玉のような声で上品に笑った。

もう四十近い年齢に差し迫りつつある紅玉も、未だ若々しい肌をしているが、顔には小じわが見えるようになってきた。

それでもまだ所作に艶さが残っているのは、熟女の門を叩いてなお、その美貌に陰りが来ていない証拠だろうか。

「重然？　どうかしたか？」

「今はそつとしてあげなさい。まだ混乱しているのです」

「……そか。なら、仕方がないな」

「ええ、仕方ないのです」

と、そんな会話をする親子を見ていた役人や武人たちは、心の中で、口を揃えて呟いた。

重然殿、お気の毒に、と。

重然が復活したのは、それから四、五分後のことだった。

眉間を揉み解し、首を鳴らし、頬をバンバンと叩いた。そして深呼吸を二回して、再び香蘭へと顔を向けた。

「……………まあ、話はわかりやした。つまり、あつしの手勢以外にも、薩摩の全兵士をつれて、薩摩を守れということですね。この……………鳳凰符をもって」

「端的に言えば、そうなりますね」

「……………それは、無理つてもんでしょう。海軍はともかく、歩軍や騎軍を持たされても、あつしにはどう運用すればいいかわかりやせん。それ以前に……………あつしには、荷が重過ぎやす」

重然が知る限り、薩摩の戦力は一千弱。重然の手勢と合わせると、戦力は二千近くにまで膨れ上がる。

石川海人衆は昔からの付き合いの者ばかりで、六百人と言えども、殆ど家族のようなものだ。

だがこの一千強。背負うには些か重過ぎる。彼らにはもちろん家族があり、重然はある意味、その家族。つまりは薩摩県の民をも背負うと言うことなのだ。

戦争中、海軍を率いて戦った重然だが、あの時は無我夢中だった。

ただ『解放』『復興』『建国』『勝利』などの言葉に酔いしれ、己の背負うものの重さと意味を見失っていたに過ぎない。

だが今は違う。共和国の幹部としての地位を手にいれ、立場に収まり、上に立つ者としての己を思い出したとき、同時に実力の底も思い出した。

一千人強の人命。一万人近い家族の思い。

一介の海人武将である俺に、それを背負えるのか？ あの時の様に、気負うことなく背負えるのか？

箱の中に静かに収まる鳳凰符。自分の体の十分の一にも満たない大きさの木の札に、重然は今まさに試されていた。

お前に私を、持ち掲げるだけの器量はあるか。

鳳凰符がそんな言葉を言っているような気さえしてくる。

目の前の木札には意思がある。その意思に、重然は怖気づいていた。

「……しかし、我らとしては、何としても重然殿に薩摩の兵を率いてほしいのです」

「海人集の長は、あつしの他にもおりました。阿智殿は、宗像海人集の頭領です。阿智殿ならば」

「彼では役不足です」

紅玉はぱつさりと切り捨てた。

「阿智殿も、頭領としてはたしかに優れているかもしれませんが。しかし、我が薩摩の兵は従わないでしょう」

「なぜ、そう思うんで」

重然の問いに、紅玉はふと、昔を思い出した。

狗根国との戦争中、紅玉は海の戦いに参加したことがあった。まだ共和国が『復興軍』だったころだ。

大陸からの移民計画のおり、渡航中の遭遇戦で、宗像の船団が助けにくれたことがあった。

その時に紅玉は、阿智の戦を見たのだ。

理に適った戦法、流れるような舟の動き。海の戦いを知らない紅玉でもって、その鮮やかさに目を見張ったくらいだ。

以前から重然の陰に隠れがちだった阿智の艦隊だが、中々どうして、実力は確かなものだった。

「だからこそ、彼では駄目なのです」

射抜くような視線が、重然に向けられた。

「阿智殿には驕りがあります。王族宗像、そして火魅子と成られた星華様縁の者としての誇りがあります。……自尊心とも呼

びましようか。あまりに貴意高く、その戦い方も綺麗　お上品過ぎるのです」

「いいじゃあないですかい。あつしには出来ない戦だ」

そうだ、と重然は思った。そういう阿智だからこそ、この鳳凰符の意思にも、打ち勝てるのではないか。

阿智と自分とでは、最初から背負っているものが違いすぎる。

『石川島海人衆』と『宗像海人衆』　よく武功を競い合うようにそれぞれ戦っていた。海軍主力の座を石川島海人衆に奪われてからは、宗像が事あるごとに突っかかってくることもあった。

それも全ては『誇り』の成せることだった。

だが紅玉は、その『誇り』を嫌がっているようだ。なぜ嫌がるのか
重然も、うすうすはわかっていた。

「星華様が火魅子となられ、九州最大の海人衆となった宗像海人衆。そんな彼らが、はたして、我々の要請に応じてくださるでしょうか。かつて火魅子の座を競い合った我々の言葉を、聞き入れるでしょうか」

「・・・・・・・・」

応じない。重然はそのことを知っていた。

はつきり言って、宗像海人衆は、各県知事を見下している。己の主が女王となったことで、増徴してしまったのだ。

「それに、うちの兵士はみんな喧嘩っ早いね。宗像の海人たちを入れたら、すぐ喧嘩になるよ」

「宗像の態度は、我が薩摩兵士の髪を逆立たせるだけですわ」

「そりゃまあ……そうすわな」

これには重然も素直に頷いた。阿智を推した重然だが、やはり宗像の態度は気になるものだった。

石川島海人衆も、宗像海人衆のことを毛嫌いしている。その様は、まるで文官と武官の関係に似ていた。

結局、荒くれ者を束ねることができるのは、同じ荒くれ者を束ねている重然だけ、ということだったのだ。

上品と言えば紅玉もそうだが、紅玉と阿智には決定的な違いがある。

それは単純な『個人の能力』であつた。阿智は星華縁の海人衆の頭領で、実力もそこそこある。

しかし紅玉は、魔人と渡り合える超人にして共和国最強の戦士、歳を経てなお衰えぬ美貌、高い人徳に知性、そして王族なのである。

まさに雲泥の差である。だからこそ、上品な人柄であるにも拘らず、紅玉は薩摩兵士たちに受け入れられていた。

ようは、腕っ節が強ければ、薩摩の兵士たちはそれでいいのである。

それが美人で王族とくれば、なお嫌う理由がない。

そして重然。腕力で、唯一香蘭に並ぶのは重然だけ。薩摩の兵士たちと気が合うだろうという、双方の人心を考えての選抜だった。

だからなんとしても、重然には、首を縦に振ってもらわなければならない。

「軍備縮小の最中、もし、北山の目的が九州進攻であつたならば……とてもではありませんが、抑え切れないでしょう」

「だから水際の防衛……と、いうことですかい」

「今はまだ警備艇や商船が襲われているだけですが、このままでは、錦江湾に船は入ってこなくなり、大陸との交易にも支障が出ます。ましてや、我が薩摩の警備艇は、すでに八隻も沈められているのです」

「みんな、陸だと強いけど、船の上はそれほどでもないよ。私も、船の上は苦手よ」

「………むむ」

思っていたよりも、事態は深刻なようだ。警備艇が八隻も沈められていると言うのは初耳だった。話を聞けば聞くほど、この適任が自分だけだと、否が応でも思い知らされる。

阿智は使えない。宗像と石川島以外で、他に有力な海人衆もない。

どうしたって、重然が立ち上がるしかないのだ。守りの薄くなった

九州を、それでも守るには、水際での防衛がもつとも適していることもわかった。

だが、やはり、どこかで尻込みをしている自分がいる。

意外と小せえな、俺も。そう思った。そう思ってしまったからか、脳裏に、一人の男の顔が浮かんだ。自分と違って、大きい男の顔だった。

「・・・・・・・・情けねえ話でさあなあ」

「重然？」

情けなさ過ぎて、重然は、苦笑するしかなかった。

ずっとデカイ図体を持つ自分よりも、脳裏に浮かんだ男は、まるで阿蘇のように大きく見えた。

「こういう時、九峪様がいれば、なんて思っちまうなんて」

「・・・・・・・・ツ」

香蘭の体が震えた。目に見えて動揺する香蘭を、紅玉は険しい表情で睨みつけた。

『慌てるな』という意思が通じたのか、香蘭は努めて動揺を押さえ込むと、重然に知られないように、ほうっと息をはいた。

「・・・・・・・・九峪様は、もういないよ」

わずかに震える声。しかし重然は気づくことなく、重く頷いた。

「わかっています。わかっているんですがね……心のどこかで、まだ、頼っているんですかね」

思えば、重大な決断を下すのはいつも九峪であり、それにとまなう全てを背負うのも九峪だった。

兵の命、民の命、家族を奪われた者の悲しみ、鬼籍に入った輩の悲願、生ある者の後悔、九洲の命運……その全てを背負って戦ったのが、九峪と言う男だった。

その幾つかを、自分たちも背負っていた。そういう思いはあった。

だが今、この時になって、重然は思うのだ。戦っているとき、今のように背に圧し掛かる重圧を感じただろうか。

重大な作戦のとき、たしかに重圧はあった。だがその自分でさえも、九峪に背負われていたのだ。

だから、その安心感が、気負うことなく戦えた大きな要因なのではなからうか。

あの時の九峪が背負っていたもの。その何十分の一でさえ、今の自分は背負うことを躊躇っている。心のどこかで、九峪が背負ってくれと、そう思ってしまうのだ。

情けない話だ。海の男が、大海に生きる海の間人が、なんと浅く小さいことよ。

自嘲気な笑いが込み上げてくる。昔の自分は、こんな笑い方はしなかった。

「九峪様・・・・・・・・」

初めて、鳳凰符をその手に取る。掌にすっぽりと収まるそれは、まるで金か銀かと思えるほどに、ずっしりとした重みがあった。そんな気がした。

これが、背負う重み。

重然はぎゅっと噛み締めた。まだ怖気づいている自分をたしかに感じながら、それでも思った。

九峪が元の世界に還ったその瞬間から、自分たちは、この『九洲』を背負っているのだ。

昔を思い出せ。九洲を、祖国を取り戻すために戦った、あの日々を！

それに比べれば、この程度、何のものかッ！！

バツと、重然が顔を上げた。

「背負う重み、大いに上等ッ」

思い切った啖呵は、重然自身が驚くほど、自然と口から飛び出した。

その声には、もう否定的な声音はなかった。むしろ立ち向かうことに覚悟を決めた男の顔が、そこにはあった。

「鳳凰符、この重然、拝領させていただきやす」

「おお、重然、引き受けてくれるか!？」

香蘭の表情がぱあっと明るくなった。そんな香蘭に、重然はたしかに頷いて見せた。

あからさまにほっと、香蘭はため息をついた。

「よかったよ……断られたら、香蘭、一人で乗り込まなくちゃならなかったよ」

「……そりゃ無理ってもんでしょ」

「そうよ。香蘭、船の戦い好きじゃないよ。揺れるし、滑るし、酔うし」

「それは鍛練が足りてないからですよ、香蘭」

キツイ合いの手を入れられて、香蘭はがっくりと頂垂れた。

香蘭と言えば、どこであろうとも敵をぶっ飛ばす、という印象が強かった。それは重然も同じだったのだが、どうやらそうでもないらしい。

やはり人の子、苦手はあるか……紅玉様はどうなんだ？

ついつと、視線を紅玉に向けた。重然の視線に気づいた紅玉が微笑んだ。

何となく、考えていることが見透かされている、そんな気分になる微笑だった。紅玉は何時だって、そんな笑みを浮かべるのだ。

それもまた、『この人には適わない』と思わせる要因の一つだった。

九峪様のことを思い出していたことも、もしかしたら見抜いているのかもしれない。

そう思うと、本当に、紅玉と言う女性の大きさを思い知る。九峪がもっとも信頼を寄せた武将の一人が紅玉であったが、それも頷けると言うものだ。

そんな紅玉に、自分が頼られている。それもまた、悪いものではなかった。

身体に力が漲る。

「薩摩の海、あつしがお守りいたしやす」

「頼みますわ、重然殿。海のことは、貴方に一任いたします」

「香蘭の分も、思いつきり暴れると良いよ」

「へい、おまかせくだせえ」

そう言つて、重然は鳳凰符を片手に、知事の間を後にした。

重然のいなくなった部屋で、ついで成り行きを見守っていた役人たちも退出し、残るのは香蘭と紅玉だけ。

「……………これで、薩摩は大丈夫かな、母上」

「心配は要りませんよ、香蘭。海のことを我々が行うよりも、ここは、重然殿に任せた方がよろしい。これは、そう……『餅屋は餅屋』ですわね」

「おお、九峪様の言葉か。餅が何かはよくわからないけど……・懐かしいね」

寂しげな一言は、過去の回顧の中へと、消えていった。

「……っあ、お頭！」

客室で待たされていた愛宕が、戻ってきた重然の傍へ駆け寄っていた。

「お頭、いったい何の話だったんでっすか？」

「ああ……まあ、ちょっとな。詳しいことは後で話す」

「ええ……いま知りたいなあ……うそ、ウソでっすよ」

重然が指を鳴らし始めて、愛宕は慌てて重然から距離をとった。

どうにも緊張感のない愛宕を見ると、なんとも複雑な気分になってくる。つい先ほど本気の覚悟を決めてきた身としては、なんとも複雑だ。

しかしそれで緩む覚悟ではない。懷に忍ばせた鳳凰符の重みは、今も掌に残されている。

「愛宕、戻るぞ。今日中に石川島に帰る」

「へ？ き、今日中でっすか？」

「おう、今日中だ」

言って、重然はさっさと客室を出て行つた。

その後ろを、愛宕は慌てて追いかけた。

「なんでっすか。そんなに急いで、なんかあるんでっすか、お頭！？」

「戦だ戦、戦の準備をするんだよッ」

パタッと、愛宕の足が止まつた。

「……………いくさ？ ………………いくさ、戦……………戦あッ！？ ちょ、お頭！？」

愛宕の絶叫を無視して、重然の足は、ただひたすら錦江湾へと向かうのであつた。

元星五年三月。

『香蘭の鳳凰符』を手に、重然が薩摩県海軍総督に就任した。

この出来事は、北山の脅威を、それとなく九州中に知れ渡らせることとなる。

そしてそれが、新たな争乱の火種になると　このとき、誰もが思っていないかった。

第6回 「阿智と重然」

耶牟原城、謁見の間。

耶牟原城の宮殿で、もっとも壮麗かつ壮大な空間である。

四方は広く、巨大な柱が並んでいる。紅と朱に染められた絹のカーテンが至る所から垂れ下がり、まるで柔らかい炎に抱かれている錯覚を感じさせる。

その謁見の間の最奥、五段の高座に鎮座するのは、大君だけが座することを許された、

火魅子の玉座

である。朱に塗られた木造の椅子には、琥珀や紅玉がはめ込まれ、金銀の装飾が施されている。背もたれには火の神性である鳳凰が象られ、後頭部があたる部分は、太陽を象徴するように丸く作られている。

玉座の周囲では合わせて百本に及ぶ蠟燭の火が陽炎を揺らめかせ、この空間が、如何に神秘的で神聖なものかがわかる。

重い。泥沼を泳ぐよりもまだ重い。石垣を持ち上げるほうがよっぽど軽い。

訪れた者にそう思わせるほど、この謁見の間はあまりにも重く厳かな空間だった。

「石川島の重然。そなたを薩摩県の守護職に任じます。我が綸旨が発せられたことは、この場にいる者が須らく証明し、御前にありし鳳凰符がその証です」

「……ははあつ。石川島の重然、畏れ多くも、快く拝領仕ります。この上は、身朽ち果て、魂滅びようと、大君の言に恥じぬ働きをいたしてご覧にいたします」

「期待していますよ。この九州で、海の戦でそなたの右に並び立つ者はそうはありません。見事、薩摩を守り抜きなさい」

高座に立つ火魅子を前に、重然は肩膝を付いた姿勢で主君と対していた。見上げる瞳に、火魅子の鬢細工かつらこに映る陽炎の火が、妖しく揺らめいて見えた。

火魅子から視線を外して、今度は眼前の鳳凰符を見下ろす。

薩摩から持ち帰った『香蘭の鳳凰符』。火魅子の綸旨を賜り、また一層の重厚を、その円形に宿した木符。

この瞬間、重然は名実共に、薩摩軍の最高司令官となった。

薩摩の 否、ともすれば九州の命運が、重然の双肩に重く押し掛かる。北山の狙いがもしも九州征服ならば、その最前線を任された重然の責任は、比のあるものではない。

しかし負けるわけには行かない。九峪に代わってやらなければなら

ない、これはそういう戦いなのだ。

鳳凰符を手に、重然は炎に彩られた空間を後にするのであった。

「あゝ……肩こった」

耶牟原城の廊下を歩きながら、重然は首を二、三度ほどならした。

まったくよお……重すぎんだよ、あそこは。何もかもが。

心の中で愚痴をこぼす。それなりの礼節は重んじる重然だが、元々は海賊の頭領だった男だ。

粗野で乱雑な暮らしの中で生きた人間に、厳然とした聖なる空間は、どうにも居心地が悪すぎた。

育ちが宜しくない、と言えばそれまでだが、これだけは慣れるのに相当骨を折りそうだと、訪れるたびに毎回思う。

愛宕でもからかって、気分転換するか。

くつくつくと、意地悪い笑みを浮かべる。

重然のお付きとして、愛宕もここ耶牟原城を訪れていた。さすがに女王の御前にまで連れて行くわけにもいかず、宛がわれた屋敷で留守番を任せていた。

「何をおかしそうに笑っておられるのですかな、重然殿」

「ん？ ……おお、阿智殿か」

前方から声をかけられ、重然はふと顔を上げた。

板張りの廊下の向こう、身なりを正した宗像海人衆の頭領、阿智がそこにいた。宗像神社伝来の秘宝である短剣を腰に挿し、右手に扇をもち、首に真珠、頭に鬘かつら勾玉のまがたまの装飾品が輝いている。

重然も正装だが、阿智の服装はそれよりもずっと清楚なものだった。重然の服装が青の草染めなのに対し、阿智は薄い藍染め。しかも倭国では見慣れない『ろうけつ染め』の衣服をまとうていた。

互いに歩み寄り、一步と言う間隔をあけて対峙する。阿智の身長は重然の肩ほどしかなく、自然と阿智が見上げ、重然が見下ろす構図となった。

「阿智殿も、都に上っておられたか」

「二月ほど前からの。今は都の屋敷に住んでおる」

「二ヶ月も前から。…………それは、また。さぞ、宗像が気がかりでしょうな」

海人衆の頭領が根城から長期間にわたって離れるということは、宗像や石川島にかぎらず珍しいことだった。

宗像海人衆の根城は筑前県にある。破壊された宗像神社を新たに新築し、巫女たちが神社に戻っていく際に、海人たちも本来の居場所

に戻っていったのだ。

阿智の現在の仕事は、那の津における海上警備が主なものとなっていた。大陸から船を護衛し、不振な船は検問し、海賊が相手であれば一戦交える。

玄界灘の平和は、阿智の手腕によって守られている。だから、その阿智が長く豊前を留守にするというのは、実は結構、大変なことなのだった。

だがとうの阿智は、特に気にした様子もない。

「なに、心配はいらぬ。私の部下は優秀な者ばかり。頭領が居らずとも、なんら乱れることはない」

そう言うと、右手の扇で口元を隠した。

「それよりも重然殿。聞きましたぞ。薩摩の軍門に入ったそうですな」

「はあ……」

なんで知っているんだ？

重然は生返事を返しながら、内心で首をかしげた。

火魅子の勅旨を受けたのは、つい先ほどのことである。正式な宣言が下るのは、これからなのだ。

本来ならば、阿智も宣言があってから知ることの出来る情報のはず

なのだ。

だが実際、阿智はすでに知っている。

重然が薩摩からの要請に応じて、火魅子の綸旨を賜るまでにかかった日数は五日ほど。その間に、何らかの形で知ったのかもしれない。何しろ『同業者』なのだから。

「ということは、石川島は空けるのですかな？」

「そうなりますな」

「頭領不在とは。……部下の者どもも、さぞ不安でしょうな」

「いや、手下は全員、つれていきます」

事も無げな重然の一言に、阿智は一瞬、目を大きく見開いた。

「……全員、とは。また思い切ったことをなされる」

「それも織り込んで、薩摩に呼ばれたんですわ」

「なるほど……なるほど」

阿智は二回ほど頷くと、背伸びをして、そつと顔を重然の顔に近づけた。上目遣いに小声で、

「全員はおやめなさい。石川島をもぬけの殻にするのは危険だ」

と言った。

低く、押し殺したような一言。

重然は何かを感じ取った。視線だけで周囲を見回すと、止めていた歩みをゆつくりと再開した。阿智も同じように歩き出した。

「いま、石川島を空けることはいけない。非常にいけない」

「なぜですかい」

「火向灘にはまだ海賊が居ろう。それを放っておく気ですか。石川島は、たちまち乗っ取られますぞ」

「だったら後で追いつくまで」

「妻子はどうなさる。海賊は奪うぞ、何もかも。．．．．．お主も、もとは海賊だろうに」

「海賊は海賊でも、あつしらは『義賊』だ。それに元はしがない漁師。無体はしない」

「お主がそうでも、やつらは違う。置いていかれた女子供は．．．．．」

と、そこまで早口で捲くし立てていた阿智は、不意に言葉をなくした。

「．．．．．まさか、連れて行くのか」

重然はニヤリと、口元を歪めた。

してやったり。そんな笑みだった。阿智は開いたままだった口を閉じると、ため息をついた。

「そうきますか。まったく・・・心配した私がバカみたいだ」

「ご心配、痛み入ります。・・・さて、心配事が解けた所で、そろそろ本題と移りましょうかい」

「ん？・・・何のことですかな」

視線を前方に向けて、阿智は低く応えた。口元を扇で隠す仕草に、重然の眼光はキラリと光を放った。

そもそもがおかしいのだ。阿智が、石川島の心配をすること自体が。

宗像と石川島。その関係が険悪ならば、阿智と重然の関係も、決して良好ではなかった。互いに目立った反目こそしないものの、それぞれの立場上、接触は控えていた。

それは、今回のように宮殿で鉢合わせしても、せいぜいが挨拶をしてすれ違う程度が殆どだった。

『他人』というスタンスを常に維持してきたのだ。他人ならばぶつかり合うこともないからだ。それが功を奏して、宗像と石川島の全面衝突は避けられてきたのだ。

だというのに、今回に限って、阿智は異様に絡んできた。在りえな

い『心配』までしてきた。

疑わないほうがおかしい。

「白々しい誤魔化しはいらんでしょう」

だから重然は言ってやった。誤魔化すということは、本心を隠したいと言うこと。それを暴き出すには、決して妥協してはならない。

阿智はしばらく無言だった。もったいぶっているのか、逡巡しているのか……それとも、あくまでも知らぬ存ぜぬを貫き通すつもりなのか。

ふいに、口元を隠していた扇が下がった。

「重然殿。僅かでもいい、部下は残していきなさい」

阿智の放つ雰囲気は鋭くなった。もう隠すつもりもないのだろう。

本性を表しやがった……………。

自分よりもずっと小さい男に、重然は、獣の如き気配を感じ取っていた。

蛇か鬼か。どちらが出てきても構わないが。

「石川島を空けると、なんか不都合でもあるんですかい」

「あります。大あります。いま完全に出て行かれると、はつきり言っ
つて困のですよ」

「なんで」

「その言葉こそ白々しい。分かっているくせに相手から聞き出そうとするのは、相手を不快にするだけですぞ」

「ちっ……さっきまで大人しかったのに」

凶星を指されて舌打ちした重然に、阿智はくくと笑った。

「お互い様ですな。おつむの足らない東魚あずまづいしと思っていたら、釣れたのはとんだ海蛇だ」

「ひでえいい様だな、おい」

「そちらも、言葉遣いが随分と乱暴になりましたな。遠慮は一体どこへやら」

お前はもう少し遠慮しろ。内心そう毒づいた。

まったく……。そうは思いつつ、重然は内心、少なからず衝撃を受けていた。

引きずり出した本性が、まさかここまで嫌味なものだったとは。温厚な印象しかなかった阿智の意外な一面は、あまりにも意外すぎた。とんだ猫かぶりだ。見事な騙しっぷりだ。きっと誰も、阿智の本性は知らないであろう。

あの紅玉や、もしかしたら亜衣でさえ知らないかもしれない、阿智

の本性。

暴いたことを誇るべきか、暴いてしまったことを嘆くべきか。重然は複雑な気分になった。

「……まあ、それでも、これで互いに腹を割って話せるというものでしょう」

「腹の探り合いはいらないってか。それはそれで楽だけだよ」

苦い表情で重然は頭をガリガリと掻いた。

「言いてえことはわかる。要は、そっちの馬鹿どもがつけあがるってんだろ？」

「ええ、まったくその通りです」

素直に頷いた阿智を横目で一瞥し、面倒くさそうにため息をついた。

阿智の懸念はわかる。石川島を空にして、その隙に何かあったら、喜ぶのは宗像海人衆なのだ。

外から見ているとわかる。宗像海人衆は本当に嫌われていると。いくら王族、ひいては女王と強い結びつきを持っていようと、それを嵩にきて威張り散らせば、嫌われて当然だ。

それでも、どこそこから表立った文句がないのは、それがやはり女王や宰相との繋がりがあるからだ。

しかし宗像海人衆が後ろ盾だと思っている亜衣や火魅子は、そんな

高慢を優しい目で見過ごしてやるほど愚かでなければ、身内贔屓でもない。

あまりにも目に付けば、ばつさりと切り捨てられるだろう。阿智はそれを恐れているのだ。だから対抗馬である石川島海人衆とも事を構えようとはしない。

「もしも石川島が海賊に乗っ取られて、それを我々が退治することにならなったら、目も当てられません。頭領である私が言うのもなんですが、宗像は石川島を手放さないでしょう。貴方たちはそのまま薩摩の軍門に『本当に』下るしかなくなる。そうになったら、もう海人衆の中で、我々（宗像海人衆）に対抗できる者がいなくなります。それでは困るのですよ」

「だったら、宗像が薩摩にいけばいいじゃないか」

「それが出来たらどれほどよいか」

やれやれと阿智は、わざとらしく嘆息して、首を横に振った。

阿智はこんな様子だが、内心どう思っているのかはわからない。

たしかに、阿智の言うことは一々最もとだ。今まで、宗像海人衆と石川島海人衆は、互いに睨みあって来た。それは結果として、暴走しがちな宗像海人衆を監視・抑制することにもなった。

つまり、宗像海人衆の暴走を押さえつけられる唯一の存在、それが石川島海人衆なのだ。

だからその石川島海人衆が『海人衆』でなくなるということは、阿

智にとつては当に死活問題なのであつた。

そういう意味では、ここは石川島海人衆ではなく、宗像海人衆が出張るのが、形としてはよかつたのだ。だが不幸なことに、選ばれたのは石川島で、宗像海人衆には話しすら回つてこなかつた。

だと言うのに……。

「私の部下たちは、揃いも揃つて言っていますよ。『薩摩なんて辺鄙に呼ばれて、石川島は可哀相だ』とね」

「まったくわかっていない」と、阿智は愚痴をこぼすように言い放つた。自分たちの行いが引き起こしたこの現状を、当の本人たちがまったく理解していないことに、苛立つている様ですらあつた。

その様を見つめながら、重然は、何だか段々と、阿智が気の毒に思えてきた。

それはきつと、この僅かな一時の間に、阿智への評価や印象が、がらりと変わってしまったためだろう。

知らない一面、なんてもんじゃない。ともすれば、目の前の男が本当に阿智なのかどうかさえ怪しくなるほどだ。

だが何よりも、阿智の本心の一部に触れたような、そんな気がするのだ。てつきり、阿智も権力を膏にきたものだ、そう思い込んでいた。

衆の雰囲気というものは、その衆の頭領の色でもある。昔、先代の頭領 織部の父親 から言われた言葉だつた。

だが、宗像は違うようだ。少なくとも、阿智はまだ暴走しているようには見えなかった。

なんだかんだと言って、阿智にも、この九洲を受け継いでいるという思いがあるのだろう。だから自らの手下の態度に、身内ながら苛立っている。

重然には、そう思えて仕方がなかった。

嫌味だが、まじめな奴。それに強かだ。それが重然の抱いた、阿智への新しい印象だった。

「話はわかった。たしかに、阿智殿の言い分も最もだ。……手勢は幾つか、残していきやしょう」

重然のその言葉に、阿智は小さく頷いた。ほっと息をはくのを、扇で上手いこと隠しながら。

「さあ、これで心配事はなくなりましたな。重然殿、引き止めて悪かった。道中、気をつけての」

笑顔でそういうと、阿智は踵を返して、重然の辿ってきた道を逆に向かって歩き出した。

遠ざかる阿智の後姿に声をかけることもなく、重然はただ黙って見送った。そして直ぐに、自身も歩き出した。

新築されたばかりで張りのある床が、きしりと音を立てた。

知事やそれに順ずる地位の者、解放戦争の折に目覚しい活躍をして取り立てられた者などは、その殆どが耶牟原城に屋敷を構えていた。普段は地方で生活している者が殆どだが、所要で上都する際には、都にある己の屋敷に一時期住まうことになっていた。

宗像海人衆頭領の阿智も、そんな一人であり、彼は二ヶ月近くをその屋敷で住んでいる。

同様に重然も都に屋敷を持っていた。あまり大きくはないが、それでも立派な屋敷である。

外見は中世の日本における屋敷に似ている。一般に『武家屋敷』と呼ばれる造りである。

この建築を最初に取り入れたのが、他でもない九峪であつた。

『どうせだから、武家屋敷に住んでみたい。やっぱり戦国時代は男のロマンだよ、うん』

誰一人として戦国時代が何でロマンが何かもわからなかったのだが、そんなこんなで出来上がったのが、通称『九峪御殿』である。現在は亜衣の住居となっているこの屋敷が、九洲における『武家屋敷ブーム』の先駆的存在となつた。

おかげで、金のある者はこぞって屋敷を立てていった。神の遣いに肖ろつという心胆が見え隠れしていた。

知事たちも我も我もと屋敷を立て、果てには復旧途中の耶牟原城に

さえ、この技法は取り入れられるほどだった。

重然も都に自前の屋敷を構えている。そんなに大きくはないが、庶民から見れば、まあ、豪邸と呼んで差し支えない大きさではある。

正門を抜けると、最初に広がるのは庭である。この屋敷には明確な玄関は存在せず、言い換えれば、建物の中に入れる場所全てが玄関のようなものだった。

「…………お前なあ」

門を潜った重然の、第一声がこれだった。重然の屋敷でもっとも玄関としての用途を成している縁側で、愛宕がでろんでろんに『出来上がっていた』からだ。

時間にして、まだ正午を過ぎたばかり。徳利が五つも空になって転がっている。

「あつ…………おつはしらあ」

頬を上気させ、目はとろんとだらしく垂れている。何が楽しいのか、へらへらと締まらない表情で、足をパタパタと動かし、手に持った徳利をゆらゆらと揺らしている。

愛宕も香蘭と同様、二十三歳の歳を迎えていた。細く締まった身体には扇情的な肉がつき、昔以上にメイハリのついた体つきをしている。

髪を後ろで束ねているのは昔から変わらないが、年月を重ねたことで五年前とは比べ物にならないほど『女の匂い』を醸すようになった。

ていた。

早い話、愛宕は『色っぽい大人の女』になっていたのだ。

外見だけ、を言えば。

「真っ昼間から飲んべえになってんじゃねえよ」

徳利を拾って、重然は呆れたようにため息をついた。愛宕の傍に近寄った瞬間、濃い酒気が重然の鼻腔を一気に襲った。

「らつてえゝ、おっはしらはあゝ、おっそいはらあゝ」

「ああつたく、語尾を延ばすな、だらしねえ」

「あひゃあ」

変な声を上げて、愛宕がコロンと寝転がった。重然の言葉の何が楽しかったのか、「にゃは」とか「みゃはあゝ」とか喜びながらバタバタと小さく暴れている。

だめだ。何を言ってもこいつを喜ばせるだけだ。

愛宕は笑い上戸なのだった。

こうなった愛宕とは、もうまともな会話は成立しない。いや会話自体は可能なのだが、すぐに笑い出すため、話が進まないのだ。

「つたく…………ツ」

嘆息した重然は、不意に息を呑んだ。

暴れているせいで乱れた衣服。裾で僅かに隠された太ももの奥が、一瞬だけ、見えてしまった。

それだけ。ただそれだけのことなのに、重然は目を逸らしてしまった。別に女性の下帯ぐらい、見るのは日常茶飯事だが……。

愛宕は色っぽくなった。艶やかさが出てきた。はっきり言って美人の部類に入る。

そんな『女性』が、頬を上気させ、目をとろけさせ、衣服を乱れさせて、まるで誘うように秘部を垣間見せている。

いくら重然でも、そこは男。相手が愛宕とわかってはいても……。

男の悲しい性である。更に言えば、子供の頃からの愛宕を知っているし、歳にいたっては十以上も離れているのだ。

気分的にも複雑だった。

「……………？ おはしらあゝ？ はおはあはいれっすよあゝ？」

「……………倭国語をしゃべれ」

「あひゃあゝ」

だめだ、こいつ、もうどうにも出来ない。

僅かに赤くなつた頬の色をごまかすように、心の中だけで呟いた。

せつかくからかつて気分転換でもしようと思つていたのに、余計に疲れが増した気がする。倍增ドン、さらに倍といった具合に。

「誰だ、こいつに酒を出した馬鹿野郎は……………」

空を仰いで、重然は大いに嘆いた。志野ほどの酒乱ではないが、自分ひとりで相手をするには荷が重過ぎる強敵ではあるのだ。

はあ……………。もう、どうでもいいや。

「とりあえず、だ。明後日にはここを出るからな。準備しておけ。いいな」

疲れた声でそう言つた重然は、家の中には入らずに、そのまま身を翻した。

愛宕はキョトンとして、

「おはしらあ？　ろこいくんれっすはあ？」

重然の背中にそう尋ねた。

「……………疲れた。俺もちょっと、飲んでくる。ついでに女も抱いてくる」

「……………いく」

「あ？」

「はしきもいく」

「だから倭国語を……っておいッ」

愛宕はいきなり立ち上がると、ふらふらしながら重然に襲い掛かった！

かのように見えたが、なんてことはなく、そのまま重然の背中にひつついた。両手を大木のように太い首に巻きつけ、足で腰を『ガシッ！』と絡めてホールド完了。

突然のことに、さすがの重然も踏鞴を踏んでしまった。五年前とは違って、今の愛宕は、身長も伸びて少しだけ体重も増えた。

いくら重然でも、もう、不動で受け止めることは難しくなっていた。

「お、お前、危ねえだろ！」

「はふなくないれっすよぉ？ はしきは」

「酔っ払いが、なにを言っ、て」

ふにん

重然の言葉が止まった。

背中に、とてつもなく柔らかい感触が二つ。

でさえ、柔い。まさか、ここまでとは…………ツ！

密着しているのに、その二つの感触だけは、ことさら熱く感じられた。否応にも女を感じさせ、思わず生唾を飲み込んだ。

「…………おはしらあ？」

「な、なんでもねエツ！…………たく、しゃあねえ、いくぞ」

諦めて重然は、愛宕を連れて行くことにした。これ以上は無意味な問答になると思ったし、これ以上巨乳　じゃなくて愛宕を感じるのは、何かマズイ気がしたからだ。

愛宕をおろして、再び天を仰ぐ。

「なんで俺が、こんなガキをこつも意識せにやなんのだ…………」

本当に、どつと疲れが押し寄せてきた。もう何でも良いから、酔っ払ってしまいたかった。

「オラ、行く前に散らかしたものは片していけ」

「はいっすう…………はれ？　こういうときは…………」

愛宕はふいに小首をかしげた。それから何を思い出したのか、

「『いえつさあゝ！』。えつへつへ」

と、満面の笑みで敬礼したのであった。

それから空になった徳利を拾って、屋敷の中へと姿を消した。

がつしゃゝん

不吉な音が聞こえてきた。酔っ払いめと重然は、疲れることに
疲れたため息をついた。

それから、ふと、愛宕の一言を思い出した。

「……『いえつさー』、な」

呟いた一言が、懐かしく感じられた。

九峪が、この九洲に残っていた沢山の痕跡。九峪がいなくなった
ことで、もうそれらの痕跡も消えてしまったような、そんな気がず
っとしていた。

だから、愛宕の口からこの一言が出来たことが、重然を不思議な気
分にさせた。

「おはしらあゝ。ひゅんひへきましたあゝ」

「だから倭国語を………もういい」

やれやれと肩を竦める。重然は気づいていないが、この仕草も、九峪の影響の一つなのだ。

痕跡はいたるところに残されている。記録にも然り、物にも然り、土地にも然り 人にも然り。

気づいてはいないが、ただ、九峪をまだ身近で感じられた気はしていた。だから重然は、それを何としても守りたいと思っていた。

九峪を受け継いだ愛宕も、守るべき存在だ。九峪を受け継いだ九洲に生くる者すべてが、重然の守りたい、守るべきかけがえのない存在だったのだ。

まるで、風に揺れる草のようにゆらゆらと前を歩く愛宕を見つめながら、重然は人知れず、決意の熱さを感じるのであった。

いるのは織部であつた。

両者そろって下帯姿。わずかに構える愛宕に対して、織部は悠然と愛宕よりも巨大な胸を両手で押しつぶすように腕を組み、肩を張って仁王立ちの体勢だった。

『龍虎相まみえる』という言葉すら生ぬるい。そこに立つ二人は、龍でもなければ虎でもない。

鬼神が、そこに聳えていた。

「なんだ、この状況………」

重然はただただ、疲れたように、がつくりと肩を落とすのだった。

耶牟原城は九州に現存する都市の中で、三番目に古い歴史を持つ巨大な都市である。

創建はおよそ五百年前　紀元前二百年ほど昔まで遡るとされている。建設当時は、異世界からの干渉をもっとも大きく受けることになる、

魔天戦争

が、まさに繰り広げられている暗黒の時代であつた。

しかし三世紀を生きる人々にとって、その時代の話は、すでに言い伝えの伝説となり、全てが神話の世界の物語だった。

伝説はこう伝えている。

『天空の姫御子は、はるか高千穂の頂に降り立った。

長い矛を大きく振り、そこから炎が生まれると、天空の姫御子は、今度ははるか阿蘇の峰を飛び渡り、その頂に昇り至った。

天空の姫御子が詠うと、空は晴れ渡った。炎の矛を掲げると、日輪は眩い輝きを取り戻した。隠されていた日輪に照らされて、天空に三柱の神が現れ、地上に五柱の神が現れた』

こうして、火魅子と八柱神は九州の地に降り立った。この時から、九州は『本当』の意味で、魔天戦争へと、その激動の道を歩むことになるのだ。

倭国全土で共通する伝説は、魔天戦争の始まりから終わりまでである。それぞれの土地、国で起こった出来事は、一本の系譜へと体系化されていくこととなる。

これが後世、皇室の手によって一部を訂正・改稿された、

日本神話

として完成され、天皇の正当性を象徴する『皇族正典』となり、同

時に、日本最古の歴史書として日の目を見ることとなる。

火魅子の物語は神話の中に散りばめられ、原型を留めることはなかったが、逆を言えば、神話全体に影響を与えているともいえるのだ。

伊邪那岐と伊邪那美の『天の沼矛』

太陽を司る女性の最高神『天照大御神』

などなど。後の耶麻台共和国の物語も含めれば、こんなものではなくってしまう。

このように、魔天戦争の伝説は、後世の世に長く影響を与えることとなる。

耶牟原城は、そんな時代に築かれた、当時を語る遺構であつた。

現代の福岡県にある星野村、黒木町、八女市を三角に結んだほぼ中心に、耶牟原城は建設された。

しかし建設当時、この都市の名は『耶牟原城』ではなかった。

耶牟原城の名前の由来は、

八牟原 やむはら

から来ているとされている。『牟』は『神』を表す意で、八牟原とは『八人の神のいる原』という意味である。蛇足だが、『ホノカグ“ツチ”ノカミ』に見られる『ツチ』も、神を現す言葉だといわれている。

かつてこの八牟原の地で八柱神は、姫御子のために全てを捧げることを誓った。その誓いの証として、それぞれの名と誓いの言葉を掘り込んだ石柱を立てた。これが数百年の時をかけて高い神性を帯びた『時の御柱』となる。

全ての戦いが終わり、姫御子と八柱神はこの地に帰り、都市を築いた。耶牟原城の始まりである。

幾年月を重ね、一度は冷たい水の底に沈んだ耶牟原城。

九洲の人々にとってまさに『聖地』とも呼べるこの巨大都市は、滅亡から二十年経った今、再び、栄華を刻みつけようとしていた
・
・
・
・
・
・

「・・・・・・・・ふん」

耶牟原城のとある酒場。

酒樽に身体を預けながら、重然は、舞台の上で朗々と語る詩人の詩を、それほど面白くなさそうに聞いていた。

そこそこの広さのある酒場は、呑んで騒ぐ客と、細々と働く給仕であたかも戦場のようなであった。

杯が飛び、酒が飛び、肉が飛び、骨も飛ぶ。もちろん人間の骨肉ではなく、鳥や獣の肉と骨だ。

「は……なるほどな」

向かいに座って黙々と酒を飲んでいた愛宕が、気の抜けた声で呟く。両手で大きな杯を持ち、ゴツゴツと音を立てて呑む様は、身体に似合わずかなりの酒豪であることが伺える。

つぶはあー。かー、うめえー。

すっかり親父であった。口の端からこぼれた雫を荒々しく拭い去り、新しい酒を波々と注いでいく。

「よく飲むな、お前」

呆れ顔で言った重然に、愛宕は鹿肉の切り身を噛み千切りながら、

「はるへのんへふおはしらにはいはれはふはひへっふほ」

「食つか呑むか酔つか話すかのどれかにしろ」

もはや何を言わんとしているのかもわからない。もつきゅもつきゅと頬一杯に肉を詰め込み、酒で一気に喉の奥へと流し込む。

食いつぷりはすばらしいが、見ているこっちは胸焼けを起こしそうだ。もつぱら飲む人の重然にとってみれば、大量の肉をこれまた大量の酒で流し込むなど、とうてい有得ることではないのだった。

「そんなに美味しい肉か、これ……」

一切れの肉をつまみあげて舌の上に乗せる。干せてしまっているし、油も固まっている。もう一度あぶれば美味しく食えるだろうが、必死になって食うほど美味いとは思えなかった。

「いやあ、なんか食べないと、損した気分じゃないですか」

「俺の金だろ。自分は一銭も払わんで、なあにが損した気分だ」

「だってえ」

すでに金欠となった愛宕は、悪びれた風もなく酒を仰いだ。

「そっいえば、お頭？」

うんざりしたように酒を飲む重然に、愛宕が不意に声をかけた。顔を重然に向けず、やや俯き加減に視線を杯へと落としている。

どこか、落ち着いているというか、慎重な表情だった。

「…………おんな、抱かないんでっすか」

「…………あ？」

思わず聞き返してしまった。いきなり何を言い出してんだ、こいつ…………と、そう思ったのだ。

あまりにも脈絡のない質問である。『そっいえば』と前置きをしているから、たったいま思い出したのかもしれない。

たしかに、重然は屋敷を出るとき、『女を抱いてくる』と言ってい

た。そのことに思い至った重然は、そういえばすっかり忘れていたと、酔った頭で何となく思った。

女、なあ……。重然に顔を向けない愛宕をみながら、一口酒で喉を潤す。

「どうでも良くなった。……。探すのも面倒くせえしな」

「……。そっすか」

机に突っ伏した状態で、愛宕がぼつりと呟く。杯を指先でいじりながら、酒を注ぐでもなく。

それから暫く、二人の間に会話はなかった。なぜか奇妙な雰囲気が出ていたからだ。周りの喧騒からかけ離れて、互いに何もいえない空気が出来上がっていた。

そんな時だった。

「よう、重然。辛気臭い顔して、どうしたよ？」

いきなり声を掛けられて、重然は驚きながら振り向いた。愛宕も声に気づいて、顔だけを持ち上げる。

「……。お譲？」

「あ……。あれ？ 姉御？」

小鹿の角で作った角杯を片手に、織部がそこに立っていた。

「・・・・・・・・おや？」

耶牟原城のある酒屋。喧騒と雑踏の中で、織部は馴染みのある顔
というか頭を発見した。

激しく揺れる人ごみの中で、それでも容易に見つけられる、巨大な
背丈。後ろで束ねられた髪。見間違うはずがない。

「おーい、重然ッ！」

大声で呼ぶが、頭は微動だにしなかった。

気づかなかったようだ。折角だから、一生に酒を呑もうと思い、

「わりい、他と呑んでくれ」

周りの男たちにそう言つと、織部は勢いよく立ち上がった。

男たちは口々に、

「ええっ」とか、

「もういつちまうのかあ？」とか、

「姉ちゃん、まだいろよ、な」などなど、織部を足止めしようとする
が、織部はかまわず男たちの傍を離れていった。

人ごみを掻き分けて、隅のほうに行く。酒樽にだらしなく寄りかか

って、妙にぎこちない表情をした重然がいる。

傍まで近づくが、重然は気づかない。はたと織部は小首をかしげた。

「よう、重然。辛気臭い顔して、どうしたよ？」

「……………お譲？」

「あ……………あれ？　姉御？」

「おう、織部姉さんたあ、あたしのことよ……………ってな」

重然の隣にドカツと腰を下ろす。

「すごい臭いだな、おい。店中酒の匂いでひでえことになってるけど、ここはまた別格だ」

さしもの織部もあまりの酒気に顔をしかめた。重然と愛宕はすでに嗅覚が麻痺しているためそれほど気にはならないが、まだ素面と言っている状態の織部は、酒の霧の中に迷い込んだ気分だ。

酒を飲まないでも酔いが身体を満たしていく。脳が麻痺を起こしたように、一瞬、織部の意識が揺らいだ。

「おっと……………」

さすがに辛くなったのか、織部は膝を崩して、重然の胸にもたれ掛った。酒を飲んで血行が良くなったのだろう、密着している部分が、焼けるように熱い。

酔いが身体に馴染んでくる。朦朧としかけていた意識は段々と明瞭になっていく。

「へへっ。悪いな重然、ちよっくら体かりるぜ」

頬を紅潮させて、言葉もどこか艶かしい。胸に感じる織部の重みが、重然を変に意識させた。

濡れた瞳と、赤く色づいた唇。うつすらと微笑みを浮かべるその表情に、重然の頬も少しだけ赤くなった。

酔い、のせいだけではない。意外なほど柔らかい織部の身体が、重然の『男』を刺激してくる。

九峪風に言えば、そう『エロい』身体なのだ。それも愛宕『以上』にエロい。

織部は今年で二十九歳になった。しかも独身。この時代では未婚としては年長の部類に入る。

年齢的なもので言えば、織部と重然の年齢差はそれほど離れていない。重然、御歳三十五歳。年の差は僅か六である。

「いやー、まさかこんな所で前らに会えるなんてな」

ケタケタと織部は笑う。角杯の酒を飲み干すと、空になった杯を重然に手渡した。何も言わないが、重然にはわかる。受け取って酒樽の中に突っ込んで、それを織部に返した。

「おう、わりいな」と、織部は角杯を受け取った。

「お嬢は、なんでまた、都に」

重然の記憶によれば、織部は火向県にいるはずである。火向県の知事は志野が勤めている。かつての志野一座（志都呂一座）は、もれなく志野の配下として、川辺城で暮らしていた。

火向県での織部の仕事は兵士の調練である。姉御肌の織部は、きつぷうと面倒見のよさから、兵士たちに慕われていた。

「いやあ、な。一座が解散して、もう五年になる。……今の生活に不満はねえけど、やっぱり、自由な生活も恋しくてよ」

「それで、都まで来たんでっすか？ 暇なんでっすか？」

「や、暇じゃねえけどよ。酒の席で何となく、座長の前でポロツと言っちゃったんだよ。そしたら座長が、『休暇をあげますから、しばらく、羽を伸ばしてきてください』……てさ」

「志野様が？ はあ、やっぱりいい知事様でっすねえ」

感心したように、愛宕は首を上下に揺らした。頷いている、らしいのだが、動きがどうも緩慢である。

いい知事、といえば正しくその通りで、志野の知事としての評判振りとくれば、九洲で随一と呼べるほどであった。

志野は九洲各地を芸人として渡り歩いた過去を持っている。こと九洲全域の風土はもちろん、農耕の良し悪し、人柄などにも精通している。

そして、自身も低い身分の出　ということになっている　であることも手伝い、志野の取り仕切る政は、民に即したものが多い。

財政の切り盛りも上手く、知事としては珍しく、娯楽にも力を入れていた。そのため現在の火向県は、自然と、旅芸人たちの活動拠点になりつつあった。

「座長も、本当は、昔みたいに旅がしたいんだろうよ。けど、座長は優しいからなあ。いまさら火向の連中を見捨てて、芸人に戻ることできないんだから、可哀相なもんさ」

志野のことを思うと、織部も少しだけ心が痛む。志野は何よりも、自由の似合う女だと思っているからだ。

右へ左へと切つ先の移り変わる剣舞のように、一見すれば不規則に見える舞いの中に、鋭い剣閃と、たしかな道筋を描いている。

凝り固まった一本道ではなく、幾重にも枝分かれした千手の道。それを選ぶ自由が、つねに志野にはあったのだ。

だが今の志野には、知事としての生活しかない。自由を愛し、舞いを愛し、新しいものを求め続ける性分の志野にとって、それは四肢をもがれた人も同じ。翼を折られた鳥も同じである。

だからせめてと、志野は人々の暮らしの中に、己の失った自由を求めている。民を自由にすることで、同時に、自らをも自由にしようとしている。

娯楽の奨励は、まさにその最たる例といえた。芸人が増えれば、新

しい物も火向県に入ってくるからだ。

織部が旅を許された背景にも、そのような事情が絡んでいた。そして織部は、許可を下した志野の心情に気づいていた。もう六年近い付き合いになる。決して短くない年月だ。

「都に来れば、なにか新しい物でもあるんじゃないかと思ってきたんだけど。手に入ったのは、大陸の酒くらいのものさ」

「目新しい物がほしければ、ここよりも、那の津や坊の津に行った方が、いいんじゃないですかい」

「……だよなあ。行くなら湊町だよなあ。奈の津か、坊の津か」

言って、織部はぐったりと脱力した。

古今東西、繁栄した都市の裏には、商人絡みの事情が関わっていることが殆どである。

その中でも、特に、交易による栄えは、他の追随を許さないほどである。

そのため、陸路での要所、または航路における湊町など、土地的に物と人が必ず通るか入るかする場所に、栄華は運び込まれてきた。

九州で繁栄した湊街は、主に三つ存在する。

最も隆盛を誇るのが、本洲、半島、大陸と通じている、

那の津

二つ目に、半島、大陸と通じている、

坊の津

最後に、琉球島との交易の際に用いられた、

錦紅湾の湊町

の、三つである。那の津に関しては省略するが、坊の津は火前県現代でいう長崎県の佐世保湾一帯に面している部分のことである。奥には巨大な大村湾もあり、この半島部分は水運業が盛んである。

これらは昔から発展を遂げた都市であるが、現在ともに船が入ってくるのは、北方の那の津だけという状況が、ここしばらく続いていた。

坊の津と錦紅港に港船が入らない理由……それは件の、北山の問題が原因であった。

坊の津はまだ大きな被害が出ておらず、収益は下がったものの、まだ正常に機能はしている。問題は錦紅港であった。

以前から、北山の軍船による領海侵犯はあったものの、それとは関係なく、琉球島からの商船は毎日のように来航していたのだ。

それがここ最近、目に見えて船が入らなくなった。輸入出による利益は右肩下がりとなり、ただでさえ豊かと言い難い薩摩県の財政は、

よりいつそう圧迫されているのだ。

香蘭・紅玉親子が重然に泣きついてきたのも、領けるというものであった。

「坊の津はなあ。最近、海賊が出て、船の入りも悪くなったって話しだぞ」

「へい、聞き及んでまさ。北山がちょっかい出してるんで」

重然の言葉に、織部は怪訝そうに眉根を寄せた。

「北山？ 琉球島の北山か」

「へい。何を思ったのか、大隈海峡から、宇治の群島周辺まで、手広く」

「北山………。あのクソツタレの北山か」

憎憎しいほど、織部の声は重かった。

織部はもともと、石川島衆頭領を父に持つ、根っからの海人でもある。志野の一座に入る数年前までは、重然同様、石川島で海人の暮らしをしていた。

当然、それなりの海賊家業もやっていたのだが、その時に何度か、北山の軍船と鉢合わせをしたのだ。

「あいつら、戦いもせずにさっさと逃げ出してよ。ああいうのがムカツクんだよ、イラツクんだよ。戦わねえってなら、来るんじゃない

えよッ！」

ダンッ！ と、角杯を床に思い切り叩きつける。全身から怒りの匂いを漂わせながら、織部は、自身がどれほど北山に対して怒りを抱いているかを無言で語りかけていた。

北山が憎い、というわけではないのだ。ただ、嫌いだけだった。

さっぱりとして、一か十を好む織部にとって、自分たちの鼻先を掠めながら、いざ近づくとさっさと逃げ出していく北山の態度が、腹に据えかねるほど腹が立つのだ。

戦うなら戦う。その上で完膚なきまでに潰しあう。織部はそう考えているのだが、北山は近づきながらも、まるで嫌がらせのように、何もしてこないのである。

何もしてこないのが、反って腹が立つ。それが織部という女性であり、北山への気持ちだった。

酒を一のみして、ふうっと心を落ち着かせる。北山のためにムシヤクシャすることが、何か悔しく思えた。

だが、ふと。心が落ち着いたところで、織部の脳裏に疑問が浮かんだ。

「北山が、そんな近くまでくるのか？ しかも船を襲うなんて」

それはそれでおかしい話だ。なぜなら北山は、『今までまともに手を出してこなかった』のだから。

織部が疑問に思うのも無理からぬことなのだ。それは重然も然り、

薩摩政庁でも、北山の明確な目的など、知る由もないのだ。

北山が手を出してきた。その事實は、可能性として十分に起こりえた事のはずなのに、何か気味悪いものを感じざるにはいられなかった。

「ことによっちゃ、薩摩が荒れるかもしれねえなあ」

難しい表情をして、織部は固い声で言った。

部外者である織部ですら、気味が悪いと思ったのだ。香蘭・紅玉親子　とくに母親のほうは、織部以上に、事態を重く見ていることは想像に難くない。

仔細はどうであれ、現在、薩摩では北山を『海賊』と認定している。これらの対処をするために、近いうちに、大規模な海賊討伐令が下されるだろう。

これが原因で北山との戦争が始まる可能性もあるが、このまま北山の暴挙を見過ごすわけには行かない。薩摩の財政は火の車なのだ。

「北山と戦か……。あたしも参加するかな」

丁度いいとばかりに、織部はニヤリと笑った。腹立たしい北山と、ようやく戦えるのだ。

千切つては投げ、千切つては投げ。脳内で自分に吹き飛ばされる北山の姿が浮かんで、気分がどんどん高揚していくのがわかる。

ただ、重然は、織部のような気持ちにはなれなかった。一軍を率い

て戦うのだ。海の戦で遅れを取るとは思っていないが、ただ倒すことに喜びを感じることは出来なかった。

大義名分はある。海賊の討伐は、重然自身、いままでだつてやってきた。それでも、予感があつたのだ。

ただの討伐では終わらない。そう思わせる気味悪さが、この一件に北山の影に、見え隠れしているような気がしてならないのだ。

これから海に出て、北山と戦つて、そしていったい何が明らかとされるのか。この胸の内に蠢く不安が杞憂に終わればと、重然は切に願うばかりだった。

「……………おいおい、重然。まあた辛気臭い顔してるぞ」

「おう……………すいやせん」

考え事に耽っていたせいで、重然の表情はいつしか、苦虫を噛み潰したくらいに難しく歪められていた。

せつかくの酒の場で、こうも暗い顔をされては堪らないだろう。不満も露に、織部は重然をねめつけた。

こういうときは、もつと楽しい顔をしなければ駄目だ。自分などは北山と戦えると思っただけで、もう気分がいいのだ。

それをこいつは……………。と、そこまで思つて、織部はふと、重然の顔を見上げた。大きな身体に似合う、大きな顔だ。無造作に蓄えられた虎髭が、時間の流れを感じさせる。

織部が、秘密を暴いた子供のように、ニヤニヤとした笑みを浮かべた。

「…………お前、ここしばらく、女と寝てねえだろ」

「へ？」

素っ頓狂な声が上がった。

ぼうつとした重然にはかまわず、一人したり顔で頷くと、

「そりゃいけねえ。女を抱かねえから、んな顔するんだよ。いねえのか、抱く女」

「いや、それは…………抱こうとは、思ってたんですが…………探すのも買うのも、面倒になって」

「なんて甲斐性なしだ」

呆れたように言われて、重然は言葉も返せなかった。たしかに、愛宕一人の相手をしただけで、女を抱く気すらなくなるなど、とんだ甲斐性なしだ。

何となく恥ずかしい気持ちになって、誤魔化すように酒を飲んだ。

「……………何だったら、あたしと寝るか？」

「ブフォッ!!」

噴き出した。凄まじい勢いで飛び出した酒が、目の前の愛宕を直撃

したが、それどころではない。

予想外も予想外。まさか織部からこんなことを言われるとは露ほどにも考えていなかった。その発想はなかった。

そも、重然にとって織部という女性は、ある種の特別な意味合いを持つ存在である。

先代に従っていた連中は、重然も含めて、皆が頼もしく慕っていた。こざっぱりとして、細かいことに拘らない、海原のように大胆で大きい漢だった。

織部はそんな先代頭領の息女であり、また遺児でもある。成長するにつれて父親譲りのきつぷうと、一人石川島を離れて旅に出てからは、いろいろな経験をしたのだろう、面倒見のよい性格にもなっていた。

姿かたちも、今は亡き母親に似てきた。母譲りの美貌に、父譲りの快活な性格。いい女に育ったと、石川島の連中は口々にため息をもらしたほどだ。

その織部を抱く。特別な存在だったからこそ、そんな考えは今まで一度も湧いたことなどなかった。

だが 視線が、無意識のうちに、織部の身体を這いずり回る。

意識して初めて、その美しさがわかった。肉付きには一切の無駄がなく、筋肉も、必要以上についていない。

くびれの細さも、胸の大きさも、人並み以上だ。それでいて、長い

髪が、ことさら織部の女を高めている。

こんなに、綺麗だったのか。そう思わずにはいられない。冗談だと笑って切り返すことの出来ない、それほどの美しさがそこにあった。

愛宕と違い、織部の女性は『熟成』されている。匂いたつような女ぶりだ。

ごくりと、知らず生つばを飲み込んで、重然はとっさに我に返った。

いかんつ。何を考えてんだ！？ 相手はお譲だぞッ！！

そう思つて、煩惱を頭から追い出そうとする。だが時すでに遅く、織部の表情は、さらに愉悦に染められていた。

「我慢するなつて、な。イロイロ溜まってんだろ？ ……あたしが、相手してやるから」

振り向いた織部が、胸を重然の身体に押し付けてきた。柔らかくも弾力のある豊かな乳房が、硬い胸板に押し潰されて形を変えている。

うおおおお ……と、もはや声にならない。今まで何人もの女性を抱いてきたが、これほど豊満な胸は寡聞に知らない。

「ほれほれ。興奮してるな？ 欲情してるな？ 性欲を持て余してるな？」

「お、お譲……………か、勘弁してくださいえ」

「なあに言つてやがる。嬉しいくせに」

困惑する重然がおかしいのか、それとも自身も興奮してきたのか、頬を真っ赤にして、さらに強く身体を擦り付けようとする。

胸だけでなく、腹で、股で、太ももで　　どんどん行為は過激になっていく。熱に浮かされたように、瞳も光を失いつつあった。

その時。

「・・・・・・・・」

愛宕が無言で立ち上がった。全身に酒を浴びたまま、顎の先から雫が垂れている。

そして

「・・・・・・・・いい加減に」

杯を掴んで。

「しろーーーーーッ!!」

大声とともに、至近距離で　　重然の顔面に投げつけた。

力の限り。

「ぶふおおッ!!」

バキンッ！ と盛大に砕け散った。重然の頭が、ではなく杯のほうである。

さすがの巖のごとき重然でも、手を伸ばせば届くような近距離で、しかも愛宕の腕力で投げられては一たまりもない。意識が一瞬だけ吹き飛んでしまった。

そのまま仰向けに倒れる。つられて織部も、重然に覆いかぶさるように倒れた。

「人に酒を吹き付けて・・・・・・・・目の前で鼻の下伸ばして・・・・・・・・」

キッと、倒れた二人を睨みつける。

「あちきは置いてけぼりかー！ッ！！！」

叫びは、店中に響き渡った。しんと店内は静まり返るが、それに気づかないほど、愛宕は興奮しきっていた。

「あ、愛宕・・・・・・・・おめえ、いきなり何を」

のそりと織部が上半身を起こした。髪についた杯の欠片を払って、愛宕を陰しく睨みつける。

だがそれでも愛宕は怯まない。目をギラギラと輝かせている。

「姉御、いくらなんでもやりすぎっす！ 場所を考えてほしいっす！」

「場所つたつて」

辺りを見回す。いつの間にか、給仕やら客やらの視線が、こっちに向けられていた。

ぱりぱりと髪を掻きながら、織部はため息を一つつくと、

「こんなもん、別に珍しくもねえだろ。ここじゃなくなつて、他のところでも、男と女が酒を飲めば、抱き合つのは当たり前だ」

「姉御はやりすぎなんでっすよ！」

「やりすぎつて……………」

と、そこで織部が突然、口元を意地悪そうにニヤリと歪めた。

「お前……………もしかしてヤキモチか？」

「!？」

愛宕が言葉を詰まらせた。怒りで真っ赤だった顔が、別の種類の赤みに変わっていった。

その様をみた織部は「やっぱり」と、納得したように呟いた。

「そーかそーか。ヤキモチか。ふーん」

「あ、いや、その……………」

目に見えて愛宕の勢いはしぼんでいった。まるでしわがれた果物の

ように、どんどん小さくなっていく。

「そりゃあ、気が気じゃないよなあ？ 惚れた男が目の前で口説かれてるんだもんなあ？ 守りたいよなあ？」

「あう………」

「自分以外の女の体で鼻の下伸ばしてるところなんか、見たくねえもんなあ？ いやー、わかるわかる」

「あうあう………」

もう反抗する気力も無くなってしまっていた。酒で鈍くなった思考回路は、すでに機能のほとんどを停止させていた。ただただ顔を真っ赤にすることしか、今の愛宕にはできなかった。

恥ずかしさに黙り込んだ愛宕を一通りからかい終わった頃には、周りの人間も興味を失ったのか、それぞれの世界に戻っていた。

はー、かわいいやつだな。姉御肌な織部は、妹分の愛宕を見つめて、やれやれと肩を竦めた。

「冗談だよ冗談。ちょっと重然をからかったただけだって」

「え、あ………へ？ 冗談？」

「そ、冗談。だから落ち着こうぜ、な？」

「は、はは………冗談」

「そう、冗談。ちょっとした悪ふざけさ」

おかしそくに笑いながら、樽の中に腕ごと杯を突っ込んで、それを愛宕に差し出した。

仲直りの証。そういう意味なのだろう。あからさまにほつとした表情の愛宕は、目を回したようにふらふらと、織部の差し出す杯を受け取ろうとした。

自然、互いに身体を　顔を近づける。その時。

愛宕の耳元で、小さくささやかれた。

今は、な。

ハッと、愛宕は織部の顔を凝視した。

不適な笑みが、あった。

「たしかに冗談だ。……………今はな。だけど、これははつきりさせとかないとな」

「あ、姉御……………?」

「半分は本気だった。半分だけ、重然に抱かれようと思った。これは嘘でも、冗談でもない」

そして、一呼吸の間をおいて、

「お前の気持ちはわかるさ。……………惚れた男だからな」

静かに、ささやく様に、でも確かに力強い言葉を、織部はしっかりと口にした。

そこには偽りも隠そうとする気持ちもなかった。ただ真実を、覚悟や決意といった硬い意思を込めて、言葉にしていた。

え？ 姉御、それって……。

愛宕は固まっていた。ほとんど混乱しかけた頭で、それでも、織部の言葉が延々と繰り返される。

そんな愛宕に、織部は、いつもどおりの笑顔を浮かべて見せた。

「ま、そういうことだから。これから仲良くしようぜ。……
・仲良く、男の取りあいだ」

「……それって、喧嘩を売ってるんでっすか？」

「おう、喧嘩だ。女の喧嘩。勝ったほうが重然を手に入れる、そういう喧嘩。買うだろ？」

こともなげにそう言っ、織部は酒を一口。すべてを吐き出したおかげで、すっきりとした気分だった。

昔から、重然には好意を抱いていた。それは限りなく兄弟愛に近いものだったが、下地はすでに出来上がっていたのだ。

数年ほど離れて、そして再開した。それからしばらくして、少しずつ、織部の中にあつた家族の情としての想いは、次第にその形を変

えていった。

恋心へと。

だから、重然に抱かれない、というのは素直な気持ちなのだ。織部も経験は豊富なほうだ。重然を気持ちよくさせられる自身はあった。

が まさか、愛宕もとはねえ。少し以外に思いながら、黙ったままの愛宕を見つめた。

愛宕のことだ。こういうことに関しては、歳の割りに初心だから、きっと自分自身にも隠し続けていたのだろう。

それが今回のことで、一気に爆発したのかもしれない。自分の想いに自覚しても、まだ整理をつけるには時間がかかるはず。

「……………上等。その喧嘩、買ったす！」

予想以上に早かった。愛宕は単純だった。

そんな妹分をおかしく思いながら、織部は力強く頷いた。こちらも了承した、という意味である。

ここから、女同士の戦いが始まるのだ。意地とプライドをかけた、女の戦いが。

だが負ける気はしない。織部にも、愛宕にも。

「つーわけでだ。まずは表でろ。さっきのいい雰囲気をぶち壊して

くれた、その礼がまず先だ」

「うっす！」

そういうと、織部は立ち上がって、店の出入り口に向かっていった。愛宕も織部の後についていく。

それからしばらくして、店の表が賑やかになる。重然が目覚めるのは、その少し前のことであった。

南の海から遠く離れて、この都でも、新たな戦いが、その幕を上げた。

第8回 「北山」

元星五年五月。

肌の寒さも次第に弱まり、雨の匂いが少しずつ近づく季節になった。梅雨の季節まであと一月ほど。迫る春の到来を、海はさざ波で迎えようとしている。

風は穏やか。海上に気流の乱れなく、船は淀みなく進んでいく。小さいながらも帆は風をいっぱいを受けてピンと胸を張っている。

船の舳先には子供がおり、船の進行方向を、目を逸らさずに凝視していた。

古来より海人たちには、海に住む魔物を発見するために、見張りとして子供を先頭に立たせる慣わしがあった。

「あ
」

呟いて、子供が後ろを振り返った。船には子供のほかに、軽装の兵士が十数人、思い思いの姿勢で波の揺れに身をまかせていた。

「船が見えた」

「なに」

兵士の一人が子供の横に立った。槍を片手にするこの男は、薩摩の兵士である。

目を細めて、海の彼方に視線を飛ばす。水平線の上に見えるのは種芽島だ。船は、その種芽島を背景にするように、海に浮かんでいた。遠すぎて細かい姿はわからないが、辛うじて帆が見える。子供のいうとおり、船で間違いない。

一人、また一人と、兵士たちが舳先に集まってきた。

「おい、あれ、一隻だけじゃないぞ」

「二隻、三隻……見えるだけでも五隻はある」

兵士たちが互いに顔を見合わせて頷きあう。

「とまれ、とまれー！」

櫂手に停船を叫ぶと、ほか二隻にも止まるように伝える。人力の動力を失った船は、風の流れだけで、ゆっくりと前進していく。

種芽島までは、まだ六里ほどの距離がある。五隻の船との距離差はよくわからないが、推測すれば、だいたい二里から三里ほどだろう。ざざーんと、波が船に当たって砕ける音がする。それ以外では、静かなものだ。

「クロだな、間違いなかつた」

船の船長で、三隻からなる艦隊の司令官である将校が、兵士たちに聞こえるように言った。

木の枝から削って作られた采配（指示棒）をはるか種芽島に向ける。

「距離は、わしらと種芽の間くらいかのう。漁師の船にしては、ちと大きすぎる」

「ここらの海は、マグロもカツオも獲れやせん。なのに、あれだけ大きな船……怪しいですぜ」

「十中八九、北山の軍船だ。旦那の読みが当たっちゃったわけだ」

「どうする、戦うかい」

兵士の言葉に、船長は首を横に振った。

「バカ言え。たった三隻で勝てるわけねえだろうが。錦紅港に引き上げるぞ」

「へい、船頭」

「よーそろー！」という掛け声とともに、三隻の船はさっと転進し、薩摩の錦紅港に向かって舵を切った。

種芽島周辺を漂う船団は、追ってくる素振りも見せなかった。

鹿児島城の中枢となる薩摩荘。重然を総大将とする海賊討伐隊は、主にここから発せられる作戦の指示によって動いていた。

香蘭・紅玉親子は、この大々的な海賊討伐作戦における民衆の動揺を抑える役目に専念している。海のこととは全て重然に任せるという言葉通り、親子は深く干渉してくることはなかった。

重然が薩摩海軍の司令官として本格的に活動を開始してから、薩摩以南の海の情勢は俄かに変化していた。

主な巡視海域は大隈海峡と、薩摩半島から、

硫黄島

黒島

宇治群島

までの海域（特に名称はないため、ここでは便宜的に『薩摩海峡』と呼ぶ）である。

北山の軍船はこの二海峡を中心に活動しているからだ。錦紅港は薩摩海峡と大隈海峡に挟まれているため、とにかく商船が入港して来なくなってしまうていた。

それにしてもさすがと言うべきか。海に出れば敵なしの重然である、海の民として名を馳せる琉球の戦士たちとも互角以上に渡り合い、負けの込んでいた薩摩軍は徐々に勝ち黒星を飾るようになっていた。

とはいえ、全ての戦いに勝てるというわけではない。重然が参加してようやく『互角』に戦えるという状況でしかないのだ。戦況は一進一退だった。

巡視船は日夜を問わず警備に当たっている。その内の数隻に、重然はある任務を与えていた。

表向きは海賊退治とされているが、『海賊』ではなく『北山』を意識した重然の指図であった。

薩摩荘にある作戦本部。二段櫓を中心に政務官が働く平屋が軒を連ねる薩摩政治の中心である屋敷の一角で、海軍の将校はそろって顔をつき合わせていた。

列席は八人。重然をあわせて九人。これに、現在警備についている将校が四人の計十三将が作戦に携わる指揮官たちである。

武将たちは木板を囲むように車座に座っている。木板には二半島と、種芽島や宇治群島をあらわす石などがおかれていた。

「やはりな」

難しい表情で重然は言った。

「宇治、黒島、硫黄島、そして種芽島。全部の周辺に北山の軍船が確認できもつした」

「種芽島を盗られたか」

重然の表情は冴えない。武将たちの表情もやはり冴えなかった。

北山の本拠地はもちろん琉球島北部だが、どこか九州に近い島を拠点に敵は動いている。

その重然の読みは的を射て、宇治群島、黒島、硫黄島、種芽島が敵の手中に落ちてしまっていたのだ。

まだ耶麻台国が健在であった頃、琉球との国境はトカラ海峡を隔てて線引きされていた。したがって今回、種芽島の四島以外にも、

耶久島

口永良部島

草垣群島

までが、琉球　というよりも北山の手に落ちてしまったことになる。つまり耶麻台共和国は、知らぬ間に以南七島をあっけなく失ったことになるのだ。

「戦争が終わってからというもの、小島にはなかなか手が回らんかったが」

「うむ。まさか北山の島にされていようとはな」

「耶久島、種芽島、硫黄島を失ったのは大きな痛手だのう」

場のどよめきは瞬く間に広まる。それだけ七島を失ったことは、少なからぬ衝撃を武將たちに与えていた。

「種芽島と硫黄島はやかいだ。あそこには小さいながら砦がある」

「そうだ。それに硫黄島はその名のとおり、硫黄が多く取れる島だ。硫黄があるのとないのとは、鉄を鍛える量も時間も違ってくるぞ」

「耶久島も捨ててはおけん。彼の島は姫御子様のご縁所。南からくる魔物を跳ね除ける御神木もあるのだ」

「まともな番兵など置かんかったからのう。まさか島盗りされるなど……」

どの武将の顔にも動揺の色は隠せない。

以南七島は耶麻台共和国所領の島々である。それを奪われたということは、

宣戦布告

をされたと言っても過言ではないのだ。

北山は『侵略』をしてきたのだ。他国の島を占領するというのはそういうことだ。

「これはもはや海賊の蛮行などではない！」

下座の武将が声を荒げた。

「領海を侵すだけならばまだしも、島を奪うなど。北山めら、九州に攻め入る腹積もりに相違ない！」

「下にも！ 使者が遣わされぬことから、彼奴らの本意は明らか」

同意するように、また一人の武将が声を上げた。思うところは皆同じで、一様にそうだそうだと頷いた。

耶麻台共和国と北山との間で、明確な国境の線引きがなされたわけではないが、トカラ海峡を境とする目安は、ある種、暗黙の了解とされていたのだ。

九州方はそれを守り、口永良部島より南に船を向かわせることはしなかった。逆に、北山はたびたび深入りすることはあっても、事を構えようとしなかった。

だが、長きにわたる暗黙の不可侵がついには破られた。釈明の言葉さえひとつもこない。

釈明がないということは、

是非に及ばず

ということでもある。言葉はいらない。全ては行動が示している。故に言い逃れも釈明もしない。

挑発的な宣戦布告と、重然たちはこれをとらえた。

「北山は、九州に進攻してこよう。じきに船団が来るぞ。北山の艦隊だ」

「北山とのいくさか。……不思議なものだのう。いざ北山と刃を交えるとなると、何やら奇妙な感じがするわい」

齡五十をとくに過ぎた老将が感慨深く呟いた。老将は薩摩の豪族で、漁業で勢力を強めた武士だった。

老将の一言で、それまでいきり立っていた軍議の場が、しんと静まり返った。奇妙といわれれば、たしかに、そんな感じもするのだ。

今この場でこそ北山、北山と口喧しく喚いているが、考えてみれば、北山と一戦に及んでいるのは、つい半年ほど前からのこと。

最近になってからだ。

それまでの微妙な関係は、九洲の人々に明確な敵意を与えていなかった。付かず離れずといった不可解な予定調和の中で、双方の関係はきわめて独特な形態へと成り立っていた。

鬱陶しくはあったが、目くじらを立てるほどではない。かと思う裏で、交易は盛んに行われてきた。

他人のようで、知人のような関係。それが今や、国家を巻き込んだいくさに転ぼうとしている。

長く暗黙の了解の中で行き、長く海の向こうに暮らす北山を眺めてきた老将を含む薩摩土着の豪氏たちには、此度の一軒が不思議な気持ちにさせるのだろう。

その気持ちは、重然にもたしかにあった。『北山といくさ』と言われても、正直なところ、現実味がいまいち湧いてこないのだ。

だが、現実味がなくても、現実はそうではない。重然自身、一度だけ、北山と刃を交えたのだ。

北山はすぐそこにいるのだ。悠長なことを言っている余裕などない。

「世の中が大きく変わっていくことなんざ、この二十年で嫌ってほ
ど思い知った。耶麻台国が滅んで、共和国が出来て、九洲が三分さ
れて、はては九峪様方が異世界に飛んでった」

「ありましたな、そんなことが。．．．．．あれから、もう五年
も経つのか」

「五年も経てば、戦のひとつも起きるさ」

「そうですな．．．．．」

重然の重い表情に、老将は静かに頷いた。

奇妙だろうが何だろうが、戦わねばならないのだ。

居並ぶ八人の目がギラリと鈍い光をはなった。重然の言葉に共感し、
肌が粟立つ気がした。

そう、これからはまた戦なのだ。しばしの眠りについていた闘争の
意思が、目覚めようとしていた。

「．．．．．して、どうするのだ、旦那」

武将の一人が重然に向かって尋ねた。石川島衆は除いて、薩摩の武
將たちは重然を『旦那』と呼んで慕っていた。

重然は木板をみつめながら、ふむと膝に手をあてて考え込んだ。

「いまのままだと、こっちが後手にまわるぞ。やつらは小さいながらに、拠点を七つもっているんだからな」

「ああ、そうだな」

「やはり、島を取り戻さねばなるまい。でなければ打てる手も打てん」

壮齡の武将が言った。角ばった顔に、細い瞳が特徴的な男だ。

男は身を乗り出して、木板を指差した。

「硫黄島、種芽島にはそれぞれ砦がある。中でも硫黄島の砦は、もともと収監の地でもある。守りは堅いぞ」

まだ耶麻台国が健在であった頃、硫黄島には多くの罪人が収容する受刑地であった。盗みや不当な殺人などを犯した者たちが、この硫黄島にながされ、硫黄採掘の重労働に駆り出されていたのだ。

それゆえ、硫黄島には堅牢な牢獄が建設された。と同時に、硫黄島は琉球島などからの異変を監視する砦としての役割も期待されていた。

共和国建国後は、財政が安定されていないため長く打ち捨てられていた。

産業中心の政策に転換されてから、ようやく硫黄採掘を再開し始めた矢先に、北山に奪われる形となった島である。

種芽島も昔は人が住んでいたが、薩摩の財政が振るわず、十分な支援は出来ないと見切りをつけた紅玉の手によって、島民一党は全員、薩摩に移住してしまっていた。

したがって、現在の種芽島は無人の島となっていた。ただし、種芽島には硫黄島同様に、

種芽島城

がある。二重の大櫓が特徴の城である。

この島も現在は北山の拠点になっている。現在の薩摩は、硫黄島と種芽島に睨まれる格好となっていた。

「あとの島には、人がいても皆はない。いや、もはや、人もいるか・
・・・」

男は口をにがらせた。何を言おうとしたのか、重然にもわかった。

占領された島民が、はたして無事でいてくれるだろうか。こればかりは、今の重然たちに知る術はなかった。

「と、なればじゃ。攻めるのであれば、硫黄島か種芽島、ということになるのう」

「だが敵の戦力もわからん。船の数、兵の数、武将の顔ぶれ。どれをとっても霞を掴むように、ようとして知れぬぞ」

「まだ、攻めるのは早い」

主戦論はすくなく、代わって慎重論が場の見解として固まりつつある。

薩摩の武將たちは、荒々しく手の早い性格である反面、こと重要な局面では冷静な判断が出来る者たちばかりだった。

若年の武將は紅玉から学び、老いた武將もまた紅玉を見習った。それが薩摩の兵を九洲一のつわものに仕立て上げたのだ。

薩摩人のこういったしなやかな気質は、重然にとって好感を抱かせるに十分だった。

「まずは現状維持に努めよう」

「敵方の調査はどうする」

老將が尋ねた。

「“ホタル”に任せるのが一番だと思うが」

重然の答えに、老將は納得したように頷いた。

『ホタル』は耶麻台共和国の抱える乱波衆だ。清瑞を頭領とする十二人の特務部隊で、隠密性の高い特殊任務に就く事が多い精鋭である。

ホタルの認知度は決して高くないが、ある程度力を持つ豪族は、噂程度にその存在を聞き知っていた。少なくとも、重然の指揮下にいる薩摩の指揮官たちは、全員ホタルのことを知っている。

「当面は我慢比べだ。出来る限り、味方の損害は抑えるように努めてくれ」

「へい」

武将たちは頭を下げると、さつさと屋敷を後にしていった。みな海に向かったのだ。北山の動向が俄かに怪しくなった以上、鹿児島城に居続ける気になどなれない。

しばらく黙って木板を眺めていた重然も、腰を上げて部屋を出て行った。

『種芽島』という名前には、由来がある。

春がどこよりも早くおとずれることから、『種が早く芽吹く島』として種芽島と呼ばれるようになったのだ。

その名のとおり、五月の種芽島は草丈の短い青が大地を覆いつくしていた。

種芽島唯一の軍港に、八隻の櫓船が停泊されている。小さな帆を備えた細長の船体で、側面からは四十本近い櫓がムカデの足のように、海水に浸かっていた。

軍港から二里ほど内陸に進むと、そこには種芽島唯一の城郭都市である種芽島城がある。

倭国は山野が多く起伏に富んだ地形をしているため、都市を築くに

は二つの形態に分けられることが多い。

一つは、数少ない平地に築かれる形態で、国都などはこの場合である。

もう一つは、山や谷などを城内に取り込むか、そのものを城として組み込む山城型である。

香蘭の居城である鹿児島城は倭国の中でもきわめて特殊な例だが、とにかく、この二つが主だった城の形となるのだ。

そして島というものは、かならず中央に山があるものである。火山活動による隆起が原因なのだが、種芽島は珍しくも平坦な島である。

そのため、小さな島であるにも関わらず、鹿児島城は『小奇麗』な街として栄えていた。

だが今は、かつての素朴な美しさは消え去り、すっかり荒れ果ててしまっていた。

無人となった種芽島城が北山の手に落ちて、もう半年が過ぎた。現在の種芽島城には、六百余人の琉球人が生活をおくっていた。

破損していた民家は建て直され、留主の屋敷周辺に琉球人は住居をかまえていた。種芽島城が収容できる人口数はおおよそ二千人ほど。まだまだ放置された空き家が目立つ。

留主の屋敷。種芽島城のシンボルともいえる二段式の大櫓に、一人の男が立っている。坊主刈りの頭で、わずかに髭を蓄えた、どこことなく細長い顔持ちの男だった。

男の名は惠源^{えげん}といった。

惠源は櫓の欄干に手をかけながら、城下の町並みを眺めている。人の住まない家は直ぐにもろくなる。城内に唯一の祈禱場でさえ、階段が崩れ落ちていたほどだ。

くんと、鼻をヒクつかせる。潮の匂いによって、夕餉の気配も運ばれてきた。

「この島の匂いは、琉球に似ておるのう」

潮の匂いと夕餉の匂いが混じりあつた独特の匂いに、惠源は口元を綻ばせた。

琉球でもそうだった。海が近いから、いつもどこかで潮の匂いを感じることが出来た。その匂いと一緒になって夕餉の匂いがしてくると、もう飯時かと嬉しくなったものだ。

「……兄上は、どうしておるかのう」

鼻を誘う匂いが琉球を思わせるせいか、惠源の脳裏に、琉球にいる家族のことが思い浮かんだ。

惠源がこの地に来て、はや半年。わずかに寒い冬の海を、惠源たちは渡ってきたのだ。

辛い航海ではなかった。津波や時化は起きなかった。島もあつという間に占拠した。というよりも、どの島にも、人らしい人など殆どいなかった。十数人でいどの島民ばかりだったが、彼らは今も大人

しく暮らしている。

全ては万事順調だ。驚くほど守備がよすぎた。よすぎて、この半年が駆け足のようにさっさと過ぎ去っていった気がする。

だからこそ、やるせないのだ。

琉球にいる兄を思うと、やるせなくて仕方がなくなる。欄干を握る手に力が入ってしまう。

「……………恵源様。何をしておいでか」

「ん？……………おお、きようごうし教来石か」

教来石と呼ばれた男が、恵源のすぐ後ろまで近づいていた。

教来石は恵源よりもいささか年若い好青年であった。腰にさした刀のように、鋭い瞳をした武将だ。

「何か、おもしろいものでも見えましたかな」

「いいや、何も見えぬ」

若い武将の言葉に、恵源はにべもなく応えた。実際、面白いと思えるものは何もない。この種芽島には、本当に何もないのである。

上陸する前は、人が住んでいるとばかり思っていた。だが敵兵は出撃してこず、街に人の姿はなかった。兵糧という兵糧、物資という物資がなかったのだ。

ほんとうに、何もない島である。つまらない島である。

目をすばめる恵源の横にならんだ教来石が、晴れ渡る種芽島の空をながめた。

「それがしは、むかし、この種芽島に参ったことがありました」

「なに？」

「十二のころでした。見聞を広めよと父に連れられ、九州へと渡ったおりに」

「・・・・・・左様であつたか」

「この空とおなじく、透き通るが如く、晴れ渡っております。・・・・・・よう覚えております」

晴天を見上げる瞳を閉じると、もう二十年も前の記憶がよみがえってきた。

当時の教来石はまだ元服もしていない少年だった。利発な顔立ちは、期待と興奮に頬を赤くさせ、まだ見ぬ海外の他国に心をはやらせていた。

父は北山に組する武将で、九州との交易で財を成した富豪であった。また高い経営力、財力、巧みな金回しの腕を買われ、『グスク（城）』を与えられるほどの実力者でもあった。

生まれて初めて踏む他国の土。それこそが、種芽島であった。平坦な土地にひっそり佇む種芽島城は、それでいて清廉な涼しさの中に

ほのかな美しさを感じさせる街だった。

これが、他国の城。幼く豊かな少年の感性を、種芽島はおおいに刺激したものだ。

「……されど。空は変わらずとも。この島は、ひどく、変わってしまった」

視線を城下へ向ける。教来石の両の眼に、思い出の街が廃墟となつて映っている。

「それがしの見た種芽島は、もそつと美しいものでした。黄金のような眩い輝きはなくとも、岩清水の流れに似た美しさがありました」

「この街は、美しかったのか」

「はつ。……美しゅう、ございました」

「そうか……。なれば、わしもその美しい街を、見たかった」

もはや恵源には、そう応えることしかできない。美しい街の姿を、ただ想像の世界で描く以外にはできない。

今の城下は、お世辞といえども、決して美しいとはよべない。それほどに美しいのならば、一目みたいと、恵源は心の底から思った。

だからこそ、腑にも落ちない。美しい種芽島の街を、九州方は、何ゆえ放棄したのか。

九洲が他国により占領され、耶麻台国が滅んだことは知っている。そして、その耶麻台国が復興したことも知っているのだ。

これから、国を富めさせようとするのは国家の運命。領地を捨てる理由が、恵源にはどうしても掴み損ねていた。

慎重に、相手の情勢を見極めねばなるまい。でなければ出向いた意味がない。

「まあ、さほどの美しきを見られなんだは惜しいが、知らぬ方が反って、よいかも知れぬ」

「そうかもしれません。なまじ見てしまったからこそ、こつも惜しく思うのかも知れませぬ」

「いつかは捨てる島ぞ。執着は心を痛ませる」

「心得ております」

神妙に頷く教来石をみつめる恵源の表情が柔らかなものになる。

「さて、直に飯だな。下へ降りよう」

「はっ」

恵源の後を付いて、教来石も大櫓を降りていった。夕日もそろそろ山陰に隠れる時間になっていた。

飯炊きの湯気が、人のいなくなった街に、さびしく立ち上っていた。

「・・・・・・・・北山？」

阿蘇山にて隠居している九峪が薩摩の一件を聞き及んだのは、重然たちが敵の拠点をつきとめた、まさにその日の夕刻であつた。

冬に九峪の元を訪れた亜衣は、それ以降まるで憑き物が落ちたように活気を取り戻し、以前にまして九峪の様子を伺うようになっていた。

世上での出来事、国政での相談など。こと理由があれば、亜衣は足しげく阿蘇にのぼっていた。

今も、九峪とともに夕食をとっているところだ。

「北山つてのは、たしか沖縄・・・・・・・・じゃなくて、琉球だったか」

茶碗と箸をおいて、亜衣は「はい」と頷いた。

九峪は琉球の事情にはことさら疎い。北山というのも、話に聞いた程度のことしか知らなかった。

「そんな連中が、薩摩に手をだしてるのか？」

「薩摩にというよりも、錦紅港に近づく舟に、でございます」

「ふーん・・・・・・・・それっていつからなんだ？」

何気ない問いかけ。いたって自然な疑問だが、尋ねられた亜衣は、わずかに表情を強張らせた。

はてと、九峪も首をかしげる。なにか不味いことでも聞いただろうか、やや及び腰になってしまう。

言いにくそうにしていた亜衣だが、覚悟を決めたのか、九峪をまっすぐに見据えて口を開いた。

「一月からです」

「一月！？ え、一月！？」

「・・・・・・・・はい」

亜衣は申し訳なさそうに顔を伏せた。対する九峪などは、驚愕に顎が抜けそうなほど口を大きく開けている。

だが、驚くのも無理からぬこと。事は一月に起こったが、今はもう五月。せいぜい一月ほど前だと思っていた九峪にしてみれば、随分と時間が開きすぎているように感じるのだ。

困惑気味に、九峪も茶碗をおろした。瞳が泳いでいる。

「け、けっこう前からなんだな」

「・・・・・・・・申し訳ありません！」

バツと亜衣は平伏した。九峪に叱られたような気がしてならなかった。

「九峪様に、いらぬ心遣いをさせまいと思い、黙っております。・
・・・・・申し訳ございませんッ！」

「ああ、いや、いいんだ。気にするなよ」

そう言つて、九峪は息をはいた。五月だが、阿蘇の山はまだ寒い。
はいた息が、まだわずかに白んでいる。

塩汁で喉を暖めながら、九峪は名前しか知らない北山のことを思つた。『沖縄』のことならいくらかわかるが、『琉球』の・・・・・それも北山とさらに限定されては、何もわからないのが現状である。九峪の歴史にかんする知識は、広く浅いものである。メジャーな時代、人物、出来事は網羅しているものの、琉球などのマイナーとなると、記憶の端にも引つかからなかった。

だから、この時代の沖縄がどのような状況なのか、とんとわからないのだ。

「北山、か・・・・・」

改めて言葉にしてみるが、いささかの実感も湧かない。形を知らないければ、どうしても像は写ってくれない。

「なにか、対処はしてるのか？」

尋ねられて、亜衣が頭を上げる。

「薩摩が、独自に対処することとなりました。女王の綸旨も賜り、

現在は重然が、薩摩の海を守っております」

「重然が？」

予想していなかった名前が出て、九峪は面食らった。

たしかに重然は海人で、海を生業の場としている。だが重然は火向県の人間である。薩摩の守護とは関係ないはずだ。

しかも、さらに話を聞くと重然は、香蘭から鳳凰符まで授けられたというではないか。

もう何が何やらである。山奥で隠居している間に、九州の歴史は大きく動き出しているらしい。

「情勢は、どうなんだ？」

「さすがは重然、といったところかと。勝てなければ、負けもせずといった具合と、聞き及んでいます」

「そうか……………」

それっきり、九峪はうつむいて黙り込んだ。まだ茶碗にご飯は半分以上残っているが、とても食べる気がしなかった。

それよりも、九峪の頭は忙しく動いている。手に入れた情報を整理しているのだ。

それを、亜衣は黙って見守っていた。

時間にして四、五分が経った。九峪は顔を上げると、あまり美味し
くなさそうに、残っていた塩汁を一気に飲み干した。

「なんにしても、今の俺には、どうすることも出来ないな」

苦笑して、米も口の中にかきこんだ。亜衣も、喉を汁で濡らした。

てばやく食事を終えて、膳が下げられると、それから二人はしばし
の酒肴を楽しんだ。つまみなどはない。話が酒の肴である。

亜衣から酌を受けて、九峪はふと、口元を綻ばせた。

「ようやく、自分自身に納得できたか？」

優しい音響きの一言だった。亜衣もやわらかく微笑んで、ちいさく
頷いた。

頬が赤いのは、酒のせいだけではない。

まだ少し寒い夜を、二人は互いの酒で、暖めあった。

第9回 「見えない思惑」

海賊討伐のおふれが下されてから、早四ヶ月が過ぎた。

わずかに肌寒さを感じる春はとうに過ぎ去り、夏の蒸した匂いのする七月になっている。

この時期、薩摩と北山の争いはこう着状態にあった。戦闘はもっぱら遭遇戦に留まり、互いに狙って攻めようとする動きはなかった。

少しだが錦紅港に入港する商船の数も戻り、閑散としていた湊も幾ばくかの賑わいを取り戻している。

薩摩の民衆間では、海賊の正体は伏せられたままである。無用の混乱は避けたいという紅玉の意思であったが、すでに海賊は北山の軍隊であるとの噂が実しやかに囁かれるようになっていた。

亜衣が薩摩の錦紅港を訪れたのは、そのような折のときだった。

「これが錦紅港か」

亜衣の言葉には驚きの色があった。

軒を連ねる屋台店のあまりに侘しい品揃え、かつての隆盛は見る影もなく消え去っているのだ。

付き人として同行してきた衣緒も、言葉がないようだ。しきりに辺りを見回しながら、愕然としている。

錦紅港といえば、筑前県的那の津、火前県の坊の津にならぶ九州の三大湊町の一角である。当然その他に数えられる湊とは規模も収益も繁盛も違いすぎる。

それがどうだ。いま目の前に映る薩摩県が誇る巨大な湊は、地方の小さな漁港といかほどの違いもない。

北山との抗争は、亜衣の予想を大きく上回って深刻なものとなっていた。

二人は市場の隅々まで足を運んだ。品揃えはなんと貧乏なものだ。いつか阿智が着ていた琉球独特の織物は豪族層に人気があつたが、それもまったく見かけない。

「これでは利益にならないぞ」

亜衣の表情は苦い。亜衣もまた茶で利益を得る茶葉商人である。交易における既得損益は心得ている。

交易自体は豪族や商人の独断で行われるが、その際、売上げの何割かを国庫に納めることになっているのだ。

関税はもちろんとして、荷揚げや運送の舟銅前を上方に支払わねばならない。

この銅前こそが筑前、火前、そして薩摩の財政を大いに支える力の源なのだ。とくに薩摩などは、この銅前によって持ちこたえている

といつても過言ではないのだ。

もしも今の状況が続けば、遠からず薩摩の財政は破綻するであろう。豪族の多くも薩摩に見切りをつけて、他県に移住するかもしれない。そうなつては、もう、薩摩に再起の可能性は万に一つもありえなくなる。

認識が甘かった！

亜衣はそう思わざるを得なかった。それほどの衝撃だった。

「こんなことで、薩摩は大丈夫なのでしょううか？」

衣緒の言葉も心配そうだ。亜衣は直ぐに答える事が出来なかった。

「・・・・・・今は、どうにもできまい。重然にまかせるしかない」

重然の活躍は亜衣の耳にも届いていた。錦紅港の賑わいも以前に比べれば戻っているとも、鹿児島城の香蘭から聞かされていた。

だから亜衣はあまり事態を深刻に考えていなかったのだ。重然ならば大丈夫だろうというある種の慢心があったのだ。

だが

「早いうちに、手は打つべきだろうな」

薩摩が潰れないうちに　と、心の中で語尾を付け足す。

海賊の正体は北山である。それは間違いない。先立つて重然が遣わした“ホタル”からの報告がそれを裏付けている。

ただ、いまだ北山の意図は見えてこない。現場では侵略だとする意見が多いが、国政にかかりきりの亜衣は、しょせん海賊という程度の認識しかもっていなかった。

「いちど、重然さんにお話を聞いたほうがよろしいのでは？」

衣緒の言葉に、亜衣はうなずいた。

「湊口にいくぞ。詳しいことは、そこでわかるう」

「はい」

前線の指揮所である陣幕は、船の発着場に設けられている。

薩摩荘を尋ねたとき、重然は陣幕にいと紅玉から教えられていた。くわしい話が聞きたければ、重然に聞けということなのだろう。

市場を後にした亜衣と衣緒は、細い道を通って湊口へとむかった。

亜衣と衣緒が陣幕を尋ねたのは、ちょうど昼時のことだった。陣幕では重然を含めた五人の武将が、雑炊を食べながら雑談をしているところだった。

雑談といっても、話の内容はやはり北山のこと。床机を囲む五人に笑顔はなかった。

突然の来訪に重然は驚いたが、取り乱すことなく亜衣を上座へと招いた。重然は薩摩の最高司令官となったが、亜衣の身分はその遥か雲上にあるのだ。

「すまない、私にも雑炊をくれないか？」

すっかり昼飯時であった。朝から何も口にしていない亜衣も空腹を覚えていた。

年若い武将が緊張しながら雑炊を器によそって亜衣に差し出した。受け取る時、亜衣が微笑んで「ありがとう」と応えた瞬間、青年は顔を真っ赤にさせてしまい、衣緒からも同じようにされて、今度は石のように固まってしまった。

だらしなくニヤケる青年を見かねた武将の一人が、ぼそつと声を掛けた。青年は慌てたように手を引っ込めて、そのまま俯いてしまった。

武将たちが、はあゝ・・・・・・・・と、額を押さえた。

「宰相さま、すいやせん。せがれがご無礼をしました」

「いや、気にしないでいい」

亜衣は笑って手を振った。その一言に武将も青年もいちようにぼつと安堵の息をはいた。

雑炊をすすりながら、亜衣は床机に目を落とした。床机の上には土で模った地図がおかれている。

薩摩半島、大隈半島、黒島、硫黄島、種芽島が、実際の位置と遜色なく配されている。

亜衣の視線を追った重然は、現状を簡単に説明した。大筋は亜衣もあらかじめ聞き及んでいたが、実際に現場の声を聞くと、知りえないこともまた多かった。

とくに、重然たちの認識には、正直に驚きの念を禁じえなかったほどだ。

「宣戦布告？」

「あつしらは、そう思っとなります」

「ふむ……」

お椀をおいて、亜衣は考えをめぐらした。

どうやら並ならぬ様相を呈しつつあると思っていたが、まさか戦争に発展しかけていたとは露ほども考えていなかった。

亜衣は今回の一件に関して、詳しいことは殆ど知らない。相手が北山だということは知っていたが、言い換えればそれぐらいしか知らなかった。

だが思えば、予兆できる材料はいくらでもあったはずなのだ。

香蘭・紅玉親子が重然を頼らねばならなかったこと。

重然がわざわざ火魅子の綸旨を賜らねばならなかったこと。

かつては九峪の、今は伊雅の直轄部隊である“ホタル”を要請したこと。

思い返せば、おかしいことだらけではないか。どれもただの海賊退治のためにしては、いささか特異すぎる対応だ。

しかし、だからこそ亜衣にはわからなかった。

これだけの出来事があったにも関わらず、亜衣の下に詳しい情報はまったく入ってこなかったのだ。島を七つ占領されたという話でさえ、たったいま重然から聞かされて知ったくらいだ。

いくら忙しい日々が続いたとは言え、これはあまりにおかしい。宰相である亜衣に届けられて然るべき情報が、何も入ってきていなかったということになるのだ。

まさか、意図的に情報を封鎖された？

そんな疑念が、胸中にわきあがった。そう思えば合点がいく。

「衣緒。お前はこのことを知っていたか？」

となりで事の成り行きを見守っていた衣緒は、首を横に振った。どうやら衣緒も詳細は知らなかったらしい。

亜衣も衣緒も驚くことばかりだったが、重然たちもまた驚いていた。

「亜衣様、ご存知なかったんで？」

てつきり上方にも話は伝わっているとばかり思っていた。こと北山との戦争となると、重然の一存で行動することが出来ないのだ。

したがって、重然にはある程度の独自行動権はあるものの、火魅子や亜衣の指示を仰がねばならないのだ。

その亜衣が知らないなどと、重然には信じられないことだった。

「私のもとには、七島のこととも伝わっていない」

「・・・・・・・・」

重然はなににも答えなかった。ただ手に持った碗をみつめていた。

「・・・・・・・・役人だ」

先ほどの青年が、力なく呟いた。亜衣や重然、武将たちも青年のほうを向いた。

青年は憎憎しげな表情をしていた。

「役人が、宰相さまに伝えなかったんだ。そうに決まっとる」

「役人が？」

青年はコクツと頷いた。

「あいつら、国力回復だか何だか言って、兵士を少なくしとる。戦争なんかもう起きないなんて思っとるんだ」

「それと亜衣様に伝えないのと、なんの関係がある？」

「北山のことを、ただの海賊としか思っとらんだ。だから宰相さまに伝えとらんだ。そんな必要がないと思っとるんだ」

「なるほど、な。それはあり得るかもしれんの」

恰幅のよい武将が言った。

「若僧の言うとおりだろう。戦争だと騒ぎになって兵士を集められるのを嫌がったのかもしれぬし」

武将たちの言葉には、亜衣も納得できる部分はあった。

兵役緩和は役人の大多数が賛成していたが、戦場を知る少数派は反対していた。

亜衣は基本的に中立を演じていた。兵役の緩和はたしかに問題もあるが、九洲の財政が切迫していたのもまた事実だったのだ。

もともと、共和国の前身である復興軍時代から金欠状態だったのだ。財政不振は戦時中も続き、終戦から五年が経った今でもやはり続いていた。

そのためどちらとも言えず、結果として兵役を免除される者が続出代わって産業が盛んになってきたのだ。

しかし役人連中は、亜衣が心中で反対していることを知っていた。だから亜衣に情報を伝えなかったのだ。

それが悪意ゆえの行動なのか、それとも純粹に、国政に専念してほしい一心から来る親切心に拠るものなのか、亜衣にはわからない。

わからないが

、知ってしまった以上、宰相としてこの一件を深く考えねばならなくなつた。

「役人のことは、今は隅にでも置いておこう。問題は、北山に九洲を征服する意思があるのか、ということに尽きると思うが」

役人のことはひとまずとして、目先の問題は北山のことだ。

もしも北山に九洲と事を構える意思があるのなら、亜衣は宰相として、それなりの姿勢を示さねばなくなる。

だが亜衣としては、北山との戦争など願ひ下げである。

現状の九洲は非常に不安定だ。財政の建て直しも中途半端、兵役を緩和したため軍備も中途半端。

九峪を支持していた武将たちも軍部から追放され、実戦経験が豊富な武将も少ない。

いくさが始まれば、はたして勝てるだろうか。そんな気持ちが芽生えるほど、今の共和国は不安定な国家なのだ。

できることならば、ただの海賊であつてほしかった。国家同士の争

いほど、面倒なことはない。

「北山とのいくさは、出来る限り避けるのがいいだろう」

「ですが、敵はもう手を出してきとります。あつしらにその気がなくとも、向こうは攻めてきますぜ」

「宰相様、旦那の言うとおりです。北山はきますぞ」

「いや、そうと断定するのはまだ早い」

亜衣は床机に置かれた模型の地図を指差した。

「仮に、だ。北山が我が共和国を害する腹積もりならば、なぜ、今をもって攻めない」

「と、いいいますと？」

恰幅のよい武将が尋ねた。

「北山が薩摩と大隈の海峡に現れたのは、一月からなのだろう？
ということは、それ以前にはすでに、以南の七島は尽く奪われていた、ということになるはずだ」

「左様ですが」

「そして、今は何月だ？ 春をとくに越して、もう真夏の七月だ。
この七ヶ月もの間、なぜ敵は積極的に打って出てこない」

武将たちは「ああ」と声を上げた。言われてみれば、たしかに、七

ヶ月も目立つた動きをしないのはおかしい話だと思った。

北山との戦闘はいたるところで起こっていたが、そのどれもが散発的で、とても何かしら明確な目的の元の行動とは思えなかった。

狙っているものが商船に限られているというのも、またおかしい話だ。そのせいで薩摩は最初、北山を海賊だと思っていたのだ。

「攻め滅ぼす上でもっとも肝要なるは、何よりも『速さ』だ。孫子曰く、『兵神速を持って是を貴ぶ』ともある。征服する意思があるのにも関わらず、七ヶ月もの時をただ浪費するなど、下の下と言わざるを得まい」

「では宰相様は、敵には何か企みごとがあると、そう仰せになられますか」

「それはわからん。その真実を知るためにも、情報がほしい」

亜衣は重然へと視線を転じる。

「重然。ホタルが敵の目的を暴くまで、無闇な行動は慎め」

「はっ。心得ておりやす」

いわれずとも、重然に動くつもりはない。先立ってその方針を諸将にも下したところである。

亜衣は頷くと、また考えをめぐらした。北山の動向には不審な点があることはわかったが、その真意はどこにあるのか。

なぜ島を奪ったのか。侵略する意思はあるのか、ないのか。この七ヶ月の間、敵は何を考えているのか。

敵がまったく見えてこない。そういう状態が、亜衣は余り好きではなかった。

思い返せば、天目と対峙したとき、彩花紫と対峙したときも、まるで先は読めなかった。

よもや、狗根国とのいくさが終わってなお、このような不安を抱くことになるうとは思わなかった。

北山は容易ならざる相手であろう。北山が動き出す前に何としても、その目的を暴かねばならない。

それまでただ待つしかない。余裕のない薩摩には酷な話だが、ここは我慢してもらわねば。

「事によれば、この一件は薩摩だけの問題では済まされなくなる。女王の言も賜らねばなるまい」

「おお、それはありがたい」

武將たちが喜色よく声を上げた。女王の一声がかかるということは、共和国全体の協力を取り次いだことと動議である。嬉しくないはずがない。

普通は他者の手を煩わせたくないものだが、薩摩はいつ財政破綻をきたしてもおかしくない状態が続いている。北山がどう動くかわからない以上、面子に拘っている暇はないのだ。

そういう実情の上では、亜衣の言葉に期待してしまうのも無理からぬことではある。

火魅子に談判する意向を約束した亜衣は、衣緒とともに陣屋を後にして、さっそく耶牟原城に引き上げることにした。思いがけない薩摩の現状を知ってしまった今、もたもたと時間を潰すわけにはいかない。

馬を走らせて錦紅港を出ると、どこにも寄らずに耶牟原城を目指した。馬の尻を鞭で叩いた甲斐もあり、その日の夕暮れすぎには自分の屋敷に帰ることが出来た。

衣緒も亜衣と同じ屋敷住んでいる。羽江は亜衣や衣緒とは別に屋敷を構え、今は別居中である。

二十二歳になった羽江は、九峪の指示で設立された兵器や道具の研究機関に所属し、その近くに住まうようになっていた。最近は恋人も出来たとかの話も聞き、衣緒は何やら焦りを感じ始めていたりする。

湯を浴びて床に就いた亜衣だが、どうにも眠れる気がしない。頭はずっと働いており、休むことを拒否していた。

頭に浮かぶことは、北山のこと。考えてどうにかなるモノではないのだが、やはり考えてしまうのは、常に機略よって生きる者の宿命かもしれない。

とにかく、明日だ。明日になって女王や大將軍、幕僚たちと話し合いをするべきだ。

何度も念じるように心の中で繰り返すういい続けると、次第に睡魔が身体を支配していった。

最後にため息を一つついて、今度こそ亜衣は考えることをやめた。寝息は直ぐに聞こえてきた。

日も暮れた薩摩荘の屋敷で一堂に会した十三将は、ホタルの持ち帰った情報を前に困惑するしかなかった。

重然を上座にして、左右にそれぞれ六人ずつが座っている。そこには愛宕など、副官級の武将数人、火向県から馳せ参じた織部も列席していた。

下座には偵察から帰還してきたホタルの乱波が、方膝について彫刻のように佇んでいる。

皆が皆、一言も言葉を発することが出来ずにいる。重然も押し黙り、織部などは腕を組んだ姿勢で、眉間に皺を寄せている。

燭台の明かりだけが部屋を照らしている。薄暗い部屋同様に、場の雰囲気もどこか陰りがある。

「わかった。下がって休んでくれ。…………ご苦労だった」

「はっ」

乱波は深く頭を下げ、さつと身軽に部屋を後にした。

そんなやり取りの後があつて、ようやく場の沈黙は破られた。

「異なことになった」

ほとほと困り果てた事態に、武将の一人が嘆くような一言を漏らした。

亜衣は約定どおりに火魅子の下知を得て薩摩にその旨の書状を送っていた。

緊急時における徴兵、米や武具など物資の供給などの許可を得たことが主な内容として記されている。

この決定は亜衣が宰相としての地位を利用して強行したものだが、それが女王の下知によるものでもあるため、役人たちは渋々これに従う形となった。

そしてその直後に、北山に潜り込ませていた乱波が無事に帰還してきたのだ。待ちに待った詳しい情報である。小躍りしかねないほど沸きあがった。

だが詳細がわかればわかるほど、重然たちの首は横に傾いていつてしまった。

乱波の報告を要約すると、

北山に九洲を侵略する意思はない。北山は耶麻台共和国と『同盟』を結びたいと考えている。

というものであった。

集合した武将全員が首をかしげた。そして混乱した。北山の行動には矛盾があった。ゆえに迷ったのだ。

「結局のところ彼奴らは何がしたいのだ？」

といった言葉が、そこかしこで沸き起こった。

侵略する構えを見せたかと思うと、その気はないという。ではなぜ七島を占拠したのかわからない。

是非を問いあう武将たちには触れず、重然はずっと押し黙っている。視線はずっと床に定められている。

北山のやっていることは何もかもがおかしい。『同盟』を結ぶものとしても、相手の領土である島を奪い取り、商船を襲い、軍艦を沈めている。

そんなことをして同盟などと言った所で、どれほどの説得力もないのだが

そう思えばこそ、わかってくる気がするのだ。うすうすと、重然の頭の中で形のなかった敵の意図らしきものが見えてきた。

説得力のない行いが、逆に、明確な確証になっているとすれば、話は違ってくる。

ふと、武将たちの話し声がピタリと止んだ。重然が突然立ち上がった。

たからだ。

十二人の視線に貫かれるのも気にせず、重然は縁側に出た。月は出ていない。松明の明かりが重然を暗闇に赤く映し出している。

星がまばゆい夜空を見上げる。

「旦那？」

後ろから声をかけられても、重然は振り向かない。

「……七ヶ月の間、連中がなにを見ていたのか、わかった気がする」

重然の呟くような一言に、武将たちは顔を見合わせた。

次の言葉を待つ武将たちを振り向いて、妙に確信じみた言葉を口にする。

「『同盟』する意思があるのは、間違いないと思う」

「根拠は？」

元の場所に座った重然に、武将の一人が尋ねた。

重然は武将の瞳を見つめながら、

「理由は敵が攻めてこないことだ。亜衣様も言っていたが、七ヶ月ものあいだ本土に攻め寄せなかった。もしも同盟を望んでのことならば、七ヶ月の間商船や軍船ばかりを狙った説明が付く」

「だが、同盟というのであれば、何ゆえ島を占拠した？ それに同盟ともなれば、使者の一人でも立てて談判するものではないのか？」

「それは……………」

そこが重然の悩みどころであった。

この一点が、まったくもって不可解に尽きるのである。『同盟』とは講和によつて成り立つものだ。したがって北山の進攻は講和とは真逆の行いなのだ。

同盟を結ばんとする相手に対して刃を向ける。これでは成功する和睦も失敗に終わるは必定となる。

重然は敵に和睦の意思がると考えている。それは間違いないとも思っている。だからこそ、自分たちがどう動くべきかも、わからなくなってしまうのだ。

議論は進まず、結論が出されることはなかった。とりあえず現状は様子見を続け、一度、紅玉や亜衣に相談することとして、その日の軍議は幕を下ろした。

翌日になつても事態が急変することはなかった。相変わらず小規模な小競り合いで始終し、北山から目立ったアプローチがかけられることはなかった。

ただ『和睦』の二文字が、不安定に目の前に突きつけられているだ

け。薩摩の十三将は、この戦いに終わりがいいのか、そんな愚かしい不安さえ抱くようになっていった。

それでも重然は、根気よく耐え忍び続ける選択をした。そろそろ諸将の中から痺れを切らす者があらわれるかもしれない。だが『和睦』の意思を確信している重然だけは、ただ待ち続けた。

その間にも、薩摩沿岸の防備は着々と整えられていく。浜には無数の杭や柵、物見櫓を立付けた。要所に小さな砦も築いた。

和睦を信じてはいても、決して油断などしない。いくさにおいて油断こそが大敵であると重然は十二分に心得ていた。

七月も半ばのころ。北山の動きがわずかに変化した。いや、厳密に言えば違っただろうか。

北山との遭遇戦が発生しなくなったのだ。それはつまり、北山が商船を襲撃しなくなったということであり、極端に言えば、出航すらしていないということである。

重然がこの微妙な変化に気づいたとき、薩摩の海は平穏そのものとなっていた。

重然は啞然とした。気がついたら、薩摩の海に北山は現れなくなっていたのだ。重然だけではなく、十二人の武将たちも首をかしげた。

こうなると、逆に不安に駆られるものだ。緊急の軍議の席で、十三将は事態の把握を急いだ。

「敵方に、何かしらの動きがあるのだろっ」

虎のような髭を生やした武将が、厳しい声音で言った。

この武将も、ここ最近の変化には疑問を抱いていたのだ。海に出て
も、北山の旗は一つとして見られなくなったのだ。

根城としている島の近くまで行けばその限りではないが、それだけ
敵は遠出をしていないという事でもあるのだ。

「北山は、何かの準備を始めたのではないのか？」

「それは考えられるのう。もしかしたら、一気に攻め寄せてくるか
もしれぬぞ」

ざわつと、武将たちが色めきたった。

なつほど、たしかに北山の制動は、まるで決戦を前にした静けさにも似ている。体力と鋭気を蓄え、来る『時』を待っているようにさえ思えてくる。

いよいよか。幾人かの武将たちの胸中に、同じ思いが駆け巡る。

「いや、まだ。まだ北山の攻撃が始まるという確証はどこにもないぞ」

一方で慎重な意見を持つ武将もいた。こちらの言い分も尤もなこと
で、北山が攻撃の準備をしているという証拠は何一つとしてない。

ないのだが、それでも武将たちは、何かピリピリとした『予感』が

差し迫ってくるのを、肌と心で感じ取っていた。潮風に乗って、殺気のような不快な緊張が漂ってくるのだ。

「旦那。旦那はどう思っている？」

推測が飛び交う中、武将の一人が重然に意見を求めてきた。それと同時に、幾対もの視線が、腕組をして黙っている重然に向けられた。じつと床机に落としている視線は、薩摩の海を模した海図に注がれている。

北山が何を考えているのか。それを見極めんとするのだが、やはり重然の知りえるところではなかった。

重然の頭の中にはどうしても『同盟』が引っかかるのだ。この一言が重要な意味合いを持つことは間違いないのだが、逆に、他にある可能性の発見を邪魔する要因にもなっていた。

必死に情報を整理するのだが、何しろ手元にある情報量は少なく、また不可解なものばかり。

手のつけようがなかった。

「………何かの準備をしている、というのは、ありえる話だと思うが」

言葉を選ぶように口を動かす。自身の意見を言葉にしているというよりも、情報を整理しながら独り言を呟いているようである。

元来、重然はそこまで思慮深い男ではない。まったくの脳足りんで

はないのだが、腹の探りあいや謀略戦では絶対に後れを取る男である。

もしもここに亜衣がいれば、これほど悩むことはなかったかもしれない。九峪がいたら、もしかしたら即解決にいたったかもしれない。だが重然は、与えられた情報を、一つ一つ繋ぎ合わせるしか方法を知らなかった。亜衣のように複数の事柄を結びつけることも出来なければ、九峪のように多角的な視点で情報を結びつけることもできない。

ぶつぶつと、自身の納得を生み出せるように、情報を整理していった。

そして十分ほどが経った。武将たちも皆、固唾を飲んで重然の言葉を待っている。彼らにしても、考えられることは大体話し合った。

ふいに、重然の肩が揺れた。顔を上げた重然の表情は、僅かな緊張を貼り付けていた。

「……………直ぐに船を出せっ!!」

驚くほど大きな声だった。部屋の外で見張りをしていた兵士たちまでがぎよっとするほどの音量だった。

武将たちはすぐさま反応することが出来なかった。重然はもう一度、

「直ぐに船を出すんだッ!」

と、やや小さくなった声で言った。そこで武将たちも、ようやく腰

を上げた。

「い、いったいどうしたんだ、旦那？」

困惑しながら武将が尋ねた。重然は落ち着きを取り戻した表情で、
バンッ！ と乱暴に床机を叩いた。

「大隈海峡から西側にかけて、艦船を集結させろ！ 全ての船を出すんだッ！」

「す、全てをか？」

「全部だ、一隻残らず、全部だッ！」

「わ、わかった」

あまりの剣幕に上擦った声で答えると、武将たちは慌てて軍議の間を飛び出していった。

重然は理由を明らかにしていないが、それでも武将たちが従ったのは、抜き差しならない事態を感じたためであった。

何かが起きるッ！ 武将たちも今度は重然の言葉より明確に、迫り来る気配を感じ取っていた。

慎重な姿勢を保ってきた壮齡の武将や、年長である老将なども、何も聞かずに出て行った。軍議の間には重然ひとりが残された。

入り口の向こうから、見張りの兵士が部屋の中の様子を覗き見ている。だがそれを注意するつもりなど、今の重然には欠片ほどもな

った。

少しして、荒々しい足音が近づいてきた。見張りが慌てて姿勢を正した。

「お頭ッ！」

「重然、何があつた!？」

織部と愛宕が慌てたように軍議の間に入ってきたのだ。重然の大声が聞こえて、何事かと心配したのだ。

二人に目を向けると、また視線を海図に落とす。いつになく険しい雰囲気に、織部も愛宕も一瞬怯んだ。

「おい、重然、どうした」

傍に近寄るが、重然の表情は変化しない。まるで織部の言葉が耳に入っていないかのようにであった。

「オイッ!!!」

無視されて腹が立ったのか、今度は耳元で怒鳴ってやる。するとさすがの重然も「うおっ」と呻いて耳を押さえた。

「お、お譲、聞こえてまさ」

「だったら返事しやがれ、このタコッ！」

「姉御ッ。お、落ち着いて」

罵倒する織部を、愛宕が背後から宥める。

なおも織部は罵倒したが、気がすんだのかはあっと息をはいて、重然を睨みつけた。

「で？　いったい何をあんな大声出したんだ？」

「そ、そうでっすよ。どうしたんでっすか？」

はっと、重然の顔が再び引き締まった。すぐまた視線を海図に落とすと、二人に手短に事態を説明した。

話を聞くうちに、二人の表情も険しくなっていた。

「重然、それは本当か？」と織部が尋ねた。重然は「いや」と前置きして、

「あくまであつしの推測なんですが」

と答えた。

「ですが、万が一もありやす。備えるにこしたことはねえでしょう」

「そりゃそうだ」

答えて、織部は笑みを浮かべた。口元を吊り上らせた、攻撃的な笑みだった。

「あたしとしちゃ、万が一を願うね。いい加減うんざりしていたと

ころさ」

「姉御、嬉しそうでっすね」

「へ、まあな。ここいらで『いいトコロ』も見せつけねえとな」

そう言つて愛宕を見る織部の瞳は、いやに挑発的な光を放っていた。

愛宕が顔を赤くして、怒つたように目を吊り上げた。握りこぶしがワナワナと震えている。

「ま、負けないでっすよ！」

噛み付かんばかりの勢いで織部に食つて掛かる。それを簡単にあしらつた織部は、

「準備する」

とだけ言い残して、さつさと軍議の間を出て行つた。愛宕も追いかけるように出て行き、また重然だけが、軍議の間に取り残された。

「・・・・・・・・なんだかなあ」

ぼそりと呟く。嬉しさ半分、迷惑半分といった様子である。男として嬉しい展開ではあるが、困ることに変わりはない。なんとなく、九峪の苦勞も判つた気がした。

だが直ぐに、雑念を思考の外に追い出してしまふ。今は男冥利に尽きているわけにはいかない。

不思議な感覚だった。『ひらめく』とは、このようなことを言うのかもしいれないと思ったほどに、重然の頭の中で北山の動き一つ一つが組み合わさっていったのだ。

なぜ北山がここしばらく動きを見せていないのか。侵略するとしても、なぜ七ヶ月も目立った進攻をしてこないのか。

すべては、同盟の二文字に集約される。同盟のための布石とするならば、或いは………。

杞憂であればいいが。重然は海のある方角の空を睨みつけた。もう空は茜色に輝いていた。

綺麗だ。そう思う傍らで、こつも思った。

まるで炎が空を焼いているようだ。多くの血を、空に塗りたいくつたようだ、と。

それは戦士としての直感であつた。ただただ、赤く広がる夕暮れの空を、時の許すかぎり眺め続けた。

第10回 「赤い竜」

重然の発した出動号令は、さながら稲妻が駆け抜けるように、全軍の隅々にまで行き届いた。

切迫。そんな差し迫りつつある何かを感じさせるように、将兵は喧騒を掻き立てながらも海に出て行った。

動員された艦船、二十余隻。総戦力、二千人。重然を含めた十三将も総出し、まさに薩摩の保有する最大戦力が残らず、たった一夜のうちに、薩摩の湊という湊から大隈海峡と薩摩海峡へ飛び出していた。

船の種類に統一性はないが、どれも矢よけの衝立を備え、かがり火がいたるところで燃え盛り、暗黒の海を照らし写している。

編成は三隊に分割された。薩摩海峡は第二隊、大隈海峡は第三隊、二海峡の交わる海域を、重然の指揮する第一隊が展開している。

異様なまでに物々しい雰囲気だ。将兵も、緊張に顔を編み縄のように引き締めている。

北山が攻めてくるぞ。

と、兵士の端から端まで、その一言は伝わった。

まさか、と思う者は一人もない。重然の迫力に圧された将たちが、あまりにも真摯すぎていた。

北山が攻めてくるぞ。

その緊張だけが、兵士たちを動かしていた。

今日の波は穏やかで、風もなかった。沖合いに風はなく、ほんとうに無風だった。

青波が船体をゆるやかに叩きつける。

ザザー・・・・・・・・ン

ザザー・・・・・・・・ン

心地よい音だ。耳に吸い込まれていく波の音を聞きながら、重然の瞳はここしばらく、硫黄島へと向けられている。

いや、実際に硫黄島が見えるわけではない。硫黄島までは百里以上もある。見えるはずがない。そもそも、今日の海上は霧に包まれている。濃霧であつた。

霧で海の先は見えない。しかし、ぼうつと霞のように、脳裏には硫黄島の島影が写っていた。その影を取り囲むように、幾隻もの船も見えていた。

海に出て、五日が経った。何もおきていない。

「何か見えるか？」

ふと、尋ねる声が聞こえた。

振り返って誰かと確かめることもせず、重然の首は横にふれた。

「そうかい」

それっきり、声の主　織部は黙り込んだ。答えを期待していたわけではなかった。そこにいたから声をかけた、ただありふれた挨拶だ。

重然と同じように、視線を海上へと投げ出す。本当になにも見えない。島も認められないし、この角度からでは味方の艦船も視界に映らない。

こうも沖合いだと、海鳥のやかましすぎる鳴声さえ聞こえてこない。ただ波の音だけだった。

「今日で五日目だな。相変わらず、何もない海だ」

「……でさあな。ここいらは、どういっわけか小島もありやしやせん」

「島がなけりやあ、鳥も飛ばない。浜辺のやかましさが恋しいぜ」

「戻りますかい？　今はまだ大丈夫ですぜ」

「戻る？」

ハッ！ と、織部は肩をすくめた。

「バカ言えってんだ。兵士どものケツを蹴り上げてここまで出張ったんだぞ？ 手ぶらで帰れるか」

「土産は何で？」

船べりの欄干にもたれる織部の上から尋ねる。

大男を見上げる上目が、おかしい物を見つめるように細められた。笑いをこらえているのか、口の端がかすかにつりあがっている。

もはや織部の癖ともいえるだろうか、何かあると、織部は重然の分厚い胸板を軽い力で叩く。

「琉球魚の肉が、薩摩の口に合えばいいな」

琉球魚は、九州南部を根城にしている海人が用いている、琉球人を指す隠語である。『海の民』と呼ばれている琉球人を、海の生物になぞらえた呼び名で、侮辱語だ。

織部の言っていることは、琉球人をナマス切りにしてその肉を薩摩の民衆に配る、という意味だ。

もちろん本当に食用とするわけではない。あくまでも織部個人のユ―モアな冗談だが、つまりは、一戦交えて手柄を立てずにどうして帰れよう、ということだ。

待ちに待って、ようやく北山に槍をつけるところまでやってきたのだ。この上は存分に戦い、武勇を示さねば引くに引けない。

とはいえ、もう五日が経っている。本当に戦えるのだろうか、という疑問も、織部の中には少なからずある。

そのことを重然に聞いてみると、答える表情は妙に自身ありげだ。

「来ますぜ、必ず」

「どうして、そんな言い切れるんだよ？」

重然の態度が織部には気になって仕様がなかった。織部に限らず、薩摩の豪族たちでさえ、その確証を得ていないのだ。

何かあるのだ。重然にそうたらしめた何かに、おそらく、重然は気づいてしまったのだ。

ただ、それがわからないから、織部は少しだけ不安になっているのであった。

海の遠くを臨むが、織部には何も見えない。

「北山の目的は、同盟することさあ」

「らしいな。クソふざけた話だよ」

ぶすつとした口調で、織部が唇を尖らせる。

「ノコノコ顔だしてきたら、あたしが奴等の顔面を阿蘇の火口みた

いにへこましてやる」

本当にやりそうだな。

簡単にその場面を想像できる。一も二もなく飛び掛って、自慢の拳を顔面にめり込ませる。織部なら雑作もなかるう。

が、笑うことが出来ない。

「……………そう、普通なら、殴られようが殺されようが仕方がねえ。先に『手を出してきた』のは向こうなんだ」

「おうよ、この喧嘩はあいつらが売って、あたしらが買ったんだ」

「だというのに、どういうわけだか『同盟』なんぞとほざきよる。お嬢、どうしてだと思ひやす？」

「あ？ そりゃあ、お前え……………」

逆に問われて、織部はとっさに答えようとしたが、しかし適当な言葉が出てこなかった。

どうして、といわれても、織部にわかるはずもない。わかっていたら、本当に敵が来るのかと心配する必要もない。

答えに悩む織部の様子に苦笑しつつ、重然の脳裏に北山の船が揺れて浮かび上がってきた。

確実に、近づいている。

「協力を取り付けんなら、それなりの『誠意』ってもんを見せなきゃなんねえ。それは、国同士でも衆同士でも同じ『約束』でさあ」

具体的にいえば『納め品』などだ。協力を願うとき、自然と受ける側が風上にたつ。願い出たほうは『誠意』として、価値あるものを『納め品』として差し出すことが普通であつた。『納め品』はまた『上納品』とも言う。

簡単な例を挙げれば、織田信長という人物がいる。彼は越後の上杉謙信と同盟を結ぶために、多くの貴重品を『納め品』として送っている。天下の半分を集中にした信長でさえ、同盟の申し出人として風下に立ったのだ。

つまりはそれだけ『納め品』という要素は大きいものなのだ。

「が、北山はその誠意を見せるどころか」

「突っ込んでくる……ってわけか」

織部の一言に、重然は頷いた。

「それも、ただ戦うわけじゃない。北山は最初に『商船』を狙ったんですぜ」

「それが？」

「もしかしたら、北山は負けが込んでいるのかもしれない」

「はあ？」

織部の口から思わず声が飛び出した。なんでそういう結論にいたったのか、まったく理解できなかった。

負けが込んでいるから、納め品もおくらずに攻め込んでくる。まったく意味がわからない。

北山と九洲が真つ向から戦争をして、それで北山の負けが込んできたために起死回生の決戦を挑んできた、というのなら、まあわからない話ではない。

しかし、現状でその理屈は当てはまらない。両者が本格的にぶつかると『かもしれない』戦いは、これからおこるのだ。

「北山の敵は、九洲だけじゃありませんぜ」

織部の疑問に、重然は答えた。

「琉球は戦争の真つ最中で、北山のほかに中山と南山がいやす」

「北山は負けてるって言いたいのか？」

「そう思えばこそ、北山がなぜ『同盟』を求めるのかに合点がいくという話でさ」

「お前はそれを間違いないと思っているのか？」

重然は苦笑しながら、

「あつしの頭では、こう考えるのがせいぜい。実際がどうかは知りませんが」

笑みを隠して、表情を引き締めた。

「もしそうならば、備えるにこしたことはありません。兵数の少ない薩摩の陸に敵を乗り上げさせたら、連中が優位に立つちまう」

最大の懸念はそこだ。もっとも寛容なのは、敵を薩摩へ上陸させないことだ。

上陸を許すということは、大きな意味合いを持っている。領土を侵されるということは、九洲内部に北山の『楔』を打ち込まれることだ。

だけではない。政治的にも大いなる損失となる。特に当方が歩み寄りの意思を一応は見せている以上、どちらがより多くの主導的要素を得られるかが問題だ。

重然の対応はあまりにも厳しいものだ。だが、兵士たちの中には、本当に戦いになるのかさえ疑問に思っている者が多い。ちょうど織部と同じように。

厳戒ともいえる警備体制 いやさ臨戦態勢は、その実、当然すぎる対応でもあったのだ。

が、まだ一つ、織部の疑問は消えていない。

北山の負けが込んでいるおおよその『推測』は理解した。だがなぜ、言い換えれば瀬戸際の状況に立たされている北山が、九洲に食指を伸ばしてきたのか。

そこが根本の疑問なのだ。

「それは・・・・・・・・」

と、重然が核心に迫った答えを言おうとしたとき。

言葉を詰まらせて、海のかなたを凝視した。

目を凝らせて突き抜ける視線の先を、織部も同じように追いかけた。日が照る早朝は、よく濃霧になりやすい。とくに重然たちのいる海域は島合いのため、とくに霧が立ち込め易かった。

海上の霧を海人は恐れる。霧の中に魔物が潜んでいると信じているからだ。この考え方は北欧のバイキングなどにも見られ、海と近い生活を送るもの共通の恐怖である。

何かが見えた気がした。けれど、恐ろしいくらいに何も見えない。見えないことが逆に怖さを掻き立てた。

気のせいか・・・・・・・・？ と、二人が思ったときだった。別の船が騒がしくなった。

「なんだ？」

嫌な予感がした。どの船が騒いでいるのか察すと、水夫が大慌てで近寄ってきた。息荒く、そうとうに急を要する風情だ。

何があつたと重然が問うと、水夫は血相を変えて、

「ば、化け物が出たつて」

「なんだと!？」

声を上げたのは重然ではなく織部であつた。織部も生まれは海人の娘、海の魔物は恐れの対象だ。

織部が水夫の胸倉をつかみあげて持ち上げた。身長は水夫のほうが高いのに、足がぶらりと宙に浮いた。

締め上げている織部がそこその美人顔だけに、水夫には余計に怖く見えた。もう鬼にでも襲われたように、涙目になっている。化け物よりも織部のほうがよっぽど恐ろしかった。

「お、おたすけー」

薩摩兵士とも思えないほど情けない声だ。しかし、それだけ今の織部が浮かべている表情は強張っているのだ。

見かねた重然が興奮している織部を落ち着かせて、詳しい話を水夫に促した。

「は、幡多丸はたまるの連中が、霧の中に、あ、あ」

喉を詰まらせながら、水夫はなんとか言葉を紡ごうとしている。ちなみに幡多丸とは竜神丸とおなじ、船の名前である。

「落ち着け。霧の中に何を見たんだ？」

「あ、赤い、長い化け物」

「・・・・・・・・」

重然と織部は顔を見合わせた。

さらに詳しく聞くと、幡多丸が目撃した怪物とはこのようなものであった。

霧の中から、ぼうつと、陽炎のように浮かび上がってきた。赤い点りで、一つ二つと増えていって、最後はとてつもなく長い一本の怪物になった。

ということなのだが。

お前も見たのかとい問うと、水夫は首を立てに頷かせた。この織部におびえている水夫も見えていたようだ。

どうやら、見間違いないようだったようだ。重然が見たのは気のせいかもしれないと思ったほどに小さかった。きっと怪物の頭か尻尾だったのだろう。

「まだ見られるか」

と尋ねる前に、重然は駆け出していた。その後ろを、織部も追いかける。水夫は腰を抜かして立つことが出来ず、一人だけ取り残された。

船体の側面に人だかりが出来ていた。重然が近づくと、水夫や兵士

たちが口々に、

「なんだ、アレは？」

「長いぞ……まるで蛇だ」

と、うるたえ声を上げている。

身を乗り出して、巨体が人垣を割る。こんどは目を凝らす必要もなかった。

はつきりと見えている。確かに赤くて、長い。

長すぎる。

「な、なんだありやあ……」

下から織部の声が聞こえた。驚きを通り越して、すでに啞然としていた。重然も同様であった。

言葉を失うほど、ソレは長いのだ。先に行けば行くほど薄くぼやけているが、それにしてもこの長さはどうだろう。軽く一町ほどあるのではなからうか。

赤い怪物は、ただゆらゆらと霧の中で揺れている。鳴声などは聞こえない。

重然は目を逸らすことが出来なかった。魅入られた、というほど綺麗なものではないが、あの恐ろしいほどの長さは、視線をはずさせることさえ許してくれなかった。

固まって動けない重然の下に、今度は愛宕が首を出した。船倉で寝ていたはずだったが、騒ぎを聞きつけてきたのだろう。

「…………お頭、なんでですか、アレ」

目を猫眼に丸めて、愛宕が尋ねてきた。知らねえ、と答えるしかなかった。事実、アレが何なのか、重然が知りたいくらいなのだ。

「海神さま？」

「海神様は青い」

海神様とは、呼んで字の如き存在である。龍神の同種で、海の守り神だ。海にちなんであるため、青い龍の威厳高い姿で表現されることが多い。

だが、愛宕が海神様と思うのも無理はない。それだけ長いのだ。とにかく長いのだ。

他の船からも騒がしい声が響いてきた。気づくと、重然たちの周りの霧も濃くなりつつあった。霧の濃度は高まれば高まるほど、魔物が出現する確立が上がっていくと信じられていた。

このままでは艦隊が恐慌状態に陥ってしまう。自身も恐怖に心を焦がしながら、慌てて全船に後退命令を発した。

赤い怪物は、霧の中に消えていった。

亜衣は不機嫌だった。

その気の害しようときたら、道行く官や将や小間使いたちが、思わず距離を開けるほどであった。

足音を荒げたり、理不尽な命令を飛ばしたりなどということはない。しかし全身からわかってしまうのだ。主に目でわかってしまう。

所作も常と変わらないが、目だけが怖い。笑っていないというよりも、もうよくわからない、と言ったほうが正しいかもしれない。

不機嫌の理由を探るよりも、以上に、関わってはいけないという思いが噴火のように湧き上がるのだ。だから、よくわからない。

ところで、なぜ亜衣の不機嫌が底冷えしているのかというと、理由は重然であった。

薩摩の視察に赴いた折、亜衣は重然と居並ぶ将たちに向かって『迂闊に動くな』と言っていたのだ。

亜衣は交渉を得意としている。ホタルから『北山に同盟の意思あり』という報告がもたらされたことで、戦だけでなく、政の可能性もあると考えたからだ。

そうなると重然には荷が重い。香蘭でも難しい。紅玉なら適切に対

処できるだろうが、薩摩県の独断で決するには事が大きすぎる。

だから、亜衣としても可能な限りの情報がほしかった。思っていた以上に重大な事態だと認識したからこそその対応だった。

だというのに。

執政室に戻って文机に向かうと、硯を軽くすって筆先を浸した。が、どうにも字を書く気にはなれなかった。

不安で飯も喉を通らないという言葉がある。今の亜衣は、憤りで筆も奔らない、という感じだった。

仕事が手に付かない。今は何よりも、薩摩で何があったかを知りたい。どうして言に背いたのか、その真相がただ知りたかった。

こういうとき思うのが、もしも九峪様がいたらという、埒もない弱き考えだ。不測の事態ほど、妙な牙えを見せ付けてくれた九峪の凄まじさは、まさに今のときこそ思い知らされる。

胸を焦がすような苛々しい焦燥が、得もいえぬ気持ちの悪さで亜衣を悶えさせる。厭な気分だった。

亜衣の仕事は対北山のことだけではない。財政の切迫した薩摩への支援、建設や土木などの公共事業の管理なども、今は亜衣の仕事が。かつて九峪の唱えた政治形態は、職務をより細分化することを主眼にしていた。しかし組織管理能力の高い人材が育っていないため、亜衣が一括しているのが現状であった。

今も机の上には、県知事から送られてきた陳情書が山を成している。今開いているものは豊後県から来ているものだ。内容は湯布岳にある温泉保養施設の増改築に関した援助要請だ。

昔も今も、仕事は亜衣のところに集中している。亜衣に任せれば間違いないと思っているのだろーし、宰相の亜衣を通すことで『官製事業』の面目が立つためだ。

亜衣にとっては堪ったものではない。

そのせいで、亜衣はなかなか自由を確保できないのだ。自由時間を確保すれば、大抵は九峪のいる阿蘇山に足を運んでさまざまな相談事ができるのだが。

今回の対北山にしても亜衣は二度、九峪に相談を持ちかけているのだ。ただ亜衣自身が詳しいことを知らない以上、九峪に相談したとて的確な意見が聞けるはずもない。

それでも本音を言えば、亜衣はすぐにでも九峪の元へ駆けつけたい思いでいっぱいなのだった。だが、最近は薩摩県政治不安が周囲にも波及して、以前にもまして陳情書の数が増え上がっていた。

亜衣は耶牟原城から動けないでいた。

「だれか」

戸口に向かって声をかける。戸口には常に衛兵が二人いる。彼らは番兵であると同時に、庶務や連絡なども行っていた。

「ここにおります」

「蘇羽哉をここへ呼べ。薩摩から帰還したホタルと、清瑞も呼べ」

「はっ」

一礼して、衛兵は伝令士となった。鎧を鳴らしながらも素早く姿を消した。

衛兵が蘇羽哉たちを連れてくる間に、亜衣の細指が竹簡に綴らせる。陳情書ではなく、何も書かれていないまっさらな竹簡だった。

文章はすぐに認められた。時間がわずかに余ったが、陳情書に目を通す気にもなれなかった。やはりそんな気分ではなかった。

やらなくてはいけないんだがな。

などと、内心でため息をつく。もはや苦笑も出てこない。自分がこうやって遅れば遅れただけ、九洲の公共事業が停滞していくのだ。

内政と外交。両立はなかなか難しい、特に一人で行う場合は。身は一つしかないのだ。

少しして、まず最初に蘇羽哉が執政室にやってきた。

「蘇羽哉、まかりこしました」

畏まって平伏する蘇羽哉の面を上げさせて、亜衣は手短に用件を話した。

蘇羽哉は巫女だが、実質的な亜衣の側近でもある。政の心得があっ

た。

「裁可を許す。各県の陳情に応えろ」

「………私が、でありますか？」

「そうだが？」

蘇羽哉の口が『あんぐり』と開いたまま閉じようとしない。

だがそれも仕方がなかるう。何しろ亜衣の指した陳情とは、積み重ねられた簡書の山のことを言っているのだ。

よくもまあ溜めたものです………。

呆れるような、感心するような。そのことを職務怠慢と指摘しないことが、蘇羽哉流のお仕え術だった。

が、今回ばかりはどうだろう。この陳情書の量、尋常にあらず。

「そろそろ、こういった仕事をこなせる人材がほしいところだ。九峪様の考えた組織の細分化というものは、効率的にもよろしいからな。お前が私ほどの判断と、そして経験をつめば、分野を明け渡してやれる」

「は、はあ………」

「お前はすでに、祭事に関する庶事を司っているな。だがその地位で満足してもらっては困る。ああ、困るのだ。九峪様の政治構想は効率面で言えば素晴らしいものだ。いずれは『省』を創らねばなら

ぬ。そのとき、ゆくゆくは蘇羽哉に『省』を預かる『大臣』になつてもらおうと思つている」

この亜衣の考えは本当である。

九峪の政治システムは、大部分を現代日本を参考にしている。そこに、歴史で入手した知識などを盛り込んだものが、亜衣の言う『効率的に有用』な政府構想であつた。

『権力分散』を主眼においた民主的なシステムだ。現代で生まれた九峪は、祭事に大きな関心を寄せなかつた。ゆえに実務的な政治を一手に引き受ける存在として『省』の設置を目指していた。ちなみに、現在までに『大蔵省』が創設されている。大臣は只深である。

亜衣はいふなれば総理大臣で、いつかは蘇羽哉を大臣にしたいと考えていた。だから、亜衣は蘇羽哉をなんとしても大臣の器に育てたいのだ。

そのために、仕事を任せると言っているのだ。

とはいつても、蘇羽哉は生返事を返すしかない。どうにも亜衣の言が言い訳に聞こえて仕方がないのだ。

だから思わず、

「私一人で、ですか？」

と聞いたのも、仕方がないことだつた。亜衣は硯と筆を蘇羽哉の前にそつと置くと、

二ヤ

と、笑みを浮かべた。蘇羽哉は項垂れるしかなかった。

「せめて数名、誰かつけてください」

「独断で登用してもいいぞ。ある程度の権限は与えてやるから、案ずることはない」

「左様ですか……………」

もう、どうにもなりそうにない。そう悟った案埜津は、唯々諾々と従うしかなかった。

いや、まてよ。蘇羽哉は項垂れながらも、ふと考える。これはこれで、たいへん名誉なことではないか。うまく事を処理していけば、重鎮としてより深く国政に関わっていけるではないか。

と、己を奮い立たせては見るものの。いちど力の抜けた肩は、容易に上がることはなかった。なによりも、この仕事量はないでしよう、という思いが強い。

「任せたぞ、蘇羽哉」

「はい……………」

駄目押しを背中に受けて、蘇羽哉は自らの仕事場に戻った。陳情書は衛兵に運ばせることになっている。

さて、国政に関してはこれでよい。手に負えないと思ったものは保留しろと言い含めておいたので、無理をすることはないだろう。本当は無理の一つでもしてほしいのだが、部下を思いやるのも人の上に立つ者の役目だ。

衛兵が書簡の山を全て運び終わっても、清瑞他はまだ来なかった。すでに一刻はゆうに過ぎていく。

清瑞は城下に屋敷を持っている。宮殿からそう遠くない場所で、これが中々の敷地を持っていた。清瑞はこの屋敷で、他の乱波とともに生活しているのだ。

とはいえ、この屋敷、もともと清瑞所有の屋敷ではない。もともとは九峪所有の屋敷であり、寝食するもの全員が、九峪に縁のある人間ばかりであった。

「……遅いな」

手持ち無沙汰になって、思わずそんな独り言がこぼれた。

と、同時だった。戸口の向こうに、ふっと人影が現れたのは。

「清瑞まかりこしました。遅参せしこと、お詫び申し上げます」

一礼して、清瑞が部屋に入ってきた。その後ろから、二人の男女が同様に礼をして入室してくる。

「ずいぶん遅かったじゃないか」

座した三人に向けての第一声である。

清瑞は臆した様子もなく、整然と、

「一里ばかりの離れ林にて、訓練をしておりました」

淀みなく受け答えた。そうか、と亜衣は言った。

話はすぐ本題へと移された。

「薩摩と北山の情報がほしい」

亜衣の求めは、簡潔に言えばこんなものである。

重然の動向には、正直なところ、亜衣も度肝を抜かれた思いなのだ。存外に勘違いされることだが、重然は意外と思慮深い男だ。

九峪や亜衣の指示に素直に従うことから、能無しと思われがちだが、決して軽率な振る舞いや行動はしない男だ。

それが、今回ばかりはどういうことか、亜衣の言を無視して行動を起こした。

なぜ動いたのか。その理由が知りたかった。

「もう一度、ホタルを向かわせようと思う」

清瑞は了承の意を頭を垂れて示した。いまだ自身の秘密を知らない清瑞に、宰相である亜衣の命令を背く意思などありようはずもない。

亜衣は清瑞の背後に控える二人を見やつた。

「そこにいるのが、薩摩へと走らせた者たちか」

乱波たちが再び平伏した。

「名はなんという？」

落ち着いた声で尋ねられた二人は、一瞬だけ互いを見合わせた。

清瑞はともかく、一介の乱波にすれば亜衣は天上人である。雲の上の人であり、その亜衣から名を聞かれるということは大変な名誉であった。

が、ひどく感激することがないのも、また乱波である。自制心が強いのだ。すぐに視線で会話を交わすと、まず最初に少女が一礼した。

「愛染あいぜんともうします」

長い黒髪が綺麗な、十代の少女だ。

続いて男が頭を下げた。

「侘吉たきちともうします」

細身で、冴えない顔つきの男だ。とはいっても、乱波の一員である、腕は確かなのだろう。年のころは四十前後と見受けられた。

愛染に、侘吉か。心の中でその名を反芻する。反芻して、ふと、亜衣はあることを思い出した。

愛染。聞いたこととなる名前である。記憶をたどれば、その名は、九峪の口から発せられたものだった。

気になると、どうにも聞かずにはいられない。

「愛染。その名は、親からもらったのか？」

一瞬、愛染が目を丸くした。

「は……いいえ、これは九峪様よりいただきました」

わずかに困り顔で、愛染はそう答えた。なぜこのようなことを尋ねられたのが、よくわからなかった。

しかし対する亜衣は、ひとり何事か納得いったのだろっ、首を縦に振っている。「そうか」という小さな言葉が聞こえた。

些細な疑問は解決した。亜衣は顔を上げると、控える二人へと視線をやった。

眼鏡を指先で直す。

「北山方の詳しい情報を聞かせてくれ」

亜衣の視線は鋭い。重然が動いた理由を察するには、同じくらいの量と質の情報が必要である。

乱波が薩摩より戻ったのは、つい先日のことだ。そのときに、亜衣も重然の行動を知ったのだ。いま総司令である重然によって、乱波

は帰還させられたのだ。

重然の本音は、ただ巻き込みたくない一心だ。乱波はあくまで清瑞の部下であり、伊雅や亜衣が直轄で運用している部隊。重然はあくまで、その人員を借りているにしか過ぎない。

が、その配慮が今回ばかりは、亜衣の手を煩わせる結果になってしまった。愛染でも侘吉でもいい、重然は返すにしても、一人とどめておくべきだったのだ。

愛染と侘吉は清瑞に促され、自らが入手してきた情報を、余すところなく亜衣に伝えた。ときおり、亜衣は薩摩方の情報も求め、それらを織り交ぜながら話は進んだ。

亜衣は特に『同盟』に関する話を執拗に問いだした。

この『同盟』に関しては、侘吉が詳しかった。侘吉は漂流した漁師を装って、北山方と接触していた。

「重然殿は、同盟の可能性が高いと申しとおりました」

「それは、重然に結ぶ意思がある、ということか？」

「いえ。北山の申している『同盟の意思』が真であると」

「つまり、虚言ではないと、重然は判断したんだな？」

「御意」

侘吉との問答で、亜衣は余計わからなくなった。

詳しく聞くと、重然は北山と戦うために船を出したという。ただしそれは、攻めるのではなく敵を待ち受けるためだという。それは北山の侵攻を意味している。

『同盟』が本当ならば、なぜそんなことをする必要がある？

二人に尋ねても、同盟の意思は間違いないと答えている。侘吉などは、北山の人間としばし生活までして情報を入手したのだ。彼は直接、その言葉を聴いている。

ただ、どうして『同盟』を結びたいのか、それまではわからなかったという。亜衣はまさにそこが知りたかった。

「清瑞、お前はどうか考える？ 北山の狙いは何だ？」

それまで無言だった清瑞に、亜衣は尋ねてみた。従うことのみを乱波の美徳としている清瑞は、率先して進言することがない。

しかしその判断力や推察力は決して馬鹿には出来ない。

そうですね、と前置きして、清瑞は己の考えを述べた。

「同盟と言ってますが、北山のやりようはまさに侵略そのものです。が、それを北山はあくまで『同盟』と銘打っています」

「ふむ………」

「私が思うのは……北山には本気で戦う意思がない、ということです」

「そうだ、それが私も気になっている」

「北山は、助けを求めているのではないでしょうか」

「助け？」

清瑞はコクリと頷いた。

ずいぶんと飛んだ考えた。内心で亜衣はそう思ったが、一方であるほどと納得もしていた。

重然たちは、琉球の情勢を多少は知っていた。中山、南山という勢力と長いあいだ争っていることも話してくれた。

助けというのであれば、なるほど、北山はこれら二つの勢力と争い、劣勢に陥っているのかもしれない。その助力として九州に『同盟』を持ちかけている。

そう考えれば、たしかに清瑞の意見は正しい。正しいが、ではなぜ侵略まがいのことを、という疑問が残ってしまう。

それを清瑞に尋ねてみると、

「わかりかねますね」

と、答えるだけだった。それはそうだと亜衣も思った。

北山の考えていることなど、わかつたはずもない。

「そして重然は敵が襲つてくると考えた。北山は動きを見せていないのだろう?」

「はっ。見せていないどころか、ここしばらくは、まったく船も見かけなくなりました」

「それを予兆と取ったか。同盟が真であると確信していながら・・・」

確信していながら、敵が襲つてこないと考えなかった。そこに、重然の考えがある。その部分を知ることが出来れば、重然の行動の意味も知れよう。

ただ、忘れてもならない。この考え方自体が、あくまでも推測ではない。清瑞の意見だって、所詮は推測の域を出ない。

なんにしても直接、重然を問いたすしかないようだ。

「すぐにも乱波を送り込め。必要だと思ったならば、清瑞、お前が直接むかってもかまわない。大將軍には私からお伝えしておく」

大將軍とは伊雅のことである。ホタルの棟梁である清瑞を独断で動かすことは、亜衣でも難しいことなのだ。

「はっ」

清瑞は承ると、しずかに亜衣の下を去っていった。そよ風のような消え方だった。愛染と侘吉も、すっといなくなった。

一人になった執政室で、亜衣はため息をついた。

事態がどんどん大きくなっていく気がする。内心のあせりも大きくなっていく。

私も、薩摩へ向かわねばなるまいか。

いったい彼の地で何がおきているのか。それをすぐにでも知らねばならない。

「・・・・・・・・九峪様に、もう一度ご相談を」

ずいぶんと時間にも融通が利くようになったのだ。阿蘇に登ろうと、亜衣は密かに決めた。

九峪様、どうか私にお力を。

第11回 「日輪と偃月の如し」

夏も、そろそろ半ばまで差し掛かった。昼間は蝉やひぐらし、日没からは蛙とコオロギが、耳障りなほどのコーラスを奏でる毎日が続いていた。

気温は平均で三十度を超えることも多く、冷やした瓜野菜が人々に涼を与えてくれるご馳走になっていた。

だが、まだ阿蘇山は涼しいほうだろう。森の中には冷たい水分質の空気が漂っている。この空气中に散漫している水分が蒸発することで、気温を一気に下げってくれるのだ。さらに言えば、阿蘇連峰はどこも標高が高く、むしろ快適なほどだ。

九峪の居住も涼しい立地にある。亜衣が特別に選んだ場所だ。

まるで別世界だ。

九峪の元を訪れるたびに、亜衣は常々そう思っていた。下界はとにかく暑い。前年からの温暖が、まだ続いているようだった。

いつそ、私もここに住んでしまいたい。そうすれば蒸し暑い寝時ともおさらばだ。と、心の片隅が囁きかけてくるのも、無理のないことだ。

「下はそんなに暑いのか」

亜衣の話を聞いていた九峪が、おかしそうに笑った。冬こそ厳寒だが、夏に入ってから九峪の生活は快適そのものだ。

まず虫がない。現代育ちの九峪には、ハエや蚊が飛び回る生活は御免こうむるところだ。

住めば都というが、阿蘇での隠遁生活にもずいぶん慣れてしまった。たまに兎華乃たち三姉妹が尋ねてくることもあるし、亜衣の訪問も度々あった。

「去年は暑かったけど、今年も負けず劣らずってところなのかな」

「稲穂の育ちも宜しすぎるほどです。瓜が飛ぶように売れて、百姓は大喜びだとか」

「うーん、今年も豊作かあ」

言って、黄金色に輝く光景を思い浮かべた。

九峪が生まれた街は都会とはいえない。郊外には田畑も多くある街だった。しかし、それでも、この世界に来て大いに感動することがあった。

何よりも田畑の多さが違う。当然といえば当然だが、秋に実る穂の暖かい輝きに、九峪は終生にわたって忘れることの出来ない感動を覚えた。

まるで黄金が風になびいて見えるのだ。その眩さの中で、豊作に喜び舞い上がる百姓の姿も、得もいえない衝撃を九峪に与えた。

世界の境界を越えて、七年が経った。九峪の精神は限りなく、この異世界に同化していた。現代ではつまらないと思っていた舞や楽を楽しいと感じるようになったし、情緒も豊かになった。

ただ残念なのは、その光景を今一度見られないことだ。あの感動をもう一度、という思いが成せないことが、九峪を切なくさせた。

「新しい米倉がいるな。いやそれよりも、納量を減らしたほうが、百姓は喜ぶかな」

ほのかに湧き上がった寂しさを誤魔化すように、九峪はあえて明るく言った。

倉庫の増新築よりも、民のことをまつさきに思いついた九峪らしさに、亜衣は微笑みながら「そうですね」と、思案気に呟いた。

この時が、亜衣は最も好きだった。政にたずさわれない九峪の意見を、汲み取り実現できる唯一のポジションに座っていることが、亜衣の優越心を高ぶらせた。

そして、その位置にいる唯一の己だからこそ、口に出せる問題もあった。

「九峪様」

ひそやかに声の調子を落として、亜衣は九峪に呼びかけた。

「折り入ってご相談がございます」

「・・・・・・・・・なんか、アレか、面倒ごとでもおきたのか？」

妙に改まった亜衣の声音に、九峪は不穏な色を感じ取った。亜衣が持ち込む相談事はこれまでも多々あったが、今のように思わず声調子を落とすことは、なかなか稀なことであった。

亜衣の手に負えない事態が発生したとしか思えなかった。そういった事柄の半分以上は、九峪の手にも負えないものだったりする。

自然、九峪は心理的に身構えてしまうのだ。が、亜衣としては、これは九峪にこそもっとも向いている問題だと確信していた。

「先だってお話してきましたが、北山のことです」

「ああ、北山」

身構えつつ、九峪は繰り返した。北山といわれて、納得がいった。

またぞろ北山が何かしてきたのだろう。詳しいことは知らないが、なかなか問題を引き起こしているらしい。

錦江港の湊が手ひどく経済的打撃を受けていると、亜衣から愚痴半分に聞かされていた。それを思い出した。

九峪としても、北山のことは気がかりである。政から 半ば強制とはいえ 退いた直後に突如出現した外威だ。気にならないはずがない。

「奴さんが要求でも突きつけてきたか？」

「まあ、似たようなものですね」

「・・・・・・・・」

九峪は沈黙した。

軽い気持ちで言ったのに、まさかの近くを掠めていたとは。

「・・・・・・・・向こうは何て？」

気を取り直して、肝心の部分を訪ねる。その部分を知らなければどうしようも出来ない。

この機を逃してはならないと、亜衣はもてる情報の全てを九峪に開示した。亜衣自身の情報量が少ないのだが、出来る限りを九峪に伝えなかった。

話を聞くうち、九峪は度々うなづいたり、考え込んだりしていた。

ただ、話している亜衣自身も思った。やはり情報が少なすぎる。九峪の表情にも、それが表れていた。

「同盟？」

しかし、ただひとつ、この一事に九峪の眉はぴくりと動いた。

やはり亜衣や重然にたがわず、九峪の思考にも引っかかるフレーズのようにだ。

「それは、どういうことだ？」

「実は・・・・・・・・」

知る限りに補足していくと、九峪の顔がどんどん固まっていた。

考えに考える様を、供された茶を飲みながら、亜衣はただ黙って見つめた。話しかけて邪魔をしたくなかった。

侍女からかわりの茶を煎れてもらい、しばらくして、九峪もぬるくなった茶を飲んだ。

渴いた喉に心地よかったのか、ほつと息を吐いた。それからふと空を見上げて、

「負けが込んでるね・・・・・・・・清瑞がなあ」

と、呟いた。

その後に、九峪は亜衣のほうを向いて、

「何がしたいんだろうな、連中は」

と、苦笑しながらその言葉をもらした。結局わからなかった。

お手上げ！ といった様子に、亜衣も苦笑で返した。もともと情報も少なく、自身もよくわかっていないのだ。なのに勝手に期待半分で相談したのは亜衣自身であったし、深く責めるつもりなどなかった。

ただ、不思議なものだ。切迫しているはずなのに、九峪といると、どうにも毒気が抜かれる思いがする。これこそが九峪の魅力だとも亜衣は思った。

それに、足を運んだのが無駄足だとは思わない。こうして少しずつでも九峪に情報を与え、ともに議論すれば、あるいは北山の動向の意図が読めるかもしれない。

亜衣はそれこそ期待していた。きょう九峪に尋ね、答えが返ってこなかったことで、亜衣の気持ちはすでに切り替わっていた。

明日、新たな乱波が薩摩に派遣される。その乱波の働き如何によって、亜衣はもう一度、ここにくるつもりであった。

そのときには、何か、手土産でももってこようか。

ひそかにそう想いを巡らせ、口元をほころばせた。その様子を、老いた猫が見つめているのを、亜衣はまったく気づかなかった。

阿蘇から帰ってきた亜衣は、馬子に乗ってきた馬の手綱を預け、すぐに別の馬へと鞍を変えた。

戻ったばかりの亜衣の元に、一人の次女が駆け寄ってきたのだ。亜衣はまだ馬上の人だった。次女が用向きを手早く伝えると、亜衣は馬を代えただけでまた九峪御殿をバツと飛び出してしまった。

馬は裏の小高い丘を駆けた。通りは人が多く馬の足を跳ばせられないからだ。比べて民家から離れた空き地は走りやすかった。

目的の場所は、この郊外とも呼べる丘に立てられている。井戸はな
いが清らかな水の湧き出ずる小さな池があった。ここは猛暑の日で
も涼やかだ。

亜衣の屋敷からは少し離れている。しかし馬を走らせれば、半刻と
かかるものではなかった。

次第に見えてきた屋敷は、なんとも重厚な造りだった。それほどの
大きさはないものの、頑丈な造りだ。和国には珍しい、なんと土と
木の屋敷であった。

この屋敷の馬子に馬を預けると、亜衣は案内もなしに縁側に向かっ
た。外見は土作りのようだが、内装は不思議なものだった。壁や天
上は土を固めて作られているのに、床だけが板張りの家だった。

「誰、いるか」

声をかけた。見えるところに人はいなかったが、すぐに返事が返っ
てきた。「お待ちください」と、男の声だった。

ひょいと姿を現したのは、駒木の孔葉代だった。

「宰相様、お待ちしておりました。いま暫しお待ちください。藤那
様にお知らせいたします」

「ああ」

孔菜代が奥に姿を消すと、間をおかず女中が冷や水を持ってきた。日も傾いて暑くはなかったが、ありがたいと思いながら水を喉に流した。

阿蘇から帰ってきたばかりで、喉もちょうど渴いていたところだ。いま一杯と所望して水を受けたところへ、半袖半裾と軽く涼やかに着こなした藤那が、孔菜代を伴って姿を現した。

「ようやく帰ってきたな。待ちわびたぞ」

「はっ……」

「上がれ。奥に酒肴を用意させてある。ついでだから、食事はここで済ませていけ」

有無を言わさぬ態度で藤那は、縁側に座している亜衣を奥間へと招いた。亜衣は逆らわず、素直に従った。

「まさか都にのぼっておられたとは」

内心の驚きを亜衣は口にした。藤那は口を愉快そうに曲げた。

藤那は火後県にいるはずだった。上都の話は聞いていない。報告義務はないが、亜衣の元には自然とそういう情報が入ってくるのだ。

「昨日方だな。北の口から入都したのは」

「兵の姿が見えませんが」

「孔菜代だけ、共として連れてきた。一兵もつれてはいない」

スーッと、音静かに戸をあけた。対面する形で、食膳が並べられていた。酒もあった。

まず藤那が着席して、ならうように亜衣も腰を下ろした。膳に目をやると、旨そうな川魚が塩をまいてのつていた。イワナだろうか。

この年、海の漁は不況だ。特に温暖な年が続いたせいで、潮の訪れを漁師たちが読み違えたのが原因だった。

料理は魚だけではない。采も肉も、米もある。すぐに食べてなくなる量には見えない。

「ずいぶん豪華な食ですね」

「気に入ったようでなによりだ」

そういうと、藤那は己の杯に酒をなみなみと注いだ。亜衣も杯に注いだ。

一献で喉を潤し、二献で酒の匂いが鼻を抜けていった。この短い間、二人は無言だった。古来の日本に『乾杯』はない。

ましてや、これは公式の場というわけではない。礼儀はあつてないような席なのだ。藤那も亜衣も、深く遠慮することはなかった。

酒もそこそこに、二人は料理に箸をのばした。亜衣は普段から深酒を戒め、藤那も昔ほど呑まなくなっていた。

「干した魚だが、悪くはなからう？」

塩に漬け込んだ青菜を食んだ藤那がそう声をかけてきた。

「油のノリは悪いが、滲み出るような旨みがある」

「海の魚にはない味でございますね」

「私は幼子のころから、イワナや山女、ウグイを食べて育ってきた」

昔を思い出しながら、藤那は忍ぶように笑った。

「伊万里殿とさして変わらん。血の尊さを知っていても、食べていたものは同じ魚だった」

「川の魚ならば、私も火魅子様も食べていました」

「ふふ。そうさ、みんな同じものを食べて生きている」

イワナをつまみあげると、藤那の目がゆるく細められた。魚に油のひかりはまったくなく、干された味気なさがあった。

亜衣は小首をかしげながら酒を呑んだ。藤那の様子がおかしいと思いはじめていた。

磊落な藤那にしては、どうにも話し方や表情、雰囲気感傷的すぎる。らしくない、といえば、あまりにらしくない姿である。

気になると、どうにも箸の動きが鈍ってしまう。食欲もなえ、はやく用件を言わせねばと思った。

膳もまだ半分ほど残っているが、亜衣は箸をおいた。カチャリツと音がたった瞬間、藤那の瞳もにわかに違う色をにじませた。

食事と談笑の時間は終わり……。これから、亜衣は藤那の話
を聞かなければならない。藤那も、亜衣が箸をおいたことを合図と
した。

話し始める前に、杯を互いに傾けあった。話す前に呼吸を正す準備
であった。

「酒はもういいか？」

一拍おいて、藤那が尋ねた。亜衣は固辞した。酒はまだ残っていた。

「……前置きも、もういらんな」

言うと、藤那も杯を置いた。

「私は齒に衣着せるつもりはない。だから、直入で言っぞ」

「なんででしょう」

「言いたいことは唯一つだ。亜衣よ、少しは自重しろ」

淀みない、唄を口ずさむように軽やかな一言だった。臆した様子も
なかった。

藤那は『自重しろ』とだけ言い、詳しくは語らなかった。その必要
がないと思っていたからだ。これだけの言葉だけで、亜衣は心当た
りに気づくだらうと信じていた。

そして真実、亜衣は眉を少しも揺らさなかった。動揺くらいはするだろうと思っていた藤那は、以外に驚いた。亜衣はまるで狸々の如く何も映さない面をしていた。

あらかじめこの話が切り出されるものと心得ていたに違いなかった。ならば話は早い。はじめからわかっていたのなら、云うべきことは全て伝わるだろう。

「なぜ私がこのことを」

「わかっています」

みなまで言わせず、亜衣は嘆息した。

「……噂は、私も聞き知っております」

「申し開きは、あるか？」

厳とした態度であった。藤那の言葉は、非ある者 罪人や謀反人などに対して用いる言葉だった。

あたかも、藤那の言は亜衣を糾弾するようであった。表情にも温かみや慈しみなどなく、容赦の欠片ほども感じられない。

別に亜衣は、罪を犯したわけではない。この場合に亜衣を罰する法は九洲の律になく、『申し開き』と責められることこそ甚だおかしいことだった。

だが、しかし、亜衣は反論しなかった。なぜなら亜衣は、ある意味で、罪人のつもりであつたからだ。『法の罪』ではないが『道の罪』を背負っていると自覚していた。

ゆえに亜衣は、申し開きをせねばならなかった。ならないが、亜衣はそれを憚った。

沈黙を通す亜衣に業を煮やした藤那が、眼を陰しくさせた。

「言えないか？・・・・・・そうだろうよ、言えまい、理由があまりにも馬鹿すぎる」

「・・・・・・」

「その馬鹿すぎる理由が、今時の噂を生んでいるのだ」

藤那がなお言い、亜衣も知っている噂とは、ここ一月の間に火後で広まった噂である。

宰相の亜衣が度々、供を連れずに阿蘇に身を隠させている、という内容の噂で、初めは阿蘇麓の村々で沸き起こった。

それがいま、火後を手広く駆け巡り、彼の霊山にはなんぞがあるやと、商人から百姓まで首をかしげていた。

それは火後を預かる藤那にとって、息を呑むほどの恐怖であつた。

「阿蘇は霊山だから、神力にあやかろうとする者がいる。ましてや、宰相たるお前が霊峰阿蘇に通い詰めと知った者たちは、興味交じりに阿蘇に登るかもしれない。その末に、九峪様の御隠所を暴かれて

もしたら・・・・・・・・」

考えるだけでも恐ろしい。比喻などでなく、藤那は本当に怖かった。何しろ、共和国は九峪の現世帰還を『公式』に発表してしまったのだ。九峪はもうこの世界に存在せず、またしてはならないのだ。

この事実が、さて無実と知られては、黙っていない者たちがいる。

「武官たちですね」

藤那の懸念を、亜衣は一言で指摘してみせた。藤那は神妙に頷いた。

「そも、なぜ九峪様をご隠居なされたかというと、元はと言えば『武官』と『文官』の意見が食い違ったことにある。この争いで『武官』は九峪様を、『文官』は女王を勝手に担ぎ上げ、ついには九洲を二分しかける大騒動にまで発展した」

言われずとも、先刻承知の事件である。このために亜衣は奔走し、豊後は混乱し、九洲全土が揺らぎ、国力は増しても軍力は衰え、そして神の遣いが地上より消えたのだ。

この一件こそが、亜衣をことごとく苦しめたのだ。忘れえようはずもない。

「伊万里殿の豊後はひどい有様になった。我が火後も危うかった。これらを収拾できたのは九峪様の退陣と武官の肅清があったからだ」

「・・・・・・・・左様でございます」

「いま、九洲は武官どもの言ったとおりになっている。他国の脅威が、いままさに、この九洲へと迫っている」

亜衣は顔を上げた。目を見開き、驚きの顔をしていた。

亜衣は藤那が、北山をさして『脅威』と呼んだことに驚いた。藤那はまだ見ぬ敵を早々に『恐れる敵』と見定めていたのだ。

初めに侮っていた己に比べて、この態度はどうであろう。藤那は北山のことを名前でしか知らないはずではないのか。

「藤那様は、北山のことをどのようにお知りでありましょう？」

「火後にも湊はある。海人がいる」

海人つながり、話は聞こえてくると言いたいのだろう。

それに、九洲で用いられている軍馬・兵馬の調練は一切を駒木の里が取り仕切っている。駒木の里の管理人は里長であるが、藤那の直列機関と呼んで問題はない。

糧食は火向知事の志野が送っている。その搬送に使用している馬は、駒木で育てた馬だ。これらは倭国馬だが、何かと使い勝手のよい馬であった。

その伝からも話は聞くという。とすると、藤那以上に聡い志野のことだ、やはり北山について気づいているとみて間違いない。

「薩摩はもちろんのこと、我が火後も志野の火向も、北山についてはすでに周知のこと。これより以北と火前方面がどうかは知らんが

な。だが少なくとも、薩摩、火後、火向で隠遁している武官たちは、今頃それ見たことかと文官を扱き下ろしていることだろうよ」

藤那の言葉は想像に難くなく、亜衣の脳裏にも、その様子がありありと浮かんできた。

まさに武官の言ったとおり、琉球が今にも攻めて来ようかとしている。薩摩に隠れた武官は齒噛みしているはずだ。

武官は豪族でないため、自身の郎党を持たない。ゆえに重然の下へと馳せ参じることが出来ないのだ。また豪族と異なるため『国家』に対する忠誠心も厚く高く、ともすれば悔しさに胸をつぶさんばかりだろう。

「その武官たちに九峪様の存在を気づかれようものなら、我らは国内に新たな火種を抱え込む羽目になってしまう」

「はい……………」

声調子を落としに落として、亜衣は深く頷いた。

九峪の存在が公になってしまうことは共和国にとって、九峪が生きつづけている限り、絶えることなく続いていく恐怖であった。

「だからこそだ、亜衣。お前の行いがどれほど危険で愚かなことが、胸に手を当てずとも、わかるはずだ」

「……………ッ」

膝の上におかれた拳を握り、唇をかみ締め、亜衣は瞳を手元に落と

した。藤那の言っていること全てが正論だった。

たしかに、亜衣とて、己が何をしているかくらい自覚している。共和国にとって不利益だともわかつているのだ。

だが、あのとき 関門海峡を出国していく交易船を見送った帰り道で、衣緒と平和の意味を語ったときに。

平穩に抱かれていない自身に気づいてしまったのだ。生きる者とは、安寧を望む。亜衣は己の安寧を、九峪に見出した。

そのことが亜衣の弱さへと突き刺さり、嘗ての決意を跳ね除けさせて、亜衣を阿蘇へ奔らせてしまったのだ。

申し開きの仕様もなかった。ただ一度、衝動に駆られ先走ってしまえば、あとは堰をこえる高波も同然だった。

あふれ出す情緒を、止める術などなかった。

「私は、九峪様にご恩がある」

前後の脈絡なく、藤那は静かに言った。

押し黙る亜衣が視線を上げると、それまでもまた違う表情の藤那と、両の眼が重なった。

亜衣は頷くことも、頭を振ることも出来ず、ただ藤那の瞳に吸い寄せられていた。

「謀反人となった私を、九峪様は赦してくださった。我が首を刎ね

んとする伊雅様を押し宥め、この命を救っていただいた。それどころか、没収されて当然の火後の領地さえも安堵してくださった」

真耶麻台国として謀反の旗揚げをして、遠征軍の撤退と同時に、藤那は共和国へと帰順した。謀反の咎で罰せられることを覚悟した藤那を迎えたのは、九峪の寛大な心だった。

罪を問わず、裁きも下さず、知事を認め、火後を安堵した。以前と同じく遇したのだ。

拍子抜けしたといえ、それこそが正直な気持ちだった。一夜の夢を見ているうちに犯した罪を、九峪は苦笑しながら赦した。

生来、感謝という心情から程遠い藤那が、初めて感涙をこぼした。

この涙こそが、また周りの者たちをも赦し、藤那は火後知事として共和国に戻ってきた。

藤那には、九峪への多大な恩があった。一生かけても返しきれないであろう恩だ。自己中心的に人生を送っていた藤那が、生涯を他者のために捧げ使うことを己に架した瞬間だった。

「その九峪様を、私は監視している。評定衆から外し、政から遠ざけ、阿蘇へと押し込め！ 仕方がないとは言え、恩を仇で返すようなことを私はやっているんだぞ！ もう腹いっぱいだッ！」

多少、酔っているのだろう。藤那の声が徐々に荒くなっていく。言葉の胎のそこから吐き出すうちに、感情を抑制できなくなっていた。

今にも亜衣の胸元へと掴み掛からんばかりの勢いだ。

「そのうえ、お前は、何をするつもりだ？ 九峪様を阿蘇へ移したのはお前だろう。九峪様を政から遠ざけ、人目から消し去ったのも、お前の考えだろう！」

ガチャンッ

藤那がにわかに身を乗り出して、亜衣にズイツと近づいた。膳があるのもかまわないほど、気が高ぶっていた。

転がる杯や椀を気にも留めず、藤那の手が亜衣の襟元へと伸びてゆく。亜衣は逃げることにせず、身動きひとつとらなかった。

麻縫いの襟をつかんだ。躊躇いなく引き寄せられた勢いで、亜衣の体も前のめりとなり、両の顔がこぶし一つ分の間を空けて急接近した。いま少し近づけば、唇がふれ合いそう。

互いの息遣いさえ、鼻先や唇に吹きかかる距離。藤那はやや興奮して頬が赤く、息遣いも忙しげであった。熱い、と亜衣はかすかに感じた。熱を帯びた吐息が、亜衣の頬をも高潮させた。

ただ、亜衣の眼は冷静さを失わなかった。藤那の言葉、一言一句とて、感情に任せて聞き逃すまいと見張っていた。

藤那は怒っていない。恨んでもいない。それが、藤那の燃えるように熱い視線からもわかった。藤那はただ心配しているだけだった。

それがわかるから、亜衣は、突然つかまれても動じず、怒りも感じず、ひたに藤那の言葉を待った。

「・・・・・・・・おまえが」

「・・・・・・・・」

「おまえが、九峪様のことをお慕いしていることはわかっている。その心の中では、あの方が日輪の如く眩いているのだろう・・・・・・・・」

息をのんだ。自覚していても、他人から言われてみると、また衝撃を受けるものだ。

たしかに自分は九峪を好いている。それは認めるところで、認めざるをえない。いや、好いているさえ緩いだろうか、私は愛している。でも、それを他者からはつきり言われるとは、ずっと思いもよらなかった。自分はいつだって、月であろうとしたし、事実そうであったと思う。

太陽の影たる月の如く、日輪で輝く静かな偃月の如く。星華や清瑞のように、あからさまな好意を見せたことはない。明けの明星と違い、月はいつだって太陽と離れ離れた。

けど、そうか。誰の目にもわかるほど、私は、九峪様を想っていたのかもしれない。隠せないほど、焦がれていたのかもしれない。

だから

「そのお前が、九峪様の不遇を覚悟してまで、阿蘇に御動座し奉った。時の流れが全てを赦し、たとえ元に戻ることはなくとも……
……また会える日が来ると」

「……………」

「だから私も賛同した、今のうちだけの辛抱だと、己に言い聞かせた。この罪の片棒を担ぎ、共犯となり、すべては未来のためとツ……
……！ 私の苦しみがお前にわかるかッ！？」

亜衣の体が震えた。指の先一つ動かせない、まるで得も知れない神掛かった力に縛られているような。

いつか、藤那の手が二の腕を握り締めていた。痛い。

「私だけではない、伊万里の表情を思い出せ。お前の話を聞いたときの、あの怒りようを！ 香蘭の悲しげな瞳も、女王の憂いた嘆きもッ！ 全ては報われる日が来ると信じたから……………お前がそうだったからだッ！」

「……………アッ」

布越しに、爪が肌を突き破ろうとしてくる。興奮している藤那は、自身の力を抑制できていない。

痛み顔を歪ませても、藤那には見えていないようだった。食い込む爪は緩まず、亜衣は思わずうめいた。

でも跳ね除けることはしなかった。してはいけなかった。

苦痛に耐えながら、瞳だけは外さない。

亜衣に劣らず、藤那も苦しそう。

「……………私たちだつて、九峪様に会いたいんだ。謝りたいんだ。しかしそれすら赦されない状況が今だッ。耐えなくてはならないのに……………なぜ待てない？ 待つと覚悟したから、お前は決断したんじゃないのか!？」

「それは……………」

その通りだ。覚悟した。でなければ、神の遣いを幽閉するなど畏れ多いことはすまい。

出来ると思つたのだ、あの時は。

言葉に窮する亜衣から、藤那は力なく手をはなした。疲れたような表情で、腕が垂れるように下がっていく。

「……………九峪様を阿蘇へお移したあとの清瑞は、ひどかつたな……………。あんなに取り乱した清瑞を見たのは、初めてだった」

ぽつぽつと、藤那が語る。回顧の先は、九峪が姿を消した直後の情景。亜衣の記憶の扉も開かれた。

「乱波が、泣いて叫んで……………まるで狂人のように成り果てて。さすがの私も、胸が押し潰される思いがした」

九峪を動座させてすぐに、亜衣たちはふれを出した。事実を知って

いるのは女王と天魔鏡の精、以下に大將軍、宰相、大臣、知事のみであった。將軍職にある音羽や衣緒、乱波の棟梁たる清瑞は何も知らなかった。

誰もが動揺し、啞然呆然とした。九峪の信奉者だった音羽の取り乱しよりもすごかったが、清瑞は気でも触れたのでは思っほどこにうろたえた。

「なぜ、どうして」と阿呆のように繰り返し、人相は死化粧しけわいを施したように悲壮で、それが四日も続いた。伊雅は事情を知っているために、四日の間、飯も喉を通らぬほどに心配していた。

案じた亜衣が弁達者の紅玉に頼み込んで、清瑞を薩摩へしばし療養させにいった。そこで紅玉に諭された清瑞は、三日を経て帰ってきた。澁刺とはとても言えないが、持ち直した面に、伊雅も亜衣も安心したものだった。

そう。乱波であるはずの清瑞は、九峪を慕うあまりに、あのように狂騒となってしまった。差はあれど九峪の突然の消失は、それほどの衝撃を近い者に与えたのだ。

「お前だけではない……なぜそれがわからないッ」

搾り出すように藤那が吐き捨てた。亜衣は何も答えられない。

ようやく静かになると、戸の向こうから慌しい足音が聞こえてきた。戸が勢いのある音を立てて開き、孔菜代が飛び込むように部屋へと入ってきた。

「藤那樣ッ！」と、叫び声をあげた。騒ぎを聞きつけて、駆けつけ

てきたのだ。

藤那は手を振って「なんでもない」と吐いた。孔菜代は散らかった部屋の惨状と、亜衣を一瞥すると、黙って戸を閉め足音を遠ざけていった。

水をさしたような静けさが戻った。藤那は云いたいことを全て吐露して、もう言葉が残されていなかった。ただ、すっきりした表情ではなかった。

膳は散らばり、酒は床をぬらしている。亜衣の衣服の裾がじつとりと酒を含んでしまっていたが、亜衣はもう気にする余裕もなかった。

「・・・・・・・・わたしは」

口を開いても、何も言葉は出てこない。ただ何かを言わねばと思っただけで、その実、言うべき言葉など何もなかった。

なかったけど、それでも何事かを言うとするば、それは　　なんだろうか。

わかったと言えいいのだろうか。わかった、もう行かないと。それが正しいのだと思う。でも、違うといえ、違う気もする。

改めて、他人から言われると、無様なものだな。

行いだけではない。亜衣をそう足らしめた恋心を含めて。

自分が、ここまで理性に反発することが、あっただろうか。これからもあるのだろうか。

「亜衣・・・・・・・・」

「・・・・・・・・はい」

宙を仰いだ藤那の、吐息のような言葉。不思議と、亜衣の耳になじんだ。

「お前の想いを否定するつもりはない。邪魔するつもりもない。だが、自分の選択を、決意を、覚悟を・・・・・・・・反故にするような真似だけはするんじゃない。お前の言葉を、私たちは一縷に希望した。・・・・・・・・わたしたちの気持ちも、無駄にするような真似だけはしないでくれ」

「・・・・・・・・はい」

「今は、一挙手さえ慎重になるときだ。北山もそうだが、武官たちがもつとも怖い。事態は奴等の予見した通りになって、正しかったことが証明されようとしている。このうえ、九峪様の存在を知られては・・・・・・・・全てが、無駄になろう」

視線を、亜衣に向ける。藤那の瞳が、さながら青い炎を滾らせているように、亜衣の瞳には映った。

「知られてはならない。商人、職人、百姓、役人、豪族、大人子供の区別なく・・・・・・・・どの全てにもだ。わかるか、亜衣、神にすら知られてはならない。それが今生に背負った我らの罪科だ」

「・・・・・・・・心得て、おります」

「ならば亜衣、今は耐えろ。お前こそ辛抱しなければならぬと知れ」

亜衣は頷いた。その場限りの首肯ではない、本心から首を振った。

何をどう言い繕うとも、亜衣が首謀者であることに変わりはない。藤那たち知事はそれに同意した以上は共犯で、同士である。

それを裏切ってはならない。亜衣は模範とならなければならなかった。一時の感情に任せ、仕方がないと甘えていいわけがなかった。

ずっしりと、重みを感じた。亜衣の挙動の一つ々に、共和国の未来が掛かっているといっても、もはや過言ではないのだ。

天命に継る前に、人事を尽くさねば。九峪に甘え頼る前に、己の使命を全うしなければ。

床をつく手に、力が入る。覚悟の握りこぶしだった。

九峪様……しばしの間、お伺いできそうにありません。亜衣にはやる必要があります。

第12回 「目前の敵」

風ナク、音ナク。

藤那と亜衣が、互いの心のうちを開かした翌朝のようすを、九洲の歌人がこの二言で表現した。明朝、人はまだ眠り、風さえも夢うつつのような　と、この歌人は起きぬけに思ったそう。朝の静けさを詠った。

清瑞が薩摩へ三人目の乱波を送り込んだのが、このときであつた。乱波は韋駄いたという名前の少女で、健脚が自慢であつた。

真姉胡が天目に従つて西日本制覇に乗り出したため、政所は情報の入手に難航するようになっていた。韋駄は十四歳と若く、また小者であつた。真姉胡の不在をみごとに埋めた。

ホタルの本拠地ともいえる清瑞の屋敷をたつて、韋駄の足は、その日の夕暮れにはもう薩摩へと到着していた。韋駄の情報伝達速度は真姉胡にも、ましてや清瑞にも劣らない。

ところで、韋駄は倭人ではなく漢民族だ。まだ倭国語は不慣れなため、もっぱら手紙など『物』を運ぶ任務が多い。このときも亜衣から預けられた書簡を、知事の香蘭へと届けにきたのだ。

香蘭は韋駄を気に入っている。何しろ大陸の言葉が通じるのだ。香蘭の場合だけ、韋駄も口頭で用件を伝えることが出来た。

韋駄がきた、と、それだけで香蘭はわざわざ応接してくれた。紅玉も出迎え、韋駄にとつては畏れ多いことである。韋駄の出は卑しくも卑しく、香蘭母子とは地位に雲泥の差がある。

それを気にさえしないことが、この親子の魅力であつた。

書にはまず香蘭が目を通し、ついで紅玉がそれを読んだ。韋駄は内容を知らず、これだけは紅玉も教えることはない。残念ながら、口頭で伝える事柄でない限り、それは機密扱いなのだ。

「韋駄」

香蘭が呼び、韋駄はすかさず返事した。

「重然が海に出ています。小船に乗って重然と合流し、詳しい情報を持ち帰るようにとのことです」

倭国語を話すときと違い、懇切丁寧なしゃべり方だ。香蘭は流暢な漢語で韋駄に令を与えた。

「他にいいつけはありますか」

「いえ、貴女に関してはこれのみです。あとは我方で請け負う由に」

「かしこまりました」

韋駄はすぐに香蘭から令状をたまわつて湊へと赴いた。鹿児島城から錦江港の湊町までも相当な距離だが、韋駄はかまわず駆け抜けた。

一日の間に、耶牟原城から火奈久城、そして鹿児島城を経て薩摩半島の南端まで走破した。

韋駄を見送った香蘭は、面白そうに笑顔を浮かべて、南の空を見上げた。

「ゆっくりしていけばいいのに」

韋駄の慌しさがおかしかった。共せる菓子などはないにしろ、せめて、休んでいつでも罰は当たるまいに。

「でも、それだけ急いでいるのかも。韋駄のほかにも、乱波が二人、薩摩に入っただけで聞くし」

あまり宜しいと言えない頭で香蘭は考える。年月を重ねたといえ、漢語で話せば別人かと思えるほどとはいえ、香蘭は『所詮』香蘭なのだ。

全開と引き続き、愛染、侘吉の二人の乱波も、一足速く薩摩へと足を運んできていた。香蘭は直接は会わなかったが、また潜入調査でもするのだろう。

韋駄はただの伝令として送り込まれたのだろうけど、亜衣が事を大きく見ていることは、さすがの香蘭にも予想ができた。

「私たちは、本当に何もなくていいのですか？」

香蘭が母に尋ねた。薩摩を預かる知事として、ここで傍観を決め込むことが、香蘭にはむず痒いほどもどかしかった。

私たちも全面的に動いたほうがいいのではないか？　そう香蘭は問うが、紅玉は必要ないと応えつつけた。

「言っただしよう、香蘭、海のことは海の人に任せればよいと。我らには我らの仕事があります」

紅玉には気がかりなことが一つあった。北山も最重要だが、紅玉はそれとは別に、もう一つの問題に目を向けなければならなかった。

「時の流れは、いつでも一つにまとまり、繋がっているもの……それを延ばすも、絶つも、今を生きる私たち次第」

すべきことは決まっている。決めている。方針は定まっている。

紅玉にも香蘭にも、全力を傾けて成さねばならぬ事柄があるのだ。

日、いよいよ照りにけり。水、いよいよ涼やかなり。虫、ますます鳴きにけり。人、ますます盛んなり。

九州の太陽は、日ごとに熱を帯びていくようであった。ただそれが日照りを招き、旱魃を起こし、人々を飢饉に飢えさせる事はなかった。ただ暑いだけで、恐ろしく暑くはなかった。

人、ますます盛んなり。

亜衣は忙しかった。蘇羽哉はよく働いてくれているが、零れ落ちる仕事も少なくない。残務というには大きすぎる残務を、亜衣は庶事

諸々の片手間に捌いていった。大規模な工事などを片手間に片されていると知事たちが知ったら、はたしてどう思うだろうか。

人が変わったようだと、宮の人々は袖越しにささやいた。政務に、交易に、外交に　心血を注ぐさまは、いったい何があったのだろうと、官から小間まで、小首を傾げるほどであった。

藤那に叱咤されて、亜衣は吹っ切れていたのだ。自分を見つめたことで、やるべき道が定められただけであった。

ただ、亜衣はそれらの仕事と同時に、自分が起こしてしまった噂の火消しにも腐心せざるをえなくなっていた。

蒔いた種から芽吹いた草を、他の誰かに刈り取らせてはならない。このまだまだみじかい萌芽には、自分と九峪の文字通りの生死がかかっているのだ。

噂の広まる範囲は、およそ中原から以南である。中原は九州のほぼ中央部を指し、火後全域、豊後中央、火向北部を含めた総称である。これより北は『北洲』^{ほくしゅう}、南を『南洲』^{なんしゅう}と、古くから呼んでいる。

つまり中原と南洲が噂の跋扈する地域である。火前方面にも、在明海を渡って噂は飛び火しかけていた。

まるで、あのときのようだ。

火消しをしながら、亜衣は苦々しく思った。これではまるで、元星四年に起こった武官と文官の対立のようではないか。

内容が、ではない。危険要素が言葉に乗って広がっていくこと、に

対してだ。またも災いは人の口から始まっている。

晴天の日、亜衣は久々に遠出をすることになった。目的地は薩摩県。重然に会いに行くのだ。

乱波を放って七日が経っている。韋駄はあくまで緊急時の伝令として送り込んだもので、亜衣はもとも、一度は重然の元を尋ねようと考えていた。

天候を占い、それにあわせて仕事を調節し、部下たちに押し付け振り分けるなどして、余裕ある時間を捻出した。

数ヶ月ぶりに、亜衣は飛空艇の管理庫へと向かった。

衣緒も連れて行こうかとも、それはやめることにした。今回は空の旅、荒れていないし、敵もない。

お粗末に立てられた戸は、すぐに飛空艇が飛び立てるようという工夫である。湿気などで機体が傷まないように、保管庫は土作りの土蔵である。

亜衣が建物に近づくと、人の気配がした。話し声が聞こえる。一人ではない、少なくとも二人いる。

整備でもしているのかもしれない。それならば機体の状態も良いだろうと考えながら、亜衣は戸を外して中をのぞいた。

「……………羽江？」

珍しい人間がいた。そこには羽江がいたのだ。もう一人いると思っ

たのは、音羽であった。

羽江も声に気づいて振り向いた。目が合ったとたん、羽江は嬉しそうに顔をほころばせた。

「お姉ちゃん！」

声を上げた羽江が、亜衣の元に駆け寄ってきた。その後ろを音羽がついてくる。いつもの甲冑は付けておらず、いかにも涼しそうな格好をしている。

羽江はもう 歳である。恋人もあり、現在は技術開発の研究機関のようなところで働いている。無論、使う側ではなく使われる側だが。羽江に所長などを任せたら、三日で組織は崩壊する。いや、三日持てばいいほうかもしれない。

大人になっても、羽江にはそういった『上に立つ』資質といったものが明らかに欠如していた。なぜか感性が子供のままいまいち成長していないのだ。ただそれは『馬鹿』と言う意味ではない。思考や概念、常識のベクトルが他人と明らかに違っていた。

その羽江は、もっぱら所属する機関で日夜研究に明け暮れている。住まいもその近くに建て、亜衣や衣緒とは滅多に顔をあわせなくなっていた。

最後に会ったのは、半年前かもしれない。それだけで変わるはずもないが、亜衣は、羽江の肉体を見るたびに複雑な気分になる。

二人の姉と違い、羽江の発育は良好だった。いうと失礼な言葉だが、
…… 本当に姉妹かと思われるほど、出るところは出て、締ま

るところは締まった、メリハリのある体つきになったのだ。

「どうしたんだ？」と、亜衣が尋ねると、羽江はなお笑顔のままで、
「たまには、この子たちも面倒も見てあげないとなあって思っ
てね。人任せにしていると、ちよつと不安だし。それに」

「それに？」

「なんだか、お姉ちゃんが使いそうな気がしたんだ。だから、不備
や整備不良がないか調べにきたんだよ」

えへへ、と笑う羽江に、亜衣も優しい笑みを浮かべて見せた。素直
に、妹のおもいやりが嬉しかった。

羽江は巫女として、きつと何かを予見していたのだ。それは亜衣が
飛空挺でどこかへと向かうことで、そのために羽江はわざわざ飛空
挺の整備のためにやってきたのだ。

別に亜衣が、何かの事故に遭遇する場面を予知したわけではないだ
ろう。それでも万が一のためにこうやって来てくれた。普段は疎遠
でも、ふと現れて力を貸してくれる妹に、亜衣は感謝の気持ちで胸
がいつぱいになった。

こういうとき、きつと九峪なら、頭をなでたりして感謝を表すんだ
ろう。しかし亜衣にはそうする機敏の細やかさはなく、ただ「あり
がとう」と答えるだけしかできなかった。

それでも、羽江は嬉しそうにしてくれた。これが姉妹なんだと、亜
衣は暖かくなる思いだった。喧嘩することも多いけど、これが姉妹

の絆なのだ。

「亜衣さん、どこかにいかれるのですか？」

音羽と会うのも久しぶりであった。尋ねられて、亜衣は柄にない自分を隠すように、眼鏡の縁を指で押し上げた。

「ああ、薩摩へいかなければならない」

「薩摩………薩摩、ですか」

途端、音羽の瞳が曇り色をした。羽江も薩摩と聞いて、にわかに関の色が変わった。

薩摩で何かが起きている。という風聞は、耶牟原城にも聞こえていた。北山という呼称はまだ聞こえていないものの、重然が鳳凰符を得、火魅子の院宣があり、乱波が放たれ、亜衣も一度だけ薩摩を訪ねた。

不穏な空気というなら、申し分ないはずだ。武人としての音羽の感覚が、ただならぬ気配を感じ取っていた。

ただの海賊じゃないッ！　そうとさえ、音羽はすでに思っているのだ。不謹慎かもしれないが、音羽は少しだけ、自身の血が滾っているのを感じていた。戦いを求めている。

ただ、音羽には、薩摩へと参じることのできない理由があった。実は先立って起こった武官と文官の対立の中で、音羽も文官によって粛清された一人なのだ。

音羽は九峪のシンパサイザーであり、その先鋒であった。九峪は武官を中心にシンパの支持を得ていたが、九峪が政治から身を引いたことで武官が発言力を失って、肅清されてしまったのだ。

音羽は、性格的には左翼の人間であった。しかし文官の発言が次第に、九峪の地位を貶めるようなものに代わっていったことを憤り、右翼派に転じてしまったのだ。

そのため音羽も肅清を受け、都を追放されるはずであった。ただしこれは、曲がりなりにも音羽は九峪の親衛隊を預かる身であったこと、温厚な正確を慕うものが多かったこと、そして亜衣や伊雅などの介助もあって、位を三降格されるに留められた。しかし事実上、音羽は発言力を失っていた。

ために、今の音羽は飼い殺しの状態であった。最近では兵の鍛錬のみが、音羽に与えられた仕事であった。

暇がちな日常を送っていた音羽を羽江が見つけ、整備を手伝わせようとつれてきたのだ。分解するときはどうしても力のある人間が必要で、音羽は昔からたびたび、飛空挺の整備を手伝っていた。

音羽は後ろを振り返って、ひっそりと佇む飛空挺を見やった。亜衣さんは薩摩に向かう。私もいきたい。

しかし音羽には力がない。権限がない。言葉がない。自分はいま、四肢を切られた虎、翼をもがれた鳥、跳ねることのできない兎も同然でしかない。

音羽は諦めるしかなかった。きつとついていても、迷惑にしかないかもしれない。亜衣には助けられたのだ、これ以上の迷惑は

かけられない。

「・・・・・・・・一番と二番が使えます」

だから音羽は、せめて何かをと思い、こう言った。音羽の葛藤を知ってか知らずか、亜衣は小さくうなづいた。

亜衣は二つを見比べて、一番の飛空艇を選んだ。飛空艇は過去三度にわたって改修され、現在の飛空艇は大型と小型の二種類が生産されていた。

一番は大型の飛空艇である。長距離移動を主眼に置いた設計で、横長い翼が特徴であった。安定性を重視したつくりで、ある程度は風の流れにまかせて飛ばせるため、術者の負担が少ない。

格納庫から滑走路は直結している。格納庫の出入り口からそのまま飛びたって行くこともできる。亜衣が身体を機体に固定させると、何や袋をもって羽江が近づいてきた。

「お姉ちゃん、これ」

「これは？」

「新発明の試作品。『発炎筒』っていつて持ち運びのできる狼煙」

狼煙、ときいて、亜衣のこめかみがピクリとゆれた。

「・・・・・・・・爆発したりしないだろうな」

しそうで怖かった。

「もう爆発はしないよ。まだ完成はしてないんだけどね、それを重然たちに使わせて、実戦で有用かどうかを試したいの」

「……重然は実験台か。可哀相に」

「お姉ちゃん……ちょっとひどくない、ソレ？」

羽江が頬を膨らませるのを見ても、亜衣は悪びれた様子もなく、考えを改めるつもりもなかった。ただ一心に、この『發炎筒』とやらの爆発で、犠牲者が出ないことを祈るのみである。

「しばらく、薩摩におられるのですか？」

音羽が尋ねた。

「いや、すぐに戻ってくる。早くて明日の夜……遅くても三日以内には戻ろうと思う。私がいないと、さすがの蘇羽哉たちも案じるだろうからな」

苦笑しながら答えると、すぐに方術で風を操り、飛空挺はふわっと重さを感じさせない羽毛のような軽やかさで浮かび上がった。

音羽と羽江が数歩の距離を開けると、飛空挺は土ぼこりを舞わせて隼の如く天空を突き抜けていった。火山の噴火に似た轟音を置き去りにして、瞬く間に大きな翼は見えなくなった。

風圧に飛ばされないように羽江をかばいつつ、音羽は、亜衣の飛んでいった空を見上げた。

「・・・・・・・・いつちやつた」

腕の中で羽江が囁く。「相変わらず上手だなあ」と、やはりどこか嬉しそうだった。

亜衣が耶牟原城を出たのは昼前のことで、到着したのは四時ごろである。日はまだ高い。

まずは薩摩の荘園におり、最初に香蘭の屋形を尋ねた。挨拶を済ませると、そのまま今度は海へと飛んでいく。重然はいまだ、海の上だった。

はるか上空から真下をのぞくと、大きな集落が広がっている。錦江港の湊町である。湊町は十数理にわたって点在し、それらを総称して『錦江港の湊町』と呼んでいた。

人間が豆と同じ大きさに見える。細々と動く豆たちは、ひどく数が少なく見えた。

しばらくして、陸地がなくなった。砂浜を越えると、もうそこは青いだけの世界だった。下も、上も。

空たかくても、潮の匂いが亜衣に海を自覚させた。

白波が瞬く間に過ぎ去るのを視界の端に捕らえながら、亜衣は首を左右に巡らして艦隊の姿をおった。高度はそれなりにとっているから簡単に見つかると思ったが、なかなか船の在り所がわからない。

さらに半刻ほど探すと、ようやく海上に船の姿を見つけた。八席ほどが、小島のように浮かんでいる。亜衣は小島に向かって緩やかに旋回しながら降下していった。

「飛空挺だ！」

そんな叫びが聞こえてきた。甲板の兵士たちが騒いでいる。重然が指示を出して、飛空挺の着陸できる場所を確保させた。

飛空挺の軌道を徐々に狭めていき、船に急接近したところで、飛空挺は離陸と同じような羽毛の軽やかさで降り立った。

「・・・・・・・・ふう」

着地の微振動を感じて、亜衣は息を吐いた。身体を固定する皮のバンドを外しながら、情けないと心の中で苦笑する。

長距離移動に適した飛空挺を使って、三刻（約六時間）ほどの飛行でこつも疲れてしまうとは。ちよつと飛ばなくなるとすぐこれだ。

「亜衣様ッ！」

重然が駆け寄り膝をついて出迎えた。それにならつて、兵士たちも膝をおつて傳く。恐れ多くも、目の前におわす方は耶麻台共和国の宰相である。

兵士たちが見守る中、亜衣は重然をたたせて船倉へと招かせた。二人の姿が見えなくなっても、兵士たちは水を打ったように静まり返っていた。

竜神丸の船倉は八つある。甲板に四室分の小屋を備え、船内にさらに四室の、二層構造だ。重然はふだん軍議に用いている上の一室へと亜衣を誘った。

床机へと腰を下ろし、二人は対面した。

「亜衣様、いつたい、どうなさったんで？」

口火を切ったのは重然であった。亜衣の突然の来訪に、心底おどろいているようだ。

亜衣に限ったことではないが、重職につくものが来訪するときは、前もって先方にその旨を伝えることが通例であった。来るとわかっていれば、迎えの準備ができるからだ。

今回の亜衣は、重然が海上にいるだろうと予想したから、事前に知らせることをしなかった。直接うみに出られるように飛空艇を使ったのも、こつゆう理由があった。

尋ねられた亜衣の表情が、恨めしげに歪んだ。

「聞きたいことは色々あるんだが……まずは何から問うべきかな」

冷たい声音に、重然は背筋が凍りつく思いがした。よくわからないが、どうやら自分は、知らない間に亜衣の逆鱗に触れてしまったらしい。いや、もしかしたら筆りとしてしまったのかも……。

「あの、亜衣様？」

「よし、重然」

「ハイッ！　なんでござえますか」

ピンツと重然が背筋を伸ばす。

依然、冷たい瞳が巨軀を貫いている。

「この物々しい艦船の数は、いったいなんだ？」

「なんだと、申されましても……伺ってないんでござえますか？」

「聞いてないな、そんな話は」

重然はまたも仰天した。そんな馬鹿など、開いた口が塞がらなかった。

亜衣が知らない。薩摩では民衆ですら戦々恐々としているのに、上方の亜衣は詳しい情報を得ていない。

その事実には重然は愕然としたが、すぐにハッと目を見開いて、

「文官……」

と、掠れるように呟いた。

重然は事の次第を『正式』な形で耶牟原城へと報告していたのだ。そういう義務だからであり、責任があったからである。

だが、下から送られた情報を、文官たちが指し止めたのだ。薩摩の問題は薩摩の問題であり、国政を司る文官や役人には関係がない。……彼らは本気でそう信じている。

ゆえに、文官の頂点に君臨する亜衣の手を煩わせるべきではないと、あえて情報を握りつぶした。そうとしか考えられない。

もちろん、これはすべて中間職にある者たちの独断行為である。罰せられなければならないが、共和国には政治に携われる人材が限られている。簡単に罰し切り捨てるわけにもいかない事実がある。

国家の中枢での亜衣は、その地位とは裏腹に、部下たちによって一部の活動を制限されているのが現状であった。亜衣が蘇羽哉を大臣にしたいなど、人材の育成に力を入れる理由も、自らの行動の制約を取り払う目的があった。

文官の専横を現状で圧しとどめることは難しい。重然の送った情報を文官が握りつぶしてしまう以上、文官の干渉を受けない乱波に情報を収集させるしかないのだ。

「私が乱波を遣わしたのは、敵方の内情を探るためだけではない。入手した情報を、私のもとへ的確に伝達するためでもある」

「も、申し訳ありやせん」

自分が乱波を送り返したことが、返って亜衣には迷惑だったのだ。

重然自身、文官のことをあまり信用はしていない。しかしまさか、亜衣へと送った情報を握りつぶされるとは思ってもいなかった。

情報の重要さは重然も心得ている。しかし重然はまだ、乱波を間者
としか認識していなかった。情報伝達には、その役目を負った伝令
兵があり、乱波はその範疇外にあると考えていたのだ。そしてこの
考え方は、重然に限らず、多くの武人が抱いていた。

乱波を純粋な伝令兵として起用したのは、九峪が最初といってよい。
高い機動力に着目したこの運用方法は、後世の歴史を知る九峪なら
ではと言えた。

この運用法に早くから理解を示したのが、やはり学識ある紅玉であ
り、亜衣であった。

乱波の運用に関する指南をしてやりたいが、今の亜衣は、そのため
に来たのではない。いくつか、重然に対して注意をして、さっそく
本題にうつった。

まず亜衣は、文官に握りつぶされた情報を、重然から直に聞きだす
ことにした。

重然の説明は、

「北山の狙いは、同盟を申し入れるところにある」

ということから始まり、

「おそらく、今回の戦いは、交渉するための材料を手に入れるため
ではなからうか」

と推測し、

「中山とのいくさで疲弊した北山には、同盟を申し込むにあたって差し出す褒美を見繕う余裕がない」

と推測の裏打ちをして、

「そこで、軍事力とそれにもなう実力を示すことで、自国の有用性を誇示したい目的がある」

と結論付けた。要約すれば、『自らの戦闘力を見せ付けることで、無用に争わせることのないように事を運び、その上で同盟にこぎつけたい』………ということを、重然はいいたいらしい。

まあ、理屈としては、わからなくはない。財宝を差し出せないから、力づくで手を結ばせようとしている。威して言う事を聞かせようというのは、たしかに、交渉する上での方法の一つではある。

だがしかし、亜衣の表情はあまりにも腑に落ちない様子である。無理もない。理由があまりにも突拍子がなく、また荒唐無稽も甚だしい。聞くものによっては、鼻で笑われて終わりだ。

でも、重然にかぎって、そこまで浅慮とは思えない。重然を動かした理由が他にもあると、亜衣はその部分を知らなければならなかった。

「連中は死に物狂いで、それこそ一から十まで、打てる手はほとんど打ってくるでしょうや。調略の類はいまのところありやせん。ということとは、連中は戦闘で決するつもりだと考えられやす。商船を襲ったのは、おそらく物資の補給と、あっしらへの脅しのため」

「……ふむ、そういう考え方もあるな」

「ここにきて同盟を結びたいということは、琉球の本国は圧しに圧されている証。もしも勝っているのなら、こんな話はありません。滅ぶかもしれないこのご時世、島を占領した連中の士気が高いことは間違いありません。なんてたつて、九州との同盟が成立しなければ、祖国を失うわけですから」

「戦闘も止む無し、ということか。そうすると、連中は総力戦をしにかけてくるな。公然と戦い、これを破らねば、武威は示せまい。・・・逆に、正面衝突を避けようとすれば、みすみす敵に攻め込まれてしまう。向こうは勝ちさえすればいいわけだからな。だからこちらは、真正面から受けて立つ覚悟で、兵を出さねばならない」

「御意」

「敵の思いつボだな」

「・・・・・・御意」

この戦い、攻める側が圧倒的に優位だ。そしてこの場合、北山が攻め手で、薩摩は守り手である。

士気の高さは戦力と兼ねることはなく、北山の意気はすこぶる高い。もちろん、これはあくまで重然の推測でしかないが、これと似た結論を清瑞も導き出している。

そして亜衣も、北山の情勢が悪いと考えていた。重然の考え方には、納得できる部分も多いと考えていた。

万に一つも備えておけば、まさか劣勢にはなるまい。士気の高い相

手が攻めてくる時、守る側は良く守る構えをしなければならない。

「問題は、連中がどこを攻めてくるか」

重然の最大の悩みどころである。

薩摩の海といっても広い。

西は薩摩海峡

東は大隈海峡

とあり、敵はすくなくとも、

種芽島

硫黄島

黒島

を前線基地として展開していると思われる。いわば、全ての海域をカバーできるポジションすべてに、敵は拠点を有しているのだ。

そして、亜衣の言うとおり総力戦を仕掛けるためには、一箇所には戦力を集中させるはず。

それによって薩摩艦隊の動きも変わる。一箇所が攻撃を受けると、残りの二艦隊はすぐさま駆けつけなければならない。その間、三分割された戦力で、敵の全戦力を相手せねばならない。

『各個撃破』される危険があつた。たとえ二艦隊が健在でも、敵に薩摩上陸を許してしまえば、その時点で北山の勝利、薩摩の敗北となるだろう。

この三島のうち、敵が集中しているのは種芽島と黒島、どちらかだろうと予測した。もし硫黄島に展開したとする。迎え撃つは重然の指揮する第一艦隊ということになるが、ここで多少でも手こずれば、薩摩海峡と大隈海峡に展開している第二艦隊および第三艦隊が救援として駆けつけてくる。

これが黒島、種芽島からそれぞれ第二、第三艦隊への攻撃となれば話は違ってくる。第三艦隊を攻撃すれば、第一艦隊は間に合うが第二艦隊は一番遠路になり、その逆も然りとなる。

第一艦隊は遊撃艦隊として、敵の攻撃目標を知る必要があつた。その調査は、結局、乱波が行うしかないのだ。重然がそう決断しなければならなかったのだが、いちど返してしまったため、時期が遅れる結果となつてしまつていた。

「攻撃目標を特定した上で、海戦で撃退するしかない」

と、重然と亜衣は結論した。士気の高い敵に、分散された艦隊で応戦する。しかも敵は海戦の手練たる海洋国家。後手に回る上、激しく劣勢に陥ることは避けられなかった。

「そこで、たつての願いがあるのですが」

「………兵を増やしてほしい、か？」

「へい。薩摩の現行戦力は、全て海に出ておりやす。しかしこうな

ると、もし艦隊を突破されても、陸地で防ぎきる戦力がありやせん」
ズイツと、重然が膝を進めた。

「薩摩だけでもかまわねえんでさ。徴兵令をお出しくだせい。そうすれば薩摩の戦力は一千、いやさ千三百は増えやす」

「……増やしてやりたいのは、山々なのだが」

目を背ける亜衣の言葉に、重然は落胆して肩を落とした。宰相の亜衣ならば、と期待を込めていただけに、叶えられないと知るやその失意は大きかった。

亜衣を責めるつもりはない。亜衣には火魅子の綸旨や兵糧米などの面で、色々と融通を利かせてもらった。そういったことでも、重然は心から感謝しているのだ。

だが、今は何よりも人がほしかった。兵士の数が足りていなかった。そしてそのために、重然は勝ち目薄き戦いに身を投じねばならなかった。

九峪の遺した弊害、だろう。民主的でありすぎたために、国家としての融通があまりにも利かなくなり過ぎてしまった。戦争の蔓延するこの時代、動きの遅さは致命的であった。

もちろん、民主的とはいえ王政国家である。火魅子が一言命令すれば、それで事足りるわけでもある。ただし、『民主的』という未知の政治形態で自由意志を得た民衆は多く、またそれを嵩にきて上位者を『絶対』としない政治家も現れ、九洲はかつてほどの統率性を失ってしまったのだ。

そして最大の問題として、火魅子が九峪の意思を強く引き継いでしまった。もはや『民主的』はある種の呪縛となって、火魅子を縛り付けてしまっていた。

亜衣の一存で兵力を増やすことは難しい。いや出来ないと言ったほうが正しい。しかし事は急を要すると再認識した亜衣は、なんとか重然に意思に依えてやりたかった。

「・・・・・・確約は出来んが、なんとか火魅子様に取り次いでみよう。大將軍が動き、民衆に薩摩の問題を知らせることが出来れば、文官も文句は言えまい」

もうそれしかないと思った。混乱や同様が民衆間で沸き起こる可能性が高いが、背に腹は変えられない。

民意が全てを左右するなら、その民意を操るまでだ。その上では高官位がものをいう。所詮は一介の文官でしかない中間層は従わざるを得ない。

あとは、文官たちの不満をどう逸らせるかが焦点となるが、それはいま議論のときではなく、重然の気にするところでもない。亜衣は問題にあげず、まずは徴兵令を発布するに当たつての根回しをしなければならなかった。

重然がかつてに艦隊を編成したことへの憤りは、すでに亜衣の中にはなくなっていた。重然の意思を確認し、薩摩の置かれた状況も認識した今、重然はさらに気がかりな言葉を投げかけてきた。

「・・・・・・赤い竜？」

「ここんところ、度々あらわれるんでさ。霧の中から、ボワァツと」

「霧・・・・・・・・」

亜衣も海人の習性は理解している。霧の中に魔物が潜んでいるという思想も知っていた。

霧の中に棲む魔物は、ときには小さな魚であり、時には大魚であり、水かきのある人間、下半身が魚という人魚から、巨大な竜など、多岐にわたって信じられていた。このうちのいくつかは、一部で信仰を集めてさえいる、人智を超えた存在であった。

亜衣は見た事がないが、目撃談もいくつかある。遭難や転覆、船からの落下による水死などの海難事故は、海の魔物・妖怪が悪さをしているからだとされていた。

それらが海人に与える真理的恐怖は計り知れない。ともすれば、これは戦どころではないかもしれない。

「霧が出ていると、北山も迂闊には攻めて来ないかもしれないやせん。戦いは、霧の出ていない日、時間になるかと思いやす」

重然の推測は、そう判断した。亜衣もそうなるだろうと考えた。

しかし戦いの場が海である以上、将兵の心にはやはり『赤い竜』の恐怖がすくうはずだ。晴れていようがいまいが、それは関係ない。

「私が祈祷で、その赤い竜が現れないようにしてやろう」

考えた亜衣は、赤い竜を抜うことにした。亜衣も巫女であるから、魔物退治をするには打ってつけである。また、たとえ魔物などがないにしろ、巫女が御祓いをすれば、将兵も安心して戦えるはずであった。

「助かりやす」

重然が礼を述べた。さつそくといわんばかりに、重然は指揮下の艦隊に号令をかけて一箇所に集め、すぐに祈禱場を設けた。

このとき、亜衣は蜀漢の諸葛亮に倣って、小麦粉を練って丸めただけの饅頭を供え物として海に捧げ投げ、塩水を振り掛けた剣で魔を断ち、その剣を饅頭と同じく海に捧げて、赤い竜への慰みとした。

それと同時に、今度は別の剣に酒をふりかけ、

「天の火矛、宗像海神に捧ぐ。我らに加護を！」

宗像氏が信仰する八柱神・天の火矛と宗像海神に加護を祈願し、その加護の証として、船先の甲板に剣をまっすぐ突き立てた。

これを全ての船に施して、儀式は完了した。決して剣を抜かないようにと厳命した亜衣は、飛空艇で他の艦隊を周って同様に儀式し、日が暮れはじめてから薩摩の鹿児島城へと戻ってきた。

夜間の飛行は危険であるため、亜衣は薩摩荘で一泊することになった。重然の屋敷を借りてそこで一夜を明かし、明朝に耶牟原城への帰路となる。

その夜、亜衣は香蘭の屋敷に呼ばれた。来たときは挨拶もそこそこに飛び立ったため、ゆっくりと話がしたいという。亜衣は快諾して知事の屋敷へと向かった。

馬に乗って夜道に行く。香蘭の遣いがそのまま共として屋敷へ先導する。夜の街はコオロギの鳴声でたたたましいのに、なぜかひっそりと静まり返っているようであった。

「おお、きたか」

年甲斐もない幼い笑顔で香蘭は出迎え、紅玉は妖艶に微笑んだ。

奥の間へと招かれ、酒を振舞われた。贅沢を慎んでいる香蘭親子だが、この日ばかりはややほろ酔いに瞳を濡れさせた。

食事も終わり、しばしば会話を交わしながら、しずかに酒を酌み交わす。落ち着いた時間が過ぎていった。

紅玉は聞き上手であった。相手から聞き出す『受けの話術』が巧かった。亜衣は知らず々々言葉を吐き出し続け、気がついたら愚痴半分の祿でもない話すらしている始末であった。

さすがにこれはいけないと思った亜衣は、咄嗟に言葉を詰ませた。気まずい雰囲気を感じ始めても、紅玉がさかさず続きを促した。

催促される形になると、亜衣としても断るわけには行かない。恐る々々話を再開すると、また、夢の世界のような心地よさで言葉がポンポン飛び出していった。

半刻、一刻と時間が足早に過ぎていく。吐き出さずだけ吐き出したら、心の底に沈殿していたストレスともいうべきものが、きれいさっぱりなくなっていた。

「これは……羽目を外しすぎましたかな」

酒も一瓶を空にして、ほどよく身体も火照っている。ただ、まだ眠気を感じるほどではなかった。

苦笑しつつ、酒を脇によせる。これ以上の飲酒は、亜衣にとって最大の武器である思考を停止させかねない。

そろそろ帰ろうか。

足元が覚束なくなるまで酒を飲むことは、亜衣にとっては愚かなことにしか思えない。視界の揺れない、まだまだ余裕があるうちに帰るべきだ。

「……帰るのか？」

酒が強いほうの香蘭はまだ呑んでいる。大陸には『酔拳』という、酔えば酔うほど強くなるという、一見して意味不明の拳法があるらしく、香蘭はその使い手である……。らしい。本人がそう豪語しているのだが、香蘭に限って無意味な嘘はつかないはずだ。

香蘭に付き合っているのは深酒してしまう。そうなるまえに場を辞するほうが亜衣には良い。明朝には薩摩を立つ。飛行中に墜落など、考えることも嫌だ。

「夜分も遅いゆえ、私はここで……」

身を低くして、退出の礼をとる。

しかし香蘭が亜衣をしばし呼び止めた。

「帰る前に、話したいことがあるよ」

最後の一献を飲み干して、香蘭も酒を脇に寄せる。紅玉も同様にしていた。

親子の顔を交互に見比べた亜衣は、これがただの酒宴でないことを悟った。きつと二人はもとより、何か言うべき事があって私を呼んだのだ。

「なんでございましょう」

「実は、最近になって、気掛かりなことが起きたのですわ」

亜衣は小首をかしげた。紅玉が詳しい話を続ける。

「失脚したかつての武官たちが、薩摩に集まってきています」

「武官が？」

「私たちが確認を取っただけでも、三十八人が薩摩に入っています。おそらく、まだ増えるでしょう」

「いつからです？」

「発覚したのは二日前。ですが、それ以前から集まっていたようで

すわね。示し合わせてなのか、それとも偶然なのか……」

偶然、ということはない。紅玉の言葉を聴いて、亜衣はすぐに考えた。

示し合わせての集合かはわからないが、ただ意味もなく集ったとは思えない。おそらく、薩摩で起きている北山問題を見届けるために集まったのだ。

つねづね唱え続けた外威への警戒と備えを一蹴され、官位の剥奪までされた武官たちが、南の脅威に関心を持たないはずがない。

北山という存在は炎だ。赤々と、轟々と燃え盛り、それに引き寄せられる蛾のように武官たちが集っている。

彼らはただ集まっただけだ。誰かが舵取りをして呼び込むことはなかったはずだ。そうする理由が、少なくとも亜衣には見つけれなかった。

「その者たちは、一所に住まっているわけではないのですね？」

「ええ、住居はすべからく散っていますわ。集落を作る動きもありません」

「そうですか……」

ならば、大きな問題にはならないだろう。亜衣はホッと胸をなでおろした。

しかし、安心する亜衣とは対照的に、紅玉の表情はまだ固かった。

「懸念はあります」

まっすぐ向けられる瞳が、亜衣を射抜いた。

「知らない噂ではないはずですね。亜衣さん……身に覚えのあるご自身の噂、ありませんこと？」

「……やはり、お耳にはいつておりましたか」

「ええ、まことしやかに」

「まいりましたね」

藤那の言葉は本当だったようだ。藤那は火後・火向・薩摩で亜衣の不振な行動の噂が立っているといっていたが、紅玉の耳にも同様の話が舞い込んでいたのだ。

言い訳をするつもりもない。説教だろうが何だろうが、亜衣は謹んで受けるしかない。

しかし、紅玉は藤那のように亜衣を責めることはしなかった。かわりに、ただ気をつけるようにと、そのみを口にした。

「武官が阿蘇の九峪様に気づいてしまうことだけは、避けねばなりません。その程度のことは、言わずもなきことだと思っていますわ」

「心得ております。つい先日にも、手ひどくお叱りを受けたところですから」

冗談まじりの返答に、紅玉はクスクスと小さい笑いをこぼした。

亜衣が香蘭の屋敷を辞したのは、宵も深い、午の刻であつた。重然の屋敷まで見送られた亜衣は、泥に沈むように眠り落ち、明朝、日の出を見届けて耶牟原城へと飛び立っていった。

第13回 「海上の大火」

八月九日。耶牟原城に急報がもたらされた。

薩摩軍の戦力増強を推し進めるために、下部機関への根回しに奔走していた亜衣は、一報を受け取ると同時に表情を険しくさせた。

急遽、諸將に役人などの、現在耶牟原城につめている評定衆を火魅子の御名で召集した。

謁見の間に、宰相の亜衣、大將軍の伊雅を筆頭として、現大臣、長官、各將軍らが顔を並べた。

火魅子に代わって亜衣が、薩摩より届けられた書状を読み上げる。広い謁見の間に響き渡る亜衣の言葉に、評定衆は息を吞んで聞き入った。

「……殊に、語るも憚らしく候。八月七日、大隈の狭海にて薩摩の兵、北山と相まみえ候。敵の策略、采配、見事に候。重然旗下の兵、櫓を漕ぎに漕いで駆けつくも、間に合い申さず候。北山、薩摩の土を踏みしめ候。昼をちと過ぎた頃、薩摩、及ばず敗れて候」

誰も彼も、一言の言葉すら吐き出せなかった。重然が、薩摩が負けたという事実だけが、評定衆に重く押し掛かっていた。

八月七日。今日が九日であるから、戦いがあつたのは二日前となる。

敵は大隈海峡に出現したのだろう。第一艦隊と第二艦隊は救援に駆けつけるも遂に間に合わず、第三艦隊を突破した北山が、悠然と薩摩に楔を打ち込んだ。

さらに、亜衣は続けた。

「これを追い、攻め滅ぼすも叶わず候。敵の兵、剣弓を尽く下ろして候。兵休ませて候。戦うこと願わずと申し出候。ひとに語り合う儀、有りにと求め候。これを責め攻めるは、刀を持たぬ赤子老婆を甚振る事と相候。これに勝る非道、外法、寡聞に及ばず候。また天下に誉れ無き事、甚だしく候。薩摩某、決議の進退窮まり候。畏れ多くも君の言、賜りたく候」

上陸した敵に追撃をかけようにも、敵は武装を解除し、軍の動きを止めている。さらにこれ以上の争いは願わず、話し合いの場を持ちたいと言っている。これに対して攻撃をしても、丸腰を相手に殺戮をするだけとなり、あまりに非情で天下の謗りは免れない。どうすればいいのか一存にできず、女王の意思を伺いたい。

薩摩からとどいた書状の内容は以上の通りである。

この戦いは、双方どちらかが壊滅しなければ勝敗は決しない、という戦いではない。勝利に及ぶ条件があり、北山は薩摩に上陸すればそれが勝利となり、壊滅せずとも撤退させられれば、それで薩摩の勝利となった。

北山に有利な戦いであつたのだ、初めから。今にして思えば、黒島・硫黄島・種芽島にわざと艦船が見えるように配していたのも、こちらの戦力を分散させるためだったというのがわかる。

ただ前進すればいいだけの北山を相手にして、苦戦は免れないと、亜衣自身がわかりきっていたことだった。

評定衆は喧々囂々と言葉を飛び交わしている。発言力の低い武官が、珍しくも声を荒げていた。彼らは北山が重然の艦隊を負かせるほどの脅威だなどと、このとき初めて知らされた。

立場を弱くしているのは文官で、最初こそ武官の失態と罵っていたものの、戦に理解のない政治家は次第に言葉に窮していった。

「元はといえば、貴様らが兵役緩和をしたのが、敗北の原因だろう！」

將軍の一人が叫んだ。

たしかに、兵役緩和で全県の戦力は半分近くまで激減している。代わって産業・工業が隆盛となっているが、その実りは軍事力に転換されることはなかったのだ。

さらに、亜衣はなんとか薩摩に限って徴兵令を敢行しようとし、火魅子から院宣も受け取ったのだが、下部組織の動きがあまりにも散漫かつ中途半端であったため、結局、十分な兵力を集めることすらできなかった。

ここを責められると、文官としては反論できない。

評定は始終、文官と武官の誹謗中傷の応酬がほとんどとなった。しかし誰の目にも、文官の勢いが弱いことは明らかだった

進まない議論の中で、亜衣の胸中に苦い思いがこみ上げてくる。ま

だ建国から五年しか経っていないのに、共和制の限界がじわじわと現れだしていた。

九峪の世界は、それでも機能していたらしい。ではなぜこの世界で、こつも機能不全が起きてしまうのか。『時代が違う』といえそうなのだが、亜衣にはまだそれが理解できなかった。

しかし、うろたえるだけの評定衆を尻目に、この薩摩での敗戦は転機になるかもしれないと、亜衣の冷静な思考は分析している。

いま、目の前で文官が激しく責められている。だが、それも今だけだ。少しの時間が過ぎて、政の場に戻れば、再び息を吹き返してしまうだろう。

叩き潰すには今しかない。崩れた双方の均衡を元に戻すために、この機を逃さず、役所の改革を断行しよう。上位機関の指示に従順となれば、行動速度はもつと速くできる。

この時から、亜衣のもう一つの戦いが始まった。文官の首領とも呼べる亜衣自身の手で、役所の肅清とそれにもなう改革思想が芽生えたのは、まさにこの日この時であった。

ただ『上位機関に従順』という考え方が、そもそも九峪の提唱する政治思想から逸脱しているのだが、亜衣はそれに気づいていない。しかしそれも仕方がないことで、上と下しかない三世紀の階級社会で、ほぼ完全に近い平等感覚を理解すること事態、不可能なことなのだ……。

何かかもが、少しずつ歪んでいく。亜衣の理想、九峪の理想、そして九洲の運命も。

巨大な齒車は、重い音を響かせて廻りだした。八月七日、大隈の狭海で！

時は遡り、八月七日明朝。運命の日。

前日に小雨が降ったが、翌当日はまた猛暑日となった。ここ数日まったく雨が降っていないだけに、小雨でも海上の兵士たちは小躍りして、天空からの冷たい恵みに感謝を祈った。

乱波による二度目の潜入は難航し、結局くわしい敵の動静を探ることが出来なかった。ただし、海戦前夜（六日夜）に、帰還した侘吉が、

『翌日に行動を起こす模様』

と第一艦隊に報せてきた。重然はすぐさま薩摩海峡の第二艦隊へ愛染、大隈海峡の第三艦隊へ韋駄を送って、臨戦態勢を整えさせた。

「あとは、どこに敵が現れるか」

予想が的中したことで、重然の意気はいよいよ高まった。半信半疑だった敵も目的を、他ならぬ北山自身が証明してくれたのだ。

将兵も緊張を募らせている。いよいよ……戦いが始まる。

亜衣と話し合ったとき同様、敵は黒島か種芽島、そのどちらかに軍船を集結させているはずだ。しかし偵察船はこの期に及んで、敵の姿を発見できなかった。

注意を引き付けるためにあえて姿を晒していたのを、最近になってすっぱり隠し切っている。巧みであり、それが戦闘準備であることは間違いなかった。

硫黄島、という可能性も捨てきれないが、これは除外するしかない。どちらにせよ、勝利の鍵を握るのは重然の采配であろう。第二・第三艦隊、そのどちらにも駆けつけるための第一艦隊である。

出来る限り兵を休め、士気を蓄え、鋭気を極限まで尖らせる。薩摩兵は海の戦いに不慣れなものも多いが、九州一の精鋭部隊である。これは大きな強みであった。

「戦いは、霧が左右する」

霧がある限り、敵が攻めてくるとは思えない。もちろん、相手も祈祷をしていれば話は別だ。しかし濃霧の中での戦闘は危険極まりない。何よりも衝突が恐ろしいはずだ。

重然は、霧の晴れる午前九時以降が開戦の時として、しばし沈黙に身を浸らせた。

雨が上がって、霧が出てきた。

「今日も暑くなるな」

空を見上げ、ここしばらく続いている猛暑を思い起こす。昨日の涼しさが恋しくなるほど、本当に暑い日々が続いた。

この一戦を、最初で最後の戦いにしたい。もう海上での生活も限界だ。常に気を張り詰め、目を凝らして敵を探して……。休まる暇なんかありはしない。それが一ヶ月も続いた。

船酔いする兵士もいた。最近になって海の上にも慣れてきたようだが、はつきり言って軍団の体力は弱っていた。

前日の雨はまさに恵みだ。天が味方してくれている。

大隈海峡に展開している艦隊は、旗艦とする中型船が三艘あり、小型船十八艇、四人乗りの小船が二十八隻という編成である。

第二艦隊も同様規模の編成で展開している。重然の第一艦隊はこれより少しだけ規模が小さい。作戦上、第一艦隊は遊撃隊であり、主軍は第二艦隊もしくは第三艦隊となる。

海の上で陣は組めない。それぞれの豪族が各々に采配を振るって戦うのが、当時の倭国での海戦である。統率性はあまり高くなく、個々人の武勇に期待する面が大きかった。

第三艦隊を指揮する司令官は、安馬^{あま}という男である。安馬は『板倉党』を束ねる長で、壮齢で角ばった顔に細い瞳が特徴的な、薩摩の有力武将であった。

安馬の元には三人の豪族が指揮下に入っている。

弥栄の豪族、修理^{しゆじ}。郎党四百人。

火向との県境に勢力を張る小豪族、丁燕^{ちやうえん}。郎党三百三十人。

海神を祭る晃巳神社^{こうみじんじや}の巫女、鴛音^{とぎね}。

鴛音は正確には豪族の類ではないが、戦勝を神に祈願し、自らも方術士として参陣した。郎党はもたず、代わりに門徒の僧兵二百八十人と傘下の晃巳海人衆百五十人が付き従ってきた。

艦船の殆どは安馬と鴛音の提供による。

彼らも、かれこれ一ヶ月ほどを海上で過ごしていた。安馬、鴛音の勢力は海人系列のためまだいいが、修理と丁燕は内陸の人であるため、体調不良を訴えるものが多くいた。

遣わされてきた韋駄から情報を受け取ると、各棟梁たちは緊急に会して軍議を開いた。

総司令官の安馬を議長とし、戦闘に備える際の確認事項と対応が主な議論となった。

「明日、薩摩が大隈のどちらかが、いくさの場になる」

韋駄より伝えられた簡素な内容を、居並ぶものたちに告げる。

武将たちの間に緊張が走った。一ヶ月間、ひたすら張り詰めさせた戦意が、ここにきて遊びのない糸のようにピンツと張った。

「ここ（大隈海峡）に敵が現れれば、迎え撃つのは我々になる。その場合は、旦那の第一艦隊が援軍にくるまで、なんとしても持ちこたえねばならない」

「向こうの戦力について、何か書かれておりますか？」

鴉音が尋ねた。安馬は再び書簡に目を落として、

「……何も。ついぞわからなかったようだ」

「ホタルだ乱波だといっても、その程度のものか」

「尾をつかませず、頭もさらさず。数がわからなければ、戦いようもなかるうに」

敵勢がわからないことは、武將たちにとって最大の恐怖だ。

こちらの戦力は、一千三百余。援軍となる第一艦隊は八百。合わせて二千を超える。

対する北山は、まったく戦力がわからない。偵察していた乱波たちでさえ、船の正しい数を調べることが出来なかったのだ。

難破した漁師を装って潜入した侘吉は、彼らと生活する中で、その秘密を知った。北山は他の島へと頻繁に船を出して、その動きは絶えることがなかった。このため薩摩方は敵の戦力を把握できなかった。

「物見船を出したほうがよいのではないか？」

情報は必要だ。修理は自らの郎党から戦力を割いて物見を出してはと提案した。

安馬は迷った。敵の動向を探るには、今しか時間がない。しかし一部といえど、戦力を割くことへの不安がある。

決めかねる安馬に助け舟を出したのは、丁燕であった。丁燕は偵察をし、船が見えれば第一艦隊への救援を要請し、見えなければ急いで薩摩海峡へ進軍するべし、と説いた。

薩摩人は守りの戦いを好まない。丁燕はその性格が強く、ただ守るだけではなく、こちらからも能動的に動くべきだと考えていた。兵法書を読んだことはない丁燕だが、『先に動く』が独自諧謔の兵法であった。

鴉音も偵察に賛同し、安馬は種芽島へ偵察船を出すことを決定した。

小船を一隻だけ選別し、偵察に送り出したのは、二十三時のことである。松明を燃やさず、船は静かに宵の黒海へと漕ぎ出した。

小船には四人乗っている。いずれもいざと言ったときのために、思い鎧は装備していない。下帯で、皮の服を着込んだだけ。太刀を佩き、弓矢を背負っている。

三時間ほど波に揺らされ、四人を乗せた小船は、一里どころか一町先すら見えない闇の奥で、点々と見える灯りを探し出した。

灯りはまばらで、見間違いかと思うほどに小さい。しかしいくら小

さかろうと、この闇の中、不思議と印象的な光の点在であった。

「大隈が戦の場になる、迎え撃つのは安馬様の艦隊じゃ」

確信して、四人はそそくさと引き上げた。何かの拍子に見つかることも限らない。長居は無用だ。

物見の報告を受けた安馬たちは、一同に視線を交差させた。

戦場は大隈海峡。武将たちの胎は据わった。

こうとわかれば、後は戦力差の問題が残る。しかしこればかりは、もはやどうにもなるまい。大きな不安材料だが、知ったからとてこちらの戦力が増えるわけでもないと思い直し、気にすることをやめた。

「向うさんの攻撃目標がわかったのです。旦那殿と緒胡痴殿おこぢをお呼びしては？」

緒胡痴は第二艦隊の司令官を任されている男だ。鴉音は全戦力を大隈海峡に集結させたほうが良いと進言した。

兵力は多いに越したことはなく、いい案だと武将たちは考えた。そもそも不安だったのは、三分の一に分割した兵で、敵を一手に引き受けることだった。

その心配が解消されただけでも、暗黒に光明を見出した気分であった。

「いや、まてよ」

ここで、修理が一計を考え付いた。

「ただ集めるだけでは、どうにも拍子抜けだ」

「どういう意味だ？」

安馬の問いに、修理はニヤリと笑みを浮かべた。

「ここは一つ、九峪様にあやかってみようではないか」

「九峪様にあやかると？」

「左様よ。わしは兵法のことはさっぱりだが、九峪様のいくさ作法はよう覚えておる。敵の横腹をちよいとつついてやるだけで、おもしろいくらいに崩れたものさ」

「そうだったな。最初は負けるかと肝を凍らせても、いつの間にか味方の兵が増えていて、敵は慌てふためき、知らぬうちに勝ってたわ」

「旦那と緒胡痴の軍は、北山の横腹をつける場所に配するべきだと考える。わしらは所定どおりに敵と切り結び、頃合を見計らって旦那たちが突撃すれば、これで敗れるいくさには成るまい」

「良い。それは良いいくさだ」

得心した安馬が、一同を見回した。

「如何であろう、ぬしらは勝てると思うか？」

「ようございましょう、正面からただ戦うよりは、勝機もありましよう」

鴉音が賛同し、丁燕も肯定して見せた。

安馬は一つ頷いて、修理の作戦を採用した。韋駄が使者となって重然に事の次第を話すと、今度は佗吉が泳いで第二艦隊へと報告にいった。

すべての船が赤々と明かりだした。深夜だというのに火を盛大に熾し、米や麦、稗粟を炊きだして兵士たちを満腹にさせる。

「見張り以外は、みな眠れえ！ 鋭気を養い、明日の戦いに備えようッ！」

「油は一掬いたりとも捨てるな、火矢の燃料となる！ 湯も煮立たせておけ、それも明日には武器となるッ！」

酒も二杯まで振舞われた。どこも決戦前夜の熱気に当てられて興奮している。そこで鴉音が勝願の舞で鼓舞すると、みな死への恐怖を吹き飛ばしてしまった。

食らうだけ食らい、眠って、朝日が昇ってきた。海に浮かぶ太陽が、寄り添う夫婦か、仲の良い双子のようだ。

酉の上刻（明朝六時半）。

この時刻に、起きている人間は見張りしかない。甲板の上で寝こける兵士たちを横目に、見張りの男はあくびをかみ殺した。

眠いわけではない。見張りは百姓の人で、朝は早い。目覚めもさぶる良い。ただ、そこかしこから寝息やらいびきやらが聞こえてくると、こっちまで眠く感じてしまう。

霧が出ていたら、戦いにならない。霧が晴れたら、戦いになる。そう言い渡されていたため、兵士たちは油断していた。霧が薄く出ているからだ。

霧の中の魔物が、北山を寄せ付けぬ。こちらは亜衣が魔除けの祈祷をしてくれたおかげで安心である。

ところで、なぜ海人たちは霧の中に魔物が潜むと考えるようになったのか。

平安期から江戸期まで、民間には妖怪信仰と呼ばれる異色の信仰があった。それは神仏に捧げる崇拜ではなく、あくまで信じることで生まれる信仰であった。

妖怪とはもともと神である。日本の神とは皇族と仏教に関するもの以外の、八百万の神々を代表する、いわゆる精霊崇拜である。妖怪とは、いわば精霊が邪気をもった姿、または西洋で言うところの妖精に該当する。

妖怪は悪さを、妖精は悪戯をする。どちらも性質が悪く、場合によっては人が死に、人間にとっては迷惑この上ない存在である。これらの妖怪たちは、人間の悪行が生み出した妄想ともいえる。

川や沼の近くで遊ぶと事故がおきることがある。それを諫めるため

に、河童伝説が生まれた。

心にやましい思いを抱くと、それを他者に知られることを恐れる。そのことから、サトリ伝説が生まれた。

神社のお供え物を盗むことへの罪悪がお稲荷様を生んだ。

妖怪とは、人々の悪行を顕現し、行いを正す存在なのだ。ゆえに妖怪は悪であり、戒めであるのだ。妖怪を信じるということは、悪を断ち、己を見つめなおすことなのだ。

海人たちも同じだ。海人は霧を恐れている。濃霧の中では、舟同士がぶつかったり、知らぬうちに流れに流されて人気のない無人島に乗り上げ、座礁し、岸壁に叩きつけられて海に散る。それらの災難がいつしか、恐ろしい魔物へと姿かたちをもっていった。

妖怪は人の恐怖・不安を喰らって大きくなる。恐怖・不安は仏教世界では『悪魔』と呼ばれる。亜衣は祈祷という行いによって、不安・恐怖の悪魔を祓ったのだ。魔物そのものを祓ったわけではない。

ただ困ったことに、この世界には魔獣がいる。霧の中に『本当に』魔獣が潜んでいる可能性もある。魔獣は方術に弱く、亜衣の祈祷は魔獣除けでもあった。

今回のいくさでは、この魔物が逆に味方なのだった。魔物は出ず、北山を寄せ付けない。そのことが兵士たちを安んじさせ、夢の世界の虜にしていた。

すべては油断であった。時代柄、仕方のないことではあるが。

霧は次第に濃くなっていった。仲間の船がどんどん霞んでいく。ここまでくると、人々は恐れおののいて船を下がらせる。しかし亜衣の祈祷で安心し、悠然と構えていた。艦隊は後退しなかった。

「・・・・・・・・ん？」

見張りが、霧の向う奥に灯りを見た。灯りは次第に、

ひとつ

ふたつ

みつ

・・・・・・・・

と、増えていく。

「ま、魔物か」

息を吞んで、増えていく灯りを見つめる。大丈夫とわかっている、やはり緊張するのは人間の臆病がなす性格だ。

赤い竜は、また長大な姿をさらした。ゆらゆらと、まるで蛇のように、大隈の霧の陽炎となっている。

「こんなおつかない物が、わしらを守ってくれるのかあ」

声を若干だけ震わせながら、呟いた。そのときであった。

ヒューー

突然だった。空中に無数の灯りが出現した！

灯りは甲高い音を響かせて、艦隊めがけて降り注いでくる。見張りたちは悲鳴を上げた。

「ぎゃあッ」

灯りが見張りたちに突き刺さった。見張りだけではない。船のそこかしこに軽い音を立てて刺さっていく。

ヒュンッ ヒシュンッ ヒュンッ ヒュヒュウンッ

「な、なんだ、どうしたッ!？」

突然の悲鳴に、安馬たち武将も目を覚ました。起き上がって甲板に出た丁燕の目の前で、灯りが落ちてきた。足元に突き刺さった灯りを見下ろして、

「火矢!？」

と叫んだ。雨のように降り注ぐ灯りは、鈍い赤で燃える火矢であった。

そして、赤い竜を見て、確信した。安馬も、修理も、鴉音も理解し

た。

「う、うろたえるなア！ 落ち着け！」

それぞれが己の郎党たちに向かって叫ぶが、声はあきらかに届いていない。それどころか、あちこちから火の手が上がって、混乱はさらに広がっていった。

「ひ、ヒギヤアアア」

「あつ、熱い、燃えて・・・・・・・・ツ」

「助けてくれエエツ！！」

喚き、泣き、叫ぶもの。炎に包まれて火達磨となつて彷徨い、転がり、力尽きる者。熱風に煽られて海に落ちる者、溺れ沈む者。

もはや收拾などつかない。安馬は悔しげに、憎々しげに、赤い竜を睨み付けた。

赤い竜は いや、北山は、まだ火矢を降らせている。

応戦など出来ない。火矢の燃料として残していた油鍋が倒された。慌てふためく兵士たちは、それが油であつてももう関係なく、気にもかけず、ただ瓶や樽や桶と同様にしか捕らえていなかった。

こぼれ流れる油に引火するのも当然で、火の手は一気に強まった。

「これでは、いくさになど・・・・・・・・ぐあッ」

まずは統率を取り戻さねばと走り回る丁燕の右目が、火矢で射抜かれた。悲鳴をあげて転がる丁燕は、頭の内側から熱に炙られて、ものの一瞬のうちに脳を焼かれ絶息した。

指揮官がやられて、丁燕の郎党はさらに大混乱に陥った。船からは黒々とした煙が昇り、兵士たちは海の飛び込み、もはや軍の体裁を成さなくなっている。

くずれる艦隊から 轟ッ 轟ッ と渦を巻く炎で、霧の水分が蒸発され、次第に霧が晴れていった。晴れる霧の中で、北山の艦隊が姿を明らかにさせていく。

中型の船が幾隻も、横一文字の隊列を組んでいる。船と船の間には縄が渡され、等間隔に松明がぶら下げられている。そのため、ただ灯りだけを見れば、船と船の間に、もう一隻の船があるような錯覚を感じさせる。

「これが、赤い竜の正体だというの？」

「鴛音様！ もう駄目です、この船も燃えてッ」

「くッ！ 致し方ありません、みな武具を脱ぎ捨て、海に逃れるのですッ！」

鴛音の郎党は殆どが海人である。鉄製の武具を脱ぎ捨てて、晃巳神社の郎党は我先にと海に身を放り出した。

巫女装束を脱ぎ捨てた鴛音も、下帯だけになって海に飛び込んだ。こうして丁燕のつぎに、鴛音の部隊も戦闘不能になった。

この危機に、安馬は重然と緒胡痴の助けを求めた。亜衣が持つてきた『發炎筒』なる手持ちの狼煙を使おうとしたが、逃げ回る兵士をぶつかった拍子に『發炎筒』を海に落としてしまう。そのすぐ後に、船が傾きだし、安馬も海中に投げ出されてしまった。

ただ、『發炎筒』は意味を成さなかっただろう。これだけ激しい黒煙が、あらゆる艦船から吹き出ているのだ。艦隊そのものが巨大な『狼煙台』となっていた。

かろうじて修理の部隊が、やや後方に位置していたため被害が少なくすんだ。ゆつくりと進んでくる北山の船と接触し、火矢の応酬で迎え撃ち、接舷して乗り込んだ。唯一戦いらしい戦いを演じたものの、しかしこのときに修理はわき腹を切りつけられて海に落ち、そのまま浮かび上がってはこなかった。

ついで第三艦隊は、抵抗らしい抵抗をできずに崩壊した。北山はまったくの無傷。修理の郎党は殆どが討ち死にし、壊滅した。

ゆらつと過ぎ去る船団を、安馬と鴉音は波に翻弄されながら見送った。北山は海に逃れた九州兵を射殺さなかった。まるで目的は達したとばかりに、目もくれず、薩摩に向かって櫂を漕いでいった。

酉の上刻（明朝六時半）から始まり、戌の中刻（九時）に戦いは終わった。『大隈海戦』と呼ばれるわずか一刻半（三時間ほど）の戦いで、第三艦隊は惨敗した。

あえて、もう一度いおう。わずか一刻半の出来事であった。

黒煙に気づいた重然と緒胡痴は、急いで第三艦隊の展開する水域へと向かった。漕ぎ手を叱咤して、まるで時化をいくが如くであった。しかし到着すると、そこは見るも無残な世界であった。無事な船など一隻もない。いや、小船が十数隻だけある。無事だったそれら小船の周りに、木の板などにしがみついた兵士たちが群がっている。

「・・・・・・・・謀られた」

かつて第三艦隊だった集団の形骸をみつめる重然が呟いた。あまり衝撃的な光景だった。

まさか、まさかそんな・・・・・・・・。こんな形で負けるとは。

もはや呆然といってよかった。重然の脳裏には何も浮かばず、何も考えられず、全てが白雲のように形がなかった。

安馬の提案を韋駄から聞いたとき、重然は人知れず小躍りした気分だった。『敵戦力』と『攻撃目標』というもつとも知りたい情報のうち、安馬の物見が『攻撃目標』を特定したのだ。これは大きな勝因となるはずであった。

緒胡痴を呼んで、大隈海峡に入り、時を待った。霧が出て、重然たちも晴れてからがいくさと考えた。それがこの時代での『常識』であった。

もし、この戦鬪を九峪が指揮していれば、あるいは『そんな、化け物なんて』と笑って、油断なく構えていたかもしれない。油断がなければ、負けなかったかもしれない。

だが、所詮は『かもしれない』だ。始まる前の『かもしれない』ならまだ意味はあるが、終わった後の『かもしれない』はまったく無駄。

北山が霧の中に現れたことは、重然たちにすれば『常識外れ』の戦術だった。

織部が悔しさのあまりに、狂ったように壁や床を殴りつけている。直情的な織部は打ちに溜め込むことが出来ない。ただこの敗戦のやるせなさや憤りをぶつけるべき相手がいないことが、まるで狂人のようさ拳を振り回させていた。

「お頭・・・・・・・・」

「やられた・・・・・・・・クソツタレめ！」

強く拳を握る。愛宕が不安げに見上げて、重然には、安心させる言葉がなかった。

重然もいっぱいなのだ。

「追うぞオ！」

間に合うかはわからない。だが、間に合うかもしれない。この『かもしれない』は、まだ終わってなどいない。

緒胡痴の艦隊から救援隊を割き、重然は怒れる闘志をほとばしらせて北山を追撃した。

「せええいやああッ！！そおおおいやああああッ！！」

櫂を動かす漕ぎ手の掛け声も荒々しい。是が非でも追いつくという意気込みが、怒涛の掛け声となっていた。

風を切る勢いで、四十隻の船団は海を突き進んだ。海面は荒れていない。波も潮も穏やかだ。なのに水しぶきが重然たちを濡らした。

普通ならどんなに急いでも半日はかかる距離を、重然は一刻ほどで漕ぎきった。もはや執念のなせる業であった。

しかし、やはり、時すでに遅く。

北山の艦隊は、薩摩への上陸を果たしていた。いま、薩摩に陸上戦力はない。戦えるものは全員、他ならぬ重然が、海に連れ出してしまったから。

現在、北山には権利がある。生かすも殺すも、ということ。仏教用語を借りれば『生殺与奪』というやつだ。薩摩の民衆、それこそ漁師から狩人、商人、職人、百姓まで、その命は北山のものとなった。

彼らが一度暴拳に出れば、天にまでとどく血飛沫が飛び散る。熱した刀は水の変わりに鍛冶屋の血で冷やされ、百姓の血を吸った野菜は紅くなる。

それを北山は出来る。出来るところにいる。最悪の事態であった。

それだけはいけない！ 決して赦してはならない！

重然が目を剥いた。牙を剥き、鉈のように分厚い刀を振り上げた。

「連中の目をこちらに向けさせるッ！ 何が何でも壊滅させるオ！
皆殺しだアッ！！」

オオオオオオオオッ！！！！

もはや歯止めは利かない。雄たけびを上げて、重然たちは北山に急接近していく。

しかし、北山の兵士たちは迎え撃たない。矢も射ってこない。

ただ、もつとも外側に止まっている船に、一人の大男が姿を現した。大男は重然よりは小さいものの、常人とは比べられない巨漢であった。

大男は息を吸い込むと、大音声を鳴らした。

「とまれえええええい！！」

声は音、音は衝撃波のようになって、重然たちの氣勢に響いた。意気と意気がぶつかって、わずかな膠着が生まれた。

それでも、頭に血が上った薩摩軍はなお襲いかかろうとした。薩摩には彼らの家族がいる。家があり、土地がある。彼らはそれらを守らねばならず、そのために必死であった。

だが、大男は、

「当方に争う意思はないッ！ 話し合う議がある！ どうか、矛先

を納めたまえッ！！」

「な、なんだとお！？」

織部の目が凶悪に釣りあがった。「ふざけやがってッ！」と吐き捨てた。

しかし、この一言で、重然は動けなくなっていた。なぜならこの時、まず敵がすでに武装を解いているのだ。油断などではなく、敵が目の前にいて襲ってくるかわかっていながら、あえて武装を解いている。

そして、話し合いたいという。

ふざけていると、織部でなくとも思っている。こちらは第三艦隊を壊滅させられているのだ。その上で、なんの話し合いがあるのか！

「重然、かまわねえ！ このままぶっ飛ばせ！」

「・・・・・・・・」

「重然ッ！」

織部が呼んでも、重然は頷かず、船も進ませなかった。ただ胸中で、

やられた！

という思いが渦巻いていた。敵の『口上の巧さ』に、齒嚙みした。

ここで攻めても、誉はない。いくさの誉れとは、切り結んで得られ

る名誉だ。北山は、その名誉を武器として、いま対峙している。

ましてや、北山は薩摩の民衆の命を握っている。いわば人質だ。守るべき薩摩を人質に取られ、誉を盾にされ、話し合いたいと申し込まれ、矛を収めよといわれれば、もうそうするしかなかった。

やられた。やられた！ 完全に丸め込まれた！

振り上げた刀を、力なく下ろした。織部は驚きに言葉を失った。愛宕にいたっては、もう何がなんだかわからず、隣でうろたえるばかり。

重然は動かないと判断したのだろっ、大男がいつのまにか姿を消していた。

「・・・・・・・・北山ッ！」

生まれて三十余年、これほどの憎々しい怨嗟を吐き出したことはあつただろうか。

狗根国に祖国を滅ぼされたときに匹敵する屈辱を、重然はかみ締めた。

元星五年八月七日　夏。

大隈海峡で、重然率いる薩摩軍が北山に敗れた。単純に考えれば、戦力の三分の一を失う大敗である。

これにより九州と北山は、史上初の軍事衝突を経て、会談を行うこととなった。

薩摩方、

修理、奮戦するも刀傷を追い、溺死

丁燕、火矢を右目に受け、見るも無残な姿となって焼死

死者、七百余十人

第三艦隊の艦船、すべて消失

という、大損害をこうむってしまう。

この敗戦が九州を動かす運命の転換点となる。しかしその事実を、神の遣いはまだ知らずにいた。

耶麻台共和国の、苦しい夏が、始まろうとしていた。

第14回 「魔兔族との再会」

『大隈海戦』から五日が過ぎた、今は八月十二日。珍しいことに、天空が泣いている。

錦江港の湊町の一つ、加奈港は九峪が興した街である。近代的な湊町の建造計画の下、実験的に設計された湊で、そこその大きさがあつた。

千品万物がこの大湊から出て、入り、薩摩と共和国を潤すはずであつた。事実、この湊町はよく機能してくれた。とくに九峪が力を入れた『造船ドッグ』は的を射て、多くの造船技師が錦江港に入植し、農耕著しい薩摩の錬兵に次ぐ誇れる産業となつた。

が、はたして今はどうだろう。過去から未来までも期待された加奈港には、商船よりも、漁船よりも、北山の戦艦が互いを擦りながら停泊している。造船業はずっと停滞していた。

異様な数の『二山月牙』の旗が、やはり異様な景観を生み出している。まるでここが九洲でないようだと、加奈湊の人間たちは錯覚した。

敗戦。その重い事実を、北山の旗と船が高々と叫んでいた。

北山の総司令官、恵源はわけのわからない男であつた。勝ち將軍なのに、変に腰が低くて、威圧的でなく、まるでらしくなかった。し

かし対面した紅玉は、惠源の腹に込める考えを見抜いていた。

同盟といえは国家間の約定である。従つて本来は、国主同士が向かい合い、杯を交わして、証文を認め、血の契約で完了する。

それに倣うならば、北山の王自らが九州へとわたつて来なければならぬ。ただし、これをしない以上、亜衣にも考えがあつた。

「私が勅使を務めます。火魅子様は、くれぐれも御動なされてはなりません」

王の代わりに惠源という男が来た。ならばこちらは火魅子の代わりに、自分が相手をしよう。

決して火魅子には合わせない。足元を見させない。驕らせない。

出来る限り我を押し通さねばならなかつた。引き出せるだけの条件を引き出して、遮二無二譲歩と妥協を押し付ける。そのためには、こちらから動くことは相ならない。

だがいまだ政治感覚が成熟しきつていない火魅子は、儀式の場こそ典礼に通じなければと思つていた。なまじ祭事を統べているだけに、儀式を重んじる傾向があつた。

「私もいくわ」

当然のようにいった火魅子を、亜衣は畏れ多くも鋭い眼光で黙らせた。もはや火魅子に向かつてこんな視線をぶつけられるのは亜衣だけで、幼いころから刷り込まれてきた恐怖心は、いくら火魅子になつたからといって拭い去れるはずもなかつた。

「いいですね。くれぐれも、動いてはなりません。くれぐれも、です。く、れ、ぐ、れ、も。……………どうーゆーあんだすたん？」

「お、おーけー」

こうして亜衣は薩摩に向かい、腰を抜かした火魅子は一日中祈禱場から出ようとはしなかった。この日は必要な儀式もなかったから、もしかしたら亜衣もそれを見越していたのかもしれない。

十三日。亜衣は薩摩荘の屋敷で恵源と対面を果たした。場には北山方の軍師、教来石が同席し、九州方は香蘭母子が同席した。

会合は三日間にわたって行われ、それぞれが代行したまま、同盟は成立した。十五日のことであった。

いくつもの条件をぶつけあい、刷り合わせ、譲歩と妥協を繰り返して、亜衣は耶牟原城へと帰った。北山は戦力の一部を本国へと帰還させ、加奈港は北山の宿営場となった。

狼藉を働いたら問答無用でたたき出すと釘をさしたが、薩摩の人々は呆気なく勝利をものにした北山を恐れてしまっている。北山の用意した土産は『恐怖』であった。ほとんど恐喝と変わらないが、成功すればこれほど強力な材料はない。

かくして『九北同盟』は成立、亜衣の尽力あって、九州はなんとか立場を守ることが出来た。

「重然が負けたあ!？」

阿蘇でのんびりやっていた九峪は、薩摩方敗北の報を聞くや、素っ頓狂な声を上げて宙を仰いだ。

とても信じられることではなかった。九峪が知る限り、重然はいくさで不敗の男だ。二十年前に起こった狗根国とのいくさでも、各地で大敗が連発する中、重然が参加した海戦は勝利したと聞いている。九峪から見ても、重然はいくさ上手であつた。こと海に関する戦いでは、九峪は全幅の信頼を置き、やおら口出しするよりも重然に任せておれば大丈夫だとさえ思っていたのだ。

北山が本当に攻めてきたことも驚いたが、九峪の驚愕はかねがね重然が後れをとつたことに集中してる。

「重然の失策……とは思えないんだが。敵が巧かつたってことか？」

「まあ、巧いといえば、そうなのかもしれません」

侍女が洗濯物を干しながら答える。どうでもよさそうな言葉に、九峪はため息を一つついて、書状へと視線を落とした。

北山問題について書かれた書状は、侍女が人里で入手したものである。侍女は生活用品の入手のために、たびたび人里へと降りている。それを見計らった亜衣が侍女に持たせたものである。

「まさか、清瑞の予想がどんぴしゃりだったなんてな……」

これにも驚いた。おそらく、清瑞も驚いたことだろう。

北山が何ゆえ攻めてきたのか、清瑞が言ったとおりの理由であった。

琉球島で繰り返される騒乱で、北山の立場が危うい、とは会談の場で恵源がもらした言葉である。

北と南に挟まれた中山は、もっとも厳しい戦いを強いられていながら、それらを戦い抜いて得た自信と実力を持って、三国一の大勢力へとなったという。

その中山が、まず叩き潰すと見定めたのが北山であった。

「にしたって、わざわざ攻めてこなくたって」

思わずぼやきたくもなる。手を貸してくれ、と言ってくれば考えなくもなかったのに、攻撃されてはいい迷惑だ。

おかげでまさかの敗戦となって、九洲はてんでこ舞いらしいことも、亜衣からの書状には書かれている。

「献上品がないとか、主導権を握りたいとか、いろいろあるんだろうけど。こっちの神経逆撫でしてどうするんだ？」

「それだけ崖っぷちだった、ということでしょう」

「そうか……そうかあ？」

「でなければただのバカなんでしょう」

「・・・・・・・・」

恐ろしい子。

人間、変われば変わるものと、思わずにはいられない。少し前まで緊張したり畏まったりしていたこの女中、九峪との生活に慣れ始めたら次第に地を露にしてきたのだが。

性格は以外になげやりな感じだった。言動もわりとどうでもよさげで、しかも辛口の批評が多い。

取り繕わなくなっただけ、まだ全然マシなんだけど。珠洲に比べたら全然イイ人なんだけど。

せめてもう少し、齒に衣着せたほうがいいと思いながら、九峪はため息一つをまたつく。

女中の言葉を鵜呑みにするわけではないが、崖っぷちなのかバカなだけなのか。考えるだけ詮無いことかもしれないが、暇がちな九峪は、気になりだしたら思考をとめることが出来ない。

北山の情勢は知らないが、たしかに、崖っぷちといえは崖っぷちなんだろう。それにしても短絡的でならない。重然を破った恵源という男、そんな馬鹿なことをするか？

九洲征服の足がかり、とも考えられるが。それほどの余裕があるなら、まずは琉球の統一に全力を注ぐべきだ。

北山、いったい何を考えている？

空を見上げて、答えがわかるわけではない。しかし九峪はいつも相手の思惑を考えると、決まって空を見上げる。晴天でも雨天でも、それは関係ない。空だけが唯一、自分と相手を繋いでいる。

洗濯を終えた女中がかごを持って立ち去った。縁側に一人、九峪だけが残される。そよ風が洗濯物と踊っている。

揺らめく布の下を、ゆつくりと歩いている。老猫だ。老いてなおどこか気品があるのは、野生の持つ独特の美しさであった。

老猫が九峪のもとへとやってくる。ゆつくりと、慌てず。この猫は擦り寄るということを余りしない。まるで私とお前は同等だ、といったように、この時も偉そうにのらくらと近寄ってきた。

ジャツと地をけって、九峪の膝に収まる。もぞもぞと具合を変えてすっぽりと収まる。ふうつと鼻から息を抜けるのがわかった。

九峪は苦笑した。

「ほんとふてぶてしいヤツだね、お前も」

聞いているのかいないのか、老猫は耳を動かしさえしない。このまま眠るつもりようだ。

家に憑いたな。そう思った。猫は家に憑く。老いて先の短い命の、ここを終の棲家を選んだのだ。

小さな虎柄を撫でてやりながら、もう一つ、九洲に憑いた大きな獅

子のことを考える。この獅子は老猫のように、頭をたやすく撫でさせてはくれまい。

九洲海軍の猛将重然を大隈海峡で破り、まさかの圧力外交を成功させた男。圧力で臨んで来た以上、これからも威圧をかけてくるだろうことは想像に難くなく、その圧力から九洲を守るのは、まだ共和国に五指としない。

この危機を乗り切るには、それこそ『和』が必要だ。孟子は何か大事にあたる時は『天地人』の構えを持って迎えるべしと説いた。その通りだと九峪は思う。

九峪が『天地人』という言葉を知ったのは、つい最近のことであった。時間だけが無駄にある九峪の唯一の趣味は読書だ。もっぱら『孫子』『孟子』『呉子』などを読みふけり、戯れに本を書く。

意図したわけではなくも、九峪の目指した『共に和する』は孟子の『人の和』と同じものだった。ささやかな感動を覚えながら、例えこのような境遇におかれていても、あれは間違った選択ではなかったのだと、誇りにさえ感じた。

北山との関係が何時まで続くかはわからない。北山が滅べばそれまでとしても、九洲も打撃を受けることは間違いない。

『和』こそがすべての基本で、原理だ。これを守り続ける限り、内部からの離散はありえない。そして誰か一人でも強い意志を持った人物がいれば、決して諦めることはない。

その筆頭こそが火魅子であり、宰相の亜衣であり、大將軍の伊雅であり、紅玉や志野などの実力者であるべきだ。彼ら彼女らが『和』

の主軸となつて力強く廻り続けたなら、それこそ安泰というものだ。

その『和』の中に自分がない。それだけが、寂しくもあるのだが。

「なんにしても……」

心の静寂を振り払うように声を吐き出す。

仕方がないものは仕方がない。すべては任せるしかなく、九峪はただ、この霊山から知りえぬ下界を想うしかない。

なんにしても、亜衣たちに任せるしかない。今の自分には力がないのだから。

ただ、九峪にも興味はある。書状に書かれた恵源という男が、どのようにして重然と戦い、破ったのか。それだけが興味であった。

「亜衣がきてくれればなあ」

最近になって亜衣がなくなった。パツタリとっていいほどに、忽然と。暇がちな九峪が余計暇になったことは言うに及ばない。

気になる。気になりだしたら止まらない。いつそ変装でもして薩摩にいかうか……。そんなくならない考えさえも浮かんでしまう。

知ったからどうと言うわけでもないのだが、九峪とて戦いの世で指揮を執ってきた英雄だ。感化された本能が知りたがるのだ。

「水上戦といえば赤壁、壇ノ浦、厳島くらいしか知らないからなあ」

「あら、ずいぶん知っているじゃない」

「まーな……へ？」

目が丸くなった。振り向こうとした直前に、老猫が起き上がったもののすごい勢いで離れていってしまった。ふてぶてしい老猫が、まるで怯えた兔のように。

「あの猫、老いているくせに判断がいいわね。さっさと逃げちゃったわ」

「危険には敏感だもんね」

「いや、経験だろう。あんな獣風情でも、長く生きればなんとやら」
わいわいと話している三人組を、九峪はポカンと見つめる。どうにも珍しい連中が来たもんだ。

老猫が去った方向を見ている魔兔族三姉妹は、酒樽を抱えて立っていた。もちろん、持っているのは兔音と兔奈美だが。

兔華乃が微笑みながら、九峪を見やった。

「お久しぶりね」

「お、お久しぶり」

生返事を返すだけで精一杯。あまりにも意外な再開に、九峪の思考

は停止した。

珍しい客と書いて珍客と読む。何かと『巾着に似ている』と指摘されることが多く、また『珍』の字をあえてカタカナで表記した場合に起きる小学校限定のバッシングが非常に愉快的言葉だ。

『珍』というくらいだから、当然のごとく、普段まったく交流のない相手が客としてくるわけで、戸口で出迎えた亜衣を、兎音は小首を傾げつつも取り合えず土間へと招き入れた。

草鞋を脱いで居間へ上ると、海豹よろしく床に寝そべってダレている兎華乃がまず顔を上げた。かつて只深が贈った『セーラー服』を着ていたが、裾やら何やらが豪快に捲れて、理路整然とした印象しかない彼女からは妙に大きなギャップを感じた。

「・・・・・・・・挨拶から始めるべきか、女性としての心得から論ずるべきか」

「ひどい言いようね。ただダレているわけではないわ」

「でしたらダレているわけでもないのに『独活の太木』に生まれ変わろうとしている理由から伺いましょうか」

「・・・・・・・・あら？　もしかして私、馬鹿にされてる？」

真夏なのに、どうやら兎華乃の季節では春が訪れているようだ。

どうしたものかと兎音を見やるが、諦めきったため息で返答されて

しまった。もしくは疲れたため息か。どっちにしろ兎音から有益な情報は得られそうになかった。

「まあ、勝手にそこら辺にでも座っている」

「この部屋にか？」

この部屋とは、兎華乃のいる空間を指す。

兎音は目を合わせずに、

「……………座っている」

とだけ言つて、そそくさと奥へ引つ込んでいった。逃げたな……………と心中で罵りながらも、言われたとおりに腰を下ろす。莫塵は勝手に出したが、文句は言われまい、というか言わせない。

「珍しいじゃない、あなたが尋ねてくるなんて。明日は誰の雨が降るのかしら」

海豹が口を開いた。見方によっては『たれパンダ』かもしれない。この場合は『たれウサギ』か。

「誰の雨も降りませんし降らせませんし降られて堪るもんですか。この九洲に赤い雨が降ったら、まず貴女を疑うべきかもしれませんね」

「私は良心的よ？ 自制心だってあるわ。そういうことは妹たちに言って頂戴」

「身内に自制させるのも、目上の仕事です」

「そうねえ……………」

兎華乃がゴロンと寝返りを打って仰向けになる。紅い瞳が見上げる。

「どこかの誰かさんは、出来てないみたいだけど？」

意地悪い笑みを浮かべた言葉に、こっちが言葉を詰まらせる。痛いところを突かれるとはこういうことを言うのだ。

亜衣が答えられないと、兎華乃はクスクスと笑いを忍ばせながら上半身を起こした。

「いろいろ大変そうね。急がしそうで何よりだわ。こっちは天目も九峪さんもいなくなって退屈だというのに」

「暇そうで何よりです。私なんかは切り々々舞のてんてこ舞いなのに」

「いいじゃない、忙しいことはいいことよ。充実した生活だわ、満足いく生涯だわ」

「内容にもよりますね」

「邪魔なヤツラがいるんでしょう？ 麓の里で噂を聞いたわ。今ならタダで皆殺しにしてあげるわよ？」

そんなに退屈ですか。とは口が裂けても聞けやしない。魅力的といえば魅力的な提案だが、たとえ金銭をもらっても承諾はすまい。

結局ただダレているという事を露呈しながらもそのことにまったく気づいていないところを見ると、やはり兎華乃は春のまま止まってしまっているようだ。季節は夏なのに。

退屈とはかくも恐ろしい。いつだか九峪が言った『人間が生きる上でもっとも恐れているのは退屈だ』の意味も、兎華乃を見ればわかっていうものだ。

時間さえも止まるのならば、たしかに忙しいほうがよいのだろうが、しよせん隣の桜の方が美しく見えることと同じだ。羨ましいと思いつながら、こうはなりたくないと思う。

「もう少ししゃんとしなさい。在りし日の貴女はしっかりしてないくとも、そこまでだらしない駄目女ではなかったはずです」

「そんな昔の話されても。もう五年よ？」

「魔人の寿命は長いと聞きますが？」

「五年は五年ね。一日と一年の長さが変わらないように、五十年生きようが二百年生きようが感じる五年は一緒よ」

体感時間は人間と同じ　　と言いたいのだが、この時代にはまだそういう言葉の概念がなく、無駄に遠まわしな言葉で兎華乃が言い訳した。

そういうものと納得したところで、兎音が茶を持ってきてくれた。高麗人参茶だ。

「ありがとう」

礼を述べて湯呑を受け取る。注がれた赤茶けた鈍い色合いが、なんとも飲む気を薄れさせる。味も最悪だ。

しかしそれをおくびにも出さないところが、流石は九州一の外交官といったところか。背中では苦しむ様子を、決して面には出さない。笑顔すら浮かべてみせる、そんな余裕。

「いい時代になったものねえ。あくせくして育てなくても、種をあげるだけで忌瀬さんが種まきから製粉までやってくれるんだから」

「……自分で育てたらどうです。退屈とは縁を切れますよ」

ジト目でそう言うと、兎華乃はあからさまに厭そうな顔をして、

「やあよ、メンドクサイ」

などとのたまった。このダレウサギは骨の髄まで腐り始めているらしい。

なぜだろう、亜衣はそこはかとなく切ない気持ちになった。かつてあれほど頼りになった兎華乃の、自堕落極まった姿を見ていると悲しくなる。

兎音が視線で「諦めろ」と語っているのも、余計に亜衣を悲しませた。兎音よ、たまには逆らったらどうだ。

『ウサギは寂しくなると死ぬ』と聞いたことがある。しかし実際は『退屈すぎて死ぬ』ようだ。なんとも俗っぽい。

もういろいろなことに諦観が指し始めたころ、ふと亜衣は周囲を見回した。

「そういえば、兎奈美の姿がありませんが」

今気づいたが、どこにも兎音がいない。客人が着たらいちはやくはしゃぎ立てる末妹はどこにいったのだろう。

「兎奈美なら蔵にいる」

「蔵？」

「漬物蔵だ。高麗人参の漬物をおいている」

「ああ……」

言われて合点がいった。高麗人参の漬物。あの恐ろしく『しわい』味のする物体か。

以前のことだが、亜衣も忌瀬に食わされたことがあった。臭いも強烈だったが、味にいたっては驚天動地というほかない。それだけ凄まじいもので、あの忌瀬ですらむせ返っていたほどだ。その反面、たしかに効能は高麗茶以上に凄まじかったが。

そうか、アレはここで、こいつらが作っていたのか。

「忌瀬さんも驚いていたわ。これが出回ったら薬師は路頭に迷うってね」

「あんなもの、毎日食べていたら舌がおかしくなります」

「弱いからねえ、人間って」

「魔人に比べたら」

クスクス。兔華乃と兔音が笑う。

「それじゃあ、その魔人に、人間のあなたがどんな御用なのかしら？」

ようやく本題を聞く気になったようだ。亜衣は茶を置いて、手短かに用件を話す。

「九峪様の身边に注意をはらってほしい」

「おかしいことを言うのね。九峪さんは『還った』のでしょうか？」

「表向きはそうしてある」

「ふうん……………」

意味深な態度で亜衣を見つめる。紅い瞳に疑問の色はなかった。

兔華乃は最初から知っている、とは考えていない。兔華乃は何も知らないだろうし、それは兔音に兔奈美もそのはずだ。

ただ、兔華乃は聡い。里で聞こえる噂と今の話を掛け合わせることなど、容易なことだ。

不意に兎華乃が笑みを浮かべた。

「それで、ね……噂の真相はこれ。あなたがよく阿蘇山に登っているという噂を聞いたけど、あなた、九峪さんに会いに行つてたのね」

「……はい」

ここでも言われるのか。噂とはかくも恐ろしく、亜衣は覚悟を決めるしかなかった。

そして案の定、兎華乃はいじめっ子のように、それはもう楽しそうに、亜衣の噂をネタにネチっこく苛め抜いたのだった。

藤那樣のように感情を露にされたほうがマシだッ！ と叫ぶことさえできない。兎華乃は絶対、わざと、反論する余地がないようにまくし立てている。

一通り楽しんだ頃、亜衣はぐったりしていた。兎音は助けることもせず、それどころかとばっちりを避けて、心なしか距離を開けていた。おのれ。

悠々と茶をしばく兎華乃が、最後に一言。

「で、あなたは自分のお尻を私たちに拭かせるために、ここにきたわけね」

ズズ、茶をすすする。

「そんな素晴らしいあなたにはもれなく高麗漬け一年分を進呈する

わ
」

「いりません……………」

「遠慮しなくてもいいのよ。あげる見返りは大陸の上流酒。これが最大限の譲歩」

「もう勘弁してください……………」

いつそ泣き出したいが、それはそれでどういうわけか涙が出てこない。鍛え抜かれた鉄面皮が憎らしいと心底思った。

兔華乃としても気は済んだ。久しぶりにたくさん喋ったのだ。姉妹だけだと、どうしても会話に限界が出てしまう。

亜衣の言い分は気に入らなかったが、収穫もあったことだし許してやろう。兔華乃の心は寛大なのだ。

兔音に命じて代わりの茶を持ってこさせる。やっと復活した亜衣は茶を飲むと、途端に元気を取り戻した。切り替えが早いのも宰相の業である。

ずれた眼鏡を直しながら、紅い瞳を見つめる。

「お願いできますか」

先ほどのまでの情けない様子から一変、凛々しい言葉で問いかける。

「お願いされましょう。九峪さんの周辺をうろつく輩を見つけたら、下山させればいいのね？」

「はい。『ここは危険だ』とでも言えば、十分でしょう」

「もし抵抗してきたら、殺していいのかしら？」

兎華乃としてはここが重要だ。兎音の長い耳も動いた。

やはり魔人だな。そう思いながら、亜衣は頷いた。

「止む終えない場合は。ただし出来る限り迅速に消してください」

「楽しむ暇がないわね。肉を断つ余韻と、絶望に彩られた紅い慟哭が得もいえない『快感』なのに」

「すみません。しかしここは譲れません」

「やれやれね。九峪さんの次はあなた。魔人使いが荒いところなんか、九峪さんにすっかり似ちゃって」

「え？」

思わぬ言葉に亜衣の口から声が漏れた。

似ている？ 私？ 九峪様に？

聞き間違いでなければ、たしかに言った。似ていると。

それだけのことで亜衣は頬が熱くなるのを感じる。と同時に、嬉しいような恥ずかしいような気持ちも沸き起こってきた。

「あら、顔が赤いわ」

「う、あ、そんなことはありませんッ」

「そう?」

ウフフフ。

このウサギ、気づいてる！ 頬の赤みをこれ以上見られまいと俯きながら、心中で恥ずかしさのあまり、さらに赤くなっていた。このウサギ、気づいてる！

それほどわかりやすいだろうか。藤那に看破され、紅玉に看破され（たと思う）、今度は兎華乃が亜衣の心奥底に押し込められた想いに目を向けている。

なんとか平静を取り繕うと必死に心を静めるが、意識すればするほど、今の自分の行動が九峪に重なっていくような気がする。まるで増埒だ。

狼狽する亜衣を横目に流して、兎華乃が兎音に出立の準備をさせる。兎奈美にも伝えないと、と立ち上がったとき、ふと気づいた。

「そついえばあなた、こんなところに来て大丈夫なの?」

亜衣はもはや、阿蘇山に登ることすら危険な立場だ。魔兔族三姉妹の存在も世間に明かされていない以上、ともすればこの一件ですら噂になりかねない。

それは亜衣も覚悟していたことだが、如何せん適役がいなかった。

こういった役目をこそ乱波に申し付けるべきなのだが、棟梁の清瑞からして秘密にしているのだから、結局亜衣がくるしかない。

「たいへんね」と、そういい遺して兎華乃は漬物蔵へ向かっていった。一人のこされた亜衣は、はあゝと大きく息を吐いた。

疲れた……。掛け値なしにそう思った。兎華乃は意地悪だ。しばらくぼうつとしながら、心臓の高鳴りに耳をそばだてる。兎華乃に振り回されたせいかな、それとも九峪に似てきていると言われたためか、この胸の高鳴りは、いったいどちらなのだろう。

少しだけ考えて、亜衣は苦笑する。埒もないと切り捨てて、緩慢な動作で立ち上がる。もう用事はない、日が暮れる前に下山したい。

玄関を抜けると、ちょうど兎華乃が兎奈美をつれて戻ってきたところだった。亜衣に気づいた兎奈美が明るい笑顔で近寄ってきた。

「ひっさしぶり〜!」

「ああ、久しぶり」

こちらにも笑顔で迎えてやる。

「もう帰っちゃうの?」

「私も忙しくてな」

「ええ〜」

明らかに不満そうだが、亜衣としては相手をしてやるわけにもいかない。「運が悪かった」と兎奈美を慰めながら、頭を下げて坂を下りていった。

「・・・・・・・・遊びにきたんじゃないの？」

残念そうに兎奈美が言くと、小さな姉が呆れた風に、

「そんなわけないでしょう、あなたじゃないんだから」

「あれ？ 何気にひどいこと言われてる？」

キョトンとした瞳で聞き返す妹を、兎華乃が「お馬鹿」と叩き伏せる。この色々と大きい妹は、脳みそだけが鶏なみだと常々思うのは、やはり間違いではなかったようだ。

でも、そんなお馬鹿で色んなところが生意気な妹は、魔人にあるまじき素直な心根の持ち主なのだ。

「さっさと準備なさい。お引越しは手早くね」

「はい」

「それとお土産も必要よね。貧弱な九峪さんなら、泣いて喜んでくれるわね」

チラッと、兎華乃が漬物蔵へと視線を走らせ、

ニタア

と、この世のものとも思えない、壮絶で凄絶で凄惨な笑みを浮かべた。その意味にすら兎奈美は気づけず、結果として九峪は地獄門へと観光旅行に行く羽目になるのだが、そうとは知らぬ兎奈美は引越し支度を始めたのだった。

「とまあ、そういうことがあってお引越してきたわけなの」

「・・・・・・・・」

「ちょっと、聞いているの？」

兎華乃は返事をしない九峪をゆするが、やはり何も言い返してこない。

が、それもそのはず。九峪はいままさに生死の境を彷徨っているのだから。

高麗漬け。九峪には刺激が強すぎたらしい。

女中が慌てて持ってきた水で復活すると、妙に澆刺した表情で兎華乃に向き直る。

「すごい、すごいぞッ。身体の奥底から色んなものが湧き上がってくるのを感じる！」

「よかったわね。ところで私の話きいてた？」

「おう、バッチリ。掻い摘んでいうと、俺の居場所がばれるかもし

れないから、見つかる前に追い返そうと、兎華乃たちがきたんだろ」

「よく出来ました。ご褒美に高麗漬けの漬け丼を」

「いや、それはもういいから」

「残念ね」

本当に残念そうで、九峪は背筋に冷たい何かを感じた。

冗談を言い合っている最中も引越し作業は進んでいく。主に兎音と兎奈美の手によって。

女中も手伝っているがもっぱら小物整理をやっただけだ。魔人姉妹が空き部屋つくりのために大きいものを『容赦なく』運び出したのを目撃してから、近寄ろうとしなくなった。懸命だ。

「それにしてもみすば……質素な家ねえ。丸々あいている部屋がないなんて」

「いま『みすばらしい』って言おうとしたら!?」

「いいじゃないそんなこと。大したことでないわ」

「その通りだけでも」

何か納得いかないと九峪が睨んでくるけど、勿論そんなことに構う兎華乃ではない。本日何杯目になるかわからない茶をしばいて九峪を黙殺する作業にさえ手馴れた感がある。

そうこうする間にお引越しは完了した。ビフォー前に物置として使われていた納屋が、アフターして立派な一軒家となった。運び出された諸々は外に放置され、麻蓑を被せられた。

やれやれ一服一服と引き上げてきた兎音たちに、九峪が手ずから茶を入れてやった。受け取る兎音がぶつきらばうにも、

「……………」

と言ってくれる様になったのだから、九峪も自然と頬が緩んでしまふ。

女中は女中で本性を現しても、神の遣いに『何かしてもらっ』ことだけはいまだになれない様子で、「とんでもないですッ」と叫んでいた。

夕食は川魚。九峪の食事は基本的に川魚。肉はあまり食卓には並ばない。それと今日は特別に高麗漬け……………を細かく刻んで野菜と一緒に煮込んだもの。臭いと味が薄まっていい感じだ。

兎音は「この臭いがいいのに」と文句を言うが、譲れない一線はある、人間として。というかお前らの嗅覚はいたい何ぞや、と言いたいのを押さえつけるだけで精一杯だ。

この日の食事は賑やかだった。普段は女中、たまに亜衣を交える程度だから、一気に三人増えたものだから、本当にやかましい食事だ。楽しい。

兎奈美は良く喋る。九峪が九洲に残っていることを、この素直なウサギは手放しで喜んでくれた。兎音と兎華乃も言葉にこそしないが、

九峪との再会は喜んでいた。

天目についていかなかった理由は、友人でもそこまでしてやる義理がないからだ。しかしそれ以上に、『天目がいなくなってもまだ九峪がいる』というのも理由であった。九州に残っても退屈はしないだろう、と。

しかし九峪すらいなくなったものだから、すっかり退屈な世の中になってしまった。人間同士の争いごとにてんで興味のない兎華乃はすっかりダレてしまい、九峪の存在を知ったからこそ、こうして引越しまでしてきたのだ。

退屈すぎた日々からの反動は大きかった。おかげで九峪は物置を一つ失った。

だから自然、兎奈美だけでなく兎華乃や兎音の口数も多くなった。

こんなに賑やかな食事は、久しぶりだな……。。

それが嬉しかった。ここに火魅子、知事、大臣、清瑞、亜衣、伊雅たちがいたら、もう言うことはないだろう。失った日々を再現できるだろうに。

満月の夜、楽しい夕宴の中で呑む酒は、ほろ苦かった。

第15回 「吹き荒れる荒らし」

大隈での勝利以後、北山はそれ以上の進進行動はしなかった。

北山はこれ以上の戦意を示さず、九州方も無駄な戦いは避けたい。まだギスギスとした重く痛い雰囲気立ち込めるが、平穏には変わらない。

錦江港にも船の姿が戻り、活気が少しずつ戻り始めていた。加奈港は完全に北山の基地化してしまっただが、これは亜衣の指示である。加奈港に北山の戦力を集中させることで、他の津は自由を取り戻した。

大きく造った甲斐があつた。ただしもはや、造船や商業港としての役割は期待できそうにないが。

八月の半ば、亜衣は再び薩摩に姿を現した。いよいよこの日が来たのだ。

加奈港で亜衣を待っていたのは、恵源と教来石であつた。港の長が使っていた屋敷へと招かれ、そこで話し合いが開かれた。

「兵をお貸しいただきたい」

会合の場での恵源の要求は、北山の援軍として琉球へ出兵してほしい、ということだった。

もともと、これが惠源たち北山が抱える最大の望みである。これさえ果たすことが出来れば、ほかに要求することもない。

本音を言えば、ふざけるなである。誰が貴様らに兵を与えるかと声を大にして叫びたいが、如何せん九州の立場は弱い。たった一回の敗北でまんまと楔を打ちつけられ、さらに加奈港を押さえられている以上、例え勝ついくさをしてでも無傷とは言えまい。

また、亜衣としても一存で決めるわけには行かない。共和制である以上、評定衆の同意を得なければならぬ。

時間稼ぎの意味合いもあつて、亜衣は一度案件を持ち帰った。惠源は了承したが、焦っていることは明白。あまり焦らすと何をしでかさかわからない。

開かれた評定で、武官はすぐさま加奈港を襲えば恐るるに足らぬと豪語するが、大隈の敗戦に衝撃を受けた文官たちは、国内で暴れられては堪らないと出兵を主張した。

この時ばかりは、亜衣も文官に同意見であつた。ただ亜衣は文官ほど北山を恐れておらず、心情的には武官よりであつたが、宰相としては身中に病魔を抱えたままのいくさは避けたいのだ。

かくして出兵は決したが、ここで亜衣と文官との間で少しばかりの鬨ぎ合いが繰り広げられた。

亜衣は人選を独断で決めようとしたのだ。共和体制の中で、少しでも文官の力を削ごうと考えたのだ。この動きに文官たちは半ば驚きつつも抵抗した。

文官寄りの武官衆を送り込もうと画策する亜衣を、合議の場で文官たちが異様な結束を見せて阻んだ。この期に元九峪派を一掃しようとして、反文官勢力をこぞって送り込もうとする文官たちを、今度は元九峪派の残党が妨害する。

決議から五日間は人事の混乱で編成も覚束なかったが、最終的にそれぞれが妥協する形で、総員七千人の軍勢が琉球へと向かっていった。

一枚岩といえない援軍が、加奈港から出立していく。翻る旗は『日輪日巴』なのに、なぜかそこに九洲らしさがなかった。

元星五年九月、かくして『第一次琉球出兵』が行われ、九洲兵は初めて異国での、ましてや他国のための戦いに挑むこととなるのであった。

『第一次琉球出兵』に従軍する將軍・武將は多様な背景を背負った者たちばかりだ。

まず、反文官派の將は九洲全体の半分ほどが従軍している。筆頭は音羽であり、文官による肅清の一環であった。残りの半分は、亜衣と武官が何とか出兵を免れさせたが、音羽だけは免れられなかった。

次に文官派の將らだ。彼らは全体的に見れば数は少ないが、これは亜衣の要求である。内部改革を断行するに当たって、文官を擁護している將軍階級を減らす目的があった。

彼らが七千の兵を率いるわけだが、これらの戦力は各方面から文官が緊急に徴収した戦力であつた。

北山に怯えきつた文官は、手の平を返すように徴兵を敢行、結果として火前方面の半島群の豪族たちが郎党を率いて兵二千、筑前、筑後からも豪族に要請して三千、豊前から二千が送り込まれる結果となつたのだ。豊前からは元九峪派の上乃が出陣している。

この戦力を大隈海戦の前にそろえることが出来れば……。

加奈港から出立していく船団を見送る亜衣は、悔しさに唇をかんだ。

しかし、これは好機でもある。この出兵と徴兵はおそらく武官ないし地方の豪族の反発を招く。九州は再び、武官と文官の対立する混沌とした世界になる。

文官のやること全てが悪いとはいえない。彼らは彼らの信義に基づいて行動しているのだ。しかし彼らの政策が、今日の出兵を招いたことは否めない事実だ。

危機を好機に転じるからこそ、九峪の右腕足りえるのだ。思い切つて文官の立場を弱めてしまえ、と亜衣は意気込みを新たにする。

文官がいくさを知るいい機会でもある。彼らに復興戦争を思い出させてやろう。そして武官には政の場を与えて、政治の難しさをとことん教え込む。

そうすれば全てが収まると、亜衣は確信的に考えていた。そもそもの問題は、互いの不理解から始まった対立だ。ならば理解してしまえばいいだけなのだ。

行動は迅速に。九峪から実践的に学んだことで、亜衣の信条だ。動き出したら速かった。

大將軍の伊雅へと働きかけて、各地の武將たちに官位を与えることから始める。知事と協力しながら検地を進め、それぞれの豪族の勢力図を精密に作成していった。作成した地図はこれまた正確に複製して、必要な部署に配布する。亜衣は自室の壁に貼り付けた。

政務の大部分を蘇羽哉に任せたまま、亜衣は武官の力を強めることに神経を尖らせた。

官位の種類はそれほど多くはない。所領の数、郎党の規模、収入の是非で官位は決められていった。官位は”火魅子に忠誠を誓った者”という意味で『従』と定め、それぞれ上から、

『従五位』

『従四位』

『従三位』

『従二位』

『従一位』

の五階級に分けられた。この上に知事があり、知事たちの代官を務めた。土地の領有を国家が法的に認める代わりに、土地管理の徹底を責任させることで、文官に対抗する力をもたせることにした。

文官からは反発もあつたが、この場でこそ強引に押し切つたところに、文官を敵に回しても構わないという、亜衣の本気と確かな手腕が伺える。

亜衣の戦略はまず『地方に力を』というスローガンから成り立っていた。

この新たに取り入れられた階級制度の認定を終えるのにそれほど時間はかからなかった。八月の終わりごろに開始して、十月に入る前に終わらせることが出来た。これには地方豪族たちが土地の安堵を求めて協力的だったためである。

また土地所領の証文を火魅子自ら豪族たちに下知させることで、この検地及び官位進呈が女王の宣言によるものだということを誇示することも忘れない。すべては女王の了解するところであり、案ずること及ばないとアピールしたのだ。

この細やかさは九峪にない。亜衣の持つ智謀の深さは、九峪ほど大胆ではなくとも細部にいたるまで綿密だった。

豪族が官位を得たことで、彼らも『武官』と同じ立場となる。外様の武官が増えればそれだけ文官の抑止となる。

ただ、一つだけ気がかりがあつた。

「琉球へ出兵した者たちは、どう思ふかな」

それが亜衣の心配事で、肝心なところでもあつた。自分たちが異国で戦っている間に、他の豪族たちが『官人』となれば、心象を悪くするのは必然といえる。

どのような戦いをしているかはわからないが、生きて帰ってきた者たちには格別の便宜を図らねばなるまい。

十一月の秋空は曇り空だった。九峪が阿蘇山に追放されて、一年が経った。

一年という短い間に、色々なことが一気に押し寄せてきた。まったく問題というものは、いつもまとめて出現する。

北山の問題が一応の決着をみせ、政府の大改革を推し進めている亜衣にも、今だけは幾ばくか平穏な時間が流れていた。

文官は混乱している。自分たちのしていることこそ『絶対の正義』と信じている彼らにしてみれば、亜衣に裏切られた気分なのだろう。対して武官からの支持が日に日に昇っている。

亜衣の目指す最終地点は、地方の豪族を『武官』として管理し、政にたいする発言力を持たせることにある。そのためには強くなりすぎた文官の力を弱めて均衡をとらねばならない。

いまの亜衣はそれのみに集中していると言っている。琉球での戦いから仲間が戻ってくる前に、すべての改革を終わらせ、新体制の下地を作るつもりだった。

しかし思い通りには行かない。一度多くの武官が追放されたせいで、武官の半数以上が文官よりの連中で固められている。

そのために地方の豪族を味方に引き入れているのだが。幸い豪族間では、手の平を返したように徴兵を敢行した文官に対する反発があ

る。これが亜衣の最大の武器である。

この調子で宰相の地位でありながら武官の手綱を手にする。目標は定まっている。

琉球での戦いは激しい。まさに激戦に次ぐ激戦であつた。

岸壁にまで追い込まれている北山の気迫は凄まじい。なまじ滅亡の足音が近づいているだけに、みな必死だった。領地の三分の一を中山に奪われ、まさに崖っぷちだ。

だが、もう長くはない。疲れ果てた軍団の中にあつて、音羽は思わずにいられない。もう北山は限界だ。

季節は十二月の暮れに指しかかろうとする。もうすぐ新年を迎える。新たな年を、私は異国の地で迎えるのか……。

九州に比べたら暖かい冬だが、やはり火の暖かさは身にしみてくる。食事を済ませて、空になった椀を放り投げた。車座になって一緒にいる兵士たちも、同じように椀を放り投げる。

複雑な気分だ。官位を落とされ、力をそがれ、戦う場にすら立てなくなつた身に比べれば、たしかに今は武人冥利に尽きるだろう。負け戦をこそ戦つてなんぼであり、激戦とはむしろ血沸き肉踊る舞台なのだから。

だが、時々思うようになる。これはいったい何のための戦いなのか。少なくとも『九州のため』の戦いではない。

考えれば考えるほど、戦う意味が見出せない。それとも、ただ戦える事をのみ喜ぶべきなのだろうか。

それも何か違う気がする。

「……………あつ、いたいた！」

声がして振り向く。右腕に包帯を巻きつけた上乃が、少しだけ疲れた笑みで近づいてくる。

音羽の隣に腰を下ろした、焚き火の前に両手をかざして暖をとる。いくら琉球でも、冬の夜は冷える。

パチパチと弾ける火の粉を見つめながら、赤く照らし出される二人の顔。割と美人の部類に入る上乃に見とれる兵士たちが何人かいるが、上乃の眼中になどない。

「冷えるねえ……………」

「そうだなあ……………」

気の抜けた声で呟く。音羽ももう考えることをやめた。所詮、自分みたいに単純なヤツは、何考えたって碌なことを思いつかないのだ、無駄なことだと思った。

上乃も音羽も傷だらけだった。上乃は腕のほかに額、足に包帯を巻いている。音羽は腹を包帯で丸々覆っている。後ろから槍で突かれたのだ。重症とっていい。

鎧の下を厚着していたから助かったようなもので、音羽自身が助からないとさえ思ったほどの傷だった。

音羽と上乃は大宜味おおいみというグスク（城）で戦っていた。

最初は都の名護で戦っていたのだが、こちらの隙を衝かれて都を落とされ、大宜味まで後退して敵の侵攻を食い止めている。北山王は背後の与那覇よなはに逃れ、臨時の首都とした。

現在その大宜味が最前線で最大の激戦区である。援軍に來た九州兵も、もともと士気が低いこともあって、すでに二千人以上が戦死している。

狭い島だけあって、敵の兵力は大したことがない。しかし長い間、北山と南山に挟まれて戦ってきた中山の兵士は恐ろしいほどに強くはつきり言って狗根国兵以上に錬度が高かった。

さらに農地が少ない以上、海洋貿易に頼ってきた琉球兵は大陸の兵法に明るく、大陸製の武器も豊富だった。

中でも炸裂岩以上に強力な『焙烙玉』は九州兵を震撼させた。爆音と同時に城壁さえ崩してしまう『焙烙玉』によって戦死した九州兵は二百人にのぼる。

「いつまで続くのかなあ、この戦い」

音羽に寄りかかりながら上乃は言葉をこぼす。知らぬ異国で、異国民のために死線を潜ってきた上乃も、すっかり疲れ果てている。

上乃とて復興戦争を戦い抜いた英傑だ。戦場を知らないわけではな

いし、実力だつて十分にある。

しかしこの戦いは、初めから『精神的支柱』のない戦いだつた。九洲のためでもなく、九峪のためでもなく、火魅子のためでもなく、ましてや伊万里のために戦っているわけでもない。

自分が『九峪派』だつたから。それだけの理由で文官に難癖をつけられ、しかたなく従軍して来たに過ぎない。

そもそも、その『九峪派』という呼ばれ方だつて、役人が勝手にそうしているだけだ。上乃自身にそんな気はまったくない。

事の次第は音羽に似ている。豊後県文官と武官が言い争い、文官が相手を貶めようと九峪の悪口を言い始めて、それに腹が立って抗議しただけなのだ。

それを文官は根に持ち、事態が沈静化されつつあるころから上乃を『九峪派』と呼ぶようになった。ただし上乃は武官だったが、音羽と違って伊万里直属だつたから難を逃れたのだ。

だから、望んだ戦いなんかじゃなかった、最初から。豊後県の暴動で立場の弱くなった伊万里の迷惑にならないように従軍してきただけ。

ただ今まで生き抜いてきたのは、そんなくだらない理由で、こんなワケのわからないトコロで死にたくない！ と、思うから。

伊万里の悲しむ顔が見たくないから、ただそれだけの理由だ。簡単だ、私はまだ『死にたくない、生きて伊万里の元へ帰りたい』
それだけ。それだけの、言葉にすれば簡単なことだけれど、それ以

外はどうだっていい。

北山が負けようが、滅びようが。

奴隷にされようが、なで斬りにされようが。

「でも、きっと、目覚めは悪いんだろうなあ」

「そうかもしれない……………」

弱音を吐く上乃を抱き寄せると、腕の中の上乃は小さく震えていた。血の少なくなった身体に、今日のような寒さはいささか酷だ。

身体を温めようにも、酒は飲めない。もう酒すら長いこと呑んでいない。酔うことが恐ろしかった。もしも夜襲や奇襲があつたらと思うと……………とても呑めたものではない。

そういえばと、ふと、かつてのことを思い出す。考えてみれば九峪以外の指揮下で戦うのは初めてだ。九峪は必ず酒を持っていた。

薩摩 昔は南火向だったが、戦力増強のために遠征したとき、只深が大量の酒を持ってきた。あの時は大変だったと思う。重然と鬼華乃が飲み比べを初めて、羽江が衣緒を怒らせて埋められて……………。

知らず知らず、音羽の口から微笑がこぼれていた。あの頃は必死で真剣だったけど、それでも、充実していた。

「九峪様がいない戦いは、こんなものなのかもしれないな」

青みがかった髪をなでながら、懐かしい日々を回顧する。感傷ではないが、音羽はこの場に九峪がいないことの『絶望』を感じた。

北山の将兵も強い。なにしろ兵士が軒並み揃って薩摩兵くらいの実力ばかりなのだ。将も強い。

しかし中山の勢いは凄まじく、いちど躪いた北山に立ち直る力も機会もなかった。九州からの援軍がなければ、名護落城で全ては終わっていただろう。

ここまで厳しい状況になると、それこそ九峪のような『ありえない戦術』で立ち向かうしかないのではないか。多分に美化された考え方もしれないが、音羽はそう思えて仕方がないのだ。

九峪様がいたら。担い手であるはずなのに、つい縋り付いてしまいたくなるほど、琉球は激しく酷い世界だった。

「……………九峪様、なんで還っちゃったのさ」

「……………」

「戻ってきてよお……………」

上乃の悲痛な言葉を聴きながら、ギュッと、小さな肩を抱く腕に力をこめた。

「琉球の情勢がよくないらしいです」

麓の里から帰ってきた女中には、巷の噂を九峪に伝えるという仕事があった。閉鎖的な九峪にとって、女中だけが唯一の情報源であった。

九峪の居室で、女中の淹れた茶を飲みながら、九峪は話に耳を傾ける。最近、九峪は何かしらの書に認めている。何を書いているのか女中は知らず、また興味もない。

先だつて決行された『第一次琉球出兵』に関しては、九峪もすでに聞き及んでいる。北山の戦況不利を受けて『第二次琉球出兵』が計画されていることも。

都を落とされて、戦場を徐々に北上させているらしい。女中の言う噂では、音羽と上乃の働きが目覚しく、鬼神のようだとさえ言われている。

しかし、それでも中山の猛撃は歯止めが利かず、終わりもなく、底抜けだ。ヤツラは洪水なんだと、九峪は言葉にこそしないが、それは女中にはわかった。

筆を止めて、茶をすすり、九峪はほつと息を吐く。十二月二十九日、もうすぐ新年を迎える。熱い茶はこの季節の必需品だ。

微風が戸口をざわつかせている。隙間風はないが、音だけで寒くなる。老猫も火桶の近くで丸くなっている。

「俺たちがここに住み始めたのが、大体一年前かな」

「はい。昨年十一月です」

「もう一年かぁ・・・・・・・・」

感慨深いのか、九峪の言葉にはささやかな重みがあった。何を思っているのか、女中は少しだけ気になった。

九峪は追放されたのだ。かつての仲間たちに地位を追われ、この阿蘇山で軟禁されている。私は九峪様の生活を面倒すると同時に、護衛と監視の役目をも負っている。

だから気になる。いま目の前で寒風に耳をそばだてる神の遣いは、二年目の阿蘇の冬をどう感じているのだろう　と。

正直言えば畏れ多い。罰当たりといえば、これほどの罰当たりはないだろう。最初は「なぜ私が・・・・・・・・」と愚痴ってもいたのだが。

思えば九峪様は、可哀想な方なのかもしれない。この家も亜衣様が手心を加えたかもしれないが、かつての栄華の頂点から転落したのだ。善政を行い、万民から慕われていたはずなのに。

そう思うことさえ、それが一年の付き合いの成したもののなのか。女中にはまだわからない。

「音羽たち、無事だといいいんだけどな」

見えぬ異国で血潮を流す仲間を力なき九峪は想う。もう無事を祈るしかなく、どのような策を講じることさえ出来ない。ただトカラ海峡を越えた同胞七千人の雄躍を期待するしかないのだ。

しんみりした空気の中で、風の音と九峪が茶を飲む音だけが、しず

しずと聞こえている。言葉はなかった。

静寂を破ったのは戸を開ける音になったときだ。見回りに出ていた兎華乃たちが帰ってきたのだ。土間からわいわいと話し声が聞こえてくる。

静けさは一瞬で吹き飛んだ。九峪も笑顔で立ち上がると、兎華乃たちを出迎えに行った。寒空の下を歩き回った兎華乃たちは、九峪が出迎えに来ないと

「ちょっと、か弱い乙女を寒空のした歩かせといて、いいご身分だね、羨ましいわね、殺したいわね」

と文句を言われるのだ。だから九峪は笑顔で迎えることにしている。

居室の戸を開け放つと、冷気が渦巻くように部屋の中へと流れ込んできた。職台の灯火がボボツと膨れたような音を立てて揺れ、一瞬の音とともに小さく破裂した。後には煙だけとなった。

女中は寒さに身をすくませたが、すぐに立ち上がって主の出て行った戸を閉める。台所は別の土間にあり、そこへ早足に向かう。茶を入れるためだ。

魔兎族を誘った九峪が今へ入ると、兎奈美が転がるように囲炉裏の前まで進んだ。よほど魔人のクセに寒かったのか、ふにやっとならなく頬を緩ませている。

「あつたかい」

暖は十分にとつてある。外は寒いだろうと思って、九峪があらかじ

め炎を焚いていたのだ。

手をかざして温まる兎奈美にならって、兎華乃と兎音も囲炉裏の周りに腰を落ち着ける。ほっとした様子に九峪は微笑んで、秋の暮れ頃に作った干し柿を持ってくる。

芳醇で、どこか野暮ったい山のおいが、部屋中に広がる。干し柿を作ったのなんか初めてだったが、なかなか上手く出来たと自負している一品だ。

干し柿特有の、表面に付着した白いでんぷん質にも旨みがある。果肉の甘み、蒸発した汁の残したほのかな渋み、そして手を白くさせるでんぷん質の旨みは、作物の取れない冬のごちそうだ。

ふだん九峪を褒めたりしない姉妹も、これだけは上手く作れたと言ってくれる。年甲斐もないが、それは九峪にとってちよっぴりだけ嬉しい言葉だった。

干し柿に舌鼓をうっていると、女中が熱い茶を持ってきた。

「こ、この臭いは……………」

かすかに臭う、これは高麗人参。

九峪の頬を汗が伝う。たいして魔兎族の反応は暖かった。

「九峪さんも、好き嫌いしてると大きくなれないわよ……………」
「イロイロと」

「もう大きいからいいんだよッ！」

「あら」

兎華乃がわざとらしく口元を隠した。いつだか心の病で阿蘇に引きこもったときから、人間との共同生活を送るようになった兎華乃たちは、ときおり下世話な会話をするようになった。

いまでも、よく九峪をからかう。からかう度に過剰な反応を示すものだから、つい調子に乗ってしまうのだ。こういうところも、九峪と接するうえの醍醐味かもしれない。

鋭い洞察力をもっている九峪だが、いちど相手に会話のペースを掴まれると簡単には脱せない。しばらく応酬するも、最後は黙り込んでしまう。こうなって初めて兎華乃も矛先を収める。

が、ここからが空気の読めない兎奈美の出番。兎華乃の後を継いだ兎奈美が、

「みせてーみせてよー」

と九峪の下半身の守護神を剥ぎ取ろうとする。もちろん九峪は抵抗するが、兎華乃は無視して、兎音も無視して、女中も無視して、老猫はあくびをかく。

死闘はかろうじて九峪の勝利で終わり、それがここ最近の予定調和となっている。兎奈美にすれば、九峪が居るだけで面白く、言い換えればただじゃれているだけ。九峪がちゃんと相手をしてくれれば、それだけでいいのだ。

日課を済ませた九峪は、こころなしに兎奈美から距離を置いて座り

なおす。

「今日も何もなかったか？」

改めて九峪は尋ねた。

兎華乃の答えは肯定。今日も何もなかった。そもそも、こんな冬真つ只中に登山なんてする物好きはいまい。とは言ってもだ、やはり油断出来ない。

阿蘇は霊山で、たまに、本当にたまにだが神官が修行に訪れることがある。敬虔な僧侶も訪れるし、そういった意味でも、兎華乃たちの見回りは必須であつた。

実際、兎華乃たちは阿蘇の森で人を何度も見かけている。採取・狩猟に來たものも居れば、靈験を得ようとする者も。問題は、靈験を得ようとする者たちの中に、亜衣の噂を聞いて『神が舞い降りた』などと信じている者たちがいることだ。

兎華乃たちは『危険な獣がいる』といって下山させているが、熱心な坊主などはそれでも一目だけでも神秘を見たいと、あくなき闘志を燃やしている。

秋口までは、三姉妹の警備の目をかいくぐって阿蘇を登頂しようと悪戦苦闘するものたちとの、ささやかな攻防戦が展開されていた。

「すっかりこの場所が見つかったら、一貫の終わりね」

こともなげに兎華乃は言うが、もしそうなることは想像するだに恐ろしい。

九峪とて、何一つ心煩わぬ生活を送っているわけではないのだ。九峪自身にも、決して人目についてはならないという責務があり、それは言われずとも遵守しなければならない。

ただ取り合えず、冬に入れば多少は安心できるだろう。阿蘇の山々は白化粧が映えている。寒風に守られた白野原が土足で汚されることはない。

食物はある。酒もある。燃料もあり、不本意だが漬物も腐らせるほどある。冬越えの準備は万全だ。

「寒いかもしれないけど、ほんとに頼むぜ」

頭を下げることを厭わない九峪は、両手で膝を押さえたまま前かがみになる。

「俺の運命は、兎華乃たちに握られてるんだから」

「さりげなく重いものを握らされているわね」

「ナニを握らされないだけマシだ。きっとイカ臭い」

ボソツと兎音が呟く。

「兎音、淑女はそういうことを口にしないものよ」

たしなめる兎華乃だが説得力はない。

「九峪さん、臭いの？」

「臭くねえよッ!!」

純真な兎奈美の問いは、九峪の心に痛かった。

この下ネタ三姉妹が……ッ! 心の中でうなる九峪だが、彼女たちがここまで俗にまみれた最大の原因が自分にあるとは、この男、露ほども考えていない。

しかも三人ともなまじ美人（一名美少女）なだけに、こういった会話は非常にやらしい。九峪としてはその美人に『イカ臭い』と言われては、地中を掘り進んでマントルに身を投げ出したくなるほど辛いものがある。

「まあ、別に握らされるのが九峪さんの運命でもナニでも、私は一向にかまわないけど。私がここまでしてあげてるんだから、光栄に思いなさい」

「ちよつ、姉様、なに自分だけ頑張ってるみたいな言い方してるのさあ」

「むしろあたしらの中で一番なにもしてないのに」

咄嗟に反論が起こる。兎華乃の労働実態を知っている妹組みにはどうやら、兎華乃の言葉が大変ふまんであったようだ。

とはいえそれも仕方がない。基本的に身体能力が『見た目相応』の兎華乃は、兎音や兎奈美ほどの無茶が出来ず、結果として一番緩くて一番楽な道に陣取っているのだ。道なき道を獣のように移動している二人にすれば、非常に不満どころの話ではない。

評価は正当に！ と叫ぶ二人を兎華乃は笑顔で黙らせる。言葉にしているのに、

「おだまり」

と聞こえたのは九峪の幻聴だ。

逆らうときだけ最強に変貌する姉の圧力に屈した妹組みが沈黙する。でも空気が黒い。あの姉に何か言ってくれと死線が度々九峪に向けられる。せめて死線でなく視線を向けると叫びたくなった。

「そ、そんな目でみるなよ」

「そうよ。あなた達、あまり困らせてはいけないわ。人間は弱い生き物なのだから、私たち上級魔人の眼光にすら怯えきってしまうのよ」

「あ、いや、お前らの視線はぜんぜん怖くないんだけども」

「・・・・・・・・」

兎華乃の沈黙。兎音と兎奈美も沈黙して、女中は息を飲んだ。

「・・・・・・・・なめられたものね、私たち魔兎族も」

「姉様、この男、ずいぶんと増徴しているようだ」

「うん、いまのはちょっつと、気に入らなかったかなあ」

肉眼でも確認できる。黒い瘴気が上級魔人の身体から迸っているのが。

このとき、九峪は自分自身の失言に気づいて顔面を蒼白にさせた。あまりにも迂闊な失敗としか言いようがないだろう。

彼女たちは暗黒面ダークサイドに堕ちてしまった。

かつて久しい、土羅久琉に襲われたときの恐怖感が、身体の中に蘇ってきた。それと同時に湧き上がる、この感情、思い出される、この言葉。

真に恐ろしきは、人非ざるもの。そして曹操の残した言葉、『人生、幾許。たとえば、朝露のごとし』

「ところで九峪さん、人間は海の中では息が出来なくて死んでしまうように、魔人も人間界の空気になかなか馴染めないわ」

立ち上がった兎華乃が、真紅の瞳で見下ろす。九峪は石となった。

「その私たちが人間界で生きようとするならば、何を必要とするか、あなたにはわかるかしら」

言葉と同時に、兎音と兎奈美が立ち上がる。

九峪は兎華乃の問いに答えることが出来ない。そこところを、九峪はよくわかっていないのだ。

兎華乃が嘲笑う。

「不勉強だな、神の遣いともあろう者が」

「な、なんだよ」

「私たちがなぜ、人間を喰らわずに高麗人参を食べているか、わかっているの？」

「え、栄養豊富だから」

「ええ、そう、その通り。逆を言えば、あれだけ精のあるものでなければ、私たちは生命を維持できないということ」

「さらに逆を言うと、人間にもそれだけの精があるということだ」

兎華乃と兎音が交互に言葉を連ね、まるで呪文のように九峪を縛り付ける。

暗に『お前を食べてやろうかあ』と言っているのだ。

しかし魔族には、いまは九洲から居なくなった友人との誓いがあり、欲望のために人を喰らうことを己に禁じている。

「だから私たちは人間を食べない」

「しかし人間の精は『生き物の精』。犬にも猫にも勝る、上質でとろけるような『精』。それは高麗人参よりも質も純度も味もよい」

「でも食べちゃいけないんだよお」

「……ジレンマよね？ 目の前に人間がいるのに」

「な、何が言いたい……俺をどうするってんだよッ!？」

恐怖に耐え切れず、九峪は悲痛な叫びを上げた。目じりに涙を浮かべないのは、せめてもの意地であつた。

兎華乃、兎音、兎奈美が笑んだ。死神の微笑にしか、九峪には見えなかつた。

「安心なさいな、あなたを本気で殺すつもりはないわ」

「……ほ、ほんとにか？」

恐る恐る尋ねる。しかし死神の笑みは崩れない。

「ええ、ええ、本当ですとも。……引き裂いて血肉を喰らわなくても、精を貪る方法はあるもの」

なんか、すごいヤな予感。

警鐘がガンガン鳴らされるが、九峪はやはり動けなかつた。これが魔人の眼光か。そういえば土羅久琉に襲われたときも、香蘭が馬の尻を蹴って走らせてくれたおかげで、逃げる事が出来たんだっけか。

終わった。そう、諦めた。

兎華乃が瞳を細めて、女中に向き直る。小さな女中が身をすくめたのは仕方のないことだ。

しかし、

「布団の準備をなさい」

といわれて、九峪はやはりと思って絶望し、意味を察した女中が頬を赤らめた。

あたふたとしながら女中が手を振り返し、

「ま、まだ夕方になったばかりですッ」

と見当違いな反応をしてしまった。しかしそんなことは、人間の法に縛られない魔人には関係がない。

「と、兎華乃……本気なのか？」

「いいじゃない。あなただってこんな美女に囲まれて、ムラムラしないはずがないわ。溜め込むのは身体に毒だわ。一思いに抜いてあげるから、いい加減スッキリなさいな」

ゲッソリの間違いじゃないのか。九峪は力の限り吼えたかった。

結局女中は布団を用意し、もじもじしながら戻ってきた。

すでに九峪は怯えた猫か、蛇に睨まれた蛙か。

「じゅ、準備できました／＼」

もう顔も真っ赤だ。言動や雰囲気わりに、心根は意外と初心なようだ。

頷いた兎華乃が部屋の戸に手を添える。兎音と兎奈美に両脇から抱えられた九峪が、絶望を通り越した境地の表情で連行される。

だが部屋を出ようとする瞬間、女中に目を留め、

「貴女も来なさい」

「うえッ！？ わ、私でございますかッ！？」

あからさまに狼狽する女中。まさか自分までとは思ひもなかった。

なぜ、どうしても言葉を重ねるが、兎華乃は涼しげに笑み、

「貴女からも精を貪らせていただくわ」

と言い放ち、女中の目に涙を浮かべさせた。

あうあうと喘ぎながら、ちらちら九峪に視線を向け、藤りんこのような顔をさらに赤くさせたかと思うと、

「わ、わたし……………わたしッ！ この年ですけど、まだ処女なんですッ！！」

いきなりカミングアウト。どうやら普段の澄ました振る舞いは、ただ背伸びをしていただけらしい。

しかし……………やはりそんなことは。

「でもそんなの関係ねえ」

兎音に一蹴され、兎華乃は瞳を輝かせる。

「処女ッ！ いいわね、処女の純血は最高の甘露だわ！！ 可愛らしく泣き叫んで頂戴な」

「ひええええん！ 九峪さまあ、助けてくださいいいッ！！」

とうとう仮面をぶち破って泣き出した女中を救い出す術を、もちろんちっけな九峪が持ちえるはずもなく。

「覚悟なさい。この世界につれてこられて二十余年、枯れ果てるまで搾り取ってあげるわ」

哀れな子羊二匹は、夕方のうちに生贄に捧げられた。三人の嬌声と二名の悲鳴は夜中になるまで絶えなかったといい、翌日、魔兎族は卵肌生まれ変わり、人間二人は生きたゾンビに成り果てた。

阿蘇の中腹で、人知れない下克上が達成された日であった。

第16回 「混迷の呼び水」

水面に沸き立つ波紋は、最初こそ一つの小波でしかない。

ただ、子供心に思った人も、きっと少なくない。小さな小石を落とした池、桶に溜められた水へと投じられるガラス玉から広がる波紋は、三百六十度の真円を刻みながら大きくなっていく、あの様子を。波紋は一つの波から二つの小波、三つの細波、四つの白波へと、姿を変えていく。そして波紋は影や岸にぶつかり、消えるのではなく新たな波紋として帰ってくる。

波紋は波紋となって波紋を呼ぶ。波紋同士がぶつかり、混じり、揺れ動いて、そうして初めて相殺の果てに消滅する。

投じる石が大きければそれだけ波紋は大きくなる。硬い壁に跳ね返された波紋は、互いに犯し合い殺し合い、やはり消える。

この仕組み 原理とも真理とも呼べる波紋の連鎖は、森羅万象に通ずる理に他ならない。人の営み、世の営み、宇宙の営みは、一と二の衝突から全てが始まったのだから。

しかし、この営みをその日その時に理解できる人間など、はたして数多としない。人間は小さくてちっぽけで、空を仰ぐことはできても空から仰ぐことが出来ない。だから人は、遥か天空に魅入られた。

上から見ないと波紋はわからない。波立っている事実すら、水中の生物は気づけないのだ。ならば渦中の人間が、どうして気づけようか、気づける道理がどこにあるうか。

でも、たとえ気づけないのだとしても、気づかなければならない宿命を負った人間は必ずいる。

しかし、世の中は皮肉だ。気づいた人間がいて、どうにかしたいと思わせ、そのためにただ駆けさせるのに、結局のところ運命より先を歩かせてはくれない。

耶牟原城にそんな不幸な宰相がいた。彼女は事態の深刻さに気づいて、あらゆる手を打ったのに、最大の障害が身内にいたとは気づかなかった。

人間に人間以外の敵はいない。彼女はそれを知った。

炎の揺らめく大きな空間は、それだけで完成された一つの世界。

その世界に君臨する女王は、ただ瞳を閉じて玉座と玉座そのものになっている。

「・・・・・・・・重然は、私たちを恨むかしら」

女王は憂いた音を発した。悲しげで、諦観の漂う言葉。

下段で対面している亜衣の表情も優れない。体調が悪いとかそんな簡単なことではない。何よりも心が重い。

女王と亜衣は決断しなければならない。重然には大隈海戦での敗北

を招いた責任を取らせねばならない。

女王としては沙汰なしの処分を下したい。たしかに裏をかかれたのは重然だが、石川島海人衆は宗像と並んで最大の水軍だ。

ただ一回の敗戦がなんだ。海洋国家の北山と付き合う以上、石川島水軍の存在意義は大きい。

とはいえ、沙汰なしに異議を唱えている連中がいる。他でもない宗像だ。宗像には九州最大の水軍に上り詰め、制海権を完全に掌握したいという野望がある。そのためには石川島が邪魔なのだ。

彼らは重然を『敗軍の将』と名指ししている。石川島衆そのものに対してさえ『大したことがなく当てに出来ない』と喚き散らすこと憚らず、両者の関係はもはや修復不可能な段階にまで悪化してしまっている。

宗像の暴走が始まった。均衡は崩されてしまった。さらに悪いことに、石川島は一大水軍といえども所詮は地方勢力でしかないが、宗像は由緒正しい女王与力の官軍なのだ。

一勢力から九州水軍の筆頭にのし上がった意地

歴史と由緒深い耶麻台王家直属としての誇り

溝は深まるばかりだ。そんな折に女王と亜衣が下した決断は、彼女たちにとっては苦渋の決断であった。

信賞必罰は家臣の統率に不可欠。重然は『罰せられなければ』ならない。九峪がまだ君臨していた頃は、あるいは藤那のように許すこ

とが出来たかもしれない。しかしそれも、九峪だから出来たこと。火魅子にも亜衣にも出来ないこと。

石川島衆は薩摩へ転封、旧領石川島は宗像の所領とする。

亜衣に出来る最大限であつた。

まず石川島を宗像に与えることで、これ以上、石川島衆を責められないようにする。土地を失った石川島衆の駆け込み先に薩摩を選んだのは、今尚、同地の兵士たちの間で重然は人気があるからだ。

そして正式な『官軍』とする。

本音を言えば石川島を官軍にはしたくない。宗像を封じ込めるには徹底した対比構造が望ましく、官軍の宗像に対する石川島衆は豪族のほう体がよかった。

しかしこうでも　これくらいしないと、石川島衆、ひいては重然が納得すまい。以前として宗像の暴走を押さえられるのは重然だけで、まさかその勢力をおとり潰しにするわけにもかない。なんとしても石川島衆は守らねばならなかった。

重然と阿智、両者に下知が下された。

「……………重然、躓きおってッ！」

書状を読み終わった阿智の声は憤りも露であつた。目障りな石川島の所領を得られると各々が喜び舞い上がる中、阿智ひとりだけが笑みを浮かべることもなく、無言のまま書状を火にくべてしまった。

下知とあれば致し方ない。仕方がないが、はたして重然の心境は以下ばかりだろうか。敗北の責を負うためとはいえ、先代より続く石川島の歴史に、己が代で幕を閉じるのだ。

すぐにも石川島を押さえようと意気込む者たちを落ち着かせ、阿智は共を二人だけつけて薩摩へと向かった。道々、聞こえてくる噂には此度の重然転封も混ざっており、広く知られているようだった。

おもしろくない。

二日の旅で石川島に到着するが、はて、重然は会うどころか目通りすら許さなかった。薩摩荘の屋敷の門前で、阿智は立ち往生していた。

「重然殿には会えぬか」

「くどうござえまさあ。会えんものは会えん！」

なんと言っても、目の前の男は道を譲ってくれそうにない。今しばし粘ってから、阿智は明日もまた伺うとしてその日は領内の一室で晩を過ごした。

二日目も空振りに終わり、返答があつたのは三日目。阿智は度肝を抜かれた。

「石川島はやれん」

それが男　男の口を借りた、重然の言葉であつた。

火魅子の下知には従わない。石川島は明け渡さない。

そう公然と言い放ったのだ。

これが、発端。亜衣の見通しが甘かったとしか言いようがない。

重然は火魅子の下知は不服だとして、君主の命に背いた。敗軍の将が命に背いた。ただしこれは外面の事情、実際のところ、怒り心頭なのは重然ではなくその郎党たちであり、もはや抑えることは出来ない、重然も諦めてしまったのだ。

それでも、家族同然に生き、死地を潜り抜けてきた部下たちを見捨てられない。重然の厚すぎる人情が、女王の命令さえも反故にさせた。

これに異議申し立てをした宗像の有力者たちは、亜衣や火魅子に上訴をかけた。彼らはいまでも、宗像の意見ならば女王と宰相は取り上げてくれると、愚かにも信じきっていた。

これがいけなかった。宗像の威張り散らしに、自分たちの失態を論って鬨る宗像に、とうとう石川島衆だけでなく、重然の溜めに溜めた『堪忍袋の緒が切れた』。

さしもの阿智も動揺を隠せず、急ぎ耶牟原城へと向かった。ことの次第を亜衣に相談するが、とうの亜衣ですら顔を青くさせていた。

「重然、なにを考えているんだ……」

もはや亜衣にも計りかねない。慎重な重然らしからぬ行動だった。それとも、それだけ不服だったのだろうか。

阿智と亜衣はなんとか重然を思いとどませようと説得するが、沙汰なし以外の命は受けないと意固地な答えしか返ってこない。

そうして日が過ぎて　最悪の事態になった。

すべては、またもや宗像から始まった。

阿智について宗像を束ねる副棟梁の蔚海が、いつまでも譲かない重然に痺れを切らして、石川島に乗り込もうとしたのだ。自身の手勢二百人余りを連れて行ったが、阿智の助言で残してきた石川島衆が追い返し、蔚海は結局ひきあげていった。

が、これでもはや後戻りは出来ず、亜衣と阿智は開いた口が塞がらなくなった。重然は完全にキレて、香蘭や紅玉の静止もむなしく石川島へ戻ってしまい、一戦も止む無しという姿勢を見せた。

最悪だ。まさに最悪だ。たしかに重然は命に背いた。そのそしりは免れないとしても　さきに、宗像が手を出してしまった。

さらに事態は緊迫していき、火向県と薩摩県の豪族たちにも火がついた。大勢力の宗像に媚び諂ってきた者たち、とりわけ大隈開戦に関わった連中は、同様に宗像から無能扱いされ、腹が立っていた。

続々と重然に賛同するものが溢れ帰り、薩摩、火向はちよつとしたパニック状態に陥った。『第一次琉球出兵』からまだ日が浅いというのに……………。

重然に賛同した豪族たちは、みな宗像を嫌っていた。奴らの横暴さを例えるならば、在りし日の平家のようにさえあった。彼らは「平氏に非ずは人に非ず」という言葉を残したことで有名だ。それだけ尊大で、ゆえに横暴で、ために滅んだ。

賛同する豪族は二十二家。その全ての郎党を合わせるとざっと九千。この二十二将、九千がいま、宗像を睨みつけている。筆頭は石川島先立つて従三位の位を賜ったばかりの重然。

まさかであろう。まさかこんなことになるとは、亜衣にも予想の仕様がなかった。ただでさえ北山に揺さぶられているのに、まさか。

琉球の戦況も宜しくない。先方は再び兵員を送れと要求している。しなければ、加奈港に駐屯している軍がどう動くか　と、脅しをかけながら。その一方で、宗像が馬鹿なことをして、重然がとんでもないことをしてくれた。

兵を送らねば。いま加奈港で暴れられたら、ただでさえ神経過敏な重然が暴発せんとも限らない。いやする。

しかし亜衣は悩んだ。いやさ苦しんだ。九洲の北部は『第一次琉球出兵』でいきなり徴兵されて、地方豪族が憤っている。南部は南部で重然の問題がある。

どこから兵を集めろというのだ。北から動員すれば彼らは一揆を起こすに違いない。南部で動員すれば重然が謀反を起こすかもしれない。

しかし兵を送らねば加奈港の北山軍が暴れて、刺激された重然が暴発して宗像と戦をはじめ、北部の豪族たちの怒りも爆発すること火

を見るよりも明らか。

一年前の騒乱よりもずっと性質が悪い。何をしても悪いほうにしか転ばない。まさに進めば崖、戻れば川である。

九州全土はもはや大混乱一步手前。この危機にはさしもの文官衆も閉口せざるを得ず、こういうときに限って彼らは右往左往してばかりだ。

宰相の亜衣、大將軍の伊雅、そして女王の火魅子が重然と阿智の間に割って入り、苦心しつつも懸命に調停にあたり、元星六年一月三日をもって両者は矛先を下ろした。

「阿智は石川島を受領、運営する事」

「はっ」

「重然は引き続き薩摩水軍棟梁を務める事」

「・・・・・・・・・・はっ」

耶牟原城で起請文に調印したのは一月六日。敗戦の責を負わせるのではないということを明らかにするために、重然には薩摩水軍の棟梁を続けさせるという破格の待遇を約束した。

言外に、どうかこれで怒りを治めてくれという、亜衣の切実な願いがあった。石川島を宗像に明け渡してくれたなら、出来る限りを尽くして優遇するからと、あの手この手で口説き倒した結果であった。

先に手を出してきた宗像を罰することを条件として重然は郎党を率いて薩摩へと移り住んだ。官軍と認められ、従三位の位を返還、將軍職を賜った。

宗像は石川島を得た代わりに他地を没収され減俸、さらに蔚海を罷免することで、ようやく一連の騒動 『石川島事件』に幕を下ろす形となった。

しかし、これはすでに、共和国にひび割れが起きている何よりの証拠でもある。東西南北、全ての豪族が思うところを抱えていることが明らかになったのだから。

折にいつて二月。亜衣はようやく『第二次琉球出兵』を発動。不安は多く抱えているが、これだけは避けられない道である。

豊後、火後、火向から兵五千を結集する。幸か不幸か、重然の問題から回復しきっていない文官たちは、思うように人事を動かせなかった。亜衣にとってこれは僥倖であった。

文官が出兵させることの出来た元九峪派はわずかに三名。

そのうちの一人、川辺城の戦いで武名を馳せた将、中校尉の遠州も九峪派の武人であった。

遠州はかつての復興軍で、川辺城の支城四つを兵二百人足らずで陥落せしめ、川辺本戦でも抜群の戦果を挙げた男だ。

白廉の鎧に金細工を施し、身体のはば全部を覆う倭国では非常に珍しいフルプレートと蛇腹剣を駆使して戦う遠州は、その洒落な姿と美男子然とした風貌に似合わない武者ぶりをもって、

『白勇公』

の異名をとった勇将である。また遠州は音羽の後をついで『九峪親衛隊』を復活させ、同隊長を務めた。そのため九峪から信頼され、『漢の熱い友情を育んだ』とは一部で有名な噂だが、もちろん根も葉もない。

音羽と並んで文官からマークされた遠州だが、とうとう年貢の納め時というべきか。

四月、自身は兵八百を率いて、加奈港より出港する船に乗り込んだ。総勢五千人をのせた大船団は、いまだ見ぬ地獄へと旅立つ。

阿蘇の九峪が遠州の出陣を知ったのは、十三日後のことであった。

「・・・・・・・・そつか、遠州まで」

兎奈美に現代の遊びを教えていた九峪の表情が翳るのを女中は見逃さない。さきほどまで楽しそうに笑いあっていた九峪が、いまや『神の遣い』の目をしている。

九峪が遠州と親しい。この噂は非常に有名だし、また真実でもあった。清瑞がホタルの棟梁になってからは、遠州が九峪の護衛も兼任していた。

「二人は只ならぬ関係だとか・・・・・・・・」。女中も含め、宮内の女はこぞって色めきあつたものだ。

「好色な神の遣いは『ソツチ』もいける口だとか……」。もちろん根拠はないが、二人の親しい付き合いは女性の妄想を掻き立てずにはいられない。

などと、間違つても言えない自分が苦しい。珠洲嬢は完璧『百合』で間違いないし、九峪だけでなく忌瀬や藤那まで『両刀』という噂もあったし、いったいこの国はどこに向かおうとしているのだろうと布団の中で考えた夜もある。

ほんとうに、二人はそういう関係なのかしら。

尋ねたいがそれは無謀というもの。彼女はおしとやかで おしとやかな性格ほどそういった話に敏感だが とても尋ねられるわけがない。

だから、出来る限り湾曲させて、

「気になりますか、その……白勇公様が」

上目がちに尋ねてみる。

九峪は茶で喉を湿らせて、

「そつだな」

とだけ答えた。

そんな物憂げな顔で、物憂げに言われるから、あらぬ噂が立つのにッ。

なんてことは顔に貼り付けた薄っぺらい皮一枚で完全に隠し切って、コポコポと茶を入れなおす。

「どうぞ」

「お、サンキュ」

「ねえ、あたしのお茶は？」

「いまお淹れしますから」

兎奈美にも茶を淹れてやり、自分の湯呑にも注ぐ。

冬場だと仕事が極端に減る。精々が洗濯や炊事くらい。草刈をしようにも草はないし、降り積もった雪は放っておいたって問題ないくらいだ。積もったら積もったで魔兔族が頑張ってくれる。

そんな女中は、もっぱら九峪と過ごす時間が多くなった。もともとやることもないし、阿蘇に娯楽はないし、それよりも九峪といるとまず飽きない。文字を読める以外の教養をもたない女中にとって、九峪はなんと博識の塊に映ることだろうか。

下界はまったく騒然として殺伐極まりないというのに、どうしてここはこんなにも穏やかに時間が流れるのだろう。九峪が兎奈美と戯れ、兎華乃にからかわれ、兎音に呆れられる日々に、ここが幽閉という、本来なら冷たく閉ざされた空間なのだということさえ忘れてしまいそうになる。

ゆえに、女中にもわかる。九峪の心中は、微笑とは裏腹にまっ

たく穏やかでない。きつと目まぐるしく変化する情勢に、無力な自分を責めているに違いない。

九峪がいたからってどうにも出来ないかもしれない。一年をともに過ごして、神の遣いも決して『万能』ではないと知らされた。全知全能がこんな幽閉生活を送るはずもない。

でも何かが出来たはずだ。全知全能でない神の遣いだって、大きな波紋を起こすことが出来る。今までだって起こしてきたのだから。

「琉球……北山は、いまどうなっているのかな」

そんな、なんてことない一言からも、九峪の気持ちは知れる。

「戦況は厳しい、という噂ですが」

「二度目の出兵があったんだから、その通りなのかもな」

「九峪様……二次出兵で、戦況を覆せると思いますか？」

もつとも気になるのはこの部分。いや別段、女中の気にするところでもないのだが、明らかに不利な状況を今回の出兵で覆せるのか、それを軍事の天才に尋ねてみたかった。

思案するそぶりを見せて、真実かんがえているのだらう、九峪は瞳を泳がせた。動揺しているのではないだろうが、珍しいとも思った。

「……一軍で七千を投入した。音羽に上乃といった実力者が指揮している。それでも形勢は不利。戦力では勝っているはずなのに」

「北山は、非常に強力な炸裂岩を使うそうですが」

「爆弾の一種かな。焙烙玉っていったっけか。元寇どころか、まだ三国時代だって終わっていないのに……さすがはパラレルワールドってか」

「……あの、九峪様。申し訳ありませんが、例え独り言でも、せめて倭国語で話していただけると嬉しいのですが」

何を言っているのか理解不能だ。『ばくだん』『げんこつ』『さんごくじだい』、『ぱらりら』だか『ぱたりろ』だか、もう思い出せない。

九峪はすまんと謝罪するが、結局、意味は言わない。教えても理解できないと思ったのか。女中は少しだけむっとした。

女中の不満そうな顔に気づいた九峪は苦笑しつつ、案外、子供っぽいやつだなと思った。まあその事実は先だって起こった魔族のご無体で、完膚なきまでに暴露されたわけだけども。

でも、取り合えず少しだけは教えてやろうか。神の遣いの威厳が損なわれる寸前だし。

「そんな顔するなって。ちゃんと説明するよ」

「そ、そんな顔って……」

慌てて顔面を手で覆つ。まさか表情に出ていたなんて。

失礼と思われたかもしれない。それは嫌だった。

しかし九峪は気にしたふうもない。

「ここで一つ、神の遣いのもつ『能力』を見せてやろう」

なんか、すごいことを言っている。

これには流石に興味があるぞ。神の遣いの能力……飛空挺よりも高く飛ぶ、方術や左道をかき消す、毒が通用しない、魔人を殺せるなど、いろいろな噂をきいたことがあるけど。

「おお。九峪さんがなんか偉そうなこと言ってる……九峪さんのくせに」

「くせにとか言うなッ！……ゴホン。と、とにかくだ。神の遣いたるもの、やっぱりすごいことができるわけだ」

あるいみ存在自体がすごい人なんだけど。

とは言わず、続きを待つ。なんだかんだで兎奈美も気になるのだろう。というか……私よりも楽しそうだ。

さて、神の遣いのすごいところとは何だろう。

「あんがい予言とかだったりして」

何とはなしに兎奈美が言う。ふと思いついて言葉にした感じだ。

予言か……巫女も予言が出来ると聞いたことがある。しか

し神の遣いに限って、巫女と同程度のことだろうか。

・
そう疑問に思いつつ待つが、九峪は何も言わない。見ると……………

「なんで先に言うのさ……………」

さめざめと 泣き崩れたる わが主

思わず歌ってしまうほど、衝撃的な光景だ。神の遣いは乙女のように涙を流していた。

「……………あつれ」

「九峪さま……ッ!？」

女中が叫んだ。さしもの兎奈美でさえ言葉を失う光景だ。叫んで何が悪い、だろう。

どうやら兎奈美の予想は的中、ど真ん中だったようだ。

おーいおいと嗚咽する九峪にかける言葉もなく。きつと神の遣いらしいところを見せたかったのだと思う。

泣きじゃくること十分ほど。おもむろに顔を上げ、咳払いを一つ。

「ま、まあ……………兎奈美はなかなか鋭いな」

「あ、じゃあやっぱり予言なんだあ」

「神の遣いともなると、予言だってできるんだ」

本当はできないけど。もちろんそんなことは言わない。

兎奈美は少しだけ感心したように頷いている。

「どんなことがわかるの？」

「ずーっと先の未来がわかる。具体的には千年先とか」

「へえー」

兎奈美の脳裏に千年先の未来が浮かび上がる。……今とまったく変わらない世界が。

「今とどう違うわけ？」

でかい魚が釣りあがった。兎華乃たちによつて貶められた『家主』の地位を取り戻さんと、九峪は現代の知識を披露する。

「いろいろ違うぞお。たとえば、そうだなあ……」

もったいぶった言い方をすると、子供は目を輝かせるものだ。兎奈美を子供というにはいろんなところに語弊があるけど、純真な兎奈美の瞳はやっぱり輝いていた。

女中も気になるご様子。何だかんだでも、神の遣いの大予言に立ち会うのだ、ちょっとだけ緊張していた。

よしよし……。内心でほくそえみながら、「よし」と言う。

「たとえば、あと数十年すれば、呉の滅亡で乱世が終わる」

この時代は呉と晋が戦争をしている。三国時代の末期だが、姜維の死が切欠となつて蜀が片付きはしたが、まだ呉と晋の戦いには決着が見えていない。

戦況は一進一退だが、それを九峪の口は『呉の滅亡』という言葉で断言した。

大陸の乱世の終焉。これには女中も目を見開いた。

「呉は滅びますかッ!？」

「滅ぶ、間違いなく。時代は晋王朝に移るだろうな。司馬氏の天下だ」

この予言の意味するところは大きい。なぜなら耶麻台共和国は、その晋と国交を結んでいるからだ。向うはこちらを『子国』と考えているようだが、なににせよ、倭国における九洲の立場は強くなる。

九峪は晋の天下になると『知っていた』から、群雄割拠の続く大陸で晋を選んだのだ。長い目で見た事前投資であつた。

このときの九峪の判断が、後世の『東征』へと繋がる力の源になる。

この予言は瑞兆だ。女中は疑わずに思った。明るい未来を、この予言は約束したも同然であつた。

こうなると他の予言も聞いてみたい。促されて気を良くした九峪が、

得意顔で続ける。

「倭国も変わるぞ。まだ先の話になるだろうけど、いずれ火魅子が天下を統べる日が来る。『耶麻台』は『大和』と名を変えて、倭国で始めての『王朝』がうまれる」

「『やまと』……………」

「そう、『大和王朝』だ。『大いなる和』と書いて『大和』。……似てると思わないか？『共に和する』という、この国のありかたと」

いわれて、女中ははっとする。

なるほど、そういうことかと納得する。つまり九峪はいずれ生まれる『大いなる和』への願いもこめて『共に和する国』としたのだ。

驚いた、正直に。九峪はずっと先のことまで考えていたのだ。百年先、一千年先の未来まで……………。

と、女中は感激しているのだが、これらの予言がある意味『ペテン』であると、知っているのは九峪だけ。

知らぬは仏である。

さらに色々な予言が女中や兎奈美を、感激させ、感心させた。とくに『アマテラスオオミカミ』のくだりは、まさしく卒倒ものであった。

「火魅子様が、神々の王にッ……！」

「だけじゃないぞ。『宗像三神』っていうのもあってな、巫衣たちも未来では『神』に列せられるんだ」

「あ、巫衣様まで」

もはやうわ言のように呟く。ああ、なんと凄まじい世界だろうか、未来とは。

前途輝く話ではないか。こんな素晴らしい予言に立ち会えた私は、なんて幸せ者なんでしょう………！

生まれてからかつてない感動である。またこの予言を知る唯一の人間であることも、女中の身を骨から振るわせた。絶頂に導かれそんな優越感だ。

だが、そこには忘れてはならないヤツもいる。空気の読めなさに定評のある兎奈美の存在が。

「九峪さんも、神様になるの？」

なんでそういうこと聞くな、お前さんは。

正直言つて、一番聞かれたくない項目だった。九峪の持ちえるやや偏った知識の中にも、『神の遣い』に該当できる神様なんかいるわけがない。

『ヤマトタケル』『スサノオ』『神武天皇』……英雄らしいところには当てはまらない。悔しいけど自覚はある。では高天原の知恵者『ヤゴコロオモイカネ』………という感じにもなら

ない。

「いません」と言えればいいのだが、その場合に起こる落胆は想像を絶することになる。何よりも回復しかけていた『威厳』が再び地に落ちる。

貫かなければ、俺はただの『食料』になりはてる！

だから九峪は考える。考えて考えて……とうとう人の形を失った存在にたどり着く。

「……………俺は」

「俺は？」

「……………り……………龍、だ」

「龍？」

兎奈美が聞き返す。神様とは違うと思うのだが、九峪にとってはまさに天啓のごとき閃きといえた。

『龍』。神格としては申し分ない。西洋で『竜』は決まって邪悪な、倒される存在とされているが、東洋の『龍』は神に順ずる存在、または神そのものともされる。もちろん龍族に含まれる『邪竜』もいるにはいるが、東洋で『竜』と『龍』は別物として区別される。

窮する九峪は、もうやぶれかぶれになっていた。とにかくそれっぽいことを言わないといけないからだ。

そこに、おあつらえ向きの龍がいる。

「『九頭龍』！」

思わず叫んでしまう。

「『九頭龍』といって、九つの頭を持つ巨大で強力な龍神だ。どうだ、スゴイだろうッ！」

「おお……九峪さん、人間やめちゃうんだ」

「あああッ！ そっちにもってっちゃうんだ！」

ダメダ、こいつもどうにもできない。あれこれして龍神にまでなったのに、まさかのコメント『人間やめちゃうんだ』。

その方向に行くとは思わなかった。これがいわゆる『その発想はなかった』というやつなのか。わかるか。

空気が読めないとか、そういう問題ではないようだ。兎奈美にはこういった壮大な話に『感激する』神経がないのかもしれない。いや、兎奈美のことだから、そもそも『理解していない』という可能性……はさすがにないと思うけど。

それとも。

兎奈美にとって、九峪はしょせん人間でしかないということなのかもしれない。だから感激できないのか。これが上級魔人の余裕か。

なんにせよ、もう魔族の中で九峪の地位が向上することはないよ

うだ、それも永遠に。兎奈美で駄目なら、どうやったって兎華乃を
籠絡することは出来ない。

『大予言で地位を回復大作戦』は成功しつつもやっぱり失敗した。
結果として女中は感激してくれたようだが、兎奈美にはほどよい暇
つぶし程度だった。

魔人に人間を崇めさせるのはムリ。今日の教訓である。

矢が頬を掠めた。浅く肉を抉り取られ、それでも血はどっと溢
れ出す。

空には無数の矢。『矢の雨』というように、絶え間なく降り続ける、
死を載せた雫たち。音も、聞くものを不安にさせる、甲高い音。

地面には死体がいくつも転がっている。その背には矢が突き刺さっ
て、まるでハリネズミのよう。

「ぎゃああッ」

隣でまた一人、悲鳴と共に倒れこむ音。どこを射抜かれたのかはわ
からないが、しばらく苦しんだ後に、悲鳴は途絶えた。

城壁に上っている兵士たちは、全員が盾を掲げて矢を防いでいる。
敵勢は目の前。城壁に取り付かんと、怒気をあげて進軍してくる。

こちら弓を引き絞って迎え撃つが、矢玉の量が段違いだ。こちら
はせいぜい二段斉射しかできないのに、敵はあろうことか四段斉射

で味方を援護している。

矢の応酬だけで相当の犠牲者が出ている。盾もあつという間に使い物にならなくなり、備えはぞつとする勢いで無くなくなっていく。

もつ、限界かもしれない。

一際大きく重い大盾で弓兵を守りながら、音羽は齒を食いしばる。音羽の身体の下で兵士二人が弓を射る。

多勢に無勢……ではないのだ。兵力ではこちらが上回っている。武器も、九洲からの第二次兵团が持ってきてくれた。兵糧だつてある。

しかし、勢いが違いすぎた。こちらも死を背負って鬼気迫る勢いだ、みな心のどこかで 勝てないと、そう思ってしまったている。

対する中山の兵はどうだ。なんという勇姿だ。兵一人が、こちらの兵士三人分に匹敵するとは。

彼らはまさに『精鋭』だ。中山の誇れる『戦士』だ。彼らには『兵士』ではなく『戦士』としての心構えがある。

九洲兵と違う。まずそこからして違う。『兵』を組んだ『戦士』がこんなに強いのかと、音羽をして舌を巻かせてしまう。

音羽の部隊は正門を守っている。上乃は別の城に籠って応戦しているし、増援の遠州は出撃して敵将を討ち取ったが、すぐに逆襲の憂き目にあつて上乃の守る琢建^{たうけん}に逃げ込んだ。

今日で十六日目の戦い。五度の戦いで、五度とも撃退した。そのたびにこちらは疲弊し、第二次兵団の到着にどれほど励まされたことか。

しかし相変わらず勝てる気がしない。攻勢は激しく、士気は低く。おおよそ考えられる勝因を持っているのに、ただひとつ、『躓き』から立ち直れないせいで勝ち目がまったくなくなっている。

「ぐあぁッ」

また一人倒れた。すでに五十人が倒れて、うち十人が死んでいる。

「くッ……ふ、踏ん張れッ！ それだけでいい！」

音羽は叫ぶ。ずっと叫んでいる。大盾を掲げ、頬から血を流して、自分自身の勇姿を味方に見せ付けてなんとか鼓舞する。それだけで精一杯だ。

怒号と悲鳴が鳴り響いた。誰かが言った。「敵が城壁に取り付いたッ！」

来たかッ！ 音羽はひときわ大きく息を吸って、胸を膨らませると、大音声で吼えた。

「おおおおおッッッ！！！」

味方への誤射を恐れて、敵の弓はより遠く、より城中へと注がれる。にわかに城壁への攻勢が緩んだ。その隙をつく。

手にしていた大盾を大きく振りかぶり、咆哮と一緒に投げ飛ばす。

巨体の重然さえも隠しきれるほど大きい盾が、轟ッと音を立てて宙を飛び、眼下に群がる敵を押し潰した。

それに倣うように、味方の兵士たちも盾を敵に投げつける。音羽のほど重い盾ではないが、梯子をかけようとする者たちは、高所から降ってくる盾に首の骨を折る致命傷を負った。

「さあ来るぞッ！！ 弓を絞れ、矢を絶やすな、剣が折れても拳で戦えッ！！」

音羽と同様の言葉が、將軍たちの口からも飛ばされる。

もはや後はない。武器はある。食料もある。兵もある。しかし質と勢いはどうしようもない。あとはただ踏ん張るだけだ。

梯子がかけられて、敵兵が登ってくる。矢による攻撃は緩んだが、以前になくなったわけではない。しかし音羽はかまわず梯子へと駆けて行き、

「オラァッ！」

自慢の槍で叩き落す。落として、梯子を掴むと、思い切りそれを押し倒した。土台を持つ滑車式の梯子も、音羽の怪力の前でもろくも途中からへし折られてしまった。

「どけどけどけエ！！ 油が通るぞッ！！」

後ろから煮立った油鍋をかついで駆けつける兵士たちが現れる。よしと頷いて前線の兵士たちが援護しながら道を作ると、梯子を登ろうとする敵に向かって油をぶっかけた。

悲鳴を上げて兵士たちが落ちていく。下も酷い有様だ。さらに容赦なく油をぶちまけ、高熱に苦しむ兵士たちの阿鼻叫喚が生まれる。

しかしこれで終わるはずもなく、油にまみれたそこへと松明を投げ込む。火が瞬く間におこり、城壁のすぐ下から火の手が上がった。

燃え盛る兵士たちは方々へと逃げ回り、火が火を新たに点けてまわる。油によって起こった火災も、そもそも油の量が少ないため広範囲ではなくとも、こつこつと広がっていく。

続いて熱湯も降下されるが、それでも中山の猛攻は歯止めが利かない。

それどころか

「お、音羽様ッ！ 西の砦が破られました！」

「なんだとお！？」

西の門から逃れてきた兵が正門砦の突破を報告してきた。中山は西の砦を突破、すぐ後ろの二の門砦に向かって突進しているという。

この情報はすでに他の将にも伝えられ、しかたなく一軍が救援に向かう。これで正門の守りは薄くなるが、背に腹は代えられない。

猛攻は尚激しさを増す。西を突破して敵は俄然、士気を高めたようだ。

「クツ・・・・・・ぐあツ!!」

腕に矢が刺さる。数を減らした矢が、それでも音羽を傷つける。矢を引き剥くと、痛みは思ったほどかじなかった。興奮しているからだ。

敵の兵もとうとう城壁を登ってきた。二、三人が乗り込み、それを撃退する。が、一人でも乗り込んできたら、もう続々と後が乗り込んでくる。

狭い城壁と、城壁裏が徐々に敵味方入り乱れての戦場へと姿を変えていく。もはや矢で応酬することが出来ない。

このまま二の門砦に向かわせるわけにはいかない。なんとしてもここで食い止めねば　ッ！

皆朱の槍が鳴いた。

突き刺し、薙ぎ払い、時には殴り殺して、絞め殺して。おおよそ知りうる殺し方で、敵兵を容赦なく黄泉路へ歩かせる。

一突きした槍に、中山兵が三人、命を刈り取られた。引き抜く時間も短く、獲物をさらに突き殺す。

音羽の働きは凄まじく、敵も迂闊に近づけない。気づくと、音羽の周りだけ、ぽっかりと空間が出来ていた。

返り血と汗で髪が湿っている。形相も勇ましく、興奮で赤み掛かっている。赤毛に赤色緞の鎧のため、巨体がさらに大きく見えた。

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・」

半刻が過ぎた。相変わらず周囲は修羅の権化だ。兵士が切りかかってくると、音羽の槍は音を立てる。

もう何人殺しただろうか。

ずくんつ・・・・・・・・。背中の傷が痛む。槍で突かれた、あの傷。こんなときに。

それでも衰えない豪腕。槍捌き。萎えない闘志、引かない赤み。獲物を追い求める瞳は、百鍊の鏡のように光っている。

皆、よく戦っている。視界の端々に北山兵と九洲兵の奮戦振りが映っている。

二の門もまだまだ破られそうにない。当然だ、何しろ二の門を守っているのは他にもない、この私なのだから。

柄を握りなおし、視線でけん制する。飛び掛った者がごとく返り討ちになって、さしもの中山兵も、音羽に恐れをなしていた。

返り血で真つ赤な音羽は鬼だ。鬼に人間が勝てる道理はない。

こんなところで死ねない。だから。

「来るなら来いッ！ 今度も、退いてもらっぞ！」

不退転の鬼神が咆哮は、中山の兵士にとって地獄への呼び声にしか聞こえなかった。

琢建の攻防も大宜味に劣らない。琢建の守備隊長が重傷を負って陣没してからは、大宜味で戦っていた上乃が指揮を執っているが、やはり厳しい。

こちらはもともと城としての規模が小さく、詰めている城兵も五百人足らずだ。街はなく、ほとんど砦といってよい。それでも良く持ちこたえているのは、上乃の采配もあるが、遠州が奇襲同然の攻撃で敵をかく乱してくれたおかげだった。

その遠州も今は城門のすぐ前で戦っている。門はまだ破られない。

琢建は小さいが、これには理由がある。谷あいについた城だから、当然規模は小さいのだが、敵が攻め入られる場所が正門一箇所しかない。背後から狙われる心配がないのが救いだ。さらに正門に続く道も狭く、上には兵を配することが出来る。弓矢を射かけ、岩を落として応戦すれば、そう簡単に落ちる城ではない。

とはいえ、もともと大宜味の支城の琢建は、正門を塞がれたら軍を動かせない。裏道があるにはあるが、これはあくまで秘密の向け道で、数人が通れる程度。

そも、大宜味を攻める敵軍への警戒とけん制が目的の琢建の城兵が、敵軍を攻める必要はない。それをあえて遠州は突撃した。この戦いが不利であると十分に悟つての襲撃であった。

しかしその遠州も今は城に戻って、再び突撃することは難しい。

一昨日から始まった戦闘は、まだ終わる気配を見せない。敵は執拗に城門突破を狙っており、それを阻止するために遠州が三百人とも奮戦している。

このままではジリ貧だ。補給も援軍も期待できない。情報だけは入ってくるが、悲しいかなその情報を生かしきる術を、上乃は持ち合わせていない。遠州ならばまた違いかもしれないが、前線で戦う遠州には頼めるべくもない。

「補給のめどが立っているだけマシだけど……」

床机に腰掛ける上乃の顔には、疲労が色濃く映っている。部屋に詰めている兵士たちが不安そうに上乃を見つめている。

外からはいまだ戦いの激しさが伝わってくる。戸の向こうを兵士達が駆けていく。

琢建を攻めている敵をどうにかできれば、大宜味へ駆けつけることも出来るのだけど。上乃はずっと頭を悩ませている。

抜けられる道。それさえあればこの危機的状況も打破できるのに！

渴望する奇跡の活路。ほんとうに、軌跡以外にこの屈強を脱する道がわからない。しかし三方を山谷に囲まれた琢建に、起死回生の道などない。

抜けるのは、正面突破しかない。

この間にも前線での遠州は獅子奮迅の働きで敵を寄せ付けない。しかしその身に纏う白金の鎧は、すでに所々で刃に打ち据えられた傷

跡が目立っている。

はあ！ と掛け声と共に振るわれた蛇腹剣が、蛇のようにうねって敵を切り刻む。特殊戦技の武具は扱いこそ難しいが使いこなせばこんなに強力な武器もない。

フォン シュオン 風を切る音もどこか独特で、人間業とは思えない。

「……………限がありませんね」

また二人を切り伏せて、ふっと息を吐く。敵が強い。一兵卒からして、遠州の一撃を防ぐ者がざらにいる。

一人が何人にも見える。琉球の兵は敵味方総じて錬度が高い。九州兵が弱くさえ見えてくる。

また切りかかってくる。雄たけびを上げてくる敵を、遠州の蛇腹剣は躊躇いなく切り刻む。手首だけで剣先を操り、螺旋を描いて。

首が跳ぶ。血飛沫が跳ぶ。遠州の美しい鎧を赤く汚していく。

「ここさえ突破できれば！」

もはや策も兵法もない。戦場で一八の賭けほど愚かな選択もないが、もはやその愚かに訴えるしか道はない。

道が一つしかなく、そこを通らないといけないのなら、もはや押し通るまで！ 押し返す勢いで勇躍すれば、自ずと道も開けると言い聞かせて、変幻の刃を振るわせる。

一閃で兵を薙ぎ払う。首が飛び、腕が飛び、足が飛び。ただそれだけを繰り返しながら、遠州は力の限り駆け出す。

勇猛の戦士が一人駆け出すと、後に続くものが現れてくる。全軍が突撃し、戦場はいよいよ混乱してきた。

玉碎の覚悟は上乃にも灯った。ただ進む。上乃には単純で、単純すぎる戦術で、それがたまらなく好きだった。

「あたしらも行くよッ!!」

その一言でもって、わずか百人の兵士と共に城を打って出る。琢建の有する全戦力が城外に飛び出した。

波状攻撃には、その利点ゆえの弱点がある。波には『押し』と『引き』があり、押している間はいいが、引いているときに攻められたら脆い。

かくして、引きのときが来た。相手はすぐさま兵を送り込むが・・・そのわずかの間さえ、上乃と遠州は見逃さなかった。

遠州が敵軍を抜けた。続いて百人が抜けてくる。直線状の陣形。それはただ突破することのみ特化した攻めの陣形。

いわゆる孔明八陣の一つ『鋒矢の陣』である。形はいささか崩れているものの、鋒矢が一直線になって飛んでくる。

決死の覚悟を秘めた遠州の突撃に、波状攻撃のために個別に編成された軍団が急襲されると、敵はようやく撤退するそぶりを見せた。

後方をかく乱されると、大宜味を攻めるどころでなくなるからだ。

遠州を追おうとする者どもは、上乃の一隊が死に物狂いで喰らい付く。上乃も長刀の名手として聞こえた勇将、その奮闘には目を見張るものがあつた。

ここで突かなければ、遠州も上乃も、もう後がない。みなぎる気迫は敵を徐々に圧していった。

敵の旗本はるか後方、これを攻めることは出来ず、またそんな考えもない。遠州の百人は、まさか上乃を見捨てたかのように、振り返ることもなく、一心不乱に攻め立てた。

この琢建を攻撃している部隊の将、多度志の指揮は悪くなかったが、勝ち戦に油断した多度志を、遠州はあえなくも討ち取る働きをした。

琢建包囲軍を後方から散々にかき回して、敵は蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「・・・・・・・・・・引いていく」

旗本へと向かう敵兵の波を、上乃は切れ切れの言葉で呟いて見つめた。疲労の余り膝からくず折れる上乃を、近くにいた兵士たちが慌てて抱き支えた。

遠州はまだ戦っていた。遠州と共に抜けた百人は、見ると二十人かそこらしか生きていない。敵味方入り乱れての戦いだったのだ、遠州が生きていることさえ奇跡に近く、それは上乃も同様であつた。

この機を逃さず、散々に打ち負かす。それが遠州の考えで、そのた

め満身創痍なものになお攻め立てている。しかし上乃はすぐに遠州を呼び戻させた。

「軍を立て直して、すぐに大宜味を包囲している中山の背後を襲って！ 早くしないと大宜味が落ちるよ！」

こうとまで言われたら、遠州も追撃を諦めざるを得ない。何より大宜味を守っている音羽は、遠州にとって先輩にあたる。見捨てることなど出来はしなかった。

琢建の全戦力を再編成して、総勢二百三十余が大宜味へと軍を動かす。この間、琢建は完全に無防備だが、どうせ守り切れないと判断した上乃は、放棄同然で出撃した。

琢建攻撃が失敗した後の中山の動きは速かった。琢建の戦力が後方を襲う前に、さっさと軍勢を引かせたのだ。あまりにも鮮やか過ぎる引き際は、音羽も感嘆するほどだった。

「引き時、引き際、引き方が上手い将は、いくさも上手い」

中山の後退で生きながらえた音羽は、後にこう語っている。

この見事な撤退を見せた将は、中山でも五指に入る武将だった。そしてこの武将こそが、北山の命運を左右する一人なのだが、この時の音羽は知らず、ただ上乃と遠州の活躍に胸躍らせるばかりであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4037z/>

黄昏の日々

2011年12月16日23時12分発行